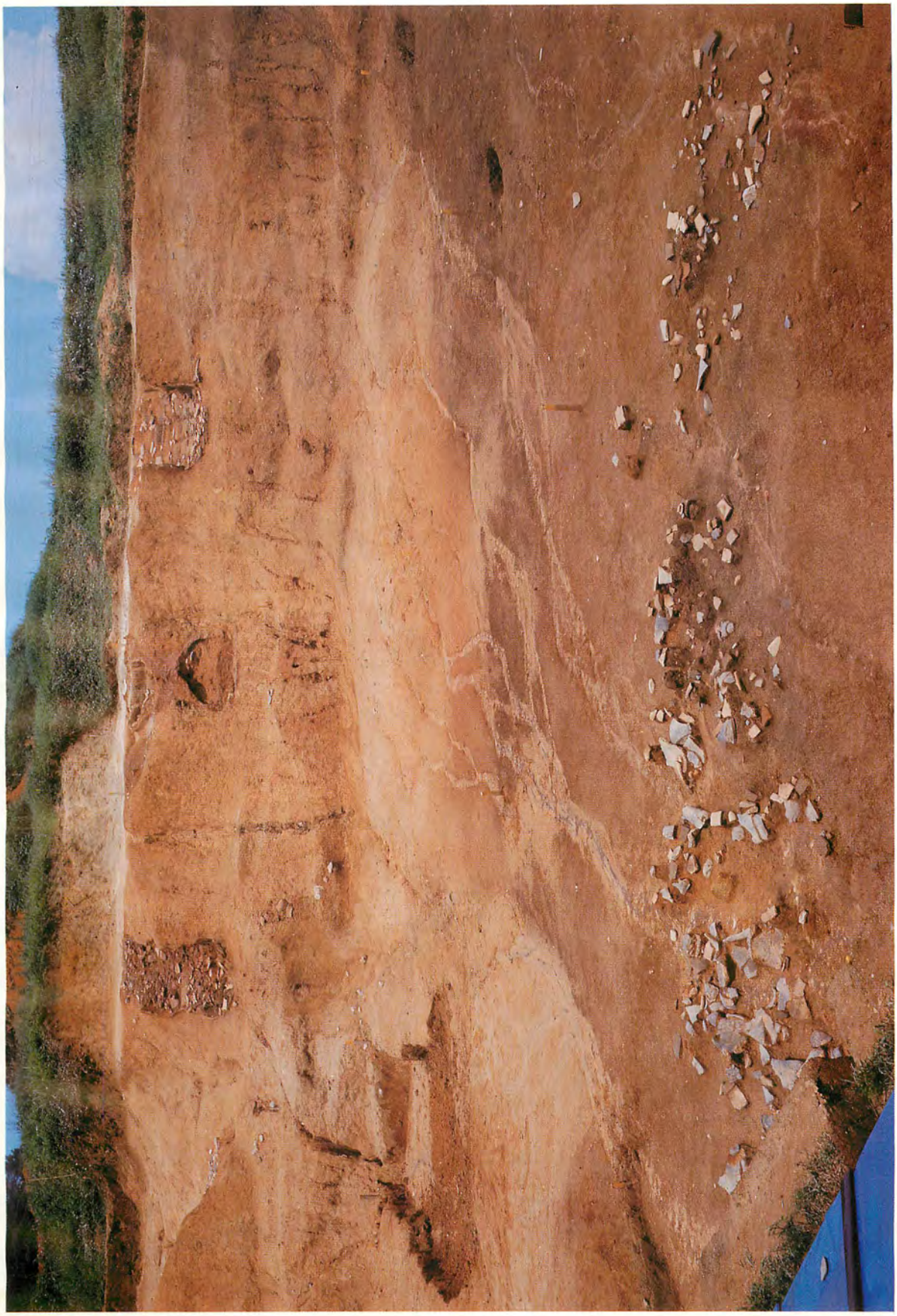
熊本県文化財調査報告書第40集

平原瓦窯址

1980

熊本県教育委員会



平原瓦窑址全景

熊本県文化財調査報告書第40集

平原瓦窯址

1980

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代郡宮原町の「平原瓦窯址群」に関するものであります。平原瓦窯址は県南部における奈良時代の寺院建築に使用された瓦を生産した窯址で、その製造過程等を知る手がかりを得ました。また瓦窯址の下部の地層から縄文時代早期及びそれに先行する石器群が検出されましたので、同時代の上益城郡御船町の「小坂西遺跡」も集録しました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸せです。

発掘調査の実施にあたりましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。

ここに心からお礼を申しあげます。

昭年55年３月31日

熊本県教育長

井　本　則　隆

平原瓦窯址

目　　次

第Ⅰ章　序　　言……1
　1　発掘調査に至るまで……1
　2　調査のための組織……1
　3　本報告書の作成……1
第Ⅱ章　調査概要……3
　1　調査地区……3
　2　調査経過……4
第Ⅲ章　位置と歴史的環境……5
　1　遺跡の位置……5
　2　遺跡の立地……5
　3　周辺の遺跡……7
　4　遺跡周辺の地質……9
第Ⅳ章　遺　　構……10
　1　遺跡序説……10
　2　遺構各説……12
　　A　1号窯……12
　　B　2号窯……13
　　C　3号窯……14
　　D　灰　　原……16
　　E　ピット群……16
　　F　溝……18
　　G　石　　組……20
　　H　土　　壙……22
　　I　その他……23
第Ⅴ章　遺　　物……25
　1　瓦　　類……25
　　A　軒　　瓦……25
　　B　平　　瓦……26
　　C　丸　　瓦……30

D 平　　瓦……31
E 道 具 瓦……36
2 土　　器……37
A 窯内・溝出土土器……37
B 蔵 骨 器……37
C 石器包含層出土土器……38
3 石　　器……38
A 石　　斧……38
B 石　　皿……38
C 叩石・磨石……38
D 石　　鏃……39
E 楔 形 石 器……39
F 二次加工のある剝片……39
G 石　　核……43
第Ⅵ章 考　　察……44
1 屋　　瓦……44
A 軒瓦の組み合せ……44
B 軒瓦の製作技法……45
C 軒瓦の笵について……48
D 丸瓦の種類と製作技法……49
E 平瓦の型式……51
F 平瓦の製作技法……51
2 平原瓦窯の構造……58
3 窯の操業期間について……59
4 平原窯製品の供給先……61
5 平原瓦窯址の性格と年代……63
6 ま　と　め……64

付　論

肥 後 の 古 瓦……181
肥後・平原瓦窯跡と出土瓦当の検討……202
平原窯跡 付近の地質学的所見……211
プロトン磁力計による磁気探査……212
楳谷寺・神園山瓦窯址……215

挿　　図　(Fig)

1　九州自動車道路と調査遺跡…… 2
2　調査地区地形図…… 3
3　平原遺跡の地形と発掘区…… 4
4　平原遺跡の標高と比高…… 5
5　八代地方遺跡分布図…… 6
6　周辺の地形と遺跡…… 8
7　瓦窯址の地形…… 11
8　平原１号窯の立地…… 12
9　平原２号窯の立地…… 13
10　３号窯断面図…… 14
11　平原３号窯の立地…… 15
12　３号窯前方部瓦出土状態…… 15
13　ピット群分布図…… 16
14　灰原断面図…… 17
15　２・３溝平面図…… 18
16　１溝平面図・断面図…… 19
17　蔵骨器出土状態…… 20
18　２溝・１石組平面図…… 20
19　12Ｊ・13Ｊ断面図…… 21
20　２石組実測図…… 21
21　１土壙実測図…… 22
22　２土壙断面図…… 23
23　22M・23M・24M断面図…… 23
24　１Ｋ～３Ｋ断面図…… 23
25　１Ｇ～１Ｍ断面図…… 24
26　縄文土器拓本…… 37
27　平原瓦窯址出土軒瓦復原図…… 44
28　軒丸瓦製作模式図…… 45
29　軒平瓦断面図…… 46
30　叩き板復原・叩き目集成図…… 53
31　平瓦Ｂ型式の叩きしめ順序と方向…… 54

32　平瓦各型式の使用布の比較…… 56
33　平瓦の分割角度…… 57
34　陳内廃寺出土軒丸瓦…… 62
35　熊本県古代瓦窯址分布図…… 66

表　(Tab)

1　窯標高比較表…… 10
2　ピット計測表…… 17
3　出土軒瓦一覧表…… 25
4　軒丸瓦計測表…… 26
5　軒平瓦計測表…… 27
6　石鏃計測表…… 40
7　石器計測表(1)…… 42
8　石器計測表(2)…… 43
9　平原瓦窯址出土の平瓦の類と型式…… 50
10　平原瓦窯址出土の平瓦各型式の数量と割合…… 51
11　瓦窯計測表…… 59
12　各窯の平瓦組成表…… 60
13　平瓦からみた各窯の操業関係…… 61
14　陳内廃寺出土軒丸瓦（１類Ｃ）計測表…… 62
15　郡別古代 瓦窯一覧表…… 64
16　熊本県古代瓦窯址地名表…… 66—Ⅰ

別　　表

1　平瓦各型式の製作技法一覧表…… 69
2　丸瓦観察表…… 71
3　平瓦観察表…… 72
4　八代郡郷比定一覧表…… 83

図面・図版

PLAN 1　1～3号窯瓦出土状態……66—Ⅱ
2　1号窯平面図・断面図……66—Ⅲ
3　2号窯平面図・断面図……66—Ⅳ
4　3号窯平面図・断面図……66—Ⅴ

図面 1　軒丸瓦実測図(1)……87
2　軒丸瓦実測図(2)……88
3　軒平瓦実測図(1)……89
4　軒平瓦実測図(2)……90
5　軒平瓦実測図(3)……91
6　軒平瓦実測図(4)……92
7　軒平瓦実測図(5)……93
8　軒平瓦実測図(6)……94
9　1号窯出土丸瓦実測図……95
10　2号窯出土丸瓦実測図……96
11　3号窯出土丸瓦実測図(1)……97
12　3号窯出土丸瓦実測図(2)……98
13　1号窯出土平瓦実測図(1)……99
14　1号窯出土平瓦実測図(2)……100
15　1号窯出土平瓦実測図(3)……101
16　1号窯出土平瓦実測図(4)……102
17　2号窯出土平瓦実測図(1)……103
18　2号窯出土平瓦実測図(2)……104
19　2号窯出土平瓦実測図(3)……105
20　2号窯出土平瓦実測図(4)……106
21　2号窯出土平瓦実測図(5)……107
22　2号窯出土平瓦実測図(6)……108
23　2号窯出土平瓦実測図(7)……109
24　2号窯出土平瓦実測図(8)……110
25　2号窯出土平瓦実測図(9)……111
26　2号窯出土平瓦実測図(10)……112
27　3号窯出土平瓦実測図(1)……113
28　3号窯出土平瓦実測図(2)……114
29　3号窯出土平瓦実測図(3)……115
30　3号窯出土平瓦実測図(4)……116
31　3号窯出土平瓦実測図(5)……117
32　3号窯出土平瓦実測図(6)……118
33　窯様遺構出土平瓦実測図(1)……119
34　窯様遺構出土平瓦実測図(2)……120
35　2号窯出土隅切平瓦実測図……121
36　3号窯出土隅切平瓦・2号窯出土熨斗瓦実測図……122
123
37　窯内・1溝・13区出土土器……124
38　2号窯内出土須恵器……125
39　石器実測図(1)……126
40　石器実測図(2)……127
41　石器実測図(3)……128
42　石器実測図(4)……129
43　石器実測図(5)……130
44　石器実測図(6)……131
45　石器実測図(7)……132
46　石器実測図(8)……133
47　石器実測図(9)……134
48　石器実測図(10)……135

PL. 1　軒丸瓦……137
2　軒丸瓦・蔵骨器・須恵器……138
3　軒平瓦……139
4　軒平瓦……140
5　軒平瓦……141
6　軒平瓦……142
7　1・2号窯出土丸瓦……143
8　3号窯出土丸瓦(M_3a類)……144
9　3号窯出土丸瓦(M_3b類)……145
10　1号窯出土平瓦(H_1a～H_1b類)……146
11　1号窯出土平瓦(H_1c～H_1f類)……147

12　2号窯出土平瓦（H_2a類）…… 148
13　2号窯出土平瓦（H_2b・H_2c類）…… 149
14　2号窯出土平瓦（H_2c・H_2d類）…… 150
15　2号窯出土平瓦（H_2e・H_2f類）…… 151
16　2号窯出土平瓦（H_2g～H_2i類）…… 152
17　2号窯出土平瓦（H_2j～H_2n類）…… 153
18　3号窯出土平瓦（H_3a類）…… 154
19　3号窯出土平瓦（H_3b～H_3e類）…… 155
20　3号窯出土平瓦（H_3f～H_3j類）…… 156
21　窯様遺構出土平瓦…… 157
22　道　具　瓦…… 158
23　凸型台圧痕…… 159
24　造瓦資料・渡鹿廃寺出土平瓦 160
25　平瓦各型式の布の綴じ合せ目 161
26　石　　鏃…… 162
27　石鏃・2次加工剝片・スクレーパー…… 163
28　2次加工剝片・楔形石器・剝片…… 164
29　石核・磨石…… 165
30　遺 跡 遠 景…… 166
31　遺跡内各所…… 167
32　1　号　窯…… 168
33　1　号　窯…… 169
34　2　号　窯…… 170
35　3　号　窯…… 171
36　1号窯・窯様遺構…… 172
37　3号窯・3号窯前方部…… 173
38　1　　溝…… 174
39　灰原・柱穴…… 175
40　石　　組…… 176
41　土　　壙…… 177

平原瓦窯址

第Ⅰ章　序　　言

1　発掘調査に至るまで

日本道路公団は九州縦貫自動車道の建設を計画し、着々と工事を進め、1971年6月の植木・熊本間の開通を始めとして、1980年3月には、松橋と八代の間が完成し、八代から福岡を経て山口にまで自動車専用道路で結ばれる見込みである。日本道路公団から依頼を受けた熊本県教育委員会では路線内に所在する埋蔵文化財の分布調査をおこない、建設工事に先立ち発掘調査を実施した。自動車道は市街地をさけ山麓線に建設されるため、多くの遺跡が路線内に存した。とくに遺跡の密集する宮原町では五ツ穴横穴群、立神C古墳、立神寺院址、平原瓦窯址、林源衛門墓、野寺遺跡、おさき墓地などの多くの遺跡の発掘調査が実施された。上記の遺跡は1976年度に発掘調査が完成し、既に報告書が公表されているものもある。平原瓦窯址の発掘調査は1976年4月から1977年3月までの約1カ年かけて実施された。

2　調査のための組織

調査責任者	岩崎辰喜	(文化課長)
	合志太助	(前文化課長)
調査総括	隈　昭志	(文化財調査係長)
調査員	島津義昭	(学芸員)
	西田道世	(嘱　託)
	中山清美	(調査員)
	安達武敏	(　〃　)
整理	上野辰男	(主　幹)
	白石　巌	(嘱　託)
	山城仁恵	(嘱　託)
調査事務局	田辺宗弘	(課長補佐)
	真弓袈裟勝	(前課長補佐)
	村上孝司	(管理係長)
	望野正雄	(前管理係長)
	石原昭宏	(主　事)
	矢野みゆき	(主　事)

3　本報告書の作成

発掘調査によって出土した遺物は熊本県文化財収蔵庫に搬入し、水洗、注記などの作業をおこなった。1979年度の事業として報告書を作成することになり、1979年4月から熊本県文化財

収蔵庫において調査結果の整理を開始、1979年12月から原稿、図版作成に着手し、1980年３月には出版のための基礎作業を完了した。なお平原瓦窯址の発掘調査にあたり現場では熊本大学学生　高橋信武、熊本商科大学生　瀬丸敬二、熊本東海大学生　豊崎晃一、別府大学生　平川敬治・清水聖子が図面作成等に協力した。また水洗、整理後の拓本、実測部の作成には、島津義昭、鶴島俊彦、別府大学生　野田英治・石本香子があたり、熊本県文化財収蔵庫の諸氏の協力があった。本報告の執筆分担はつぎのとおりである。Ⅰ島津義昭・隈昭志　Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ1(A)2･3 Ⅴ1(A･B･C)2･4･5･6Ⅴ1(A･B･C)島津、Ⅴ1(C･D･E)、Ⅵ1(D･E･F)･3鶴島俊彦。野田英治、遺構の写真は中山清美が主としてあたり、一部中山以外の調査員が撮影した。遺物写真は白石巌が撮影した。なお、発掘調査中には国学院大学教授　乙益重隆、熊本大学教授　白木原和美、熊本大学講師　佐藤伸二、九州大学助手　下條信行・木村幾多郎、九州歴史資料館技師　亀井明徳・高橋章、福岡歴史資料館館長　三島格、北九州歴史博物館主幹　小田富士雄、同学芸員　武末純一、熊本市立博物館学芸員　東光彦・富田紘一、玉名高校校長　田辺哲夫の諸氏が遺跡に来訪され多くの教示を賜わった。また、遺構、遺物の整理検討について、熊本大学教授　松本雅明、熊本大学助教授　甲元眞之、奈良国立文化財研究所考古学第三調査室長　森郁夫の諸氏より教示および援助を受けた。また陳内廃寺の資料については城南町教育委員会社会教育課長　徳本明氏および熊本大学助手　中村愿氏より閲覧の御配慮をいただいた。

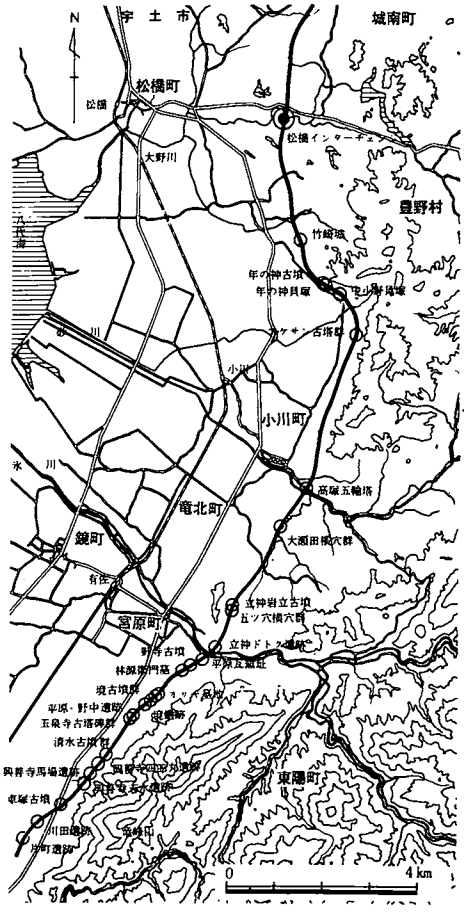


Fig. 1　九州自動車道路と調査遺跡

本報告を作成するにあたり、熊本大学　高橋俊正・長谷義隆氏より遺跡周辺の地質学的所見をいただき、さらに瓦をめぐる諸点について小田富士雄・武末純一・甲元眞之氏、熊本大学大学院修士　村田多津江氏の論考をいただき、付論として掲載した。また、楳谷寺・神園山瓦窯址は平原瓦窯址との対比の上でも重要であるので、三島格氏および熊本市文化財調査委員会(代表森下功氏）熊本市教育委員会の御厚意により概報を再録し、併せて三島氏の追記を掲載した。

なお、発掘調査を遂行するにあたっては、宮原町教育委員会、および同教育委員会　佐々木真行主事から有形無形の御援助をいただいた。また、発掘調査にあたっては地元の宮原町の方々のご協力をいただいた。厚く感謝の意を表する。

第Ⅱ章　調　査　概　要

1　調　査　地　区

遺跡の所在地　平原遺跡は、熊本県八代郡宮原字平原（くまもとけんやつしろぐん みやのはらまち おおあざみやのはる あざひらばる）に所在する。付近の地形は平原という字名から予測されるような真平な平地ではなく低丘陵の尾根上に、帯状に続く平地である。自動車道路は北の方向から立神を経て氷川を橋で渡り、平原遺跡の北西方向でやや西にカーブし八代市方向に続いていく。遺跡はこのカーブのやや西側の一帯である。踏査の折、既に窯壁の一部が露出していた。遺跡の一角には宮原町教育委員会が建てた遺跡標柱があった。調査対象地区は１～３号窯の存する斜面と更に西側の谷部分、約10,000㎡が定められた。調査地区内の最高所は北側の丘陵上で標高83.1mをはかる。この地点を頂点として南側に傾斜していくが、調査地の南端で標高64mをはかる。西側の谷と窯の存する東斜面の間は突出した南に延びる丘陵によって画されている。

調査区の設定と名称　調査地の東側、平原遺跡を東端として磁石による南北線を基本としてそこから西の方へ割りつけていった。４m×４mをグリットの単位として南北をA～U、東北を１～28、全体で 688カ所のグリットを設定した（Fig. 3）。発掘は全面人力に依っている。窯周辺は全面発掘をおこなったが、他の箇所では適宜グリットを分割して２mトレンチとして遺構の有無や土層断面の観察をおこなった。

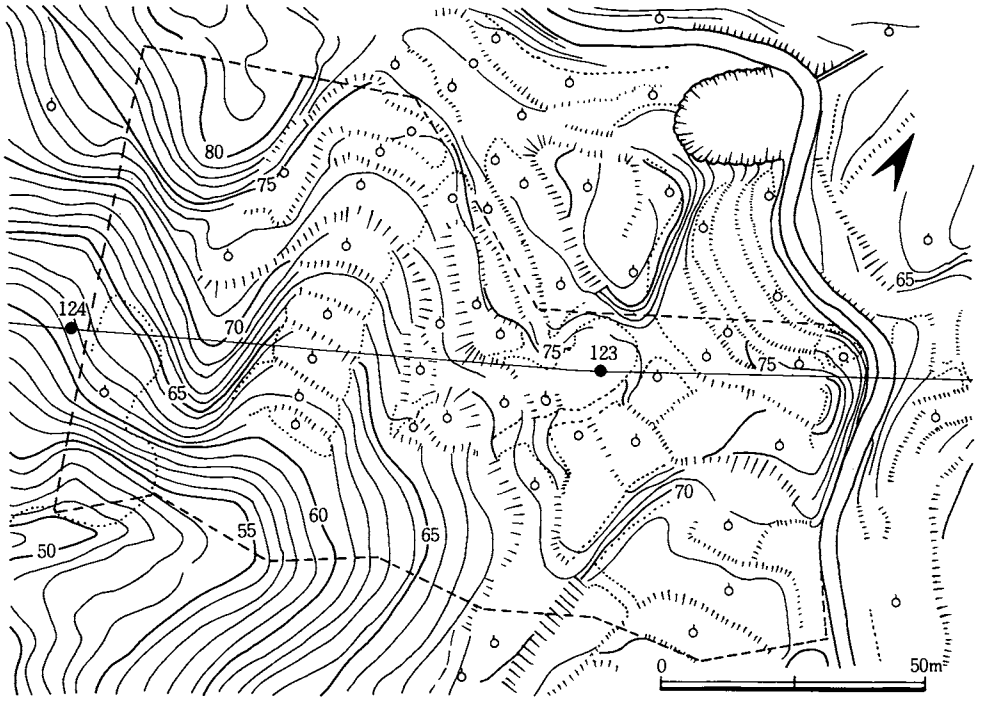


Fig.　2　調査地区地形図（……調査対象地区　—●—高速自動車道センター）

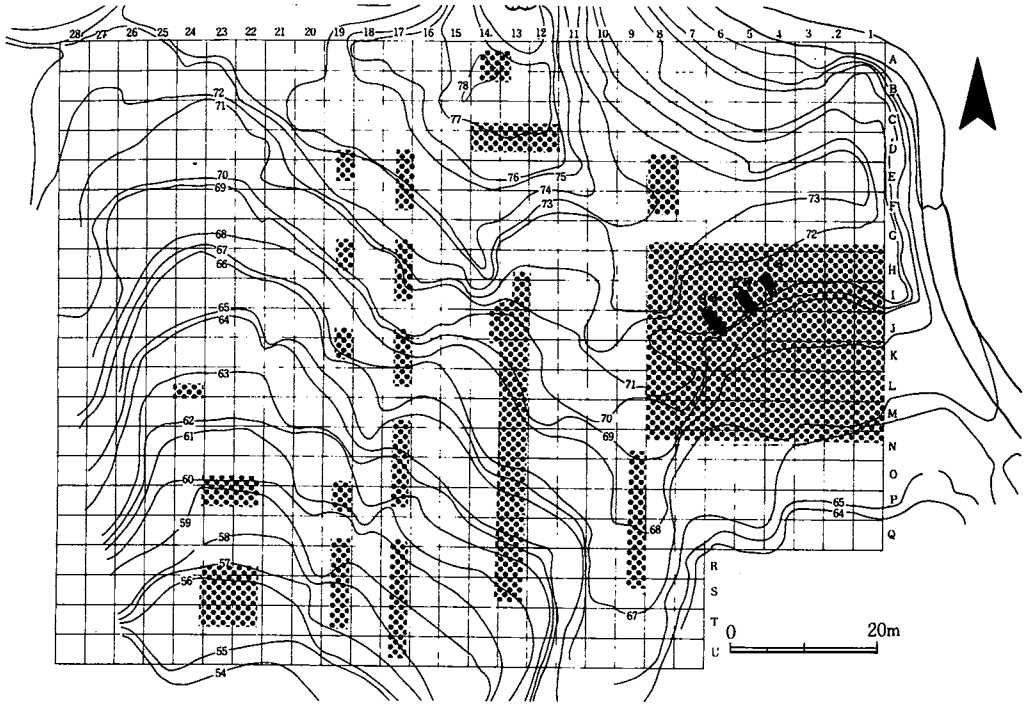


Fig. 3　平原遺跡の地形と発掘区

2 調 査 経 過

調査の進捗　調査は既に窯壁の露出している１、２、３号窯周辺の整掃から始め、それと並行して灰原と目されるＪ～Ｍ、１～８区の全面排土をおこなった。また、大量の排土を廃棄するため、３本（No１～No３）のトレンチを設定してまずその部分の記録をした。遺跡一帯は密柑畑であったため、樹木伐採後の老木の樹根が全域に残っており、その除去に極めて大きな労力を要した。窯部の調査を進める一方、調査地の最高所の発掘および調査地内の平坦地の発掘をおこなった。このようにして、東から西にかけて調査をすすめていった。一方、G～M、１、２区で石鏃や剝片を採集し、石器時代の包含層の存在が予測されたので、この部分の掘り下げをおこなった。長期間にわたる調査の為、様々の思い出に残る出来事があったが人身に係る事故に遭遇しなかったのは幸いであった。９月15日には強風により思いがけず現場小屋が飛んだ。

第Ⅲ章　位置と歴史的環境

1　遺跡の位置

平原瓦窯址は北緯130°41′29″、東径32°32′42″に位置する。現在の宮原町の市街域は、八代平野を臨む平地部が中心で、ここに多く民家がある。遺跡の立地する丘陵上には村落は形成されていない。一体に八代平野の東部では集落は山麓沿いの渓口集落としての発達が顕著で、後背地の五木・五家荘・河俣などの山地村と海辺村の諸集落を結ぶ接点として賑わっている[1)]。宮原町もこの例に漏れず交易・交流の要となっている。このような立地的な特質は決してこの地域の遺跡の性格と無関係ではないであろう。

2　遺跡の立地

遺跡は宮原町の中心地から東に入った低丘陵に位置する(Fig.4)。標高83.1mの丘陵を頂点として西南に延びる斜面の標高約74.0mにほぼ高さを同じくして3基の窯が立地している。北側は平原道路と呼ばれる町の中心部と早尾地区を結ぶ町道が、大略尾根沿いに東西に延び、遺跡の北を限っている。町道から眼を北に転ずれば氷川の流れを眼下に収めることができる。遺跡一帯は無風時は日の良く溜る暖い所であるが、いったん南風が吹けば、腹巻田、今寺、坊屋敷の各集落が立地する平野部から東に延びる細長い谷間から風が吹きあげ、その勢いは予想をはるかに超えるものがあった。遺跡の南側は、谷の南の竜峰山(517m)から派生する山塊によって視野を区されているが天気の良い日には西南方面に、はるか八代市を経て八代海を眺めることも出来た。

遺跡から平原道路を横切って氷川に延びる谷間におりれば、谷間には水が自噴して、近頃迄山仕事の重要な飲料水となっていた。また、南側の谷あいにもほうぼうで小さな水の自噴地があるが、それらは飲料水とはされず谷間の水田地帯の井手に流れ、瀬戸川に合流しはるか八代海に注ぐ。調査前、遺跡一帯は、前述のように密柑畑であった。遺跡地内にみられる人工的な平坦地形は密柑植付に伴う地ならしの跡とみられるものが大部分である。密柑の以前は、小規模な薩摩芋畑があり、周辺は松林であったという。この地と人間の関係からみるとこの一帯は

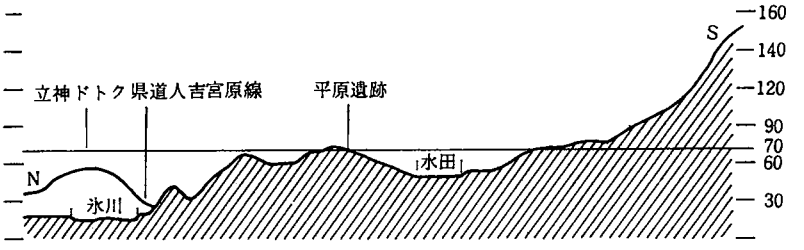


Fig.　4　平原遺跡の標高と比高

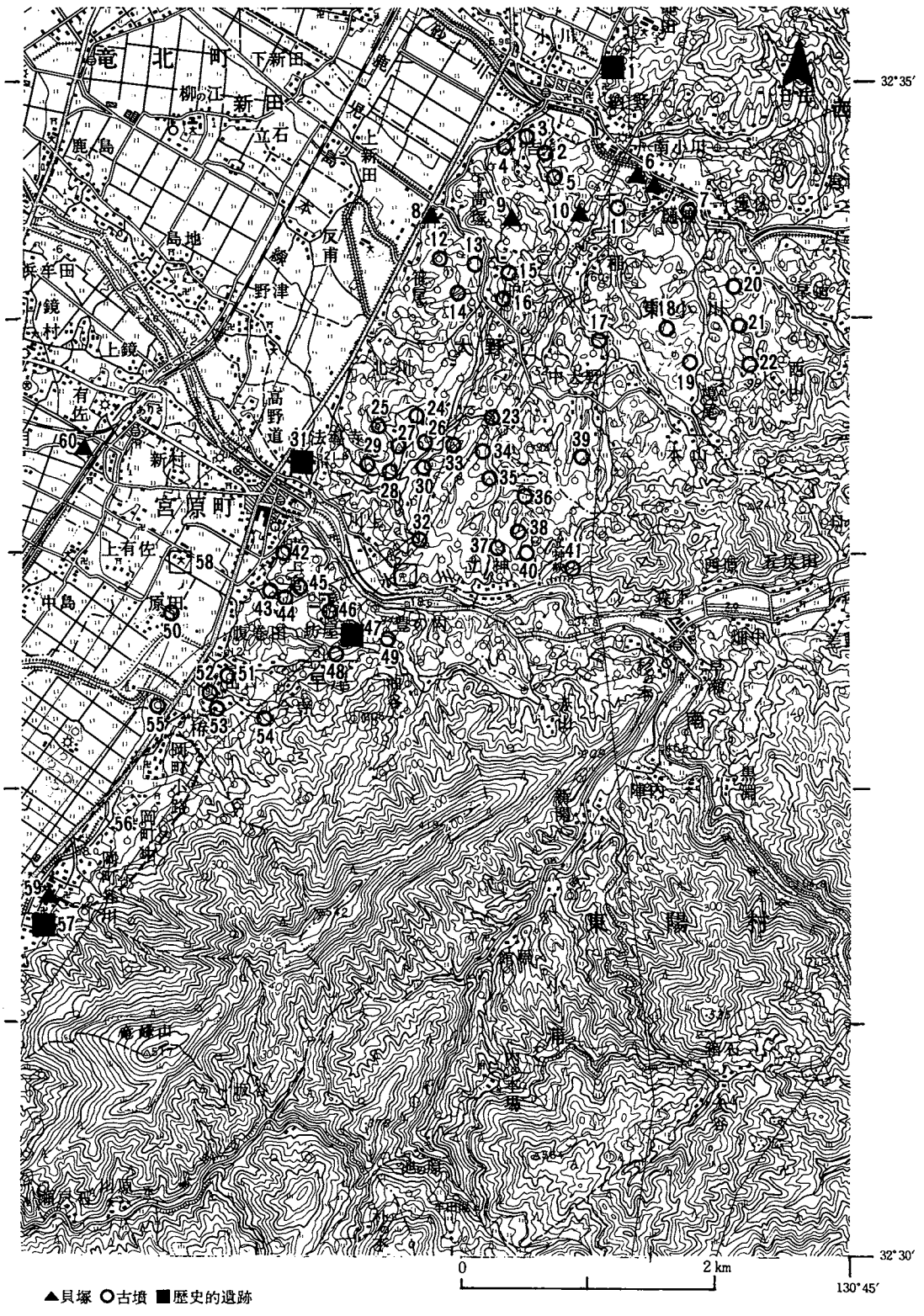


Fig. 5 八代地方遺跡分布図

調査した瓦窯、蔵骨器の示す古代の或時期から、昭和の初めに畑地として開墾されるまで長い空白期があったのである。

3 周辺の遺跡

八代地方は肥後の一大遺跡密集地である（Fig. 5）平野の大部分は中世末から近世にかけての干拓により築かれた新田である。海岸に面する山麓部に、縄文時代から歴史時代にかけての多くの遺跡が見られる。なかでも古墳時代においては、氷川を挟む南北の丘陵上に前方後円墳と多くの古墳群がみられ、この地が古墳時代における政治的中心地であったことを示す。[2)] 和名抄に依ると八代地方には5郷があるが肥伊郷を宮原町一帯に比定するのは諸家の一致する所である（別表4）　平原遺跡の周辺の遺跡としては、次の遺跡がある（Fig. 6）。

(1) 立神ドトク　1976年熊本県教育委員会によって調査が実施された。寺院址であるという伝承が地元にあったが、発掘の結果それを積極的に裏付ける遺構・遺物は出土しなかった。縄文早期の多数の石器と少量の土器、奈良時代の須恵器および糸切底の土師器片、青磁細片などが出土した。氷川右岸、氷川を臨む標高58mの丘陵の頂部から南斜面に遺跡は位置する。遺物では石鏃の大量出土が平原遺跡と同様で注目されるところである。

(2) ヒトクチ坂の古墳　正式の調査を受けていない。平原遺跡の南方の谷に位置する。『宮原

八代地方遺跡一覧

1．正　院（小川町）
2．権内古墳（竜北町）
3．竹の下横穴群（〃）
4．乱橋横穴群（〃）
5．高塚古墳（〃）
6．土穴瀬貝塚（〃）
7．樋渡古墳（〃）
8．大野貝塚（〃）
9．西平貝塚（〃）
10．段貝塚（〃）
11．段横穴（〃）
12．太尾古墳（〃）
13　大瀬田横穴（〃）
14．太山古墳群（〃）
15．大野窟古墳（〃）
16．古窟古墳（〃）
17．大瀬田横穴群（竜北町）
18．高尾横穴群（小川町）
19．山中古墳（〃）
20．梶尾林1号墳（〃）
21．梶屋林2号墳（〃）
22．向山横穴群（〃）
23．永田古墳群（竜北町）
24．姫の城古墳（〃）
25．物見櫓古墳（〃）
26．野津第5号墳（〃）
27．中ノ城古墳（〃）
28．上北山王古墳（〃）
29．端ノ城古墳（〃）
30．下溝口遺跡（宮原町）
31．法導寺（〃）
32．園の迫古墳群（〃）
33．岩立C古墳（宮原町）
34．大明神古墳（〃）
35．七ツ穴横穴群（〃）
36．五ツ穴横穴群（〃）
37．九十九塚古墳群（〃）
38．滑川古墳群（〃）
39．馬原古墳群（〃）
40．本村古墳群（〃）
41．空滝洞窟遺跡（〃）
42．室山古墳群（〃）
43．大王山古墳群（〃）
44．〃（〃）
45．〃（〃）
46．桜ケ丘古墳（〃）
47．平原瓦窯址（〃）
48．一ト口坂の古墳（宮原町）
49．平原遺跡（〃）
50．原田古墳（〃）
51．峰薬師古墳（〃）
52．大明神古墳（〃）
53．栫古墳（〃）
54．小越古墳（〃）
55．岡城古墳（八代市）
56．竜峰古墳群（〃）
57．興善寺廃寺（〃）
58．氷川中学校校庭遺跡（宮原町）
59．峯峰貝塚（八代市）
60．有佐貝塚・有佐古墳（有佐町）

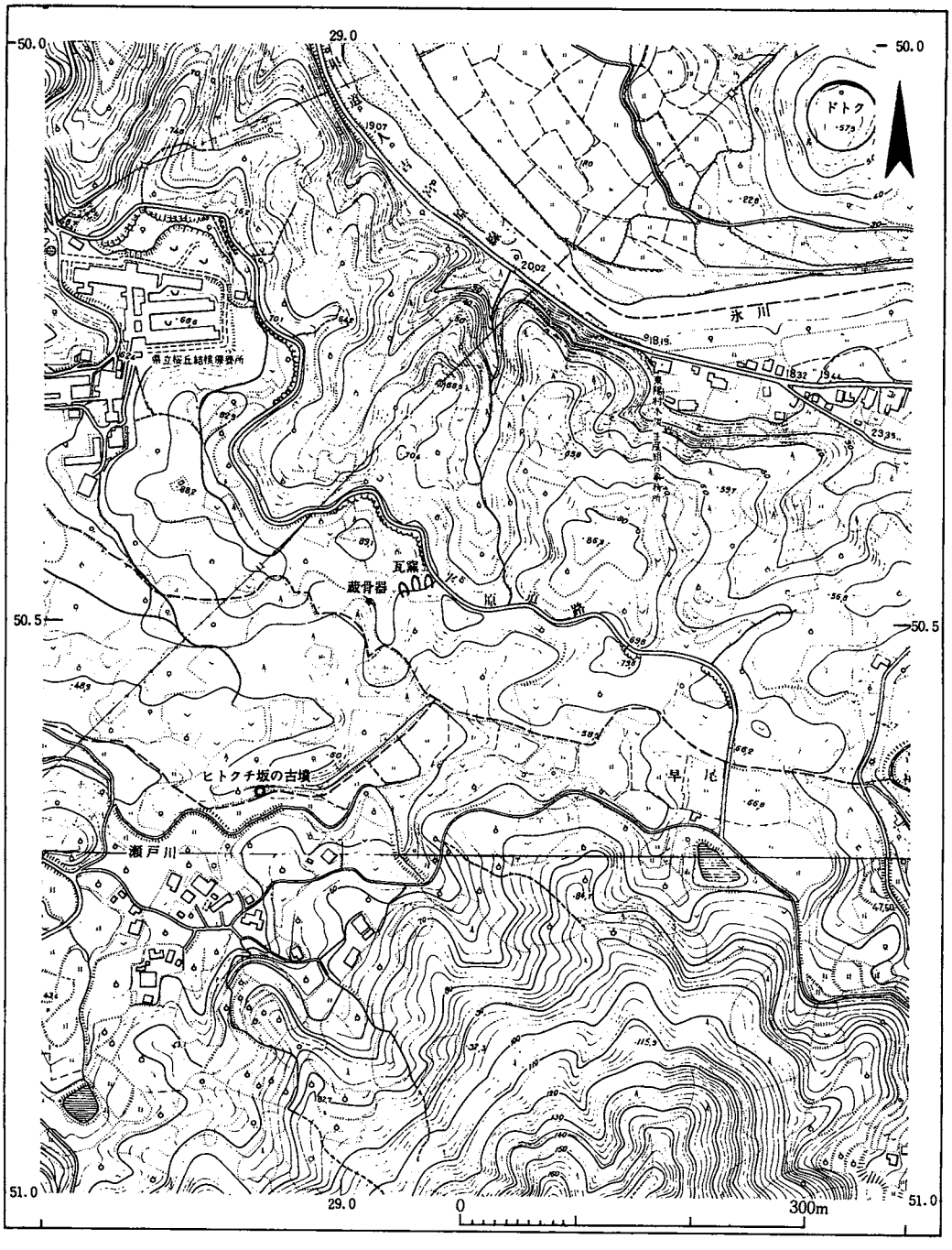


Fig. 6　周辺の地形と遺跡

郷土誌』によれば、「字平原、俗にヒトクチ坂という短い坂を東方からあがったところにある。羨道の短い横穴式石室墳で、前面中央に幅50cmの羨門を切り抜いている。」という特異な古墳であるが、くりぬきの玄門をもつ古墳は村井真輝氏の研究によれば、県内の宇土・八代・球磨郡に少例が分布している[5]、古墳時代終末期の石室様式とみられる。また、『宮原郷土誌』には、「大字早尾字平原で、茶褐・赤褐・灰色のうすでの土器破片が発見された。北に高く南に川があり、早尾から油谷にこす鞍部の平原で、ここでも耕作がおこなわれていたものと思われる。」と記し、平原に遺跡の存することが紹介されている。この地点は、平原遺跡から東方 300m のところであり、平原道路新設の折に住居址が表われたといわれているが実体を明らかにしない。このように、山あいに入れば、ほとんど遺跡は知られていない。平原遺跡の南側の谷のむこうに坊屋敷という集落が存する。踏査を実施したが遺跡の発見はなかった。恐らく中世から近世にかけて栄えたとみられる竜峰山を対象とする修験関係の坊が存ったと考えられる。前述の立神ドトク遺跡における寺院の伝承も同様のものではなかろうか。

4．遺跡周辺の地質

宮原花崗閃緑岩を基盤として、その風化土が一帯にみられる。風化の度合いは著しく進み、上表部は粉状を呈し、徐々に深くなるにしたがい良くしまった荒い砂状に変っていく。雨が降る毎に流路が樹根状に発達し、小溝を形成していく様子はたびたび眼にした。このような亀裂溝の底には、良質の粘土が堆積している（地質については付論の高橋、長谷論文を参照されたい)。

註１）三浦保寿『熊本県新誌』　1963年

２）乙益重隆「野津古墳群」『五ツ穴古墳群』熊本県文化財調査報告　第34集所収　1979年

３）江本直編『立神ドトク遺跡』熊本県文化財調査報告　第35集　1979年

４）江島濕・山下利夫・塚本一・永松豊三編『宮原郷土誌』1959年

５）村井真輝「Ｂ地区（岩立Ｃ古墳）」『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告　第34集　1979年

第Ⅳ章　遺　　構

1．遺　構　序　説

平原遺跡は、当初より瓦窯址の発掘調査を目的としたが、調査の過程でその他の遺構も検出した。

遺構の種類　遺跡の主体になる瓦窯址は３基である。東側に位置するものから順に１・２・３号と呼ぶ。１号窯の下方に窯様の遺構を検出したが、窯である積極的な状態は見い出せなかった(本報文中では窯様遺構と呼ぶ)。３号窯の西側には溝があり、自然の流路に手を加えた人工的な溝だと判断された。１・２・３号窯の東南側には灰原が形成され、その部分にピットを検出した。Ｊ13区では溝の内に石組遺構を検出した。石組の周辺から蔵骨器が出土したが、転落しているものとみられた。近位置に蔵骨器を裾えたとみられる土壙があった。灰原の東側には縄文時代とみられる石器、土器などを出土する包含層を確認し、土層断面に土壙を検出したが全体の形を把握することはできなかった。

土層　花崗閃緑岩を基盤とするため、表土の腐食土を除いて、黄色のいわゆる「マサ土」が遺構面を形成する。花崗閃緑岩は上表部では風化が進み粉状を呈し、掘削後のトレンチ壁の崩壊が著しかった。

各瓦窯址の位置関係　遺跡内の最高所83.1m から西南に延びる丘陵の斜面に３基の瓦窯址が位置する(Fig. 7)。丘陵の斜面は密柑畑として整地されており、最高所の平坦面から現場事務所のある下方の平坦面まで５段をかぞえ、瓦窯址は３番目と４番目の平坦面の境をなす崖面に存する。崖の上・上面は71.5m および69.0m のコンターと大略一致し、上下の比高差は 2.5m をはかる。各窯の遺構残存部の標高はほぼ同一で、ほとんど高低差はない (Tab.1)。１号と２号の距離は約８m、２号と３号は約10m をはかる。窯の長軸は、焚口を基点にすれば大略西北の方向で、３基の窯の主軸はほぼ平行する。以下述べるごとく３基の窯の煙道および焚口はいずれも削平されていたが、幸い、燃焼室と焼成室の床面は残存していた。

（単位m）

窯号数	遺構下面	遺構上面
1	70,439	71,644
2	69,850	71,684
3	69,755	71,670

Tab. 1　窯標高比較表

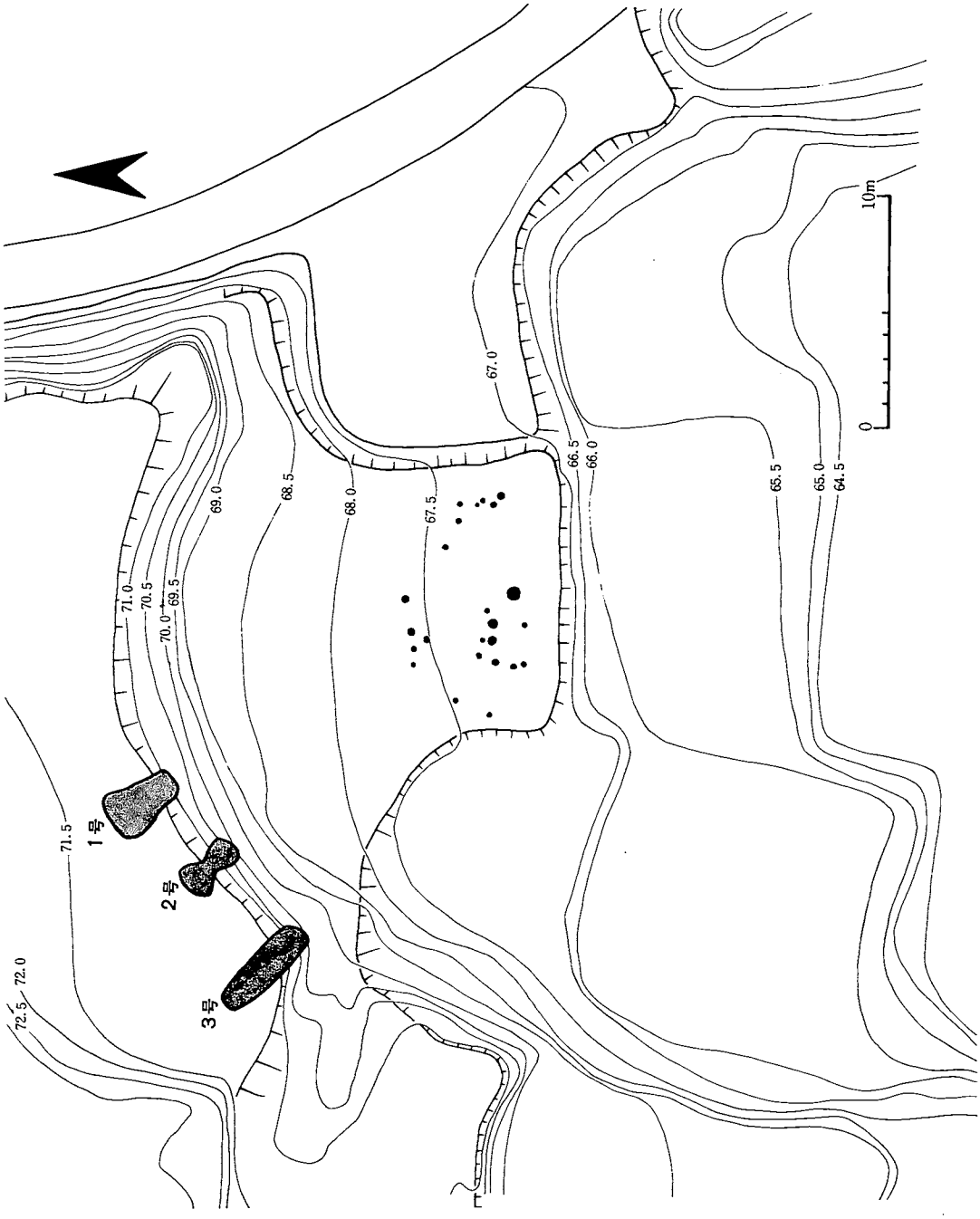

1号
2号
3号
71.5
72.0
72.5
71.0
70.5
70.0
69.5
69.0
68.5
68.0
67.5
67.0
66.5
66.0
65.5
65.0
64.5
0
10m

Fig. 7 瓦窯址の地形

2. 遺 構 各 説

A. 1号窯 (Fig. 8, PLAN 1・2, PL. 32・33)

窯内の状態 窯壁の一部が崖面に露出していたので、窯の長軸を予想して窯内の落ち込み土を上方より排土していった。窯内は3層にわかれる。①表土より約40cmの厚さに耕作土とみられる黄褐色土がみられる②その下は窯壁を多く含む赤色土が約30cmの厚さにあり③その下にクリーム色をなす粘性の強い土が約20cm堆積していた。恐らく窯廃絶後、ある期間を経た後天井部が崩壊したものであろう。耕作土が深く及んでいる事や、窯壁の破片が大量でしかもあまり磨耗風化していない点などからみると、近年になり破壊されたとみられる。

構造 燃焼室の一部と焚口、煙道および天井部を欠失する。平面形は羽子板状をなし、現在長3.23m、燃焼室の南端の幅 144cmをはかる。燃焼室の床はわずかに上り気味に焼成室に続く。焼成室は5段の階段が5列の溝によって画されている。溝は左右の両端のものは上から2段目より始まり燃焼室まで及ぶ。焼成室は5本の溝で4列にくぎられた段を有する。段のうち最下段の燃焼室と続く部分は、段差をほとんど認めないが、溝の下方の先端がこの部分で終っていることから、この部分も燃焼室の一部と認めてよいと思う。したがって、総計24個の段が焼成室に存する。それぞれの段は平面形四辺形をなすが大きさは一定しない。最下段は長方形を呈するが、焼成室は上方にいくにしたがい幅が広がっているので、上側の階の横幅も広がっている。焼成室の最大幅は復原して約1.8 mをはかる。窯壁は窯の中央部で約40cmの立ちあがりが残っていた。この部分で復原すると窯の断面形は高さ約70cmのカマボコ状断面形をなすとみられる。窯壁は表面から約5cm程が赤変していた。壁にスサ等の強化材は認められない。

燃焼室から焼成室にかけて約6°焼成室の傾斜は約28°をはかる。床面は赤色に焼きしまり、部分的に粉末状の炭化物がみられた。地山を掘削して造られた地下式の瓦窯である。

瓦の残在状況 床面に密着して瓦が出土した。いずれも小破片である。燃焼室での出土点数が多い。燃焼室では溝の中に落ち込んだ状態で出土するものもあるが、意識的に溝を覆うような造作は認められなかった。合計 295片の瓦が出土した。

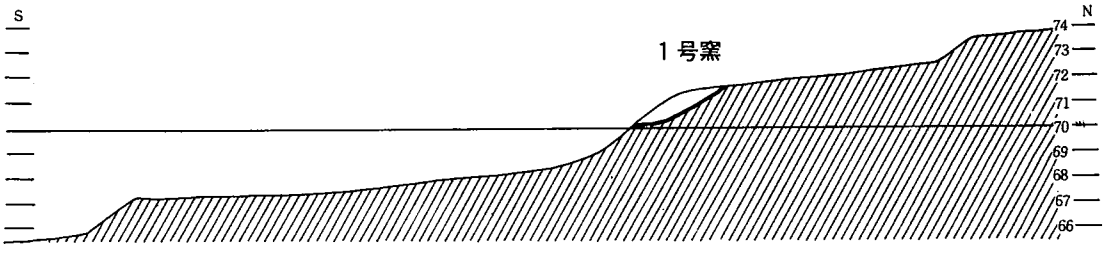


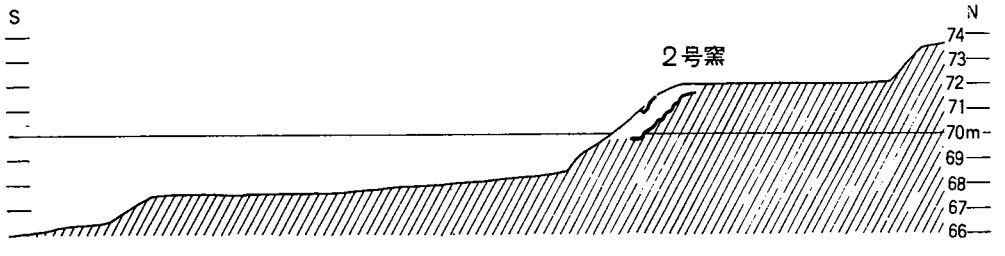
Fig. 8 平原1号窯の立地

B．2号窯（Fig．9，PLAN 2，PL．34）

窯内の状態　燃焼室の両壁が崖面に露出していたので、それを手懸りとして発掘を進めていった。天井部の一部が残っていたので、逆に上方より排土した。窯内は3層にわかれる①明褐色の耕作土の混入した土で、下方に窯壁を含む②は赤褐色土で多量の瓦を含む③は粘性の強いクリーム色の土で炭化物を含む。遺構の平面図（ＰＬＡＮ１）からも解るように、窯の傾斜が急な為窯の上半に置かれた瓦が下方にずり落ちて来た状態がみられる。また窯内には拳から人頭大のチャートの円礫がみられたが、これは火を受けていないので、窯廃絶後に投入されたものと判断される。窯内からは瓦の外、土師器甕、須恵器大甕片も出土した。

構造　燃焼室の一部と焚口、煙道部を欠失する。無花果の実のような平面形をなす。現在長2.85m、燃焼室の両端で幅1.14mをはかる。燃焼室の焚口寄りの部分は広がるようで、西壁がやや幅広くなっている。燃焼室と焼成室の境は明瞭に区分されている。燃焼室はやや高くなり焼成室は極めて急である。前者は7°後者は45°の床面傾斜している。段の総計15個をかぞえる。各段の平面形はまちまちで正方形をなさない。焼成室は奥にいくにしたがい幅が広くなり最大幅は1.64mをはかる。焼成室の溝は上から4段までは断面U字形をなし、しっかり掘られているが最下段部では浅くなる。幅10cm、深さ約10cmをはかる。溝は直線でなくやや西方へ曲っている。2号窯は、ちょうど焼成室の最下段の上方の天井部が残っていた。天井部は床と同様燃焼室と焼成室に対応するごとく段がつき、焼成室の天井は高くなり上方へ続いていく。天井が高くなるにしたがい床面も高くなるので床と天井の間隔は変らない。0.8～1.0mをはかる。窯壁は素掘りのままの状態で補強材等の使用はない。窯壁の表面は灰黒褐色に変じている。地山を掘削して造られた地下式の瓦窯である。

遺物の残在状態　多量の瓦は焼成室の下方に詰まった状態で出土した。これは先述の如く、上段にあったものが落下した結果とみられる。燃焼室からは5片の瓦しか出土していない。瓦とともに出土した礫は後世の混入とみられる。耕作時における礫の捨て場として窯の陥没穴が利用されたものであろう。床面に密着して出土したのは瓦のみであった（PLAN 1）。なお瓦の外に土師器甕、須恵器大甕も出土した。



Fig．9　平原2号窯の立地

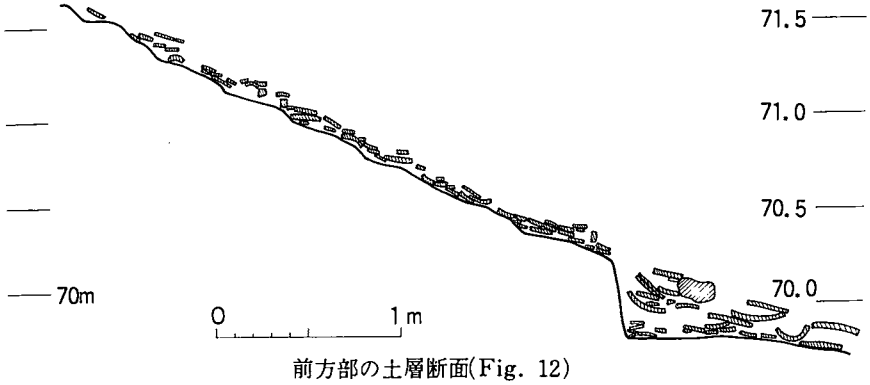
C．3号窯（Fig. 10, PLAN 4，PL. 35）

窯内の状態　粘り気の強い風化土を取り除くと床面に密着した瓦の堆積が露われた。瓦は全て半焼成および未焼成のもので、堆積土の水分により表面が溶解し原形を留めぬものも多い。下方つまり焼成室に近い部分のものは比較的良く残っている。瓦の上には窯壁片が散乱し、窯詰めをしたまま窯の使用が放棄されたことが想定された。

瓦の堆積状態　窯詰めのままの状態であるが本来の姿を観察できた箇所は少ない。燃焼室の最先端部では、1枚の平瓦を凹面を上にして、その上に4枚の平瓦を凸面を上面にして重ねている状態がみられた。

構造　燃焼室の一部と焚口、煙道および天井部を欠失する。平面形は羽子板状をなし現存長4.16mをはかる。窯の幅は燃焼室で1.26m、奥にいくにしたがいわずかに幅を減じ約1.0mをはかる。焼成室は7段よりなり、中央部に幅10～15cmの溝をもつ。溝の断面形はV字状をなし、深さ10cmをはかる。溝は一直線であるが、上から2段目まででいったん切れ、3段目から6段目まで続く。最下段には設けられていない。窯壁は南側は破損していたが北側は比較的良く残っていた。焼成室で高さ42cm、燃焼室の中央部で40cmをはかる。焼成室で復原すると高さ約80cmのカマボコ切断状の断面をなすらしい。窯の傾斜は27°をはかる。地山を掘削して造られた地下式の瓦窯である。

窯の前方部　3号窯の前方部に幅2m、長さ4mにわたり瓦や石片の散布がみられた。断面図でみるとおり、3号窯の焚口部分が切断され、地山が急激に約1.2mの深さに落ちている。この落ち込みの最上部には、瓦や窯壁が地山に密着した状態でみられる。前方部から出土した瓦類は、3号窯内のそれと種類も焼成の具合も一致し、3号窯焼成部の瓦が窯前方部が破



前方部の土層断面(Fig. 12)

1　淡褐色
2　わずかに赤紅色(粘土質)を含む為、黄色っぽくみえる
3　1と似ている
4　2に似るが粘土質の赤紅色土が2より多い
5a　赤紅色粘質土・窯壁、瓦等はこの中に含まれる
5b　a と似るが硬い・窯壁の内側の流出したものか
6　有機化の全くみられないバイラン土、地山

Fig. 10　3号窯断面図

損する時に前面に散乱したものと判断される。地山に遺物が密着し、地山との間に有機土等がみられない事などから考えると、窯前方部の落ち込みの形成は、窯の破壊時と同時か、さほど時を経ず、しかも急激に行われた可能性がある。このような大規模な地山の流出は、人口的な所作とは考えられない。恐らく流水によるものであろう(Fig. 12)。

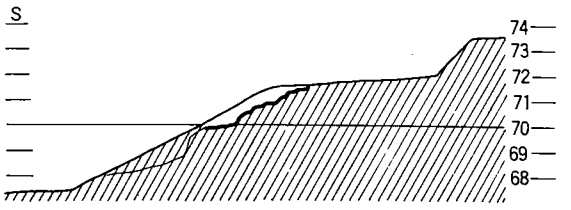


Fig.11 平原3号窯の立地

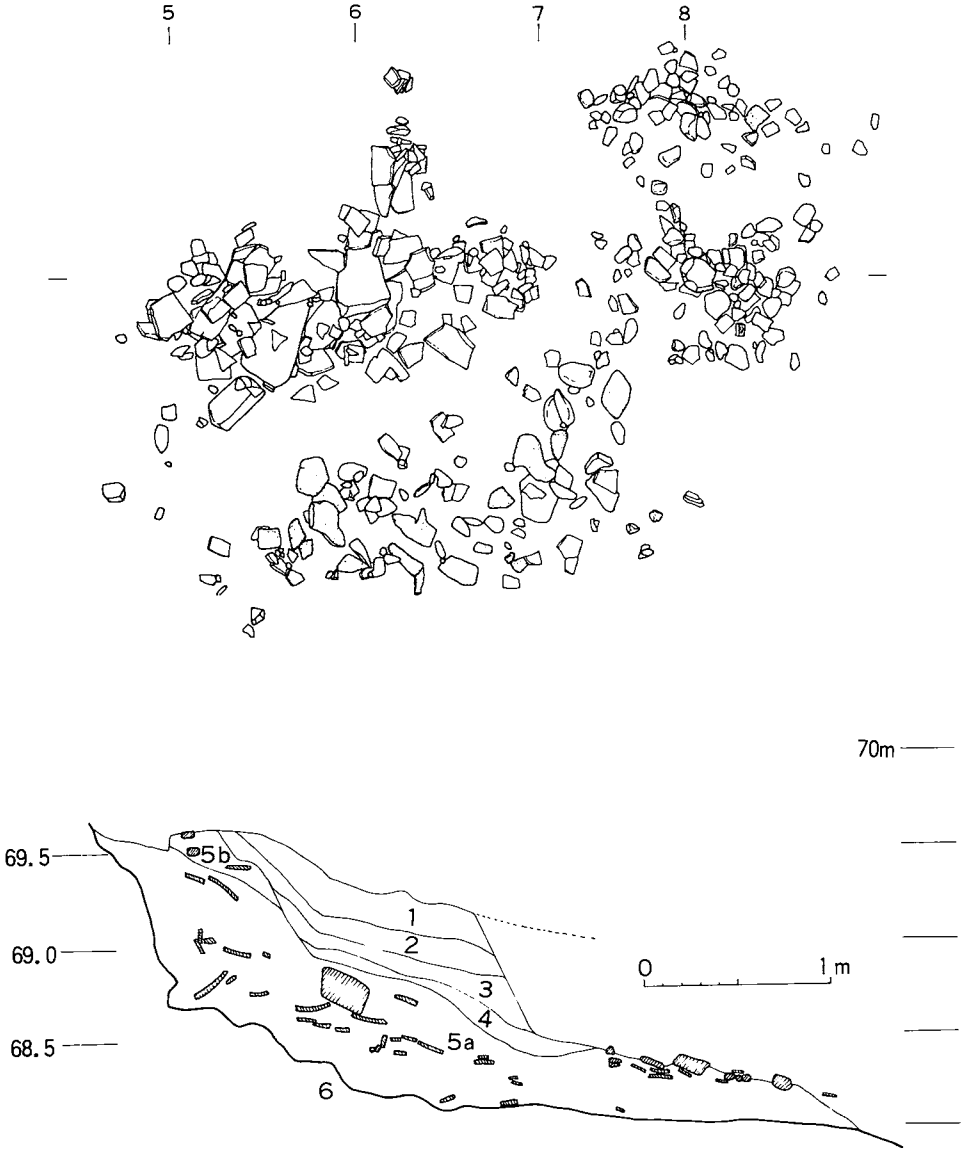


Fig.12 3号窯前方部瓦出土状態（上の数字は窯上方からの延長距離 単位m）

D．灰原（Fig.7，PL.39）

瓦の分布状態　1・2・3窯の存する扇状の崖から要にあたる部分に、焼成不良の瓦が散乱する灰原がある。各窯の焚口の部分は既に削平されていたので、瓦は見られない。瓦の堆積は2Lから3M方向に分布の広がりをもつ。瓦に混じって砂岩、花崗岩などの角礫や須恵器の細片もみられた。瓦は、一体に窯に近い部分（2L）のものが小さく、遠距離のものが大きい傾向にある。灰原の広がりは約20㎡である。約2,400片の瓦が出土した。

灰原の断面　灰原は地形に沿って順々に低くなっていくが、南端は調査地外であり確認していない。北端は1Nおよび2Oを結ぶ箇所からみられ、約15度の傾斜を示す。瓦を包含する層は上下2枚（a・b）であるが、bが本来の灰原であり、aは2次的な堆積層であると判断された。灰原は15cm前後で比較的薄い（Fig. 14)。

E．ピット群（Fig. 13, PL.39）

1～3区のL・M部分に、24個円形のピットが検出された。1層の褐色土に掘り込まれている。灰原の傾斜面の上方にあり、しかも瓦層より下位にあることから瓦窯と関連あるピット群とみられる。配列に規則性はみられないが、簡単な建物の柱穴と推定される。

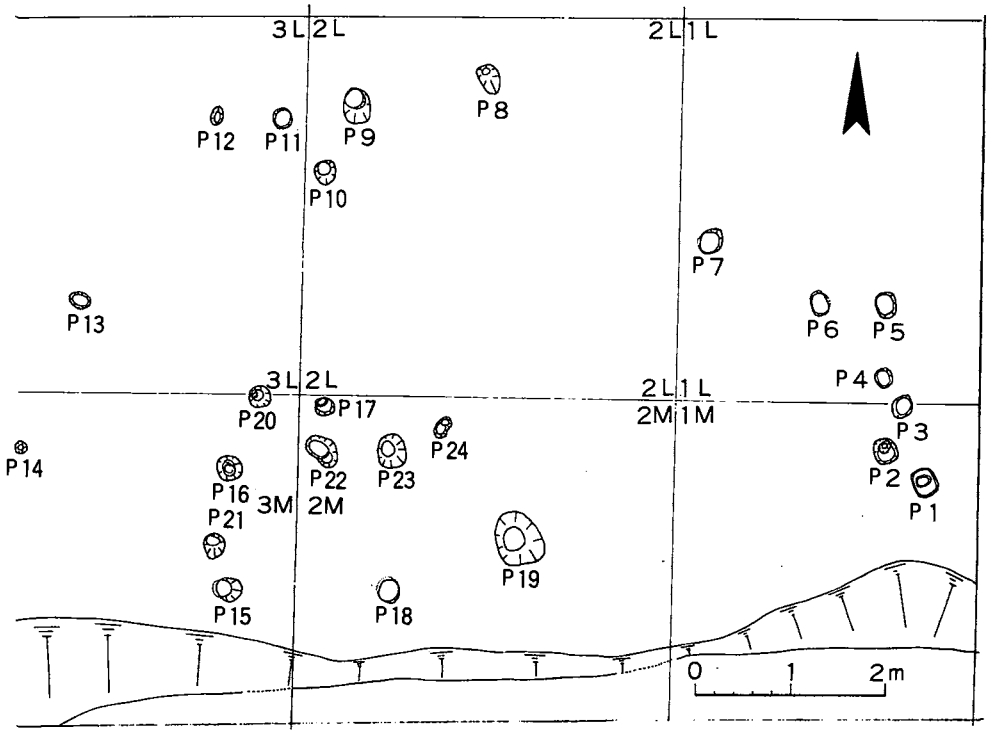


Fig. 13　ピット群分布図

Pit.No	Pitの深さ(cm)	Pitの底標高値(m)	長径×短径(cm)	備　　考
1	17.0 (32.5)	66.465 (66.31)	25 × 19	瓦出土
2	17.5 (27.0)	66.565 (66.47)	24 × 19	瓦出土
3	11.5	66.735	21 × 17	
4	12.5	66.755	16 × 13	
5	13.5	66.940	21 × 16	
6	33.0 (39.5)	66.765 (66.70)	21 × 18	
7	21.5	67.005	24 × 19	瓦出土
8	21.5	67.170	25 × 16	瓦出土
9	61.0	66.875	30 × 22	瓦・炭化物出土
10	28.5	67.130	19 × 18	
11	23.0	67.260	17 × 16	瓦出土
12	11.0	67.350	15 × 10	
13	9.0	67.260	19 × 12	
14	18.5	66.865	10 × 10	
15	35.5	66.220	22 × 20	瓦出土
16	17.5 (30.5)	66.610 (66.48)	22 × 21	
17	29.0 (42.0)	66.530 (66.400)	17 × 15	
18	29.5	66.055	21 × 17	瓦出土
19	24.0 (42.0)	66.180 (66.00)	50 × 39	瓦出土
20	21.0	66.690	18 × 17	礫出土
21	45.0	66.210	21 × 17	
22	18.0 (42.0)	66.540 (66.30)	31 × 19	瓦出土
23	43.0	66.180	29 × 23	
24	24.5	66.405	20 × 10	

Tab. 2　ピット計測表　(　　) は2重の底を示す

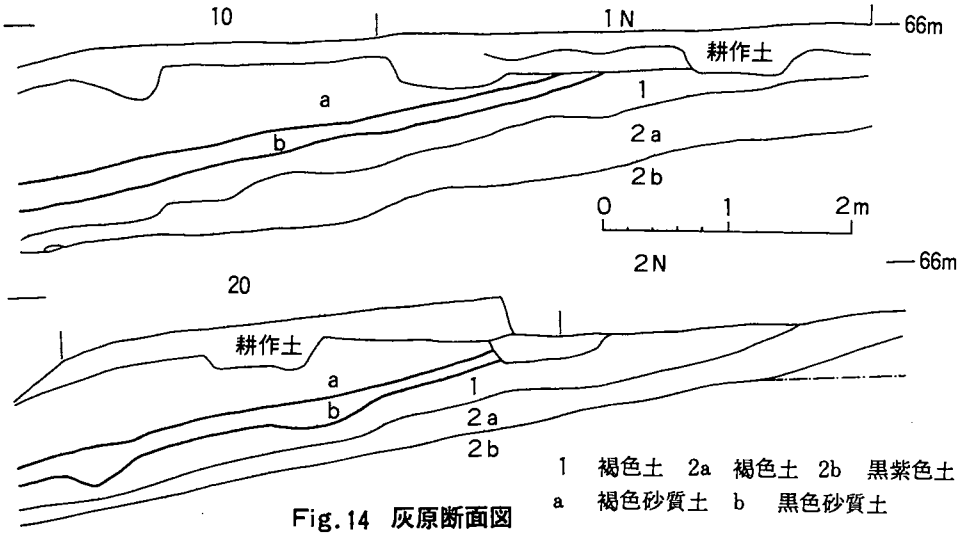


Fig. 14　灰原断面図

F．溝 (Fig. 15・16，PL・38)

1 溝　3窯の南側にみられる溝である。この溝は地表部分もわずかに凹状をなしていて、丘陵の頂部へ至る道として利用されていた。溝は西から東に向って低くなり上側と下端で、比高差約3mをはかる。溝幅は約 3.5mで、断面形は幅広のU字状をなす。溝の底には流水で形成されたとみられる小さな溝に、角礫の集積がみられ、その中から少量の須恵器と瓦片が出土した。

2溝　12H区から傾斜に沿い西南方向に続く溝で、断面はV字形をなす（Fig. 19）。13J区では、地表面から溝底まで約 3.5m、溝幅は一定しないが約1.5～2.8mをはかる。溝底には小さな深い底があり雨水により生成したものだとみられた。12・13J区の断面（Fig. 19）をみると、13J区の北側に古い溝が認められる。恐らく雨水等によって順々にいく条かの溝が形成され、結果として今日のような大溝になったものであろう。13J区では、溝の底近くに石組みがみられ、周辺から蔵骨器片や須恵器片が出土した。なお、この溝の末は、19Qにもみられたが、溝幅は狭くなっていた。

3溝　22～24、M～Q区にみられる幅8mの大溝である。調査区の西側谷の北から南にかけて続く。断面形は浅皿状をなす。2溝と同様に流水等によって形成された自然溝である。人工遺物の出土はなかった。

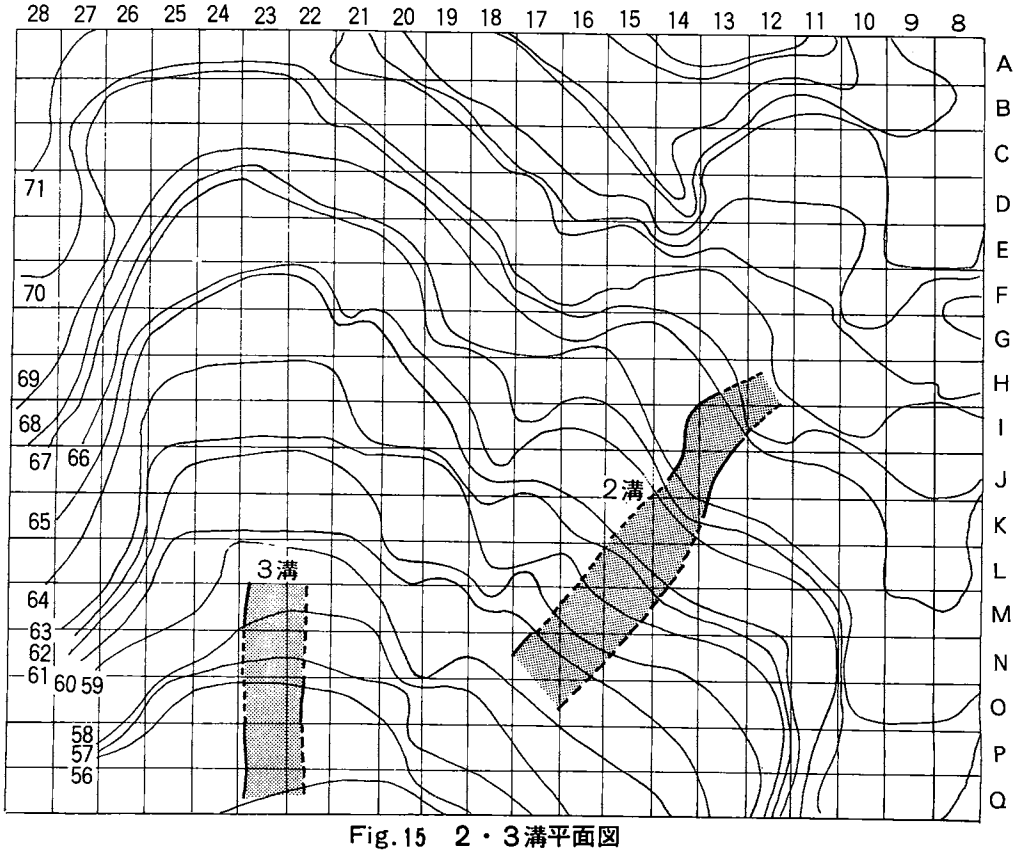
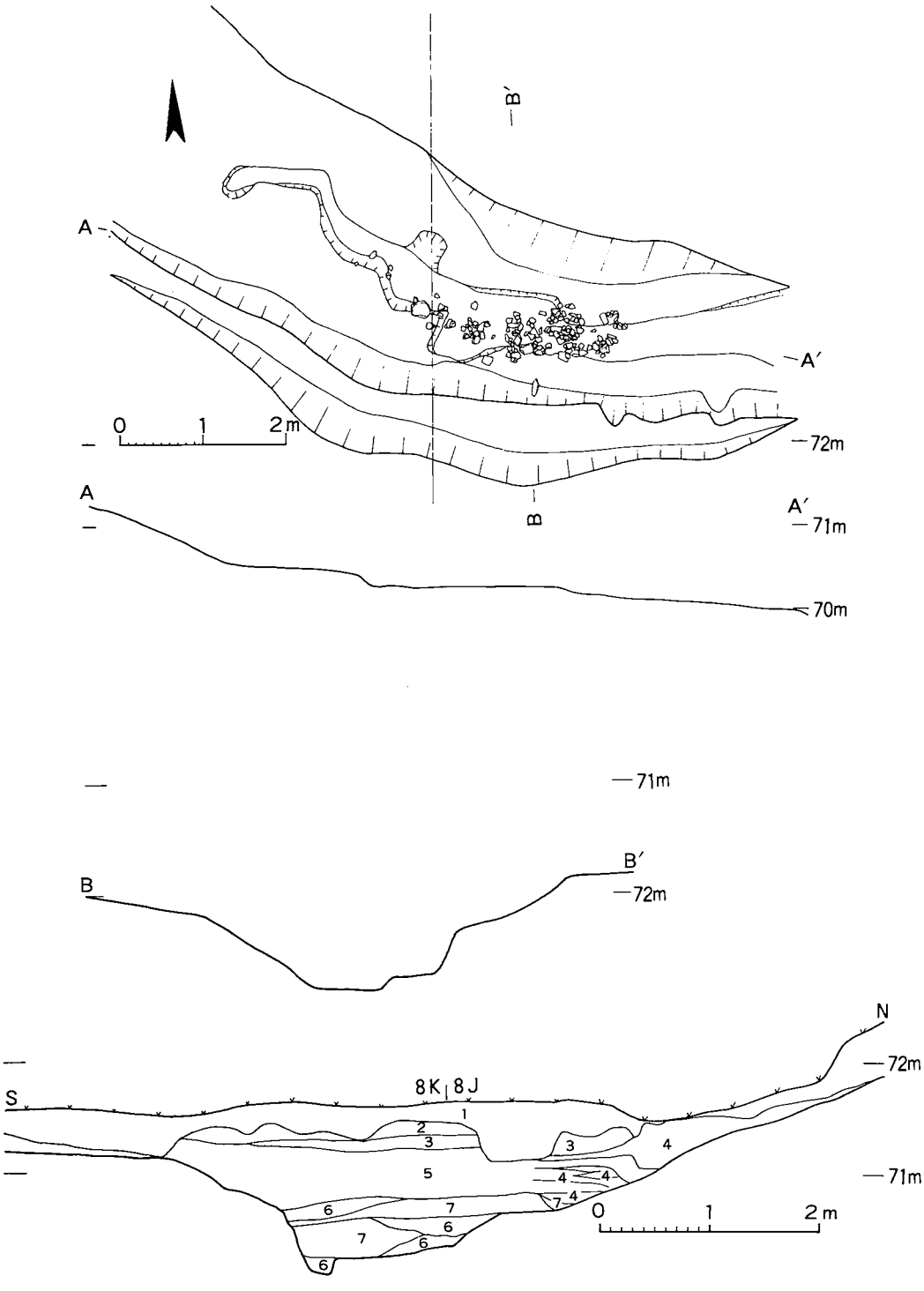


Fig. 15　2・3溝平面図



1　耕作土　2　黒色土　3　灰黒色土(粘土混入)　4　黄色土(粘土状)　5　赤色土(さらさらする)　6　赤色土(やや粘土状土混じり)　7　白色土混入土

Fig. 16　1溝平面図・断面図

G．石　組（Fig. 18～20，PL. 40）

1石組　2溝の底にある石組で、人頭大から拳大の円礫を大略4段に積んでいる。概して大きめのものを下にする傾向がみられる。全体として雑な積み方である。石組の最下端から溝底まで約40cmあり、石組は溝が一定程度埋まった時点で構築されたとみられる。

2石組　13N区にある石組みで、礫がトレンチ内に半環状態に出土した。拳大から人頭大の礫を無造作に並べた状態をみせる。礫の間から近世陶器が出土した。

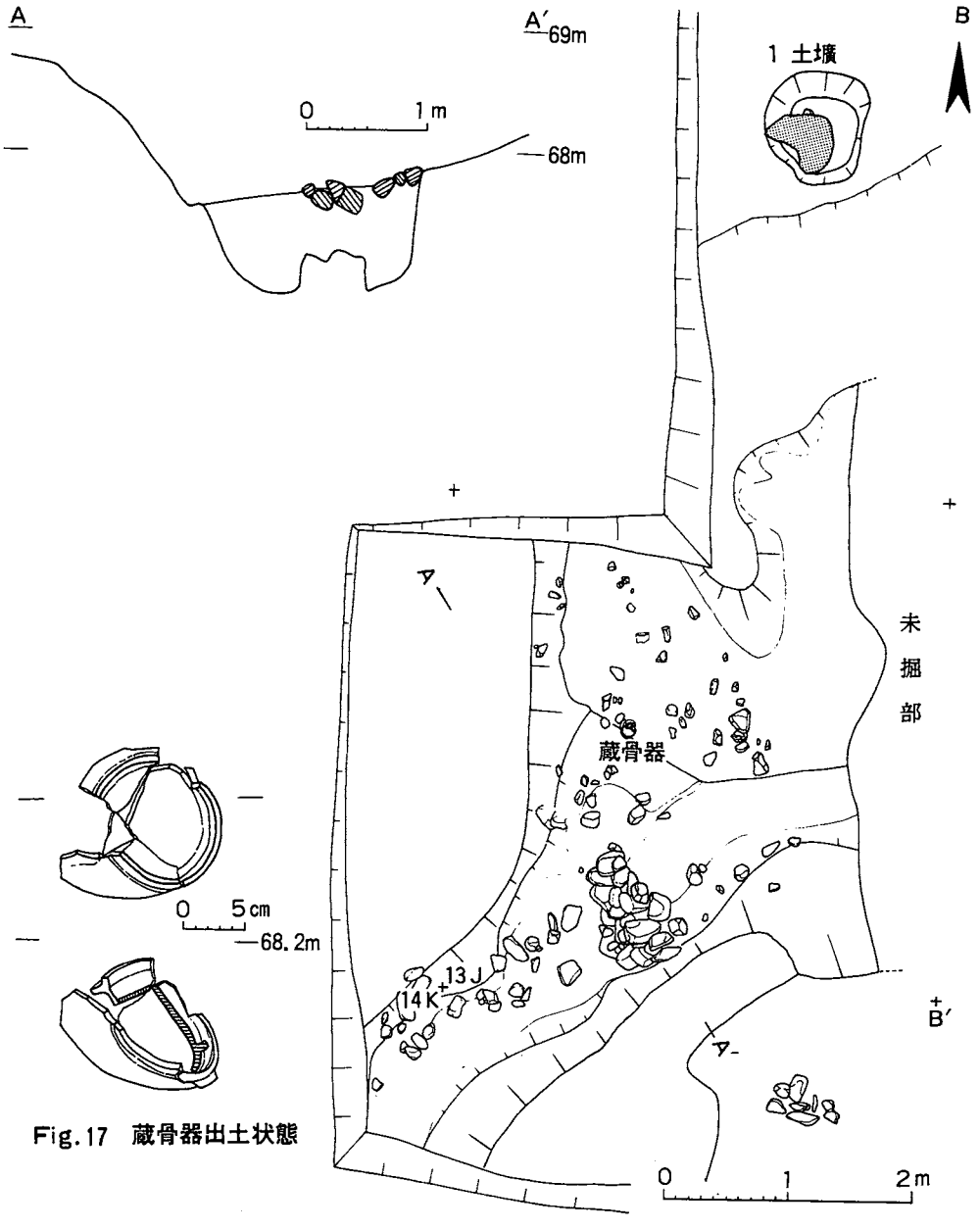


Fig.17　蔵骨器出土状態

Fig.18　2溝・1石組平面図

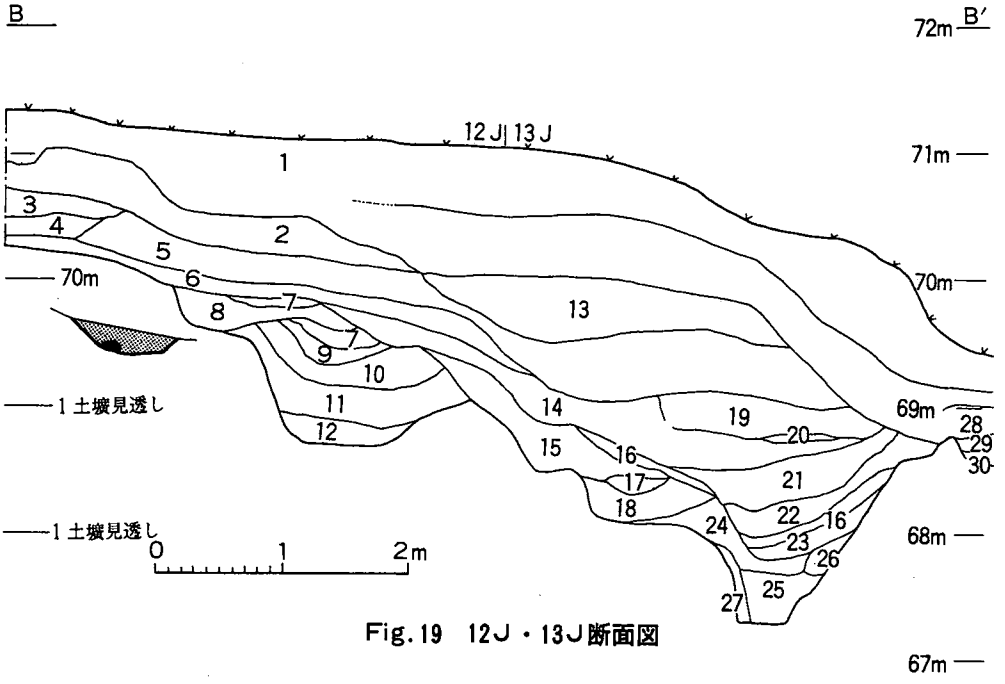


Fig.19　12J・13J断面図

1　耕作土
2　灰褐色土で赤みがかっている粘土弱
3　褐色土で粘性は弱
4　褐色土で3よりも暗い
5　明褐色土
6　5よりも明るい
7　赤褐色土
8　褐色土で多少の炭化物がみられる
9　灰褐色土
10　明灰褐色土
11　褐色土で地山の粒子を多少含む
12　灰白色土
13　明灰褐色土　黒色ブロックを多少含む
14　赤褐色土　赤色ブロックを多少含む
15　褐色土　14より粘性は弱い
16　黒褐色土　粘性強
17　灰褐色土　砂まじり
18　明褐色土
19　赤褐色土　赤色ブロックと黒色ブロックが多少混じる
20　砂　層
21　灰白色土　粘土ブロックが多少混入
22　赤褐色土　赤色ブロックと黒色ブロックが多い
23　褐色土
24　灰褐色土
25　24より暗い灰褐色土
26　地山くずれの部分　粘土ブロックが混入
27　灰褐色土
28　灰褐色土　27より明るい
29　褐色土　粘性強し
30　明褐色土

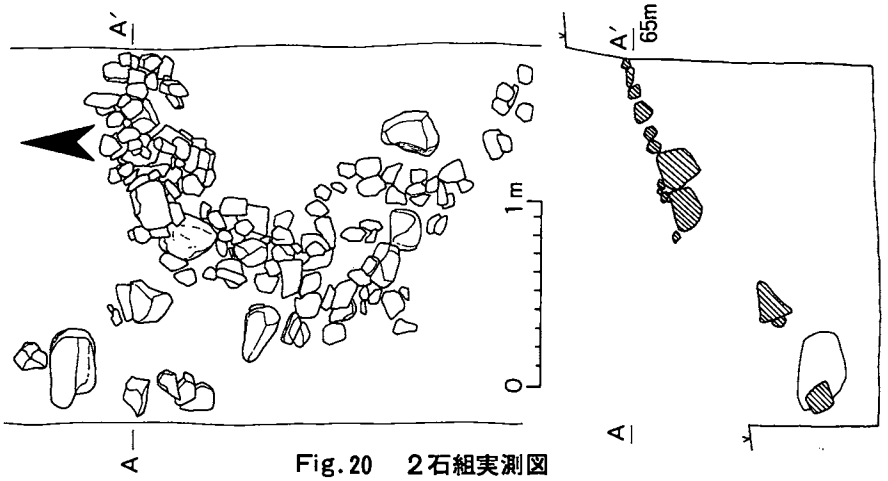


Fig.20　2石組実測図

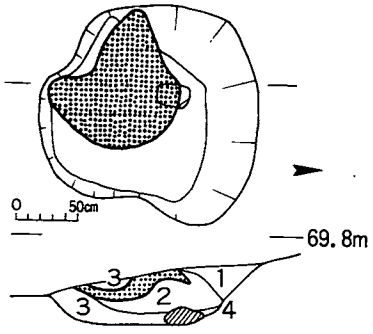


Fig.21　1土壙実測図
1　赤色粘土質土　2　黒褐色土
3　褐色土　4　地山
（アミは炭）

H. 土壙（Fig. 21・22, PL. 41）

1土壙　13Ⅰ区で炭の詰まった土壙を検出した。土壙は不正円形をなし、断面は浅皿状をなす。南北90cm、東西80cm、深さ20cmをはかる。上縁部は流出しているとみられる。底に長径15cmのチャートの平石が据えられていた。土壙の中位から上部分に炭を敷いている。炭は厚く層をなし、最大厚10cmをはかる。北側には赤色の粘土質土がみられるが、この土は意識的に置いた状態であった。この遺構は、この地点から5m、南の谷底で出土した蔵骨器の下部構造であるとみられる。土壙からの遺物の出土はなかった。

蔵骨器の出土状態　底部の大きな破片を中心として、胸部破片や蓋が散乱した状態で出土した。13Ⅰ区から転落したと考えられ、落下した時点で破片が散乱したものであろう。底部破片には白色化してチョークの粉末を思わせる焼骨が付属していて、蔵骨器である事を示している。

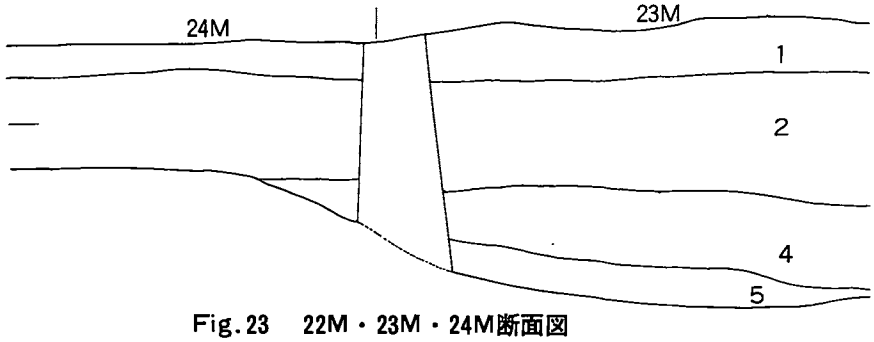


Fig.23　22M・23M・24M断面図

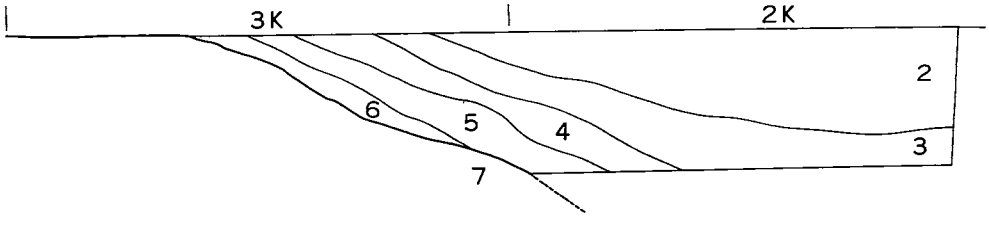


Fig.24　1K～3K断面図

2土壙　ＩＭ区の西側の断面で検出した土壙で、全体の形を明らかにしえない。断面形はU字状をなし、縁部で径１ｍ、深さ60cm底面は平で径60cmをはかる。土壙は２ａから掘り込まれているので、縄文時代の土壙であろう。土壙内には褐色土を基本とする７枚の土層がみられた。遺物の出土はなかった。

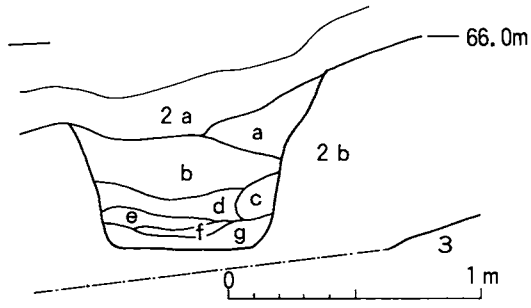
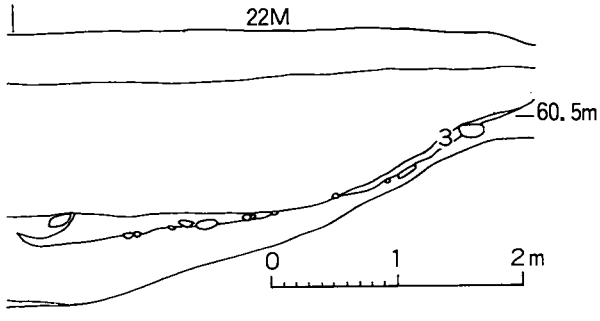


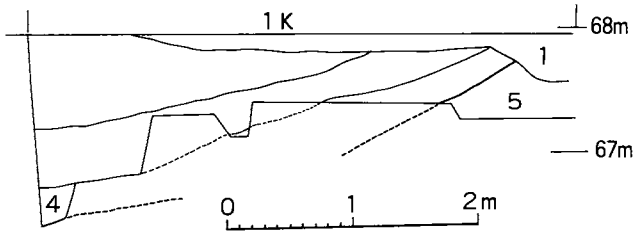
Fig.22　2土壙断面図
2a　褐色土(粘質土)　2b　黒紫色土(粘土)
3　褐色土(砂をふくまない)

Ｉ．その他

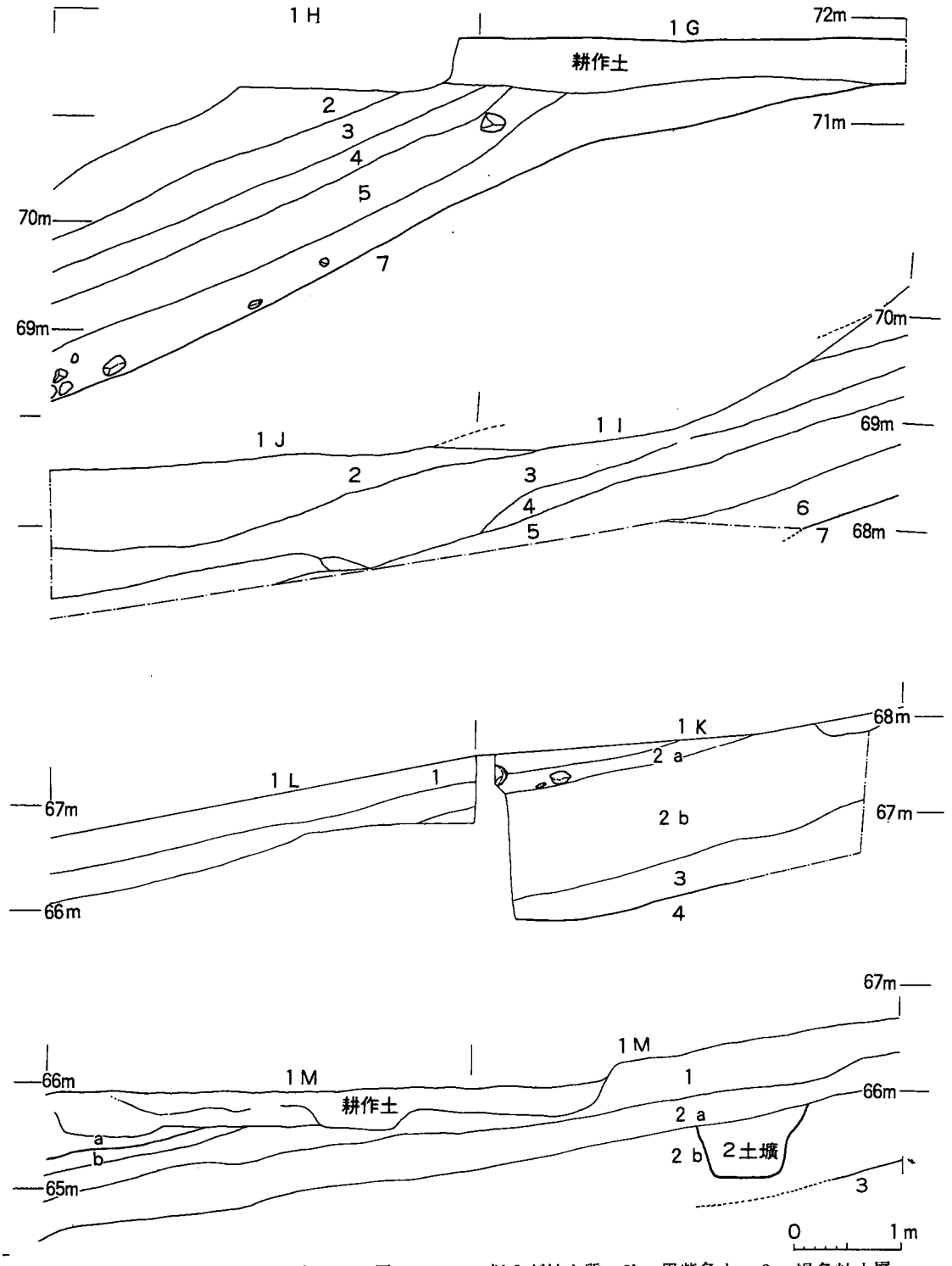
１～３・Ｋ～Ｎ区にかけて、地山が凹み谷をなす部分がある。この谷は北から南にかけて続いている。１～３Ｋの断面でみると幅約10mをはかる。谷の中央部で地山の花崗岩バイラン土層まで 1.6m 以上をはかる。谷の堆積土は６枚よりなる。褐色から黒褐色に及ぶ、粘土質の土で、遺跡内の他の箇所には見られない土壌である。２ａ・２ｂ層から土器、石器が出土した。この層は下方にいくにしたがって厚くなる様子であるが、下端を明らかにはしなかった。



1　表土　2　明褐色土　3　赤褐色土　4　褐色土(炭化物が少量みられる)　5　黒褐色土(４に比し色が濃く、粘性もやや強い)



1　褐色土(砂質)　2　黒紫色の粘土層　3　褐色粘土層　4　濃緑黒色土(炭化物を含む)　5　黒褐色土　6　礫(チャート・砂岩・礫岩・片岩など)層　7　花崗岩バイラン土



1　褐色土(砂質)　2　黒紫色の粘土層　2a　1に似るが粘土質　2b　黒紫色土　3　褐色粘土層
4　濃緑黒色土(炭化物を含む)　5　黒褐色土　6　礫(チャート・砂岩・礫岩・片岩など)層
7　花崗岩バイラン土　a・b　瓦集積層

Fig 25　1G～1M断面図

第Ⅴ章　遺　　物

1．瓦　　類

瓦の記号について　ここで、取扱った瓦類は原則として窯内出土のものである。灰原からは2,000点の瓦の出土をみたが、遺構の性格上、焼成中に変形したものや小破片が多い。軒瓦については、灰原出土のものも紹介する。軒瓦は点数が限られるので個体毎の記述をおこない、丸瓦・平瓦は窯毎に分類したものを記述する。瓦類は軒丸瓦はＮＭ、軒平瓦はＮＨ、丸瓦はＭ、平瓦はＨと記号化し、丸瓦・平瓦については出土した窯の号名を含めて表記する。丸瓦・平瓦の１号窯、２号窯、３号窯出土のものは、それぞれM_1、M_2、M_3、H_1、H_2、H_3と表記する。

軒瓦の出土場所　軒瓦の出土瓦に占める割合は少い。各遺構ごとの軒瓦の出土点数はTab.３のとおりである。２号窯内から多くの軒瓦が出土したが、１・３号窯内から軒瓦は出土していない。

A．軒丸瓦（図面１・２、PL１・２）

軒丸瓦の残存状態　69点の軒丸瓦が出土したが、大多数は灰原から出土した。焼成不良の破片が多い。完成品はない。

ＮＭ１　全体の形が窺える数少い例である。断面台形の傾斜縁で、周縁に大略二等辺三角形の陽起歯文をもつ。鋸歯文は10個が残っているが、復原すれば24個になるとみられる。傾斜縁と平坦面の境に凸線をめぐらし、22個の半球状の珠文をめぐらす。蓮台は８個の複弁蓮華文からなるが、複弁は複子葉弁で子葉を画する外側の凸線は丸い。２個の子葉は凸線により２分割されている。中心蓮子は１＋５＋９で、蓮子が２重にめぐっている。顎部の裏面が周縁に沿って１段高くなっている。丸瓦部との接合粘土の上面に反転した布目が残っている。丸瓦との接合は瓦当面裏側に断面三角形の溝を掘り接合する。中房に長さ 1.6cm、幅 0.1cm、高さ0.05cmの範傷がみられる。瓦当裏面は中心部に縦方向のナデ、その上から段に沿ってナデが重ねられている。灰色を呈し、焼成は甘い。表面には小さな焼きヒビが生じている。

出土場所	軒丸瓦	軒平瓦
1　　窯	—	—
2　　窯	7	17
3　　窯	—	—
3窯前方部	2	2
灰　　原	60	14
計	69	33

※接合したものは一点として数えている。

Tab. 3　出土軒瓦一覧表

ＮＭ２　周縁を欠失するが、焼成良好で黒褐色を呈す。焼成が良好のため瓦当面が良く残り、各所の原寸を知ることができる。蓮子は高さ 0.5cmをはかる。この瓦にもＮＭ１と同じ範傷がみられる。裏面の調整もＮＭ１と同様であるが、丸瓦との接合部に布目はみられず、瓦当面に直交する条痕がみられる。

ＮＭ３　表面青灰色を呈し焼成不良。瓦当文様も磨滅気味であるが、ＮＭ１・２と違いはない。

裏面の一端に丸瓦との接合溝の一端が残っている。裏面にNM１・２のような抉りはみられない。表面の状態が悪く調整などは観察できない。

NM4・５　風化によって瓦当文様は磨滅気味である。NH５には丸瓦接合溝の一部が残ってる。ともに灰白色を呈す。

NM６　瓦当面が３片に割れ別々に出土した。全体の３分の２が残っている。表面黄褐色、内は黒色をなし焼成不良。表面が風化している。胴土に多量の石英粒がみられる。

NM７・８　小破片である。NM７は表面黄色、胴土は黒色をなす。精製された粘土を作っている。NM８は小豆色をなし、焼成良好。

NM９　瓦当面が３片に割れ出土した。全体の３分の２が残っている。赤色をなし焼成はあまり良くない。中央の大きな破片の子葉を囲む凸線が外区の界線を切ってやや外に出るのが特長である。精製された粘土を用いている。上部には丸瓦との接合溝が良く残っている。

NM10　瓦当面の４分の１が残る。精製された粘土を用いている。小豆色をなし、焼成良好。

B．軒平瓦（図面３～６，PL.３～６）

軒平瓦の出土状態　33点のうち灰原と２号窯から31点が出土した。しかも２窯の出土数は17点と半数以上を占める。完成品はなく、瓦当部の出土が多い。瓦当面が完全に残っているものは１点である。

NH１　瓦当面は風化している。顎部の幅８cmをはかる。粘土紐を巻きあげた状態が良く観察できる。

NH２　右脇区をわずかに欠損している。左脇区は切断され、側面には叩きがみられる。凹面には布目の上から幅３cmの圧痕が平行してみられる。瓦当面の左側外区は範ずれをおこし、珠文が表出されていない。赤色を呈し、焼成はよくない。

NM NO	出土場所	直径	内区			外区				瓦当厚	備考
			中房	弁区		外区広	内縁	外縁			
			直径	弁区径	弁幅		幅	幅	高さ		
1	2窯	(172)	52 54.5	26 27	26 28	24.5	15	9	19	21	笵傷あり
2	灰原	—	53 57	28 30	28 30	—	15	—	—	26	笵傷あり
3	3窯前方部	—	—	27	27	—	15	—	—	26	
4	灰原	—	(58) 53	27	26	—	15	—	—	22	
5	灰原	—	—	26	23	—	15	—	—	21	
6	灰原	—	54	28	27	—	15	—	—	22	
7	3窯前方部	—	—	27	23	—	—	—	—	14	
8	2窯	—	—	—	26	—	14	—	—	18	
9	(2窯 灰原)	—	54	26	23 27	—	15	—	—	21	
10	灰原	—	—	26	25	—	15	—	—	18	

Tab.４　軒丸瓦計測表

単位は㎜　—計測不能　（　）復原値
瓦当厚は中房を中心に計測・中房なきものは端部の厚さ

NH NO.	出土場所	上弦幅	弧　深	下弦幅	内　区	上外区	下外区	脇　区	側縁の調整
					幅	幅	幅	幅	
1		—	—	—	21	10	13	なし	切断
2	2　窯	(220)	(45)	(22)	21	7　10	12　13	なし	切断→叩き
3	灰　原	—	—	—	21	7　10	8	—	—
4	灰　原	—	—	—	22.5	10	10	—	—
5	灰　原	—	—	—	21	9	10	なし	切断→叩き
6	灰　原	—	—	—	18　20		10　12	なし	切断→叩き
7	3窯前方部	—	—	—	21　22	8　11	12	なし	切断
8	灰　原	—	—	—	—	10	—	なし	切断
9	2　窯	(215)	(45)	(235)	18　21	9	12	なし	切断→叩き
10	2　窯	—	—	—	21	6　9	10　15	一部あり	切断
11	灰　原	—	—	—	21	8	10	なし	切断→叩き
12	灰　原	210	45	234	18　20	12	12	なし	切断→叩き
13	2　窯	—	—	—	23	10	12	11	切断
14	2　窯	—	—	—	20	7　9	11	なし	切断→叩き
15	2　窯	—	—	—	19　21	9	11	なし	切断
16	灰　原	—	—	—	21	10	—	なし	切断→叩き
17	灰　原	—	—	—	—	—	11	—	—
18	灰　原	—	—	—	—	—	—	あり	切断
19	2　窯	—	—	—	22	11	14	なし	切断
20	灰　原	—	—	—	19	10	10	なし	切断→叩き
21	灰　原	—	—	—	23	10	7	一部あり	切断
22	灰　原	—	—	—	—	—	9	9	切断
23	灰　原	—	—	—	21	8　12	12	—	—
24	2　窯	—	—	—	21	10　11	13	—	—
25	2　窯	—	—	—	20　21	9	11	—	切断
26	3窯前方部	—	—	—	22	9	11	—	切断→叩き
27	2　窯	24.8	(40)	(265)	21	10	11	なし	(切断 切断→叩き)

Tab. 5　軒平瓦計測表　　単位mm　—は計測および観察不可能　(　)は推定復原

NH3　瓦当の部分破片である。脇部を切断しているが界線の下方の一部が残っている。右側端面が断面逆く字形に残っている。この部分は下の面を叩いた後、その上を瓦当の逆方向から篦状具で切断している。黒灰色をなし、焼成良好。

NH4　瓦当中央部の破片である。粘土紐の最小の単位で欠損している。瓦当面の反対側には長径 3.5cm、短径 3 cmの楕円形の指頭状の圧痕が並列してあり指紋が残っている。灰色。

ＮＨ５　左側面が残っている。側面は切断され叩きが附される。凹面部には布目が残るが瓦当上縁は約１cmの幅で削られヨコナデがみられる。

ＮＨ６　小豆色を呈し、瓦当面右側が残る。脇区は切断されて叩きが附される。

ＮＨ７　左側面が残っている。側面は切り離したままの面が残っている。灰色をなす。

ＮＨ８　瓦当面の下半のみ残る。凹面には細い布目が残る。

ＮＨ９　出土品のうち数少い瓦当面の完形に近い資料である。左右の外区は切断され、側面を叩く。顎は段顎をなすが、顎幅は一定ではなく両端で７cm、中央部で６cmをはかる。凹面には幅３cmの模骨痕がみられる。布目は瓦当面の端のところまでみられる。左側端の上部を幅約１cmほど面とりしている。右側端には面とりがみられない。瓦当面を下にし、凸面から見た場合、左側端部（瓦当面の右）から右に下る罅がみられる。恐らく粘土紐を桶に巻いていく場合右まわり（時計の方向）に巻いていったことを示すものであろう。焼成はあまり良くない。灰色を呈す。

ＮＨ10　瓦当面中央部から右側端が残っている。瓦当幅は右側端に寄るほど狭くなる。中央部で4.5cm、右側端で 2.5cmをはかる。文様が右方向へぶれている。右脇区の上半は切断され、断面逆く字形の２面がつくられている。叩きはみられない。瓦当面は逆台形状に顎の中央部から剝落していて、瓦当部の裏面には隅丸四辺形の凹部が並列している。剝離面の反対側は逆に隆起している。凹面は布目の上の刷毛目がみられる。瓦当面寄りの部分では、右から左へ調整される。右端には幅１cm、高さ 0.5cmの凸部が残っている。表面は黄色、胎土は黒色をなす。焼成はあまり良くない。

ＮＨ11　瓦当面の右側端が残る。脇区は切断されている。

ＮＨ12　瓦当の中央部で折れているが、接合すれば文様帯は完形となる。両側面は切断され、わずかに叩き痕が認められる。凹面には2.5～3.5cmの模骨痕が残る。断面に凹画から凸面の瓦当下端に斜行する粘土紐の状態が観察できる。灰色をなし、焼成はあまり良くない。

ＮＨ13　瓦当の右半分を欠失する。平原瓦窯の中では脇区の残る数少い例である。瓦当面の文様は他のものと違いはない。凹面は布目の上から幅４cmの篦状具で押圧され凸凹をなす。瓦当部との接合部は瓦当面と同じ方向に削られているので、瓦当面が凹面よりやや下になる。左側端残っていて２面に面取りされ、断面が逆く字形をなす。顎部では叩きの上を調整し、部分的にその上を削っている。顎の段も高く、平原瓦窯の軒平瓦では大きい部類に属する。灰色をなし固い。

ＮＨ14　出土瓦のうち最も大形の破片である。瓦当部が顎の中央部で剝離して出土した。文様帯は左側端を欠失する。右の脇区は切断され、側縁部は断面逆く字状に面取りがなされているが、下側の広い面には叩きがみられる。凹面には側縁に平行する幅 2.2cmの角ばった圧痕がみられ、布目が圧痕により部分的に消えている。この文痕は文様面、狭端面の両方から加えら

れている。凹面の布目は瓦当面寄りの部分ではナデ消されている。その部分には指頭による圧痕もみられる。顎の幅は中央部から両端にかけて広くなる傾向がみられる。顎の段の部分は、瓦当面と反対側の方向へ余分の土を掻き取った痕がみられる。小豆色をなし焼成良好。

ＮＨ15　瓦当面は中央部しか残っていない。平瓦部は顎を境にして欠損している。右側面は断面逆く字形に面取りをしているが、叩きはみられない。凹面の瓦当寄りに幅３cm程にヨコナデ、部分的にそれと直交するヨコナデがみられる。焼成良好。灰色を呈す。

ＮＨ16　瓦当面の右半分と顎部が残る。焼成により歪み、全面罅がみられて、ちょうど粘土紐の接合面から分離している。右側端部は断面逆く字形に面取りをしている。下側の広い部分は叩きを施す。灰色をなし固い。

ＮＨ17　長さ８cmの小破片で、わずかに下外区の鋸歯文がみられるが、欠失した上方部分は粘土紐の単位を示している。灰色をなす。

ＮＨ18　焼成により歪み脹んでいる。左側面が残っていて面取りされている。

ＮＨ19　瓦当面の左が残る。左側面を大きく切断し叩き凹面の角を落している。凹面の布目の下に模骨の凹部がみられる。瓦文様はずれている。赤色を呈し、焼成不良。

ＮＨ20　右瓦当部が残る。側端部に叩きがみられる。ちょうど顎の部分で欠損している。灰色をなし、焼成不良。

ＮＨ21・22　ともに右脇区部分の破片。側端は断面逆く字形に面取りをしている。ＮＨ21の下外区の鋸歯文は先端部が切れている。ＮＨ22の側縁の２面の切取り痕をみると、上面は瓦当面から平瓦部狭端面へ、下面は下（凸面）から上（凹面）方向へ工具の移動がみられる。

ＮＨ23　焼成による脹みがみられるが、それを差し引いても瓦当面の寸法は他のものよりやや大きい。凹面に布目は残っていない。顎部から瓦当面にかけて、やや下へ傾斜する。

ＮＨ24　瓦当面が剝落した状態で残っている。赤色をなし、焼成不良。

ＮＨ25　瓦当面は中央部が一部残るだけであるが左側端部が残っている。側端は切離されたままである。凹部にはわずかに布目が残る。顎部は篦状工具で段を成形し、平瓦の方向へかき取っているが、充分ではなく粘土が残っている。灰色をなし焼成良好。

ＮＨ26　表面は風化が著しい。瓦当先端部で剝離している。側端を切断し、叩きを施す。灰色をなし焼成不良。

ＮＨ27　４片に分離して出土したものが接合した。瓦当面の右側端部の上半を欠失するが、文様体は左右大きさが復原できる。両側端を切断しているが、右側は切離しのまま左側は叩いている。面取りをしているが、左側は凸部との境がなく丸味をもっている。凹部にも叩きの痕がわずかに認められる。布目はみえない。顎部の丸瓦へ続く部分は表面が剝離し、顎段を形成するにあたり粘土を補充したことが観察できる。灰色をなし焼成良好。

C．丸　瓦

丸瓦の分類　丸瓦は完形・破片を含めて１号窯から35点、２号窯から53点、３号窯から 498点、窯様遺構から３点出土している。平瓦の出土点数に比較すると、１・２号窯の場合はかなり少ない。今回出土した丸瓦には、行基葺き丸瓦はみられず、全て玉縁付きの丸瓦であった。

分類にあたっては、資料の全てが凸面の丁寧なナデ調整によって叩き目の観察が不可能であること、完形を知られる資料が極めて少なく、３号窯に偏在することから、１・２号窯では玉縁部の段の形状によって、３号窯では凹面玉縁端縁の縁取りの有無によって分類した。窯様遺構出土の３点はいずれも小片で分類できなかった。なお、分類にあたったのは31点である。

丸瓦の分類呼称法　平瓦の記述にもつかえる次のような分類呼称法を用いた。

第１次成形技法　用意された瓦土を型にあてる段階の技法で、粘土紐巻きつけ技法と成形技法不明に大別した。粘土板巻きつけ技法を用いた資料は、丸・平瓦ともみられなかった。

側面調整　分割載面と破面をそのままにしているａ手法、削り調整をのちに面取りを凹凸両面に行うｃ手法、凸面のみに行うｄ手法、凹面のみに行うｅ手法がある。

１号窯の丸瓦（図面９，PL. 7）

M_1ａ類　玉縁の段が直立する類である。粘土紐巻きつけ技法を用いる。凸面は横ナデ調整、凹面は不調整である。側面調整にｂ・ｄの２手法がある。胎土は砂質で小石を含む。焼成良好で褐色を呈する。

M_1ｂ類　玉縁の段が緩かに傾斜する類である。粘土紐巻きつけ技法を用いる。段部に横方向の沈線が数条みられ(PL.24-1)、段の成形にあたって回転を利用した刷毛状工具の使用が考えられる。凸面は横ナデ調整、凹面は不調整である。側面調整にａ・ｂの２手法があり、ａ手法のものには破面が凹面側に残る。胎土はやや砂質で、焼成良好、にぶい赤褐色を呈する。

２号窯の丸瓦（図面10，PL. 7）

M_2ａ類　玉縁の段が直立する類である。粘土紐巻きつけ技法を用いる。凸面は横ナデ調整、凹面は不調整である。側面調整にｂ・ｅの２手法がある。胎土に精良なものと砂質で小石を含むものがある。焼成の堅緻なものは青灰色を、良好なものは褐色やにぶい赤褐色を呈する。全長については不明だが、M_2ａ－1･2の幅は各々13.4cm、13.9cmを測る。

M_2ｂ類　玉縁の段が緩かに傾斜する類で、第１次成形技法・凸面調整・胎土がM_1ｂ類と同一である。側面調整にｂ・ｃの２手法があり、ｃ手法のものには凹面側の破面を削りきれずに残している。凹面は布の皺の痕跡である凹線をナデるものがある。焼成堅緻なものは青灰色を、良好なものはにぶい赤褐色を呈する。

３号窯（図面11・12，PL. 8・9）

M_3ａ類　凹面玉縁端縁の縁取りを行う類である。粘土紐巻きつけ技法を用いる。凸面は横ナ

デ調整だが、これに先行してM_3a－2には、縦方向の削りによる調整が加えられている。凹面は不調整だが、1例にナデ調整がみられる。側面調整はe手法が中心で、c手法が1例にみられる。また、凸面側に破面を残すものがある。胎土は精良で、焼成は不良、にぶい赤褐色を呈する。M_3a－1は全長29.2cm、幅16.5cm、M_3a－2は全長29.5cm、幅16.9cm、M_3a－7は全長31.5cm、幅17cmを測る。

M_3b類　凹面玉縁端縁の縁取りをしない類である。M_3b－1・3は玉縁が先細気味で凸面に勾配があり、また玉縁の段が低くて断面三角形に近い。M_3b－1は胴部中央が張り出して弓状の縦断面をもつ。M_3b－3の凹面中央にみられる横方向の段は広端側で高い。模骨の痕であろうか。

粘土紐巻きつけ技法を用いる。凸面は横ナデ調整、凹面は不調整である。側面調整にb・eの2手法があり、e手法のものには凸面側に破面を残す。胎土は精良で、焼成やや不良、明褐色やにぶい赤褐色を呈する。M_3b－1は全長28.9cm、幅14.6cm、M_3b－5が全長28.2cm、幅14.8cmを測る。M_3a類に比較すると器肉も薄く、細身の丸瓦といえる。

D．平　　瓦

平瓦の分類　平瓦は完形・破片にかかわらず、窯内出土品の全てを分類の対象とした。点数にして1,618点である。分類の基本となったのは平瓦凸面に施された叩き目であるが、風化のため叩き目観察の困難な資料は不明として扱った。叩き目は格子叩き目と縄叩き目とに大別できるが、縄叩き目の場合は原体の相異を判断するのが困難であるため、5cm幅内の縄目の条数によって2分類した。

平瓦の分類呼称法　丸瓦と共通する分類呼称法のほかに、平瓦では次の分類呼称法を用いた。

第2次成形技法　型にあてられた瓦土を叩きしめる段階の技法で叩き目を木目直交・平行の格子叩き目(Ⅰ)、木目斜交の格子叩き目(Ⅱ)、左撚りの縄叩き目(Ⅲ)、木目を観察できない格子叩き目(Ⅳ)に大別した。

叩きしめの順序と方向　叩きしめる動作の方法で、叩きしめの円弧をもつものと、もたないものとがある。叩きしめの円弧には、平瓦狭端を上にして凸面をみた場合、左側縁外方に円弧の中心がある樋巻作り平瓦に特有の叩きしめの円弧Aと、両方の側縁外方に円弧の中心がある叩きしめの円弧Bがある。

1号窯の平瓦（図面13～16，PL.10・11）

平瓦の出土点数は258点で、6類に分けた。全て格子の叩き目で、第1次成形技法はa～d類が粘土紐巻きつけ技法、e、f類が不明である。

H_1a類　木目平行の深い刻線（幅2～3.5mm、間隔4.5～5.5mm）に木目直交の浅い刻線（幅1.5～2mm、間隔3～4.5mm）を加える。叩きしめの円弧はAに属する。側面調整にb・dの2手法があり、その後に凸面の側・端縁を幅2～4cmにわたってナデ調整をするものが多い。凹

面は不調整がほとんどで、稀に一部をナデ調整した例がある。布目は端縁に平行する糸に疎密があり、布の綴じ合せ目が1点に認められた。胎土は砂質、焼成良好、多くはにぶい褐色を呈する。ほぼ完形のH_1a－1によって、全長43cm、広端幅29.3cm、狭端幅28cm前後が知られる。

H_1b類　木目を観察できた資料はない。幅4.5～6mm、間隔7～8mmの刻線と、これに直交する幅4.5～6mm、間隔6～8mmの刻線からなる格子叩き目である。大型の格子叩き目で、叩きしめが十分になるよう全面に叩き目の重複がみられる。全て破片であるが、叩きしめの円弧Aに属すると考えられる。凸凹面ともに不調整で、側面調整はb手法である。布の綴じ合せ目をもつ資料はなかった。胎土に多量の砂を含み、焼成良好、暗褐色や明褐色を呈する。寸法不明。

H_1c類　木目平行の刻線（幅1～2.5mm、間隔3～4.5mm）に木目直交の刻線（幅1.5～2mm、間隔4mm前後）を加える。叩きしめの円弧がAに属する。凸面広端縁にナデ調整がみられ、少数だがH_1a類と同様に凸面側縁をナデ調整する例がある。凹面は不調整がほとんどで、稀に一部をナデ調整した例がある。側面調整はd手法である。布の綴じ合せ目が2点に認められる。胎土はやや砂質、焼成良好、にぶい赤褐色を呈するものが多い。寸法不明。

H_1d類　木目平行の刻線（幅1.5～5mm、間隔3～8mm）に木目直交の刻線（幅1～2mm、間隔3～9mm）を加える。全て小片で、叩きしめの順序と方向を知ることができない。凸凹面はともに不調整で、側面調整はd手法である。胎土に精良なものとやや砂質なものがあり、焼成良好、にぶい褐色や赤褐色を呈する。寸法不明。

H_1e類　H_1a類の叩き目の上に、木目平行の刻線（幅5mm前後、間隔4mm前後）に木目直交の刻線（幅・間隔とも6mm前後）からなる格子目を1～2mmの細い刻線で4分割した叩き目が重複している。小片のためや部分的な叩きしめのために叩きしめの順序と方向は不明である。凸凹面とも不調整で、側面調整はd手法である。H_1a類と同様に凸面側縁をナデ調整する。胎土は砂質で、焼成良好、黒褐色を呈する。寸法不明。

H_1f類　木目を観察できないが、幅1.5～4mm、間隔3.5～5mmの刻線とこれに直交する幅1mm前後、間隔3～5mmの刻線を加える。叩きしめの円弧Aに属するとみられる。凸凹面とも不調整で、側面調整はc手法である。胎土は砂質で、焼成堅緻ながら焼き歪みがみられる。青灰色を呈する。寸法不明。

2号窯の平瓦（図面17～26, PL.12～17）

平瓦の出土点数は481点で、15類に分けられた。e・f類が縄叩き目、l類が全面ナデで、そのほかは格子叩き目である。k類はe・h類の叩き目を混用する。第1次成形技法はj・k・n類が不明、ほかは粘土紐巻きつけ技法によっている。また、a・b・d・e類は広端両隅を切除しており、特徴ある平瓦として一群をなしている。

H_2a類　木目平行の刻線（幅1～1.5mm、間隔4～4.5mm）に木目直交の刻線（幅2～2.5mm、間隔5.5～6.5mm）を加える。叩きしめの円弧がBに属する。凸面は不調整とナデ調整する2種が

ある。側面調整にｂ・ｅの２手法がある。凹面は不調整だが、狭端を上にしてみた状態で広端縁から18cm、左側縁から８cm程のところに、長さ2.5cm幅1.3cm高さ0.3cmの突起がみられる。また、側・端縁にみられる縁に平行する段、側縁・中央部に側縁に平行して走る何本もの細い凸線、および、凹面の凸部（模骨の凹部）の布目が、押圧されているなど特有の圧痕がみられる（ＰＬ．23）。この特有の圧痕は、布目より後出するもので、凸型台による圧痕と考えられる。なお、凹面中央部に長さ約４cmの半円形の凹み（ＰＬ．24-5）をもつものが３例ある。凸型台に載っていた何かの圧痕であろう。

布の綴じ合せ目が７例にみられる。胎土は精良で、焼成堅緻、青灰色や灰色を呈する。ほぼ完形のH_2ａ－１は、全長35cm広端幅24.7cm狭端幅24cmを測る。

H_2ｂ類　木目平行の刻線（幅１～1.5mm、間隔３～3.5mm）に木目直交の刻線（幅１～1.5mm、間隔2.5～４mm）を加える。叩きしめは広端から狭端へ、右回りに行う。凸面は不調整または一部ナデ調整し、凹面は不調整である。側面調整にｂ・ｄ・ｅ・ｃの４手法がある。布の綴じ合せ目は認められなかった。胎土は精良で、焼成堅緻なものは青灰色や暗褐色を、焼成やや不良なものは黄褐色や明褐色を呈する。全長は不明だが、H_2ｂ－１が狭端幅25.7cm、H_2ｂ－２が広端幅24.4cmを測る。

H_2ｃ類　木目平行の刻線（幅3.5～4.5mm、間隔３～8.5mm）に木目直交の刻線（幅３～4.5mm、間隔4.5～6.5mm）を加える。叩きしめの円弧はＡに属するが、通有のものと異なり左回りの方向に叩きしめる。また、多くは広端から狭端へと叩きしめているが、狭端から広端におよぶ例もある。凸面は不調整で、側面調整にｂ・ｅの２手法がある。布の綴じ合せ目を１例に認める。凹面は一部或いは全面を縦方向にナデ調整する例が多い。胎土は精良で、焼成やや不良、黄褐色や明褐色を呈する。H_2ｃ－１が全長30.3cm広端幅22.3cm狭端幅21.3cmを測る。厚さが３cm前後のものがある等、厚手で広端幅と狭端幅の差が小さい平瓦である。

H_2ｄ類　木目平行の刻線(幅4.5～5.5mm、間隔4～7.5mm)に木目直交の刻線(幅4.5～5.5mm、間隔4.5～６mm）を加える。叩きしめの円弧がＡに属する。凸面は横ナデ調整、凹面は不調整である。側面調整はｂ手法。布の綴じ合せ目と分割界線が各々２例に認められる。胎土は砂質で、焼成やや不良、にぶい黄褐色を呈する。H_2ｄ－１は全長35.6cm広端幅28.5cmを測る。

H_2ｅ類　縦方向の縄叩き目がみられるもので、５cm幅に太めの縄目が９～11条走る。叩きしめの円弧がＢに属し、木目に直交して縄を巻いた叩き板が想定される。凸凹面とも不調整または一部ナデ調整で、側面調整にｂ・ｅの２手法がある。凹面にはH_2ａ類と同様の凸型台圧痕がみられる。布の綴じ合せ目は認められない。胎土には精良と砂質のものがあり、焼成堅緻なものは青灰色・灰色を、良好なものは黄褐色やにぶい褐色を呈する。全長については不明だが、H_2ｅ－２が広端幅24.5cm、H_2ｅ－１が狭端幅24cmを測る。

H_2ｆ類　縦方向の縄叩き目だが、５cm幅に細めの縄目が15～18条みられるものである。叩き

しめの順序と方向は不明。凸凹面とも不調整または一部ナデ調整し、側面調整はｂ手法である。布の綴じ合せ目は認められない。胎土は精良で、焼成良好、にぶい褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｇ類　H_1ａ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法・調整手法ともH_1ａ類と同一で、布の綴じ合せ目が２例に認められる。胎土は砂質で微量ながら径１cm前後の小石を含む。焼成良好、にぶい褐色を呈する。H_2ｇ－１は広端幅30.7cmを測る。なお、H_2ｇ－１の凹面に５～10mm幅、深さ３mm前後の凹線が狭端縁から側縁にかけて走るが、その性格は不明である。

H_2ｈ類　H_1ｆ類と同様の格子叩き目を有する。叩きしめの円弧Ａに属するとみられる。凸面はナデ調整、凹面は不調整で、側面調整にｂ・ｃ・ｄの３手法がある。また、凸面広端縁を縁取る例がある。布の綴じ目は認められない。胎土に精良と砂質があり、焼成堅緻なものは青灰色・灰色を、良好なものは褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｉ類　H_1ｃ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法・調整手法はH_1ｃ類に準ずるが、側面調整にｂ・ｄ・ｅの３手法がある。布の綴じ合せ目が２例に認められる。胎土は砂質で、焼成良好、にぶい褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｊ類　木目に斜交する刻線（幅４～5.5mm、間隔５～６mm）を交差させた斜格子叩き目である。叩きしめは広端から狭端へ、右回りに行う。凸凹面とも不調整で、側面調整はｃ手法、広端縁は縁取られる。布の綴じ合せ目は認められない。胎土は砂質で、焼成良好、にぶい褐色や明褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｋ類　H_2ｄ類の格子叩き目の上に、H_2ｆ類の縄叩き目が部分的に重複する類である。小片ばかりで叩きしめの順序と方向は不明である。凸凹面とも不調整で、側面調整はｂ手法である。胎土はH_2ｆ類に類似し精良で、焼成良好、にぶい褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｌ類　凸面の全面を左方へ横ナデし、叩き目の痕跡を全く残さない類である。凹面は不調整、側面調整はｂ手法である。布の綴じ合せ目は認められない。胎土は砂質で、焼成良好、黄褐色を呈する。寸法不明。

H_2ｍ類　H_1ｄ類と同様の格子叩き目を有する。叩きしめの円弧Ａに属するとみられるが、通有のものと異なり狭端から広端へ叩きしめる。凸面はナデ調整、凹面は不調整で、側面調整はｄ手法である。胎土は砂質で、焼成堅緻、青灰色を呈する。寸法不明。

H_2ｎ類　H_1ｄ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法、調整手法ともにH_1ｄ類と同一である。にぶい褐色を呈する。寸法不明。

３号窯の平瓦（図面27～32，PL.18～20）

平瓦の出土点数は843点で、その中の264点が前方部から出土している。先にふれたように３号窯前方部出土の遺物は３号窯の瓦類が流出して堆積したものと考えられ、実際に双方の平瓦組成は基本的に同一である(Tab.10)。　したがって、ここでは３号窯前方部出土の平瓦を３号窯のそれに含めて扱った。

出土した平瓦は10類に分けられる。第１次成形技法はすべて粘土紐巻きつけ技法で、ｄ・ｅ類が縄叩き目、ほかは格子叩き目である。広端両隅の切除がｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｉ類にみられる。

H_3ａ類　H_2ｃ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法・調整手法・寸法などにもH_2ｃ類との相異点はみられない。ただ、H_2ｃ類に比して焼成がより不良で軟質となっているものが多く、出土点数が総出土点数の４分の３以上を占めるほど多量に出土している。叩き板の柄の圧痕を残す例や、凹面に８×10cm程のあて布の痕跡をみせる例がある（PL. 24－３）。

H_3ｂ類　H_2ａ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法・調整手法ともにH_2ａ類と相異点がなく、凹面には凸型台圧痕がみられる。焼成が良好で褐色系の色調のものが多い。寸法不明。

H_3ｃ類　H_2ｂ類と同様の格子叩き目を有する。側面調整にｂ・ｅの２手法があるが、成形技法・調整手法はH_2ｂ類と同一である。布の綴じ合せ目は認められないが、H_3－２の凹面側縁には幅６mm深さ４mmの分割界線があり、その位置は幅2.5cm前後の模骨痕の中央にある(PL. 24－４)。H_3ｃ－１は全長33cm幅25.8cmを測る。

H_3ｄ類　H_2ｅ類と同様の縄巻叩き板を使用したとみられる類である。叩きしめの円弧Ｂに属するH_3ｄ－１があり、H_2ｅ類と同一の成形技法によっている。凸凹面はともに不調整で、側面調整はｂ手法である。凹面には凸型台圧痕がみられる。胎土・焼成・色調はH_2ｅ類に類似する。寸法不明。

H_3ｅ類　H_2ｆ類と同様の縄巻叩き板を使用したとみられる類である。叩きしめの順序と方向は判然としない。凸面側縁をナデ調整し、凹面は粘土紐接合部をナデ調整するものがある。側面調整はｂ手法である。胎土・焼成・色調ともH_2ｆ類に類似する。H_3－１は狭端幅25cmを測る。

H_3ｆ類　H_2ｄ類と同様の格子叩き目を有する。全て破片で叩きしめの円弧は不明だが、広端から狭端へ、右回りに叩きしめる通有の方法をとる。調整手法はH_2ｄ類と同一で、胎土はやや砂質、焼成良好で赤褐色や灰色を呈する。寸法不明。

H_3ｇ類　H_1ｆ類と同様の格子叩き目の上に、H_3ｃ類の格子叩き目が重複する類である。いずれも小片で叩きしめの順序と方向は判然としない。凸凹面ともに不調整で、側面調整はｂ手法である。胎土は精良で、焼成堅緻、暗灰色を呈する。寸法不明。

H_3ｈ類　H_1ｃ類と同様の格子叩き目を有する。成形技法・調整手法はH_1ｃ類と同一で、胎土・焼成・色調ともH_1ｃ類に類似する。

H_3ｉ類　H_2ｊ類と同様の斜格子叩き目を有する。叩きしめを右回りに行う。凸面をナデ調整、凹面は不調整で、側面調整は側面部を欠くため不明である。胎土・焼成・色調はH_2ｊ類に類似する。寸法不明。

H_3ｊ類　木目に平行する刻線（幅１～２mm、間隔2.5～５mm)に木目に直交する刻線（幅0.5

～1.5mm、間隔3.5～5.5mm）を加える。叩きしめの順序と方向は破片のため判然としない。凸面はナデ調整、凹面は不調整で、側面調整はｂ手法である。胎土は砂質で、焼成良好、灰色と赤褐色を呈する。寸法不明。

窯様遺構の平瓦（図面33・34，PL.21）

平瓦の出土点数は37点で、９類に分けられた。ｄ類は縄叩き目で、その他の類は格子叩き目である。ｇ類とｈ類は各々ｆ・ｂ類、ｆ・ｄ類の叩き目を混用する。ｃ類の中にH_1ｃ－10と接合する資料があることや、１号窯との位置関係から、本来同一の遺構である可能性があるが、１号窯で40％強出土したH_1ａ類が窯様遺構から全く出土せず、逆に窯様遺構で大半を占めるａ類が１号窯に皆無であるなど、同一遺構としては考えにくい現象もある。第１次成形技法はａ・ｂ・ｄ・ｇが粘土紐巻きつけ技法で、他は不明である。また、ほとんどの資料が小片で寸法を知ることができず、叩きしめの方向と順序もａ類が叩きしめの円弧Ｂに属するほかは判然としない。

H_4ａ類　H_2ａ類と同様の格子叩き目を有し、成形技法・調整手法もH_2ａ類と同一である。凹面に凸型台圧痕がみられ、広端隅の切除が行われる。胎土・焼成・色調はH_2ａ類に類似している。

H_4ｂ類　H_2ｂ類と同様の格子叩き目を有する。凸面はナデ調整、凹面不調整で、側面調整はｂ手法である。胎土は精良で、焼成堅緻、暗灰色を呈する。

H_4ｃ類　H_1ｃ類と同様の格子叩き目を有する。凸凹面とも不調整で、側面調整はｄ手法である。胎土はやや砂質で、焼成良好、にぶい赤褐色を呈する。H_4ｃ－１はH_1ｃ－10と接合する。

H_4ｄ類　H_2ｅ類と同様とみられる縄叩き目を有する。凸凹面ともナデ調整がみられる。胎土は精良で、焼成堅緻、灰色を呈する。

H_4ｅ類　H_1ｂ類と同様の格子叩き目を有する。調整手法はH_1ｂ類と同一で、胎土・焼成・色調は類似している。

H_4ｆ類　H_1ｆ類と同様の格子叩き目を有する。凸凹面とも不調整で、側面調整はｄ手法である。胎土は精良で、焼成やや不良、赤褐色を呈する。

H_4ｇ類　H_3ｇ類と同様の叩き目を有し、ｆ類の叩き目の上にｂ類の叩き目がみられる。凸面をナデ調整し、凹面は不調整である。胎土は精良で、焼成堅緻、暗灰色を呈する。

H_4ｈ類　ｆ類の叩き目の上にｄ類の縄叩き目がみられる。凸凹面とも不調整である。胎土は精良で、焼成堅緻、灰色を呈する。

H_4ｉ類　H_1ｅ類と同様の格子叩き目を有する。凸凹面とも不調整である。胎土は砂質で、焼成良好、にぶい赤褐色を呈する。

Ｅ．道具瓦（図面36，PL.22）

隅切平瓦　２号窯から４点（１～４）、３号窯から１点（５）出土している。１～３はH_2ａ

類を利用し、屋根に葺く状態（上方が広端）で広端右隅を切除している。4と5は各々同一の叩き目であるH_2d類・H_3f類を利用したもので、広端左隅を切除している。側縁に対する切除部分の角度は、60度（1）、54度（2）、60度（3）、53度前後（4）、53度（5）である。

熨斗瓦　2号窯から2点出土している。2点とも全長については不明だが、1は広幅、2は狭幅の熨斗瓦である。1は幅14cm、厚さ2.3cmを測り、全面ナデのH_2j類を利用している。一方の側面には凹面側に破面が残り、一枚の平瓦を凸面側から分割載線をいれて2分割したと考えられる。2は幅10.3cm、厚さ2.1cmを測り、H_2b類を利用したものである。

2．土　　器

A．窯内・溝出土土器（図面37・38，PL. 37）

2号窯　1は瓦に挟まれて出土した。く字形の口縁をもつ甕である。外側には上半は縦、胴部は横位の荒い刷毛目がみられる。内面には篦削りがみられる。胴部中央に最大径をもつ。外面に一部黒色部をもつが、全体に黄褐色を呈す。高さ16.0cm、口径20.4cm、最大径19.0cmをはかる。

3は瓦の間から6片に破れて出土した。大甕の肩部から胴部にかけての破片である。外面は格子の叩きの上から平行叩きを施す。内面は同心円の深い叩きがみられる。直径20cm以上の大きさになるとみられる。灰色をなし、焼成は良好。

3号窯　2は焼成室から平瓦上に口縁部を下にした逆位で出土した。馬穴形をなし左右に2個の小さな把手をもつ。器面が風化していて調整の状態を明らかにしえない。把手の付く部分に細い断面V字形の一条を巡らす。把手の一方は欠損している。全面赤色を呈する。高さ14.4cm、口径21.2cm、底径15.0cmをはかる。

1・2溝　須恵器の破片である。甕の胴部破片で、断面が厚い。外面は小さな格子叩き、内面は同心円文の叩きがみられる。叩きは浅い。いずれも灰色を呈し、焼成良好。

B．蔵骨器（図面37，PL. 2）

出土状態　13J区の谷底から出土したが、原位置は13I区の炭の詰まった土壙であったらしい。底部と胴部および蓋は散乱した状態であった(Fig. 17・18・21)。

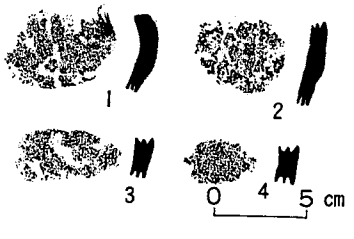


Fig. 26　縄文土器拓本

器形　いわゆる薬壺形の蔵骨器である。口縁部の先端を欠失する。最大径を肩部にもち、ゆるやかに延び底部に続く。脚部は八字形をなし角ばる。内面および外面下半に篦削りがみられ12.6cmをはかる。蓋部は、径2.5cmの偏平な宝珠形のつまみをもつ。ともに赤褐色をなす。器表面の風化が著しく、細部の調整を明らかにし

えない。

C．石器包含層出土土器（Fig. 26）

石器包含層のⅡa・Ⅱb層から少量の土器片が出土した。包含層は粘性が強いため表面が土と同化して土器の取りあげは困難であった。表面の文様は観察出来ない。無文土器とみられる。いずれも黒褐色を呈し、焼成は悪い。1は口縁部破片でやや内湾する。2～4は胴部の破片。これらは縄文土器であるとみられる。

3．石　　器

石器の出土状態　調査区の東側でチップや石鏃が採集されたので、遺物包含層が存在することを予測して1・2、H～L区を掘り下げた。出土物は全てレベルを記入したが、1グリットでは作業上広すぎるので、1グリットを2×2mに四分割し、東列の北を1、東列の南を2、西列の北を3、西列の南を4と呼んだ。2K区であれば、2K－1、2K－2、2K－3、2K－4と表記する。置物の包含層は2a、2bの褐色（a）～黒紫色（b）を呈する粘性の強い土である。2aから2bにかけての移向は漸位的で生活面をおさえることは出来なかった。1M区から南側は2bの下端まで掘り下げなかった。恐らく南側へ包含層は続いていくものとみられる(Fig. 25)。

出土土器の種類と点数　記録しながら取りあげた石片は2,000点であるが、そのうち石器は107点である。石器の種類と数量は次のとおりである。

磨製石斧	1	打製石斧	1	石　皿	4	叩石・磨石	4	石鏃	77
楔形石器	2	二次加工のある剥片	26	使用痕のある剥片	5	石核	5		

石材　石器はチャート、黒曜石、サヌカイト、黄緑凝灰岩、安山岩などであるが、黒曜石は石鏃と剥片に数点みられるのみで、大部分はチャートを使用している。チャートは調査地内の花崗岩バイラン土の下に拳から人頭大の礫群があるほか、転石として遺跡周辺の随所で入手できるものである(Tab. 6～8　なお石材、色調の省略記号の説明は65頁参照)。

A．石　　斧（図面46）

3は磨製石器の破片であるが、研磨の状態、復原した全体形から磨製石斧の一部であると判断される。4は半分を欠失する打製石斧。先端部を大きく剥離し、周辺に小さな調整剥離を加えている。

B．石　　皿（図面48）

いずれも石皿片で全体の形を明らかにしえない。表面は研磨されている。自然の安山岩の扁平礫を用い石皿として使用したものである。

C．叩石・磨石（図面47）

1・2・4・5は自然礫を使用した磨石である。縁部に敲打痕のみられるものもある。3は

長端部および周辺に叩き痕がみられる。6～9は凹石で、扁平面の一面および両面にくぼみがみられる。また周縁には敲打痕が認められる。9は敲打により周縁の一部が剝離している。

D．石　　鏃　（図面39・40）

石鏃の型式　77点の石鏃は全て無茎、打製もので、その形状より2型にわけられる。

A型「わたくり」ないもので、形状と三角形の底辺部の形の違いで、2種にわかれる。

A_1　いわゆる三角鏃で、全体形が三角形をなす。底辺長と全長の比率は、1対1から1対1.5の値を示めす（図面39－1～11）。

A_2　底辺の両端に調整が加えられ、やや菱形に近いもので、底辺長と全長の比率は1.5以上の値を示す。両側縁が直線でなく、やや丸みをもつもの（図面39－12～18）や、先端に加工を加えるものなどがある。

B型は「わたくり」をもつものであるが、わたくりの全体の形状から2種にわかれる。

B_1　A_1にわたくりを有するものである。全長に占めるわたくりの割合によって、さらにいくつかの亜種にわかれる。

B_2　A_2にわたくりを有するもので、B_1に比して、わたくりが浅い。わたくりの深さが全長の10分の1以上のものが多い。以上の型式のうち、石鏃の仕上げの状態をみると、A_1、B_1は断面が扁平で薄身のものが多い。A_2、B_2は石鏃の最大厚が中心部にきて、しかも厚い。したがって断面形は台形様の三角形になるものが多い。同一の石材を使用していても、この違いがみられるので、この差は石材の節理などの性質による差ではなくて技術的なものであると予測されるが明らかにしえていない。

E．楔形石器（図面42－4・7）

4は両端に加撃によるつぶれを残している。7もつぶれを残している。b面の右側に自然面を残している。主要剝離面にはポジティブな打瘤裂痕を有する。

F．二次加工のある剝片（図面41・42）

石鏃や楔形石器を除いて、二次加工のある剝片は29点出土している。形や機能によって、3種にわけられる。

1.スクレーパー　（図面41－2～9，図面42－1～3）

図面41の2は厚味のある剝片を素材として一側辺にのみ加工を施す。先端は尖っているので何らかの機能を有したのかもしれない。3は打面を残す縦長剝片を素材として一側辺に凹状の加工を施す。いわゆるコンケーブ・スクレーパーである。4は二側辺に加工を施し、他の辺は裁断している。5はc面にブランテング様の加工を施す。またa面には粗い加工を施す。6は裁断面をもつ。a面の上辺およびb面に加工を施す。7はb面の右辺が欠損している。加工のある部位は使用されて細かくつぶれている。8は下方に意図的裁断面をもつ。b面にはポジティブな打瘤および打瘤裂痕をもつ。両側縁に使用痕とみられる小さな剝離がみられる。9は主

図面39	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	2K－2	C	G	(14)	15	3.5	1.2
2	2L－1	Sh	Oy	(17)	8	5	0.4
3	2L－1	A	G	(15)	9.5	4	0.36
4	2M－1	Sh	Ly	(18.5)	12	5	0.6
5	2K－1	C	Ly	(13.5)	10	3.5	0.27
6	2J	O	B	14	10	3.5	0.1
7	2L－4	C	G	14.5	10	3.5	0.2
8	2K－2	C	Ly	15	11	4.5	0.31
9	2K－3	C	OG	(11)	12	3.5	0.9
10	2K－3	Sh	LOG	19.5	(10.5)	4	0.35
11	2K－1	C	GB	18.5	16	6	1.2
12	2M－1	O	B	(8.5)	18	3.5	1.2
13	2K	C	R	25	(16.5)	5	1.8
14	1L－4	S	G	12	10.5	3	0.3
15	2K－2	C	G	16	15	5	0.6
16	2M－1	C	DBG	18	(11)	4.5	0.5
17	2K－3	C	Ly	15.5	12	3	0.5
18				(13)	13	2.5	10.25
19	2K－4	O	B	10	9	2.5	0.21
20	2K－4	O	B	11	11	2.5	0.05
21	2L－1	O	B	(14)	(11.5)	3.5	0.1
22	2M－1	C	R	11	12	2.5	0.22
23	1L	C	R	14	13	3.0	0.2
24	灰原	C	G	21.5	20	4	1.1
25	2K－2	Sh	Oy	(12.5)	10	4.5	0.6
26	3H	O	B	16.5	13	3	0.4
27	3N	S	Oy	20	12	4	0.3
28	2M－1	S	G	23	(14.5)	4	0.5
29	2M	C	G	21.5	15	3.5	0.7
30	2L	S	G	17.5	(16)	3.5	0.67
31	30	C	Ly	20.5	19	3.5	0.19
32	2K－1	A	GC	19	13.5	3.5	0.49
33		A	G	13.5	10.5	3.5	0.1
34	2K－2	O	B	13	12	2.5	0.1

図面39	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
35	1N	C	LGG	28	15	5	1.4
36	2K－4	C	G	12.5	15	4.5	0.5
37	2K－2	O	B	13.5	17	4	0.83
38	1L	C	G	17	(11.5)	5	0.6
39	1M	G	A	20.5	16	3.5	0.2
40	2K－4	A	G	18	11	3.5	0.45
41	2K	C	G	(14.5)	19	4.5	0.83
42	2K－2	C	G	(18)	11	5	0.85
43	2M－1	C	G	(23.5)	(14)	3	1.15
44	2L－4	C	G	16.5	12.5	3.5	0.4
45	2M－1	C	LG	(20.5)	(13)	4	0.7
46	2K－4	O	B	16	(11)	3.5	0.55
47	3N	Sh	G	20	16.5	3.5	0.75
48	2M	C	OG	16.5	12.5	3.5	0.5
49	2M	S	B	14	(11)	3.5	0.2
50	2K－1	C	Ly	(16.5)	(9.5)	4.5	0.55
51	2J	Sh	Ly	(15)	11	6	0.6
52	2L－4	C	G	15	9	2.5	0.22
53	2M－4	S	G	19	13.5	3	0.5
54	2K－2	Sh	LOG	(22)	17.5	5.5	1.1
55	2L－4	C	G	14.5	14	3.5	0.6
56	2M	C	G	14	10	3.5	0.38
57	3C	C		(13.5)	(11.5)	2.5	(0.2)
58	2L－1	C	G	16	12	4.5	0.64
59	1L			15	9	4	0.2
60	2M	C	G	(12.5)	14.5	4	0.5
61	2J						
62				(21.5)	(13)	5.5	1.48
63	2J	C	G	8	14.5	4.5	0.6
64	表　採	C	G	19	14	5.5	0.7
65	2K－1	R	G	18	11.5	5	0.53
66	2K－1			(19.5)	(16.5)	4.5	
67	2K－2	A	G	(18.5)	13	4	0.79

Tab. 6　石鏃計測表　石材・色調の記号については65頁参照（　）は推定値　長さの単位は㎜　重さはｇ

要剝離面を打面として５～６回の剝離をおこない、その後、刃部にリタッチしてスクレーパーとして使用している。ａ面では左側辺の下端に近い部位を刃部としている。ｂ面にはポジティブな打瘤を残している。 図面42の１は横長剝片を素材としている。ａ面の右側辺にリタッチをしている。２は厚味のある剝片の一辺に急角度の二次加工を施したものでエンド・スクレーパーである。３は縦長剝片を素材として一側辺に加工を施す。他の側辺は切断され急角度をなしているが加工は施されていない。６は剝離面の下端に加工を施している。ａ面の左側辺に使用痕らしきものがみられる。図面43の２は両者に加工がみられ、ａ面では全周に粗い加工が施してある。３はａ面の右側に細かいトリミングを施し刃部としている。４は打面と裁断面を残し、ａ面の右側辺に両面から調整を加える。８は加工は下半に加えられ、使用による剝離も認められる。

２．尖頭状剝片 （図面40－15～18・20～31）

平面形が三角形および台形状をなす剝片で、片面および両者から打撃が加えられているが、細部の調整は加えられていない。

図面40の 15～18は主要剝離面に荒い打撃が加えられている。17は上半、18は下半を欠失する。21は全体に荒い剝離を施しながら、先端部に細かいトリミングを施している。22は全周、加工を施すがａ面には自然面を残している。23は厚味のある横長の剝片を素材として両側辺にリタッチが加えられている。また下方は裁断を受けている。24は厚味のある剝片を使用している。ａ面には全面に加工を施す。25は裁断面を残す剝片を素材として全周に粗い剝片を施す。26は先端部を欠失する。両面に粗い剝離がみられる。27は全周に粗い加工を施す。ａ面に自然面を残す。ｂ面には細部加工が施されている。28はａ面の一部に節理面を残す。ａ面の加工は粗い剝離である。ｂ面においては先端部に細かい加工を施す。29は全面に粗い加工を施す。基部に粗いノッチを入れている。30はｂ面の主要剝離面の周りに粗い加工を施す。31はａ面では大きな粗い剝離を全周に施し、ｂ面の基部付近に加工を施す。 図面43の６は縦長剝片の打撃面付近の主要剝離面にリタッチを施している。コンケーブ・スクレーパーである。

３．二次加工のある剝片（図面43，５・７）

図面43の ５は裁断面を有する剝片で、ａ面の下端に加工が施されている。ｂ面には自然面が残っている。７はａ面の右側辺に自然面を残し、左側辺に加工を施す。両端に加撃点をもつ。

４．使用痕のある剝片（図面41，８・図面42，５・９・10・12）

図面41の ８はｂ面に打瘤を残しており、両側縁に使用痕を残す。ｃ面は裁断面でリングの状態より意図的な切断と推定される。図面42の５は打面を残す縦長の剝片で一端に自然面を残す。右側辺に使用痕を残す。９は縦長剝片を素材として両側辺に使用痕を有する。10は打面に自然面を残す。ａ面の左側辺に使用痕を残している。12はａ面の両側辺に使用痕がみられる。11のａ面の一端に自然面が残っていて、原石が小円礫であったことを窺わせる。

図版40	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重 量
1	2K－3	C	G	(17)	(11)	6	
2	1N	C	G	(12)	11	4	0.9
3	灰原	C	GB	26.5	15	8	3
4	1M	C	G	(17.5)	(13)	3.5	0.7
5	1M	C	G	27.5	(14)	3.5	0.7
6	2J	C	LG	34	23	5	2.14
7	2K－1			(19.5)	18	6	1.8
8	2K－2			(8.5)	(7)	2.5	
9	2K－1	C	G	(19)	(18)	6	(1.8)
10	2K－2	C	R	(16)	(7.5)	(2.5)	
11	1J	C	B	(13)	(9.5)	2	0.21
12	1J	C	G	20	14	4.5	
13	1K－3	R	G	(9)	(11)	3	
14	2K－1	C	G	(11)	(15)	5	0.95
15	2L－1	C	LGG	16.5	12.5	5.5	0.55
16	2L－1	R	G	18	11.5	3.5	0.6

図版40	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重 量
17	2K－4	C	G	17.5	17	5	1.6
18	2L－1	C	R	16.5	16	7	1.5
19	2L－1	C	R	21.5	21	4	1.2
20	2K－2	A	G	14	20	3.5	1.7
21	2K－1	R	G	31	2.15	0.8	5.3
22	2K－1	C	R	24	1.8	0.8	3.2
23	2J	C	R	21	1.2	0.8	2.28
24		C	LG	25	19.5	12.5	3.55
25	1L	C	LG	28.5	20	10	5.2
26	2M－4	C	G	21	21	11	3.6
27	1H	R	G	22	18	8.5	2.75
28	2K－1	C	G	44	29	14.5	16.8
29	2K－1	R	G	39	22	8	10.25
30	2K－2	C	G	40	28	9	11.22
31	1J	C	G	37	29	13	13.37

図版41	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重 量
1	2M－4	C	G	20	21	11	4.3
2	2K－1	C	LG	26	24	15.5	5.9
3	2K－1	C	G	29	19.5	6	2.91
4	1L	C	R	30	27	10	6.4
5		C	G	40.5	19	12	8.9
6	2K－1	A	G	28	30	10	6.4
7	2J	A	G	43	36	13	11.5
8	2L－1	C	DG	41	29	13.5	18.95
9	1N	C	R	54	43	23	47.2

石材・色調の記号については65頁参照

図版42	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重 量
1	2M－4			26	32	8	5.7
2	2K－1	C	G	27	32	11.5	8.8
3	2K－2	R	G	46	21	12	8.5
4	2K－1	C	G	25	20	10	4.25
5	2J	C	Ly	34	16	6	3.0
6	2K－1	C	R	37	18.5	7	4.68
7	2K－2	A	LOG	27.5	26.5	11	6.5
8	2K－1	C	G	30	23	8	7.17
9	2K	O	G	35	20.5	64	4.5
10	2K－2			39.5	20	13	11.5
11	2K－1	C	G	37.5	28	13	13.25
12	1J	C	G	49	21	7.5	6.4

Tab. 7　石器計測表 (1)

(　) は推定値　長さの単位は㎜　重さは g

G．石核（図面44，1・2，図面45，1・2，図面46，1・2）

図面44の1は初めにc面をつくり、a面を剝ぎ、その後、b面をつくりd面を剝ぐ。最後にa面を打面としてe面を剝離している。2はa面に自然面、bに節理面を残す。まずa面の上下を剝離してa面の右側から交互剝離をおこなう。図面45の1はd面を加撃面としてa・c面を剝離し、a面を加撃面としてd・b面を剝離している。a面とd面では、a面が新しい剝離である。2はb面の自然面を打面として剝離されている。a面の下方にa面から打撃が加えられ、c面加工が施されているようにもみられる。下端はピック状をなしているのでツールとしてよいのかもしれない。図面46の1はc面を打面としa・c面を形成している。c面の右縁にはつぶれが残っているのでハンマーストーンとも考えられる。2はb面に自然面を残している。d面を打撃面としておこなう。

図版47	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	1L	A	G	92	75	64	668
2	2J	A	G	119	93	57	865
3	H－1	A	G	119	57	37	362
4	2L－4	A	G	116	86	41	648
5	J－1	A	G	99	53	34	276
6	2K－2	A	G	108	70	41	428
7	1Tre	A	G	92	63	27	248
8	2K－4	A	G	103	49	25	275
9	2M－4	A	G	105	75	35	459

図版48	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	2K－2	A	G	136	126	48	1175
2	1J	A	G	133	120	68	1584
3	2K－4	A	G	136	170	49	1759
4	2K－2	A	G	89	213	51.5	1590

図版44	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	1K	C	G	57	30	32	65.7
2	1N	C	G	58	65	33	215.6

図版43	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	2K－3	R	G	29	23	15	
2	2L－4	A	LOG	39	48	14	36.39
3	表　採	C	G	32	33.5	12	11.75
4	表　採	C	G	39.5	33	11.5	14.5
5	2J	C	G	25	28	11	10
6	2K－3			22	22	7	
7	2K－1	C	G	26	24	15.5	5.9
8	1N	C	G	52.5	51	17	36.61

図版45	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	2K－3	C	BG	38	37	36	58.5
2	2M－4		LG	63.5	49	25	83.6

図版46	出土地区	石材	色調	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	2L－4	C	LG	46	46.5	50	84.92
2	2L－4	A	LG	52.7	36.5	34.8	63.7
3	2J	A	G	89	42	25	13.28
4	2M－1	A	G	40.5	47	7	18.8

Tab. 8　石器計測表（2）

石材・色調の記号については65頁参照　長さの単位は㎜　重さはg

第Ⅵ章　考　　察

1．屋　　瓦

A．軒瓦の組合せ（Fig. 27）

軒丸瓦　平原瓦窯址出土の軒丸瓦文様は一種である。外区は外縁と内縁にわけ、外縁に外向する正三角形の陽起鋸歯文を、内縁に半球状の珠文を配する。外縁の陽起鋸歯文は22個に復原できる。外縁は傾斜縁をなし、傾斜面と平坦面との境に凸線を巡らす。蓮弁は複弁蓮華文で弁数は８弁である。中房には蓮子が２重（１＋５＋９）に巡り、合計15個の半球状の蓮子がみられる。

軒平瓦　軒丸瓦に対応する軒平瓦の瓦当文様も一種である。脇区を切断するという特異な仕上げ方をなすものが多い。文様は偏行唐草文で、上外区に推定22個の珠文を配し、脇区と下外区に外向する正三角形の陽起鋸歯文をもつ。鋸歯文は脇区が各４個づつ、下外区が19個、合計27個に復原される。偏行唐草は中心の連続波状の茎から上側に２本、下側に３本、５群合計12本の支葉が派生する。しかし、中心の波状の両端も左右に巻くので、支葉は14本となる。支葉の派生の仕方は一定ではなく、支葉が接続しているものや遊離しているものがある。

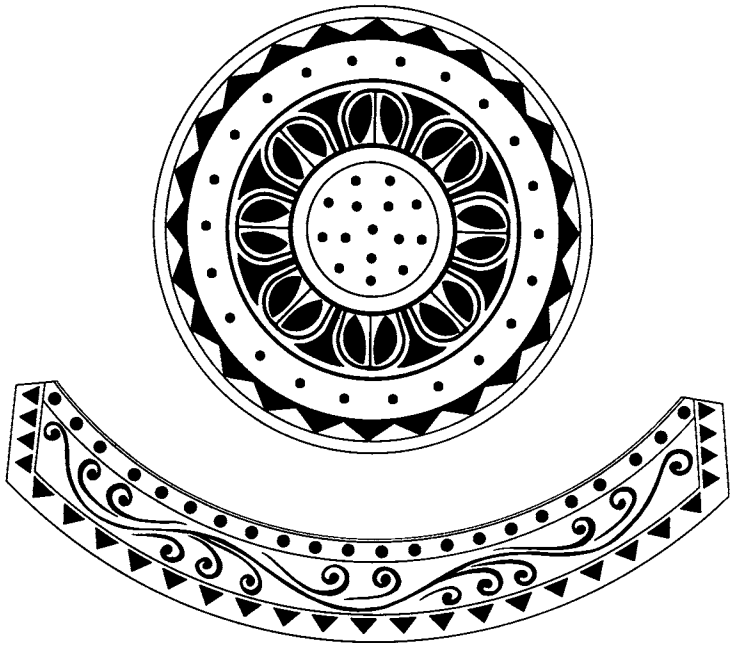


Fig. 27　平原瓦窯址出土軒瓦復原図

B．軒瓦の製作技法（Fig．28）

軒丸瓦の製作順序　破片の観察から次のように復原される。

(1) 瓦当笵に外区の粘土を入れる。

(2) 瓦当笵に内区の粘土を入れる。

(3) 瓦当全体に粘土を足す。

(4) 丸瓦接合用の溝をつける。

(5) 丸瓦を接合する。

(6) 瓦当裏面中央部をえぐる。

(7) 内面接着粘土、外面接着粘土で丸瓦接合の補強をする。

但し(6)(7)は逆の場合もある。以上の行程のうち、(6)をおこなわないものもみられる。以上の段階について細部の検討をおこなう。

外縁の粘土入れ　外縁部が瓦当平坦面を境として剝離している破片が多い。剝離面は凸凹がみられ、笵に挿入した粘土を指頭を用い密着させていく作業が復原される。外縁の剝離片は鋸歯文を施す面(内側)より、反対側(外側)が大きく残っている。これは内区を笵に入れた後に加えた補強の粘土が外縁とともに剝離しているからである。外縁外側の補足作業は瓦当部を笵に入れたままなされるので、笵から瓦当面を離して、外縁部の外周をナデ調整しても、補足粘土の部分は凸状にやや高く残る。外縁部の断面には粘土紐のあとが観察できるものがある。このことは外縁の粘土入れが粘土塊を一気に押込むような作業でなく、小さな粘土紐を重ねながら笵に粘土を充していくような注意深い作業があることを示している。

外縁にみられる笵縁　外縁部の外側には笵の深さを示す痕跡が残っているものがある。上述の補足粘土に施されるナデ調整が充分でない場合、笵に挿入された部分は平滑な面として残っているので識別は容易である。外縁部では笵の深さは0.8cmである。

内区・外区の粘土入れ　外区に粘土を充すと内区の粘土入れが引続いてなされる。NM4の

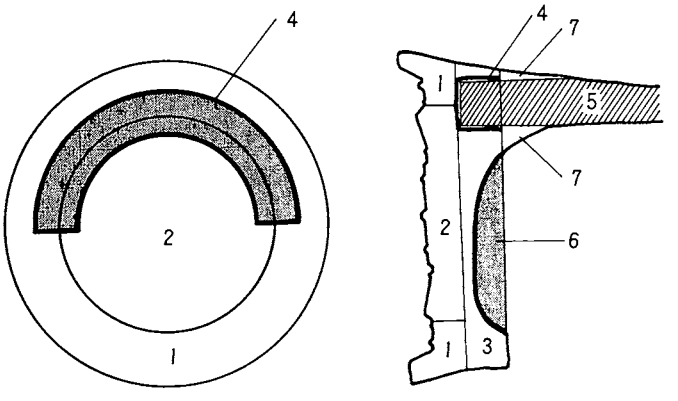


Fig. 28　軒丸瓦製作模式図

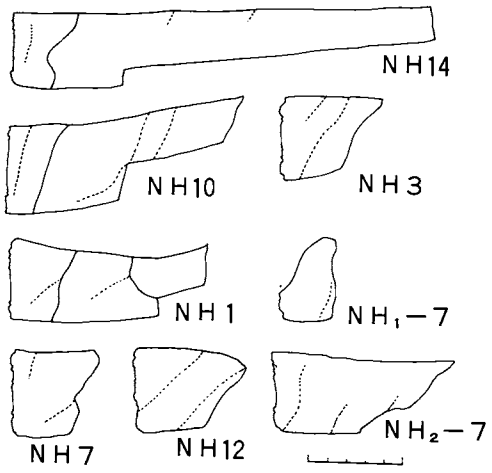


Fig. 29 軒平瓦断面図　断面の実線は剥離部を示す。

断面には粘土を外区より順に詰めていった状態がよく示されている。瓦当の断面には、瓦当面と平行には粘土の重りは観察できない。粘土塊を一気に補充していったとみられる。

丸瓦接合　丸瓦部分が残っている資料は出土していない。全て脱落している。接合部の観察できる資料は5点である。NM1は接合溝の中心部に深さ0.6cmの断面三角形の溝を掘っている。接合溝の中に溝をもつものはこの資料のみである。NM2の丸瓦先端が当る部分には櫛目状の沈線がみられる。丸瓦凹面と接する部分にも同様の沈線がみられるので、接合を有効ならしめるための加工であろう。瓦当部に丸瓦を接合するとき、瓦当面は範に入れたまま丸瓦を取り付けたとされているが、丸瓦取付部位は一定であったであろうか。平原瓦窯址出土の軒丸瓦には中房部に笠傷がみられるものがあり、その位置を基準にして丸瓦接合について検討をおこなうと、NM1と2はちょうど180度逆の位置になる。またNM4とNM2は同じ部分に丸瓦を接合している。このことは茫台の形態が四辺形であることを暗示している。[1]

瓦当裏面　瓦当裏面の形にa・bのタイプがある。aは瓦当裏面の中央部を刳るもの。bはそれをおこなっていない。aでは丸瓦接合部分から下の方へ粘土を掻っている。その際周辺部を残すので、それが裏面に土手状に残るのである。恣意的な掻取りであるので土手の幅と高さは一定しない。また掻取り部分が正円形をなさない。仕上げ調整は中央部では縦、周辺部では土手に沿ってナデられている。bは刳りをもたないので、瓦当裏面は平坦のまま仕上げる。したがって、瓦当に対する粘土のつぎ足しがaより少い。

擬似一本作り瓦　平原窯址の大部分の軒丸瓦にみられる瓦当裏面下半部の、土手状の外縁はいわゆる「一本作り」[2]に似ている。しかし、上述のように瓦当部と丸瓦部は別々に作成されているので一本作りではない。このように丸瓦を接合しながら、形状が一本作りに似るものを「擬似一本作り瓦」と呼んでおこう。類例としては、陳内廃寺[3]、浄水寺[4]、肥後国分寺[5]、稲荷山遺跡[6]、天台寺[7]などにみられる。九州の分布では肥後に分布が集中することが注目される。

軒平瓦の製作順序　軒平瓦の製作についてはa・bの2手法がみられる。製作技法の観察できる27点の軒平瓦のうち25点はa手法により製作されているので、この手法が平原窯で通有のものであったことが窺える。

a．粘土紐巻あげの桶巻作りで、分割した軒平瓦の祖形を笵型を押しつけ瓦当面を形成するという特異な技法をもつ。

b．瓦当部と平瓦部を別個に作り接合する。

a．**技法**　製作順序は次のように復原される。

(1)　粘土紐を桶に巻くが、顎部に相当する部分は平瓦部より厚くする。

(2)　平瓦凸部および顎部を叩く。

(3)　桶から円筒状の粘土を抜き取り分割する。

(4)　瓦当面となす広端部の先端を切断し、平坦化する。

(5)　平坦部を笵に押す。

(6)　側縁を切断する。

(7)　側面を叩く。

(8)　顎部と平瓦の段を整形する。

(9)　側端の調整をおこなう。

但し、(7)と(9)については、これをおこなわないものもある。a手法の細部について検討をおこなおう。

粘土紐　粘土紐の重り部分で剝離した瓦が多い。また剝離してなくとも凸凹面ひび割れにより重り目が正体を表わすものが多い。粘土紐は、剝離したものをみると断面が台形をなし、厚さは常に凹面部の方が凸面部より厚い。粘土紐を桶に巻いていく場合を想定すると、桶面に接する側が常に手前より厚くなることになる。おそらく桶と粘土紐を密着させるに具合いのよい形であったろう。粘土紐を桶に巻いていく時、顎部に相当する部分の紐の幅は平瓦部より広いものが用いられる。幅広の紐を分離しないように巻くため、粘土の上面を指頭で押し凹めながら巻いている。顎部の分離面には指頭状の圧痕が残っている。圧痕は右から左へ移動しているので桶を左方向へ回転させながら粘土紐を巻いていったか、あるいは粘土紐を右巻きに重ねていったと想定される。粘土紐の継目が観察できる資料でも、凸面からみて左側の粘土の上に右端が重さなっているものがあるのも上記を想定を裏付ける。顎部は通常３～４本の粘土紐で形成される。

凸面の叩き　凸面の叩きは同一の軒平瓦では２種の方向がみられる。顎部は瓦当面に対して斜めの叩きがおこなわれ、平瓦部の下方では例外なく側縁と直交する。直交の叩きは叩き板を桶に対して直交するようにして作動させたからであるが、このような方向が生じるのは、上述のように叩きを施す前に既に顎部の段が形成されていたからである。顎部と平瓦部の叩きの作業順序を示すような資料はないが、まず顎部から叩いたとみるのが自然であろう。

分割　大部分の軒平瓦は側端を二次的に切断しているため、最初の分割がどのようにおこなわれたかを知る資料はない。

顎部の整形　叩き締められたとはいえ、顎部と平瓦部との境は未調整である。凸部の末端に凸面に直交するように篦状工具で刻みを入れ、その後平瓦の尻の方へ余分の粘土を掻き取る。

この作業が丁寧になされず、平瓦部に余分の粘土が残っているものもみられる。

瓦当面の製作　分割され、今や瓦当文様を付すばかりになった平瓦は笵入れをおこなう前に瓦当面の調整をしなければならない。そのため瓦当面に相当する面を瓦当面と平行に切断する。この作業は顎部の叩きや、凹面の布目が瓦当端で切断されていることから推定される。

瓦当笵　平原瓦窯址の軒平瓦の瓦当文様は先述のように全面に表出されていないものが多い。これは顎部まで形造った平瓦を最後に瓦当笵を挿入するため、どうしても大きさの違いが生じやすいという点が原因であろう。軒平瓦の瓦当部分には笵端の深さを示すような痕跡はみられないばかりか、前述したように瓦当の端には切断された布目や叩きの跡がみられる。このような点からみると、笵は端のない扁平なものであることが憶測される。

側縁の切断　出来合いの平瓦を一定の形をもつ笵に合わせるため正しく重ならず笵型との間にずれを生じるものが多い。瓦当の両側縁の切断はこの理由から生じたものと解される。

調整　側面を切断した場合、切り口が不整合だったり、粘土紐の重目が露出する。そこで更に側面を叩く必要が生じる。a 手法の軒平瓦は全て脇区が切断されるが側縁の切断と調整方法には６種類がある。

a_1　側縁を切り離し、そのままのもの

a_2　側縁を２面切り離し、そのままのもの

b_1　側縁を１面切り離し、叩きを施すもの

b_2　側縁を２面切り離し、２面ともに叩きを施すもの

b_3　側縁を２面切り離し、１面に叩きを施すもの

c　a_1～b_3が部分的に混合するもの。凹面に幅1.5cmの細長い板状のもので押圧するものもある。

b．技法　瓦当部の断面からみると、平瓦を瓦当部に挿入して軒平瓦を製作したと判断される。平瓦凹部は篦状工具で強く押圧する。布目はみられない。顎との接合部にも押圧による凸凹がみられる。瓦当面に接する凹面の先端は 1.5cmの幅に強く篦削りがなされているので、この部分に段がつく。瓦当文様は全面残っている。a 手法のものに比して全体に大振りな造作である。

C．軒瓦の笵について

同笵の認定　平原瓦窯では軒平、軒丸瓦各１種の瓦当文様が製作された。文様については前述のとおり同一である。平原瓦窯では何個の瓦当笵が使用されていたであろうか。出土資料を観察すると文様相互の寸法に微細な差がみられる（Tab.4･5)。これは成形から焼成に至る工程で生じた差異であろうか。或いは元来の笵の差異が焼成後まで残ったのであろうか。出土した資料について両者を識別する手だてをもたないが、いくつかの資料の現象を手懸りとしてこの問題を考えてみたい。

笵傷について　出土した軒丸瓦と軒平瓦には笵傷がみられる。NM1・2・4には中房に同一の線状の笵傷が残っており、これらが同笵瓦であることは明白である。他の資料は、表面の風化の度合いが進んでいたり、中房面を欠失していたりして不明である。軒丸瓦にも、多数の笵傷がみられるものがある。多くは小さな点状をなしているが、複数のものに同一にはみられない。

文様部分の歪みについて　NM9の複弁の圏線部分はやや外区の方へ張り出している。弁の先端部がこのように外区の方に突出するのは、出土資料の中では唯一である。さらにその左側の弁も他のものに対して扁平である。このような特長は、粘土を笵に挿入した時に生じたものとはみられない。笵を異にすると考えられよう。

胎土について　軒瓦の胎土は焼成の何如にかかわらず、概して長石、石英粒の多い荒い感じのする粘土を用いているものが大部分である。このような瓦の原材については、遺跡の周辺の随所で入手できるものであり、恐らくそれを使用したものであろう。長石、石英は一般的に花崗岩を構成する岩石であるのでそれらが含まれていることは異とするにはあたらないが、逆にあまりそれらが含まれていない（或いは表面にはみえない）軒丸瓦がある。NM9は、他のものに比すと粘土が精製されている。

瓦当笵の数について　以上のわずかの手懸りでみると、平原瓦窯で使用された瓦当笵は軒丸瓦、軒平瓦ともに2個の笵が識別できる。また出土瓦当の点数も必ずしも多いとは言い難い。このような点から考えると、実際に平原瓦窯で使用された瓦当笵は各種2個位のものであったのであろう。このような笵の数の少なさは瓦窯全体の性格とも関連あろう。

D．丸瓦の種類と製作技法

丸瓦の種類　丸瓦は全て玉縁付丸瓦で、行基葺き丸瓦は出土していない。型に粘土を巻きつけた後、平瓦と同様に叩き板によって叩きしめられたと思われるが、その後の全面にわたる横ナデ調整によりその痕跡をみることができず、平瓦との製作関係を明確に知ることができない。

分類にあたった31点の資料に限れば、瓦窯址全体で次の3類が知られる。

A類　玉縁の段が緩やかに傾斜する特徴をもつ丸瓦で、M_1b・M_2b類にあたる。

B類　凹面玉縁端縁を縁取りする丸瓦で、M_3a類にあたる。3号窯からはB類と胎土・色調の類似する焼成不良の丸瓦破片が多量に出土しており、3号窯で最後に窯詰めされた丸瓦と考えられる。

C類　玉縁が先細気味の形態をもつ丸瓦で、M_3b－1・2にあたる。完形のM_3b・1は胴部中央に最大径があって、縦断面が弓状を呈する。

その他、M_1a類・M_2a類・M_3b類の一部は、玉縁の段が通有のように直立し、凹面玉縁端縁の縁取りをしないものであり、本来はいくつかの類に分かれるものと思われるが、破片での出土という資料的制約のため分類することができなかった。

丸瓦の製作技法　分類にあたった丸瓦は、平瓦と比較して資料点数が少なく、完形品も限られるが、ここで丸瓦の製作技法について述べておく。

円筒状木型　粘土を巻きつけて粘土円筒とするためには円筒状の型が必要とされるが、玉縁付丸瓦の場合はビール瓶の恰好をした木型と考えられている。[8] 木型には肩のいかったものと滑らかなものがあるが、平原瓦窯址においては全て滑らかな肩をもった木型が使用されている。こうした木型の使用は粘土紐巻きつけ技法を用いる場合により有利であると考えられる。なお、C類のように玉縁が先細気味であるのは、この木型がほかの類のような胴部と玉縁が平行関係にある木型と違い、先端ですぼまる形態であったことに起因している。

第1次成形技法　型に粘土を巻きつけるには、全て粘土紐巻きつけ技法を用いている。分類にあたらなかった多くの丸瓦破片においても、これは同様である。粘土紐の巻きつけ方は、M_2a－1では型の下部（丸瓦の広端部）から左回りに巻きつけて成形する。なお、玉縁の段となる部分には、さらに粘土紐を付加して厚味をもたせている。

刷毛状工具の使用　緩やかな玉縁の段を有するA類には、凸面段部に横方向に平行する凹線が数条みられるものがある(PL.24—1)。横ナデ調整に先行しており、玉縁の段の成形にあたって成形台の回転運動を利用した刷毛状工具の使用が考えられる。

凸面調整　叩きしめた後におこなわれる調整は、すべて横ナデ調整である。B類のM_3a−2は胴部凸面に数本の縦方向の綾が走り、横ナデ調整に先行して削りによる調整が加えられているとみられる。

凹面玉縁端縁の縁取り　B類の凹面玉縁端縁は縁取りされるが、玉縁を上にして凹面をみた場合、M_3a−1にみられるように工具の動きは右上方、ないしは右方へ向う。これは型からはずされた粘土円筒の玉縁（或いは分割後の丸瓦玉縁）から工具をさし入れて右回りに削りとったことを示している。

分割方法　型からはずされた粘土円筒を2分割して丸瓦とするには、次の2方法がみられる。1つはA類にみられる方法で、粘土円筒の凸面側から刃物でその厚さの半ばまで分割載線を入れて乾燥後に叩いて分割するものである。A類には玉縁部の側面調整をしないものがあり、丸瓦側面の凸面側に分割載面が、凹面側に破面が残る。いま1つの方法はB類にみられ、粘土円筒の内部からその厚さの半ばまで分割載線を入れる方法である。この場合は丸瓦側面の凸面側

1号窯	—	—	a	—	b	c	—	—	—	—	f	—	—	d	—	e	—	—
窯様遺構	—	a	—	b	e	c	d	—	—	—	f	g	h	—	—	i	—	—
2号窯	c	a	g	b	n	i	e	f	d	k	h	—	—	m	j	—	—	l
3号窯	a	b	—	c	—	h	d	e	f	—	—	g	—	—	i	—	j	—
3号窯前方部	a	b	—	c	—	h	d	e	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
型式	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	X

Tab. 9　平原瓦窯址出土の平瓦の類と型式

に破面が、凹面側に分割載面を残すことになる。

側面調整　A類には玉縁部の側面調整をしないものがあるが、大半はb手法の削りによる調整がなされる。2号窯出土の2点は凸凹面の面取りを加えるc手法である。B類は凹面の面取りを加えるe手法がほとんどで、凸凹面の面取りをするものが1例みられる。c類はb・eの2手法がある。面取りの削りの方向は、B類のM_3a・1が玉縁から広端へ、M_3a－2が広端から玉縁へ向う。

凹面調整　ほとんどの資料は凹面の調整をおこなわないが、A類のM_2b1は布の皺によってついた　凹線を、B類のM_3a－3は玉縁の屈曲部をナデ調整している。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	X	不明	計
1号窯	0	0	107	0	66	55	0	0	0	0	1	0	0	8	0	3	0	0	18	258
	－	－	41.47	－	25.58	21.32	－	－	－	－	0.39	－	－	3.10	－	1.16	－	－	6.98	100
窯様遺構	0	17	0	2	1	3	1	0	0	0	1	2	1	0	0	1	0	0	8	37
	－	45.96	－	5.41	2.70	8.1	2.70	－	－	－	2.70	5.41	2.70	－	－	2.70	－	－	21.62	100
1号窯＋窯様遺構	0	17	107	2	67	58	1	0	0	0	2	2	1	8	0	4	0	0	26	295
	－	5.76	36.27	0.68	22.71	19.66	0.34	－	－	－	0.68	0.68	0.34	2.71	－	1.36	－	－	8.81	100
2号窯	45	236	26	55	1	5	25	3	27	3	11	0	0	1	3	0	0	2	38	481
	9.36	49.06	5.41	11.43	0.21	1.04	5.20	0.62	5.61	0.62	2.29	－	－	0.21	0.62	－	－	0.42	7.90	100
3号窯	655	58	0	32	0	2	9	3	5	0	0	1	0	0	1	0	2	0	75	843
	77.70	6.88	－	3.80	－	0.24	1.07	0.36	0.59	－	－	0.12	－	－	0.21	－	0.24	－	8.90	100
計	700	311	133	89	68	65	35	6	32	3	13	3	1	9	4	4	2	2	139	1,619
	43.24	19.21	8.21	5.50	4.20	4.01	2.16	0.37	1.98	0.19	0.80	0.19	0.06	0.56	0.25	0.25	0.12	0.12	8.59	100

Tab. 10　平原瓦窯址出土の平瓦各型式の数量と割合

E．平瓦の型式

平瓦の型式　前章で記したように平原瓦窯址出土の平瓦を各窯毎に、第1次成形技法（瓦土の巻きつけ方)、第2次成形技法（叩き目）を主な基準とし、それに調整手法を加味し分類した。平原瓦窯の平瓦全体からみた場合、各窯には共通する類もみられる。このような共通類を総合して、平原瓦窯址出土の平瓦をA～Q・X（全面ナデ）の18型式に分類した（Tab. 9）。

各窯（窯様遺構含む）における平瓦の組成は、18型式の中の6～15型式からなっており、窯毎或いは型式毎の出土点数に多寡がみられる（Tab. 10)。

なお、丸瓦については、資料的制約のため類別に留めておく。

F．平瓦の製作技法

平瓦の製作技法は、型式によっていくらかの相異がみられ、また特異な技法の使用が認められる型式がある（Tab. 9）。本遺跡では痕跡を残す例は全て桶巻作りによっており、一枚作りとみられる資料は出土していない。以下、平瓦の製作技法について述べる。

第1次成形技法　大半の型式は粘土紐の痕跡を残しており、粘土紐巻きつけ技法によっている。ただし破片資料が多いため、第1次成形技法が不明の資料を多く含む型式がある。この場

合、格別に製作技法上の差異は認められないことから、同様に粘土紐巻きつけ技法によっていると考えられる。一方、第1次成形技法が不明である型式にはJ・M・P・Q型式がある。いずれも資料数が少なく、破片であるため痕跡を認めにくいが、J・M・P型式は、各々I→H、K→G、C→Pと2種の叩き板（後述）が混用されるもので、その叩き目を有する型式と同様、この3型式も粘土紐巻きつけ技法によっていると考えられる。なお、粘土板巻きつけ技法の根拠となる糸切痕、および粘土板の合せ目は、1例も検出されておらず、丸瓦製作にあたっても粘土紐巻きつけ技法が用いられていた。

以上のことを考慮すると、平原瓦窯址では平瓦の製作にあたって粘土紐巻きつけ技法を用いていたとみて間違いなく、「粘土紐桶巻作り」[9]の平瓦を製作していた点に大きな特徴がある。

平瓦製作については、「粘土板桶巻作り」が飛鳥時代の平瓦に一般で、奈良時代前期の平瓦にもひろくみとめられる一方、「粘土紐桶巻作り」の平瓦は、武蔵国分寺・肥後渡鹿(とろく)廃寺や、畿内では藤原宮跡ほかの奈良時代前期の瓦にあるという[10]。渡鹿廃寺[11]の平瓦について実見したところ「粘土紐桶巻作り」平瓦は、斜格子叩き目と縄叩き目が重複してみられるものに限られ（PL.24—7)、ほかの平瓦は「粘土板桶巻作り」によるものとみられる[12]。また、県内では城南町陳内(じんない)廃寺の供給瓦窯である陳内瓦窯・富合(とみあい)町平原瓦窯で、この「粘土紐桶巻作り」平瓦が製作されている[13]。陳内瓦窯のそれは凸面叩き目と軒瓦の組合せから8世紀前半代と考えられており、肥後における「粘土紐桶巻作り」平瓦の製作をその頃までさかのぼらせることができよう[14]。

なお、陳内廃寺出土で8世紀初頭頃に推定されている重弧文軒平瓦は、「粘土板桶巻作り」平瓦を利用している。肥後における「粘土板桶巻作り」平瓦の上限をほぼ示すものとみられる。

叩き板　平瓦凸面の叩きしめに使用された叩き板は14種で（Fig.30)、刻線叩き板と縄巻叩き板に大別できる。本遺跡で多く使用されているのは前者で12種がみられる。J・L・M・P型式は各々叩き板I・H、K・D、K・G、C・Pを混用している。E型式には木目を観察できた資料がなく、O型式が木目に斜交する斜格子叩き目、他の型式は木目に直交平行の格子叩き目である。叩き板の形状は、叩き板の柄の圧痕(PL. 24—2)を残すA型式の叩き板のように羽子板状のものであろう。復原した叩き板に限れば、幅6～7cm前後のA・F・Nを大型の叩き板、幅4～4.5cm前後のB・I・Oを小型の叩き板と大別できる。

一方、縄巻叩き板を使用するものにG・H型式がある。両方とも瓦の圧痕で節が左下りについており、左撚りの縄を叩き板に巻きつけたものである。G型式は太めの縄を使用しており、5cm幅に9～11条の縄目がみられ、H型式は細めの縄を使用し、5cm幅に15～18条の縄目がみられる。なお、後述するようにG型式は叩きしめの円弧がBに属することから、木目に直交して縄を巻きつけた叩き板であることが知られる。

叩きしめの順序と方向　叩きしめの円弧が9型式にみられる。この中のB・G型式は両側縁外方に円弧の中心がある叩きしめの円弧Bに属する。B型式のH_2a-2によって叩き板の動き

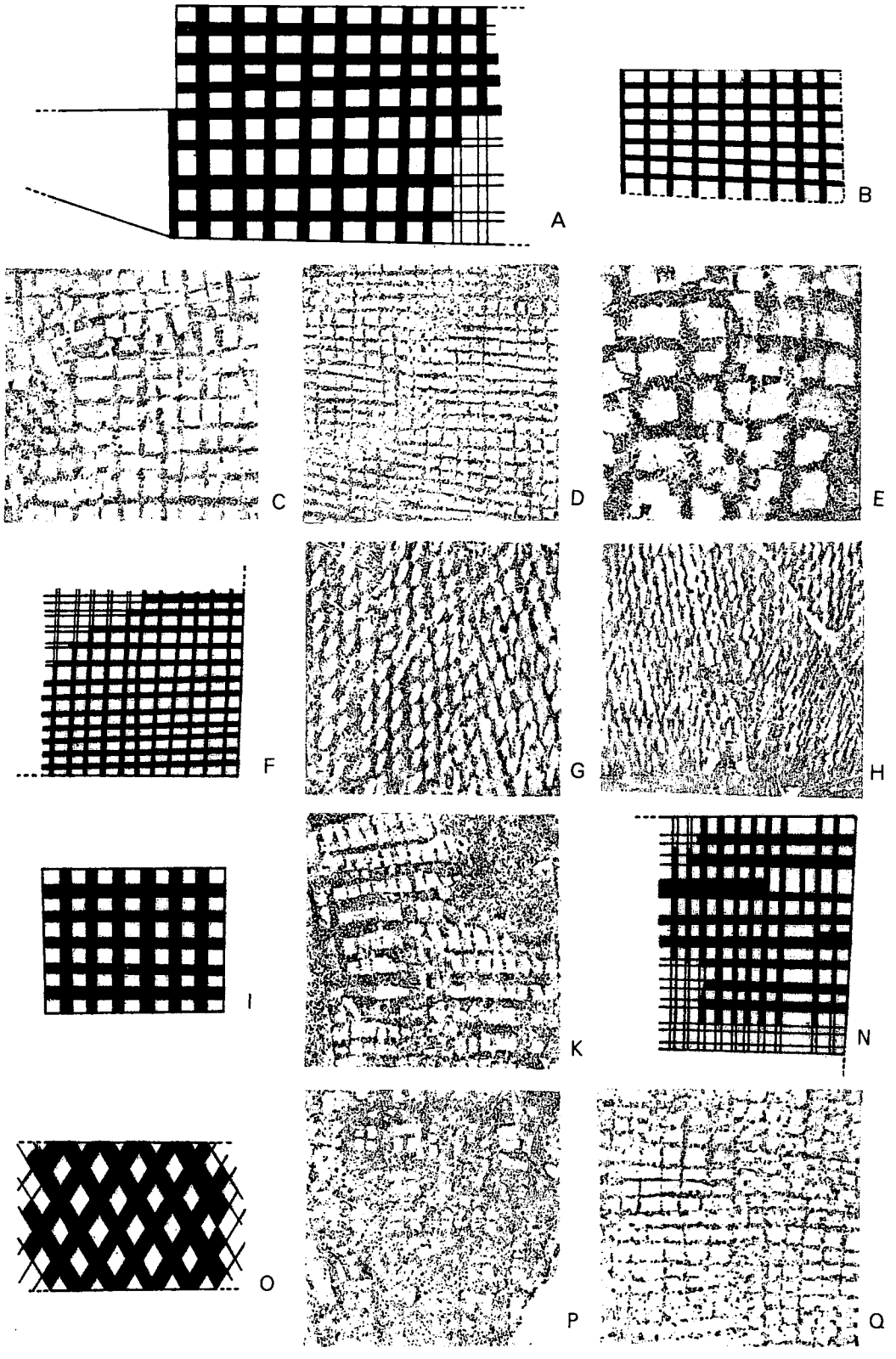


Fig. 30　叩き板復原・叩き目集成図　（上方が狭端、ヨコ方向が木目の走行、記号は型式と一致する）

をみるとFig. 31のようになる。左右の円弧で叩き板の同一部分が逆にあらわれており、この種の叩きしめの円弧は、叩き板をもつ工人の手の位置が左右の円弧の中心にあることを示している。叩きしめは、狭端を上にしてみた場合、狭端から広端におよぶ動作を左側縁から中央に向って行い(左の円弧)、その後に、広端から狭端におよぶ動作を右側縁から中央に行っている(右の円弧)。このような叩きしめの方法は、桶巻作りを想定した場合は不都合をきたすため、一枚作りを思わせる。[15] しかし、B類には後述するように桶巻作り特有の布の綴じ合せ目が認められる(PL.25)。さらに、この一群の平瓦凹面には同一箇所(狭端を上にしてみた場合、広端縁から18cm左側縁から8cm)に突起がみられ、側・端縁の段、布目の押圧とともに凸型台によると考えられる特有の圧痕がある(PL. 23)。したがって、この一群の平瓦は一枚作りによるものではなく、分割した桶巻作りによる平瓦を、凸型台上で再度叩きしめたものと考えられる。[16]

一方、A・C・E・F・I・K・N型式は、叩きしめの円弧Aに属する。この中でC・F・Iの3型式は通有のように広端から狭端へ、右回りに叩きしめるのに対して、A型式は広端から狭端へ(稀に狭端から広端へ)、左回りに叩きしめている。同じ円弧を描いていても叩きしめ

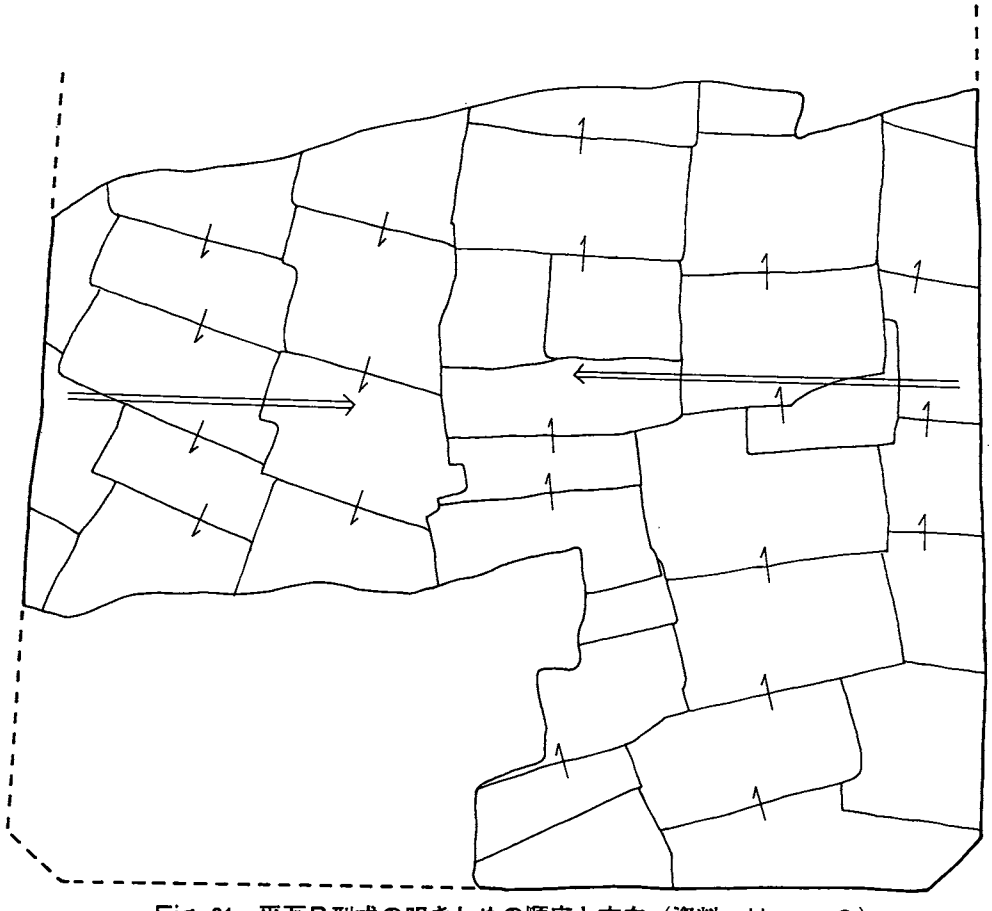


Fig. 31 平瓦B型式の叩きしめの順序と方向(資料、H_2a－2)

の方向に違いがあるのは、回転台の回転方向に原因するもので、A型式の場合は通有と逆に回転台が右回りだったことを示している。なお叩きしめの円弧を描かないD・O型式の場合も通有のように右回りに叩きしめ、全面横ナデのX型式は左方へ横ナデ調整しており、いずれも回転台は通有と同様に左回りであったことを示している。

なお、E型式のように大型の格子叩き目では、叩きしめが十分になるよう全体に叩きしめの重複がみられる。

凸面調整　X型式のように全面横ナデ調整し、叩き目を全く残さないものがあるが、大半の型式は不調整か一部をナデ調整している。I型式の場合は横ナデ調整であるが、他の型式が回転を利用したナデであるか否かは、破片のため判断できない。なお、C・F・P型式の一部資料には凸面主要面が不調整ながら、側縁部の2～4cmを木片を利用したとみられる縦方向のナデ調整がみられ、F型式では同様のナデが広端縁にも認められる。

側面調整　分割載面と破面をそのまま残すa手法はみられず、削り調整するb手法、削り調整の後に凸凹面の面取りをするc手法、凸面のみの面取りをするd手法、凹面のみの面取りをするe手法の4手法がみられた。E・I・Q・X型式はb手法、L・N・P型式はd手法、O型式がc手法と1つの手法がみられる。他の型式は2手法ないしは3手法を混用している。

凹面調整　桶からはずされた粘土円筒は、凸面の粘土紐相互の接合が叩きしめによって強固になるのに比較し、凹面では粘土紐の合せ目を残す場合が多く、凹面にナデ調整を加えることがある。平原瓦窯址出土の平瓦では調整しないものが多いが、A・C・F・G・H・Jの6型式に凹面調整を加える資料がある。A型式を除いた他の型式は、少数の資料で凹面の一部に縦方向（側縁平行）のナデ調整がみられる。A型式の場合は大半の資料が全面ないしは半分程を指頭によるナデ調整をおこなう。調整方向は広端から狭端へ向うが、側縁に平行するものと、側縁とある角度をなすものがある。

広端両隅の切除　平瓦広端の両隅を切り除く調整手法が、B・D・G・H・I・Oの6型式にみられる。切除の方向は、ほとんどが平瓦凹凸面に平行で、凸面から凹面に向っておこなうものが若干みられる。切除した面の長さはB・D・G型式では2cm前後と短いが、H・I・O型式では 4.5cm前後と長めに切除がなされる。このように同一手法を用いる一群の平瓦であるにもかかわらず、微細に差異がみられる原因は、後述するようにB・D・G型式とH・I・O型式の製作に若干の時間差があったことに関係するとみられる。

広端両隅を切除している平瓦の類例は、県内では渡鹿廃寺跡で出土している[17]（PL. 72－6）が、そのほかには寡聞にして知らない。県外では大宰府史跡第60次調査や[18]、東京都町田市瓦屋根瓦窯跡[19]などにみられるが、2者とも平瓦の四隅を切除するものである。

なお、H型式の隅を切除する資料は、縁の厚さから狭端部の可能性もある。しかし、明らかに広端両隅を切除しているI型式に狭端隅を切除しているとみられる資料があり、またHとI

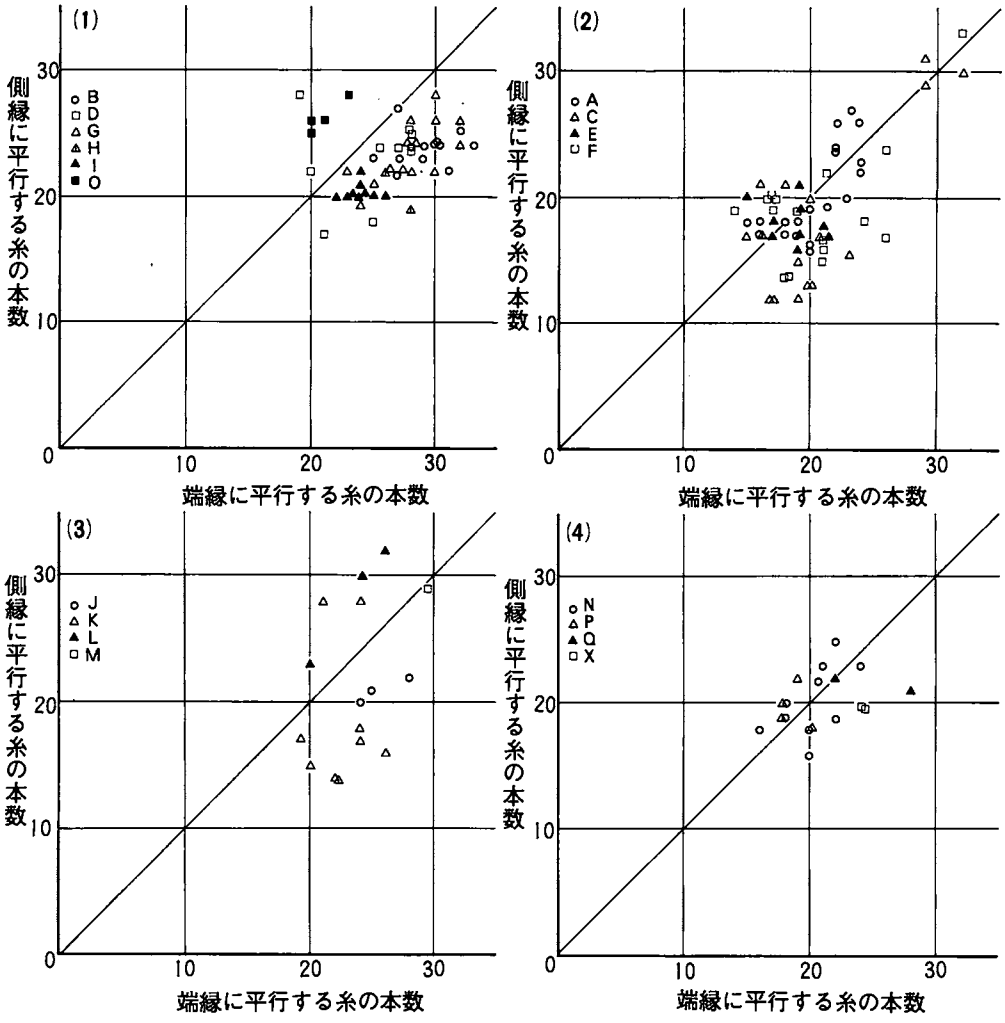


Fig. 32　平瓦各型式の使用布の比較（3cm四方）

の叩き目がＪ類において混用されており、Ｈ・Ｉ型式が同一技法によっている可能性が高いことから、Ｈ型式においても広端両隅を切除していると考える。

布の経緯　各型式凹面についた布目が、3cm四方に何本みられるかを比較した（Fig. 32)。横軸は平瓦の端縁に平行する糸の本数、縦軸は平瓦の側縁に平行する糸の本数である。ここでは広端両隅を切除する一群（Ｂ・Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｏの６型式）を他と区別して扱った。この一群のうちＢ・Ｇ・Ｈ・Ｉの４型式は、端縁に平行する糸の本数が側縁に平行する糸の本数を上回っており、布の経(縦糸)を端縁に平行にして使用したことを示している。この他、ＨとＩの叩き板を混用するＪ型式、Ｘ型式も同様の布の使用法が考えられる。

一方、分布のあり方をみると、相対的に１箇所に集中する型式と離れて複数の箇所に集中をみせる型式がある。１つの集中が１枚の布の使用によるものかどうかは精査を要するが、型式によって別の布、或いは共通の布が使用されていた可能性が考えられる。

布の綴じ合せ目　平瓦桶巻作りの場合、使用される布は端縁に平行して桶に巻きつけるため、側縁に平行する綴じ合せをおこなう。したがって、側縁に平行する布の綴じ合せ目がみられることは、その平瓦が桶巻作りによって製作されていることの有力な証左となる。[20]

平原瓦窯跡ではA・B・C・F・I・L・P・Qの8型式にこの布の綴じ合せ目が認められる。桶巻作りによる同一型式の平瓦が4分割によって製作されている場合、原則的には平瓦4枚に1枚の割合で布の綴じ合せ目があらわれるはずである。本遺跡の場合、破片を含めた布の綴じ合せ目の出現頻度は、前章でふれたようにいずれの型式も低い。しかし、本遺跡では他の痕跡から、平瓦を桶巻作りによって製作していたと考えられる。したがって、布の綴じ合せ目の出現頻度が極めて低い型式や、全く見い出せない型式がある理由を、遺跡の性格に由来する資料上の制約によるものと理解する。

なお、比較的に完形・ほぼ完形の資料が多いA型式においても出現頻度が低い。この場合、A型式は焼成不良で、風化作用を強くうけていること、多くの瓦が凹面の全面ないし半分近くにナデ調整がみられることに原因するとみられる。

あて布の使用　3号窯出土のA型式の3点には同一のあて布の痕跡(約8×10cmの四角形)がみられる(PL. 24—3)。あて布に使用されている布は、あてられる布に比べて経緯本数が多く、目の細かい布が使用されている。

分割界線　粘土円筒を分割する目安となる分割界線がD・I型式の凹面側縁にみられる。分割界線は4分割の場合桶の四方についた細い突帯によって生ずるもので、高・低2種類の突帯によって、叩くだけで分割が可能な深い分割界線と刃物で分割載線を入れるための目安となる浅い分割界線がある。D・I型式はいずれも浅い分割界線で、幅6mm深さ4mm前後を測り、断面はU字状を呈する。なお、D型式のH_3c—2の分割界線は、幅2.5cm前後の模骨痕の中央に位置するとみられ、分割突帯が桶の枠板中央についていたことが推察される(PL.24—4)。

分割角度　先述してきたように、本遺跡で出土している平瓦は、痕跡を残しているものは全て桶巻作りによるもので、一枚作りとみられる資料は1点もない。そこで、粘土円筒を何分割したのかを知るために、平

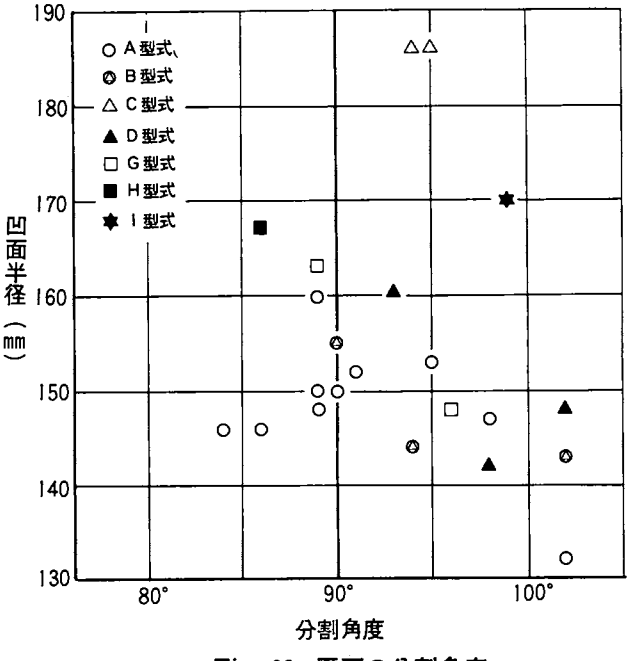


Fig. 33　平瓦の分割角度

瓦凹面がつくる円弧のその復原円周上に占める角度を計測した(Fig. 33)。遺跡の性格上から完形・或いは完形を知ることのできる資料が極めて少ないので、特定の計測部は定めなかった。したがって、凹面半径（平瓦凹面がなす円弧の復原半径）は、その大略を示しているとみなければならない。ただしA型式は狭端幅と広端幅に大差がなく、文字通りの円筒状の桶が使用されており、計測部の違いによる凹面半径の相異は小さいとみられる。なお、B・G型式は桶巻作りによる分割後、さらに凸型台上で叩きしめられており、原初の円弧を留めるものでない。

さて、一般的な4分割をおこなっていれば、その分割角度は側面調整を考えると90度以下になるはずである。しかし、実際には90度前後に計測値が集中するA型式にしても、84度から102度までのバラツキがみられ、分割後において平瓦にある程度の歪みが生じることが予想される。そして、3分割の場合の分割角度である 120度には大きい隔たりがあることを勘案すると、計測にあたったA・B・C・D・G・H・Iの7型式は4分割によっていたと考えることが妥当であろう。

凹面半径　計測にあたったほとんどの型式が14～17cmの範囲にある。特にA型式は15cm前後に集中しており、桶の直径が平瓦の全長（桶の高さ）とほぼ同じ長さであることが知られる。

一方、C型式は凹面半径18.6cmとほかの型式に比較すると大型の桶が使用されている。

軒平瓦使用の平瓦　軒平瓦は軒丸瓦とともに完形を知られる資料がなく、瓦当部とその周辺を知るのみである。瓦当部と平瓦部が別個に作られて接合されるb技法の軒平瓦は、ナデ調整や押型によって叩き目の観察が困難であるため、使用された平瓦の型式については判然としない。一方、平瓦部と顎部を桶巻作りによって同時に成形するa技法の軒平瓦は、平瓦部凸面や顎部、および一部の資料では側面や凹面にも、平瓦B型式と同様の叩き目（叩き板B）がみられる。この両者は胎土・焼成・色調の点でもよく類似しており、同時期に製作されていることを示している。

2．平原瓦窯の構造

窯の共通性と相違点　平原遺跡では3基の瓦窯址を調査した。焚口部を欠失していたが、窯の構造を窺うには充分であった。三窯に共通する点を列記すると次のようになる。

①窯は地山を刳抜いて作られている。

②焼成室に階段を有する。

③焼成室に小溝を有する。

一方、燃焼室と焼成室の境が高低差をもつもの（2・3号窯）と、共室の境が明瞭でないもの（1号窯）などの相違点がある。また焼成室の溝も窯毎にその数を異にする。

灰原　灰原は焚口部周辺が削平を受けている事もあり、窯毎の堆積を明らかにする事は出来なかったが灰原の残存部では3窯の灰原が混じっているような状態であった。このことから操

業規模は小さく短期の操業であった事が窺える。

柱穴　灰原の中に23個の柱穴とみられるピットを検出した。瓦と柱穴の分布との間には何らの関連性は見い出し得なかったが、柱穴は瓦の分布のほぼ中央部に位置する。柱穴は掘込み面が灰原の下面であるので同期の遺構とみられる。柱穴の配列には規則性はみられないが、小さな柱を雑然と建てた簡単な作業場、と推定される。

排水溝　3号窯の東側で検出した溝は自然の流路に手を加えた排水溝である。窯の周辺部では流路は広がっており、一部3号窯の側壁を溝が切っている状態であったが、これは後世の溝の広がりと解釈される。上方の断面では意識的に溝を加工したような状態が観察された。この溝のある3号窯の東側の部分は、3基の窯が並ぶ東西の斜面から台地が南へ延びる変換点にあたり、窯より上方で降った雨水がちょうどこの部分に集約して流れる。したがって3号窯を築くにあたり、この部分を整地しておいたことが考えられる。溝の底面に少数ではあるが窯と同時期とみられる須恵器等が出土したことから窯操業時には溝が機能していた事が推定される。一方、3号窯の廃絶は急激な窯の破損に依る事が前方部の断面より観察された。このことからすると排水溝は長期に渡りその役割りを果すことはなかったのである。

遺跡名	全長	燃焼部			燃焼室と焼成室の境		焼成室			焼成室床面						天井高	煙道長	焼成室床面積 ㎡	備考
		平面形	最大幅	奥行	幅	高さ	床傾斜角	最大幅	奥行	階段		溝			平坦面数				
										数	高さ	数	幅	深					
平原1号窯	334	長方形	144	(106+α)	149	0	28	186	230	6	3·12	5	6·10	4·6	24	(80)	—	3.98	燃焼部は6°の傾斜をもつ
2号窯	258	楕円形	114	(64+α)	100	12	45	164	190	5	20·28	2	10·18	8	15		—	2.40	燃焼部は10°の傾斜をもつ
3号窯	416	長方形	126	(118+α)	126	42	26	126	298	6	20	1	10·20	5	13	(85)	—	3.49	
陳内瓦窯	696	円形	188	170	160	75	38	160	520	13	20·30	1	4	1	13	100·128	300	7.68	
富合平原1号窯	154	×	×	×	×	×	7.5~17	142	(154+α)	×	×	×	×	×	×	(92)	×	(1.83+α)	
2号窯	228	×	×	×	×	×	5~21	(160+α)	(228+α)	×	×	×	×	×	×	90	80	(2.57+α)	
3号窯	322	半円形	102	(100+α)	70	16	19	116	222	×	×	×	×	×	×	—	×	2.42	

Tab. 11　瓦窯計測表

全長は水平距離で現在長を示す。焼成室床面積には溝も含む。
—は不明・×は無い事・（　）は推定値を示す。数字の列記は最大と最小を示す。
焼成室床面の平坦面とは焼成室内の溝により区画された段階面を指す。

3．窯の操業期間について

本遺跡では各瓦窯の切合い関係が、前庭部およびそれに続く灰原の欠損によって把握できず、かつ灰原における瓦の堆積も単一的な状態を示しているので直接に各窯の操業期間の関係を知ることができなかった。

しかし、先に示した平瓦各型式の窯毎の組成を手懸りとして操業期間について論じることは可能である。平瓦の各型式は1つの窯のみにしかみられない場合もあるが、それは極めて限ら

れた型式で量的にも少なく、各型式のほとんどは2ないし3窯にまたがってみられる（Tab.12)。このような各型式の窯毎の広がりを大別すると、次の3群として把握できる。なお、ここでは1号窯前方の窯様遺構については、1号窯と同一の遺構として取扱う。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J (H+I)	K	L (K+D)	M (K+G)	N	O	P	Q	X
1号窯（窯様遺構を含む）		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○		○		
2号窯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○			○
3号窯	○	○		○		○	○	○	○			○			○		○	

Tab. 12　各窯の平瓦組成表

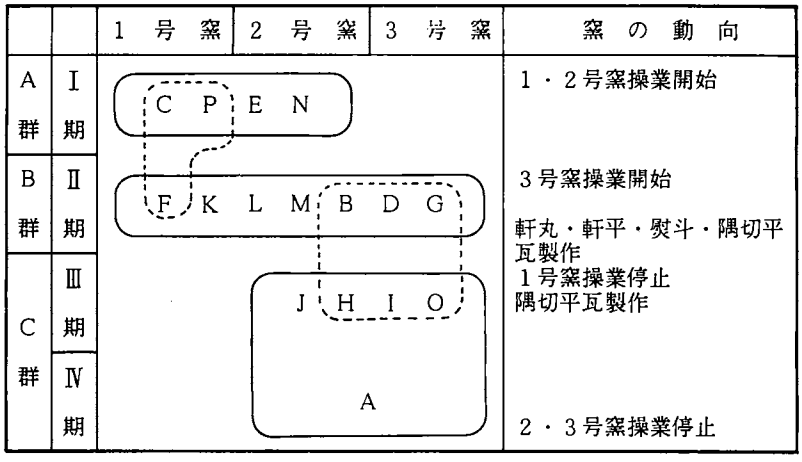
A群　1号窯・2号窯に共通して出土する型式群で、C・E・N・P型式から構成される。このうちP型式は1号窯だけから4点出土しているものであるが、Cの叩き目とPの叩き目を混用したものであることや、C型式とP型式の凸面側縁の調整が同一手法によっているためP型式をA群に含める。

B群　3基の窯に共通して出土する型式群で、B・D・F・G・K・L・M型式から構成される。このうちK型式は3号窯から出土していないが、3号窯にKとDの叩き目を混用するL型式があることからB群に含める。また、M型式は窯様遺構から1点だけ出土しているが、KとGの叩き目が混用されており、これもB群に含める。

C群　2号窯と3号窯に共通して出土する型式群で、A・H・I・J・O型式から構成される。このうちJ型式は2号窯から3点だけ出土しているが、HとIの叩き目を混用する型式であるのでC群に含める。なお、A型式の平瓦は全て焼成が極めて不良か或いはやや不良である。3号窯から多量に出土した反面、灰原からは全く出土していない。これを勘案するとA型式のの平瓦は製品としての窯出しがなされなかった可能性が強い。

以上のA・B・Cの3群を構成する全ての形式の平瓦は、同時に焼成されたものであるか、それとも何らかの時間的変遷を経ているのであろうか。前者と考えると型式毎の平瓦製作技法が余りにも個別的で多岐にわたっていると思えるのである。この場合、時と場所接して14種の叩き板が使用され、多くの調整手法が混在して操業されたと想定せねばならない。翻ってA・B・C群の分布によって示される1・2号窯、1・2・3号窯、2・3号窯という区分を時間的推移とみるならば、各型式の技術的関連と断絶を時間的推移の結果として考えることが可能である。このような観点からすると、C群の型式を出土しない1号窯は、2・3号窯がC群を焼成している時期にはすでに操業を停止していたことが考えられる。逆に3号窯はA群の型式を出土しないので、1・2号窯に遅れて操業が開始されたと考えることが可能である。そこで、平原瓦窯址の操業を4期に設定し、A群をⅠ期、B群をⅡ期、C群をⅢ期とし、最後に窯詰めされたとみられるC群のA型式をⅣ期として、平原瓦窯址の操業順序を想定しておく(Tab.12)。

各期毎にみられる平瓦の製作技法（特に叩き板や凸型台の使用、広端両隅の切除）の相違は、



Tab. 13　平瓦からみた各窯の操業関係

新窯（3号窯）の操業開始や、旧窯（1号窯）の操業停止、2号窯における軒丸・軒平・道具瓦の製作などといった窯場の生産動向と密接な関連をもつものであろう。

4期にわたる平原瓦窯址の全体の操業期間と各窯の操業期間が、どれほどの長さであったかは窯毎の窯詰めの回数や、各窯が継続的に構築され操業されたのか、或いは断絶があったのか等の基本的問題が解決されなければにわかに決し得る問題ではない。しかし、平瓦の製作技法の観点から検討した場合、各期の技法には同一の技法がみられる。すなわち、Ⅰ期のC・P型式とⅡ期のF型式の一部資料にみられる凸面側縁の縦方向のナデ調整、Ⅱ期のB・D・G型式とⅢ期のH・I・O型式にみられるように、両期に切断の長短はあっても広端両隅を切除していることである。このような製作技法の連続性は、Ⅰ期からⅢ期までの各期の窯操業が時間的に切目のない連続性を示していると考えられる。つまり窯がとだえることなく操業されたとみられるのである。しかし、Ⅳ期のA型式は小型の平瓦であること、叩きしめの際の回転台の回転方向が通有とは逆で右回りであること、多くの資料に丁寧な凹面調整がみとれることなどから、Ⅰ～Ⅲ期の製作技法とは大きく異なっている。この差異を技法の不連続という点からみるならば、Ⅲ期とⅣ期の間には時間的断絶が存在したとせねばなるまい。

4．平原窯製品の供給先

平原窯製品　平原瓦窯で製作された瓦がどこで使用されたかを知る為には、まず平原製品の特徴が把挙されなくてはならない。この点についてはⅥ章1で指適したように、とくに軒瓦において平原製品を特定することが容易である。

平原瓦窯周辺の古瓦出土　平原瓦窯址が存る八代郡における古瓦の出土地は12カ所である。[22] 正式な調査を受けていない所が多いが、今日のところ平原窯の製品は見い出せない。とくに八代郡寺に比定されている興善寺廃寺は平原瓦窯址の南北約4kmの近地にあるので出土瓦との対比は調査の当初からの課題であったが、平原窯の製品は見られなかった。[23]

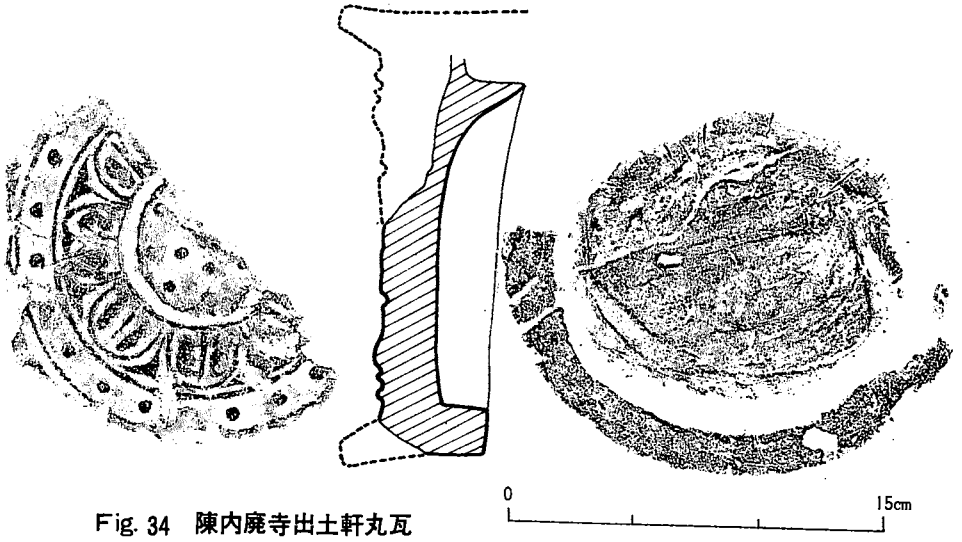


Fig. 34　陳内廃寺出土軒丸瓦

類似古瓦　平原製品と最も類似するのは陳内廃寺出土の軒丸瓦である。陳内廃寺は熊本県下益城郡城南町に存する寺院址で1957・1958年に小林久雄・松本雅明氏等によって発掘調査が行われ法起寺式の伽藍配置が復原され、肥後に於ける最古の寺院として付置づけられている。出土瓦は多種におよび肥後の古代瓦を考えるうえで基準となる遺跡である。軒瓦は軒丸瓦３種、軒平瓦３種が松本雅明氏によって分類された。このうち軒丸瓦Ⅰ類Ｃが平原製品と似る（Fig. 34)。報告書の記述を引用する。[24]

軒丸瓦１（老司式）（Ａ・Ｂの記述は略)…Ｃ(５図３）これも瓦の大きさも構成も（Ａ・Ｂと)かわらないが花弁の外区が少しまるみをおび、珠文の数は二十五で、やや小さくなっている。あごはさらに高く六cm、裏には幅二cm、高二cmの外周をめぐらしている。

Ｃとされたものは、この資料１点しか出土していない。陳内廃寺Ａ遺跡（東僧房比定地）の第１トレンチから出土したものである。平原製品と比較すると良く似ているが同一ではない。[25] ①中房、弁区の径・幅が若干大きい。②使用粘土は良好で、平原瓦窯址から出土したもののように石英粒を含んでいない。このような違いをどのように評価するかの問題である。①についてみると、平原瓦窯址出土のものとの違いは３mmを越えるものではなく、同一範によって生ず

直径	内区			外区				瓦当厚	裏面土手高	
	中房	弁区		外区広	内縁	外縁				
	直径	弁区径	弁幅		幅	幅	高さ			
—	58	28	29	(25)	15	—	—	26	12	23

Ｔａｂ.14　陳内廃寺出土軒丸瓦（１類Ｃ）計測表

単位：mm
— 計測不能
（　）：復原値

る差異に含まれると考えてもよい。②については、平原瓦窯址の多くのものが瓦の表面からでも観察出来るような石英粒を含むが全資料がそのような胎土を有するものではない。例えばNM9などは陳内例に近い。以上の事から、陳内廃寺出土の瓦は平原瓦窯址の製品と考えてよい。平原瓦窯址から陳内廃寺までの距離は直線距離にして約16kmをはかる。なお、軒平瓦、丸瓦、平瓦については陳内廃寺の全資料との対比を行ったが平原瓦窯址の製品は見出さなかった。[26]

5．平原瓦窯址の性格と年代

出土瓦の単一性　平原瓦窯址出土の瓦類は前述したように、文様は単一で平瓦においては18型式に分類される。窯の床面堆積が一面である事、灰原が厚く形成されていない事などからみて比較的短期の操業時間が推定される。瓦の操業期間の問題を陳内廃寺に付属した陳内瓦窯址を例に上げ検討してみたい。陳内瓦窯址では窯内から3種の軒瓦（軒平瓦2種・軒丸瓦1種）が出土している外、灰原とみられる下方の池中から別の軒平瓦1種が採集されていて、陳内廃寺の創建期から窯の使用が始まり、建設後の補修瓦も作られたとされている。[27] 陳内廃寺の創建期を白鳳の終り、もしくは和銅頃と考え、補修瓦を奈良時代前期に比定する松本雅明氏の説に従うならば、陳内窯の操業年代はおおよそ30年～50年の長期の使用が推定されることになる。

瓦の操業年代の長短は瓦窯址の性格とも強い関連を有するとみられる。すなわち陳内瓦窯址にみるような有力官寺に付属する瓦窯（群）は「官窯」として長期に渡る使用がみられるのに対し、平原瓦窯のような短期間の操業は、この窯が緊急の需要に応じる為に作られた窯である事を示していると考える。

瓦当文様　平原瓦窯址出土の軒瓦は「老司式」に相応する。[28] 肥後における老司式の分布はわずかに陳内廃寺と玉名郡家址比定地である玉名市立願寺で[29]知られているのみであった。立願寺は軒丸瓦において老司式の要素を継続するが老司式の平瓦は作っていない。陳内廃寺では老司式軒瓦としては、軒丸瓦3亜種、軒平瓦1種の4種に分類された。[30] このうち軒丸瓦A＋軒平瓦の組合せは老司瓦窯址および大宰府周辺の老司式と差異はない。軒丸瓦のB・Cが老司式以外の軒平瓦と組合せにならないとすれば、やはりAと同様、老司式の古式のものと組合せになるとみるべきであろう。このことは肥後に於ける老司式軒丸瓦の変容が軒平瓦より大きかった事を示すばかりでなく、逆に軒平瓦に変容が生じない短期のちに軒平瓦の亜種が表われた事を示している。このことから平原瓦窯址出土の陳内廃寺軒丸瓦1種（老司式）Cと同型の軒丸瓦と軒平瓦の組合せは陳内廃寺の創建時からほど遠くない頃のものであるのが推定される。絶体年代については目下進行中の大宰府の発掘調査の結果が九州に於ける古瓦研究の時間尺を決する重要な事実を明らかにしていくであろうが、ここでは平原瓦窯址の年代を奈良時代の前半期、すなわち八世紀の前半と推定しておく。

6. ま　と　め

最後に肥後における古代の瓦生産を概説し2、3の問題点について言及しまとめとする。肥後の古代瓦窯址は15カ所が知られているが窯と窯の周辺部を発掘調査の対象としたのは今回の平原瓦窯址の調査が最初であった。知られている窯では前述の陳内瓦窯址が平原3号窯に最も構造上類似する(Tab. 11)。注目されるのは、実測図には記されていないが、焼成室の各段の中央部に小さな溝を有することである。段の端部だけの抉込みである点が平原瓦窯と異なるが、この様な例は肥後では他に知られていない。何らかの系譜上の関連を有すると考えられる。

肥後の瓦窯址のうち詳細不明の3カ所を除いて8カ所の窯からは須恵器の出土を見ている。このことは肥後に於いても瓦生産が在来の須恵器生産と深い繋がりを持つことを示している。[31] 古代の13郡のうち、阿蘇、天草、芦北、山鹿、菊池、合志（山本）の各郡には瓦窯址は知られていない（Tab.15)。瓦窯址の分布は単に立地条件の適合性のみがその要因ではない。粘土や燃料の入手条件の他に、各郡の持つ政治性が大きく作用していると考えられる。肥後の瓦窯の半数以上が益城・飽田・託麻郡などの国府所在地に集中しているのは、これ等の郡に所在した国府、国分寺、国分尼寺などの官衙の建設と強い関係を持つとみられる。小山窯の出土瓦が国分寺に供給されている事は知られているが、[32] 更に今後の調査によって生産地と供給地の関係を明らかにしていかねばならない。また瓦窯の多くが、古代官道近くに立地することも偶然ではない。平原瓦窯もその例に属する。大量の生産物の運搬に整備された道が必要であったのは、今日だけではなかったのである(Fig. 16)。

和名抄郡名	玉名	山鹿	菊池	阿蘇	合志	山本	飽田	託麻	益城	宇土	八代	天草	芦北	球磨
瓦　窯　数	2	—	—	—	—	—	1	3	7	—	1	—	—	1

Tab. 15　郡別古代瓦窯一覧表　　—は未発見地

註(1)　平城宮出土軒丸瓦についても、丸瓦の頂部がくる位置と瓦当の位置関係について検討がなされ、位置関係が一定の角度（0度　90度　180度）をもってずれていることから、笵台の平面形が正方形または長方形と推定されている。(森郁夫　「屋瓦」『平城宮発掘調査報告Ⅸ』　奈良国立文化財研究所学報　第34冊　1978　奈良)

(2)　林博通「いわゆる一本造あぶみ瓦について」『史想』第17号　京都教育大学考古学研究会　1975　京都

(3)　松本雅明「陳内廃寺」『城南町史』所収　1965　熊本

(4)　乙益重隆「浄水寺廃寺」『熊本県文化財調査報告　第三集』　1962　熊本

(5)　松本雅明「肥後の国分寺」『熊本市南部地区文化財調査報告書』所収　熊本市教育委員会　1975　熊本

(6)　田辺哲夫「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」『熊本史学』　第10号　1956

(7)　山本通「天台寺趾調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯　1932　福岡

(8)　浦林亮次「瓦の歴史」『建築史研究』28号　1960

(9)　佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号　1972　東京

(10)　註(9)を参照

(11)　奈良朝の託麻郡寺に比定されている。熊本市教育委員会「熊本市東部地区文化財調査報告書」1971　熊本

(12) 熊本市博物館保管の遺物を東光彦氏の御好意により実見した。

(13) 陳内瓦窯と富合町平原瓦窯については、「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」(熊本県文化財調査報告　第49集)に概要が掲載されているので参照されたい。

(14) 城南町教育委員会「城南町史」　1963　熊本

(15) 豊後国分寺跡には叩きしめの円弧がBに属する3種の平瓦があり、一枚作りの可能性の高い平瓦と考えられている。(大分市教育委員会「豊後国分寺跡」　1979　大分)

(16) 藤原京跡においても叩きしめの円弧がBに属し、凹面に凸型台圧痕を留める平瓦資料があり、桶巻作り平瓦を分割後に凸型台上に置き、再度叩きしめたものと考えられている。(奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」　1978　奈良)

(17) 熊本市博物館保管の遺物で、東光彦氏の御教示によるものである。

(18) 九州歴史資料館「大宰府史跡」昭和54年度発掘調査概要　1980　福岡

(19) 国士館大学文学部考古学研究室「瓦屋根瓦窯跡」　1969　東京

(20) 桶は一般に截頭円錐形をなすため、これに巻きつけられる輪状の布は、綴じ合せ目を境にして、一方は綴じ合せ目に直交平行の経緯であるのに対して、片側では斜交する経緯となる。

(21) 前掲(9)を参照

(22) 江上敏勝「熊本県八代地方における古代中世の寺院址」『歴史考古』第15号　1967

(23) 松本雅明「興善寺廃寺調査」『熊本県の文化財』所収　1961　なお九州自動車道建設に伴い寺院の北側の発掘調査が行われ、多くの屋瓦類が出土した。その資料について検討を行ったが平原瓦窯製品はみられなかった。

(24) 前掲(3)を参照

(25) この検討については、城南町教育委員会徳本明氏、熊本大学甲元眞之氏の協力を得て熊本大学考古学研究室保管の分および城南町教育委員会所蔵の全資料との対比を行ったが、類品は見出さなかった。

(27) 松本雅明「古代（瓦・須恵器）」『城南町史』　1965　熊本

(28) 小田富士雄「大宰府系古瓦の展開」『九州考古学研究（歴史時代篇）』所収　小学館　1977

(29) 前掲(6)を参照

(30) (3)と同じ

(31) 三島格「須恵器の窯址」『須恵器の窯址・小代焼と二川焼』　1966

(32) 三島格「楳谷寺・神園山瓦窯址」『熊本市東部地区文化財調査報告書』　1973

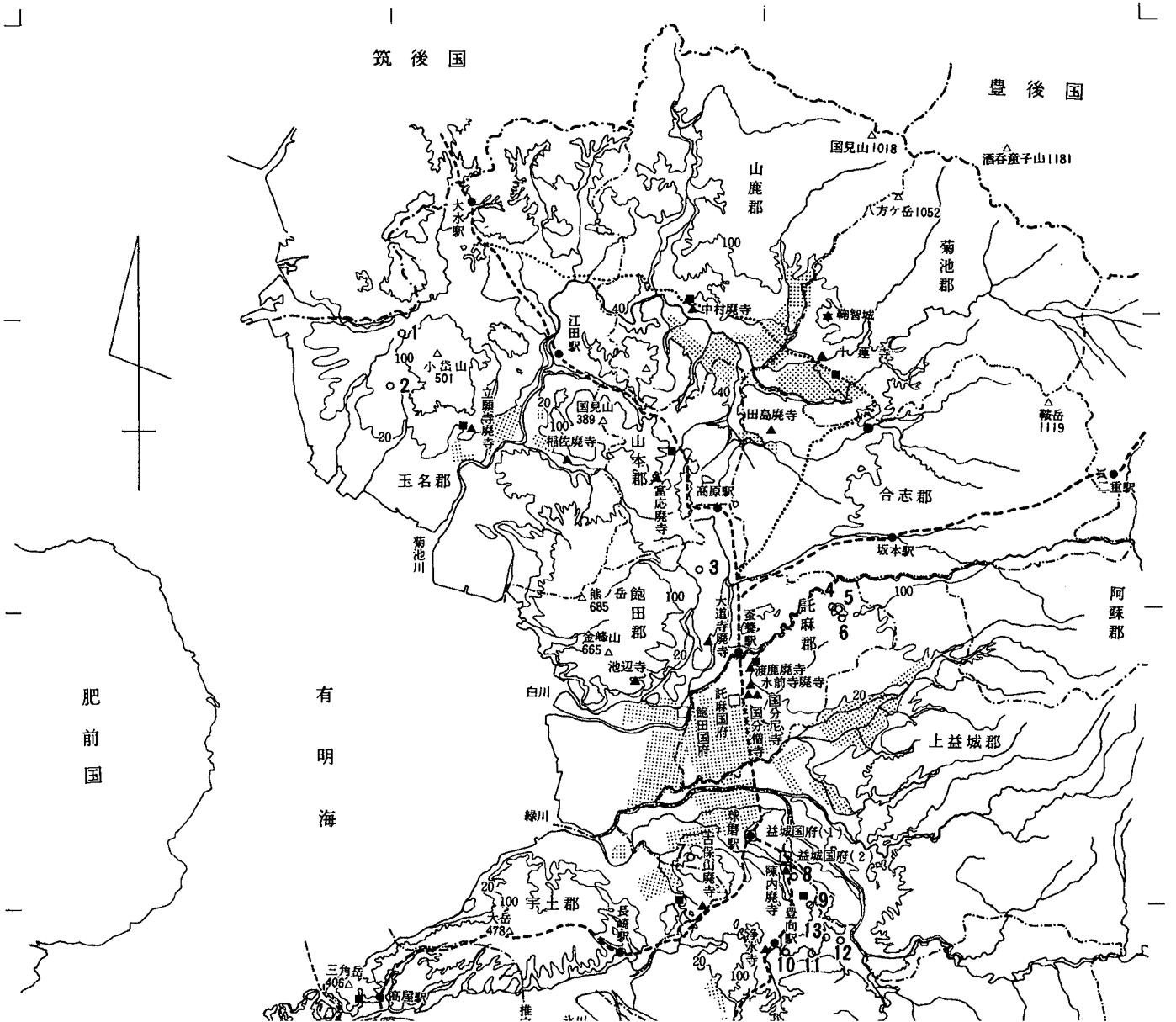
Tab. 6～8の石材・色調の記号説明

石材	C　チャート	Sh　頁岩	A　安山岩	O　黒曜石
	S　サヌカイト	R　流紋岩		
色調	Ly　浅黄	R　赤	OG　オリーブ灰	B　黒
	G　灰	BG　青灰	DBG　暗青灰	DG　暗灰
	LOG　明オリーブ灰	Oy　オリーブ黄	GC　灰オリーブ	LG　緑黒
	LGG　明緑灰			

番号	遺跡名	所在地 ( )内は古代郡郷名	基数・構造	出土品	時期・供給先	文献
1	十蓮寺遺跡	荒尾市大字平山字小路 (玉名郡)				
2	番丈窯跡	荒尾市大字樺字下横打 (玉名郡)		連珠文軒平瓦 平瓦・丸瓦 須恵器 瓦器		熊本日日新聞社『熊本の歴史・2』1959
3	田畑窯跡	鮑託郡北部町大字下硯川字田畑・小園通称鹿次郎谷 (鮑田郡)	2基			
4	神園山窯跡	熊本市長嶺町神園 (託麻郡波良郷？)	2基 地下式無階無段登窯(1号)	平瓦・丸瓦		熊本市教委『熊本市東部地区文化財調査報告書』1971
5	中山窯跡	熊本市小山町中山諏訪神社近く (同上)	2基	平瓦・丸瓦		同上
6	小山窯跡 (楳谷寺窯跡)	熊本市小山町字上ノ山 (同上)	1基 半地下式無階無段平窯	平瓦・丸瓦 少量の須恵器	8世紀中頃 国分寺	同上
7	平原窯跡	下益城郡富合町大字平原字本庄 (益城または宇土郡)	3基 地下式登窯 3号は有階無段	平瓦・丸瓦 須恵器	8世紀前半 陳内廃寺	城南町教委『城南町史』1965
8	陳内窯跡	下益城郡城南町大字陳内字本村 (益城郡)	1基 地下式有階有段登窯	軒平瓦 平瓦・丸瓦 須恵器	古保山廃寺か	同上
9	東亀山窯跡	下益城郡城南町大字鰐瀬字東亀山 (益城郡)			大明神遺跡(益城郡家想定地)	同上
10	八ノ瀬戸窯跡	下益城郡豊野村大字八ノ瀬戸・巣林 (益城郡当麻郷)	1号窯は地下式無階有段登窯で瓦窯 2号窯は須恵器窯	平瓦・丸瓦 (鬼瓦・軒平瓦を近くで採集)	奈良後期～平安初期 浄水寺・池辺寺	同上
11	峰尾原窯跡	下益城郡豊野村大字上巣林字峰尾原 (益城郡当麻郷)	土砂くずれにより埋没し、不明	布目瓦 須恵器	奈良後期～平安初期	同上
12	西山・陣ノ平窯跡	下益城郡中央町大字大沢水字西山 (益城郡当麻郷？)	3基余 有段登窯	布目瓦 須恵器	奈良後期～平安初期	同上
13	西山窯跡	下益城郡中央町大字大沢水字西山 (同上)	数基	布目瓦 須恵器 瓦器 土師器		同上
14	平原瓦窯跡	八代郡宮原町 (八代郡肥伊郷)	3基	軒瓦・平瓦 丸瓦 土師器	8世紀前半 陳内廃寺	本報告書
15	高山窯跡	球磨郡深田村深田桃木(球磨郡球玖郷)		軒平瓦 平瓦	勝福寺か	

Tab. 16　熊本県古代瓦窯址地名表

※なお番号はFig.16と対応する。
松本雅明・三島　格・緒方　勉・上野辰男・松本健郎諸氏の教示に依る。


筑後国
豊後国
肥前国
有明海
山鹿郡
菊池郡
玉名郡
山本郡
合志郡
飽田郡
託麻郡
阿蘇郡
上益城郡
宇土郡
国見山1018
酒呑童子山1181
八方ケ岳1052
大水駅
江田駅
中村廃寺
鞠智城
十蓮
小岱山501
立願寺廃寺
国見山389
稲佐廃寺
田島廃寺
鞍岳1119
二重駅
高原駅
富応廃寺
坂本駅
菊池川
熊岳685
金峰山665
池辺寺
大道寺廃寺
蚕養駅
渡鹿廃寺
水前寺廃寺
国分尼寺
国分僧寺
託麻国府
飽田国府
白川
緑川
益城国府(1)
益城国府(2)
古保山廃寺
陳内廃寺
豊向駅
浄水寺
長崎駅
大岳478
三角岳406
高屋駅
推

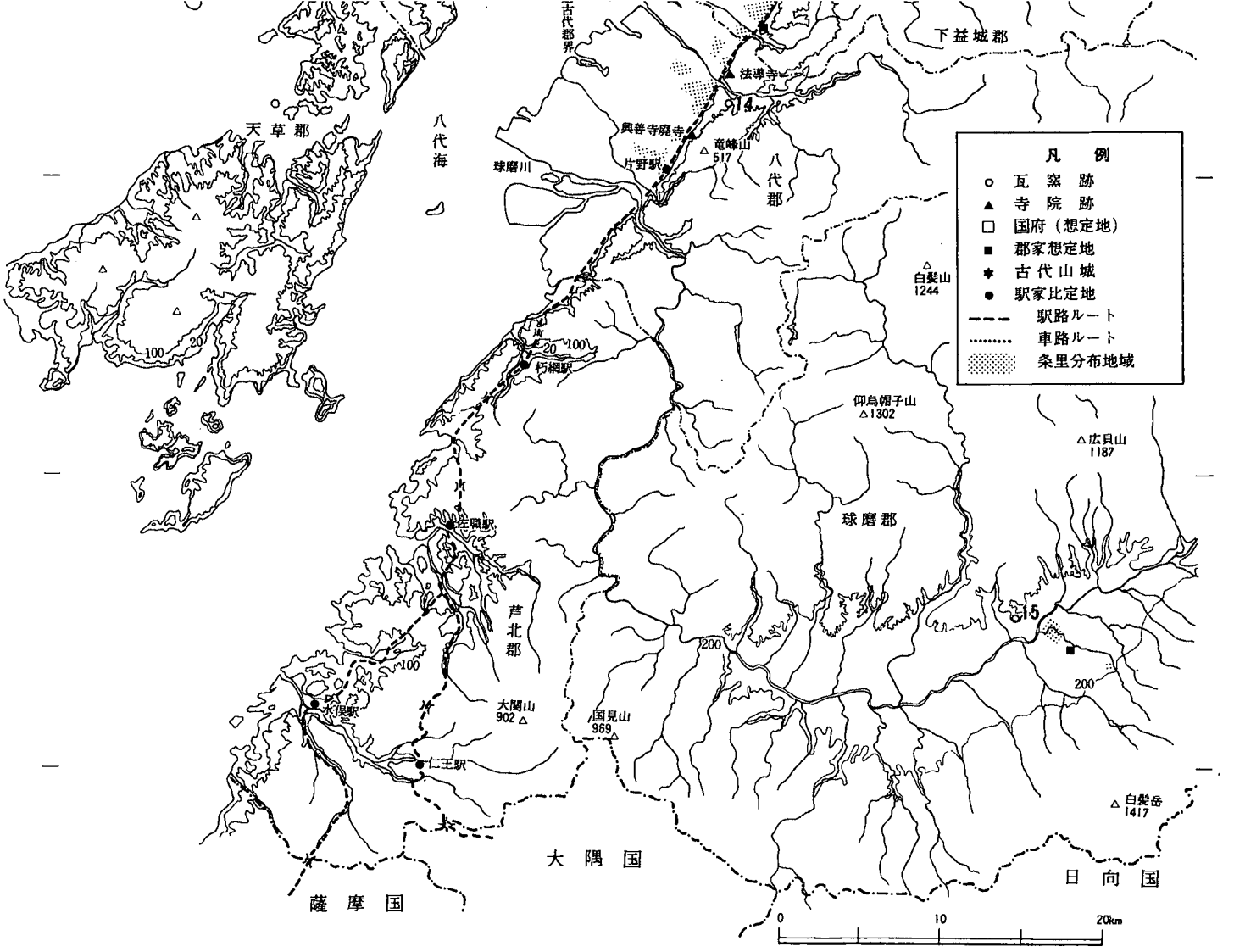
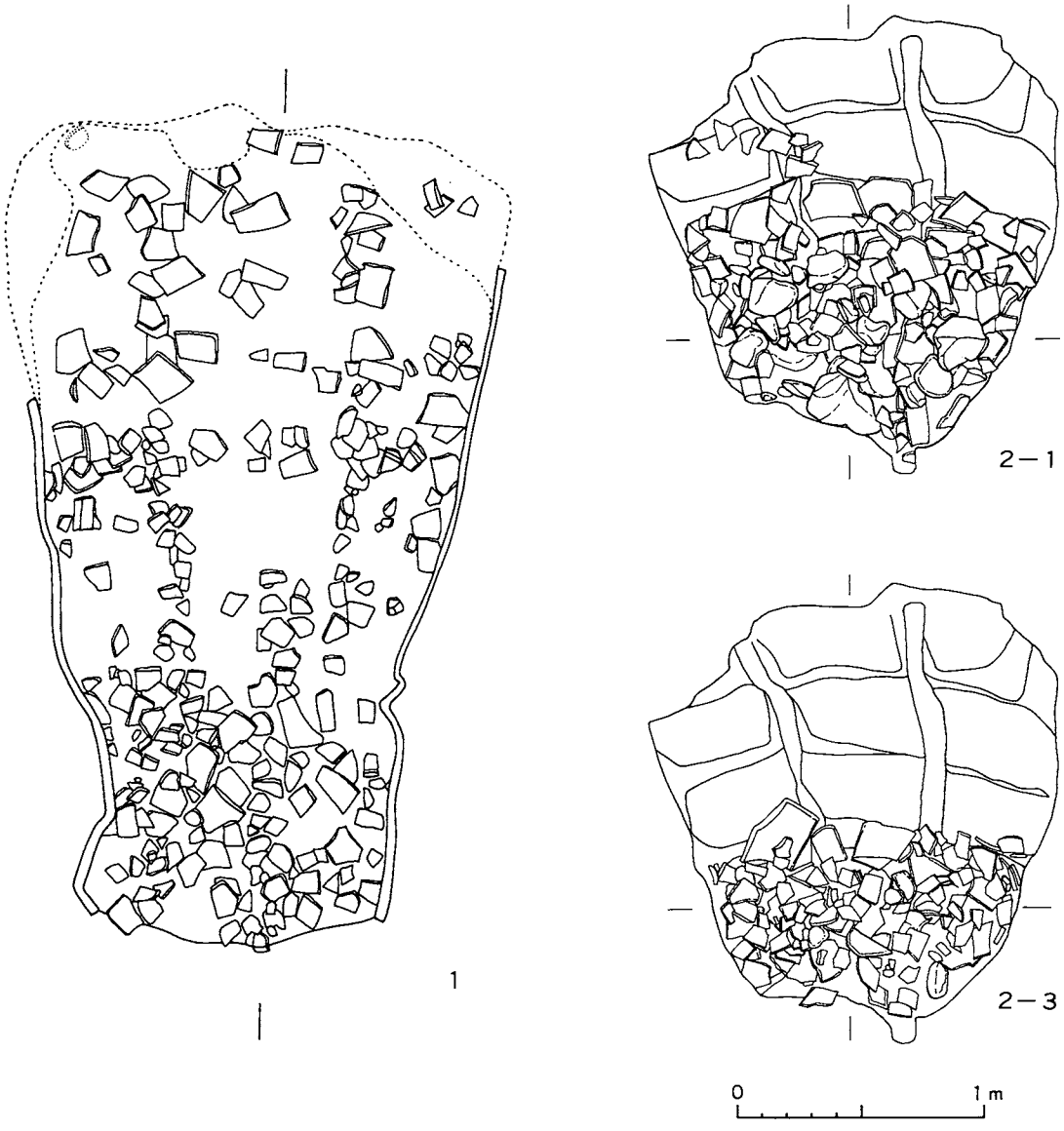
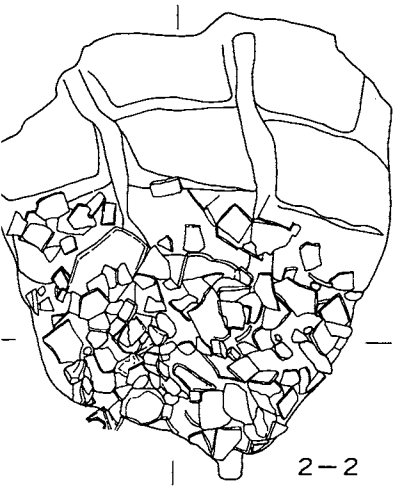


Fig. 16　熊本県古代瓦窯址分布図

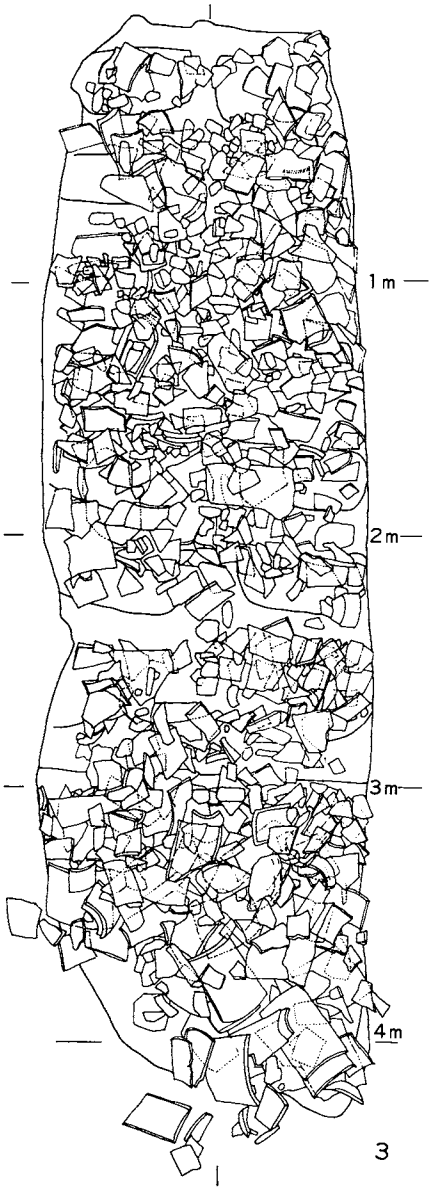
PLAN 1　1～3号窯瓦出土状況





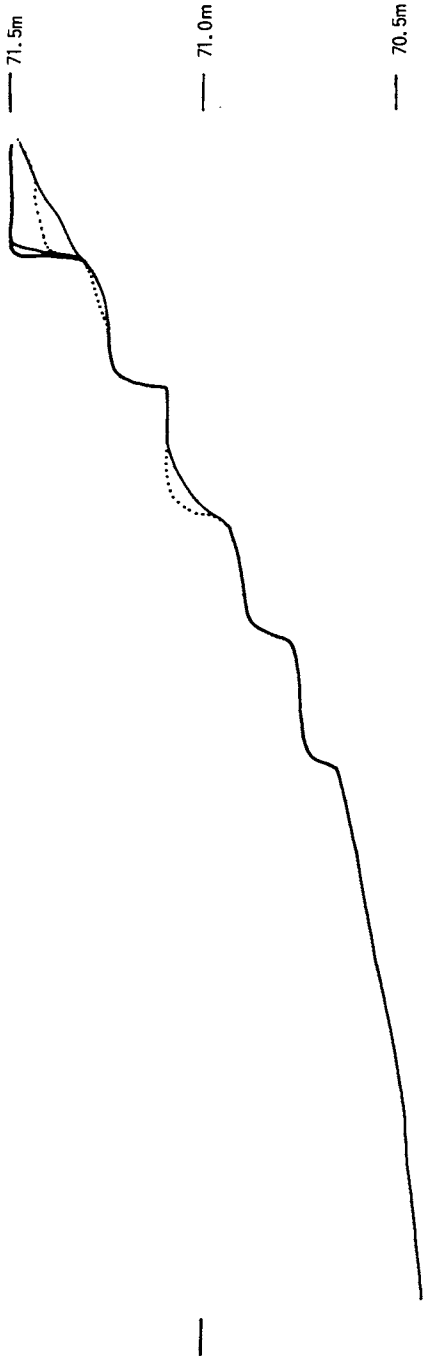
2－2

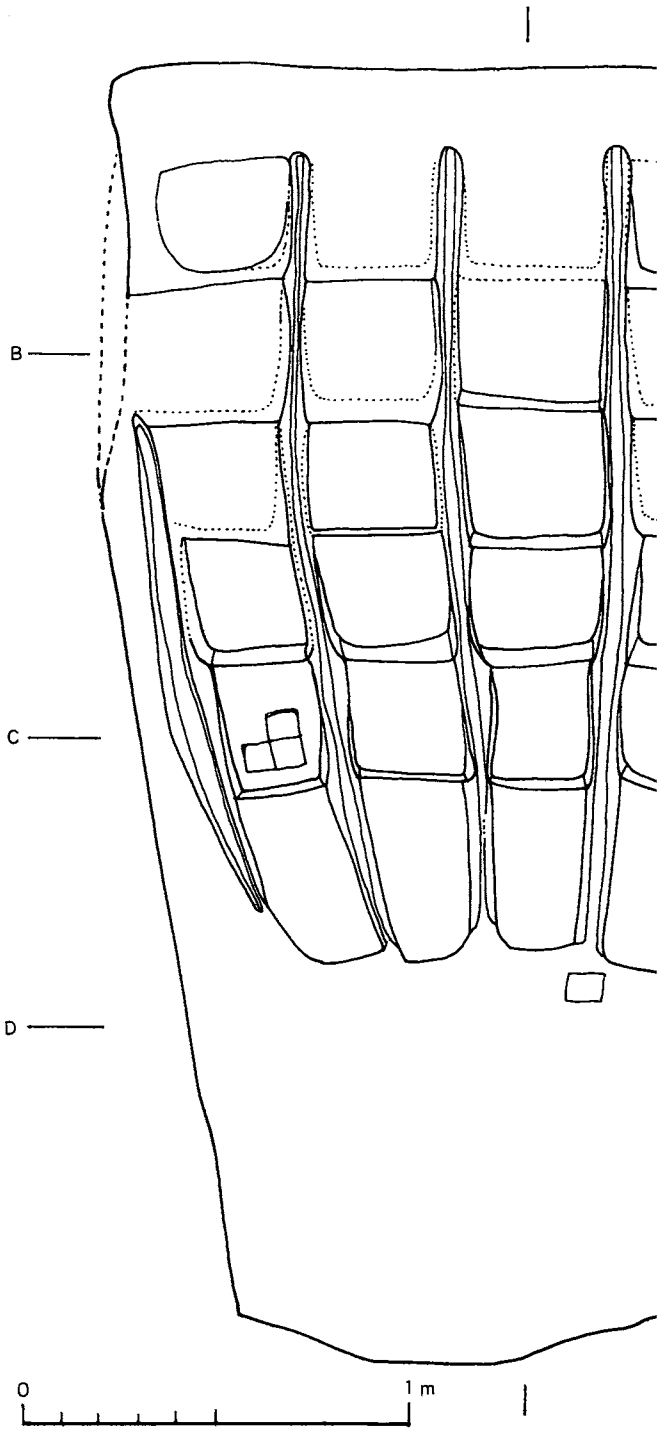
2－4

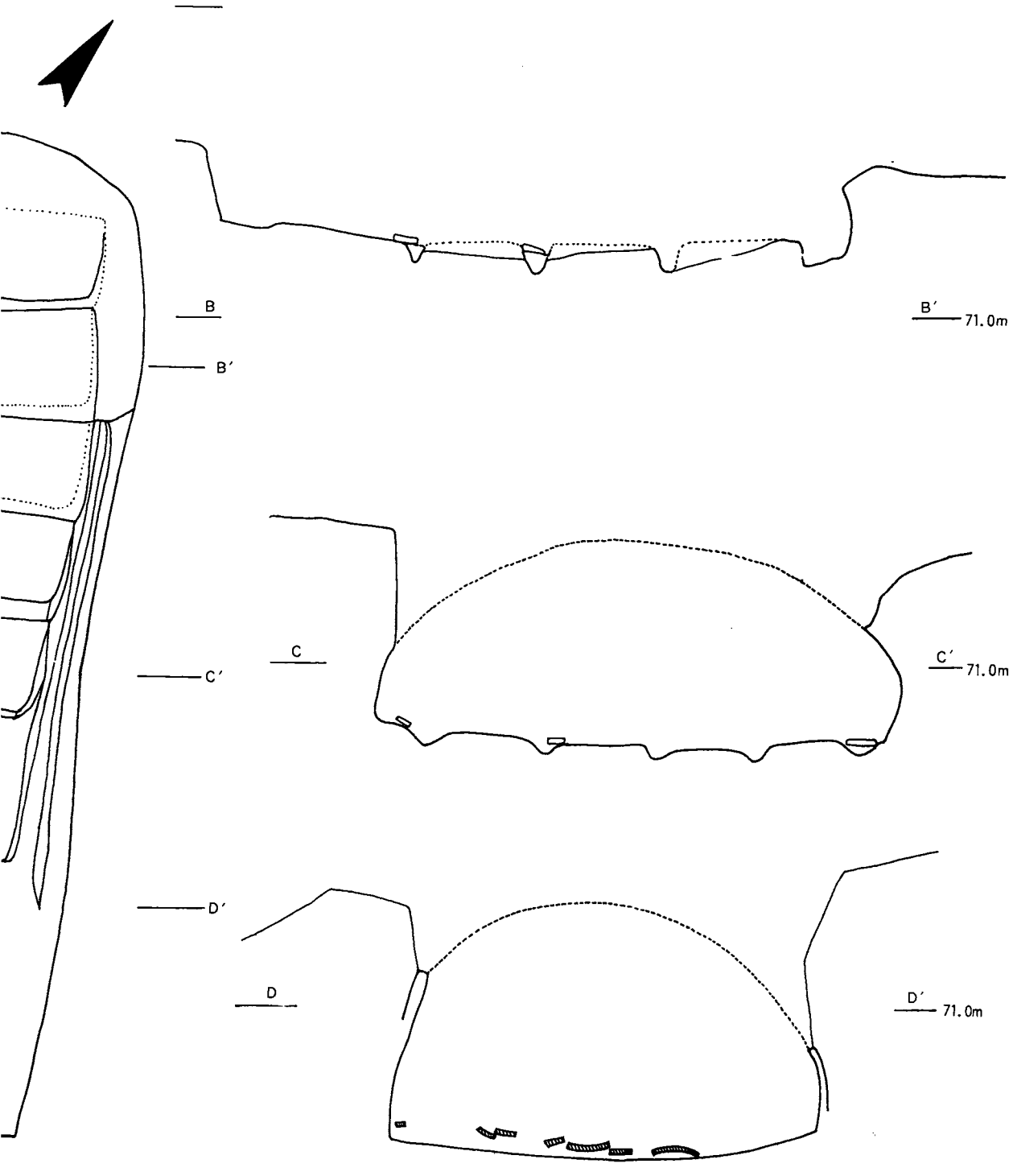


3

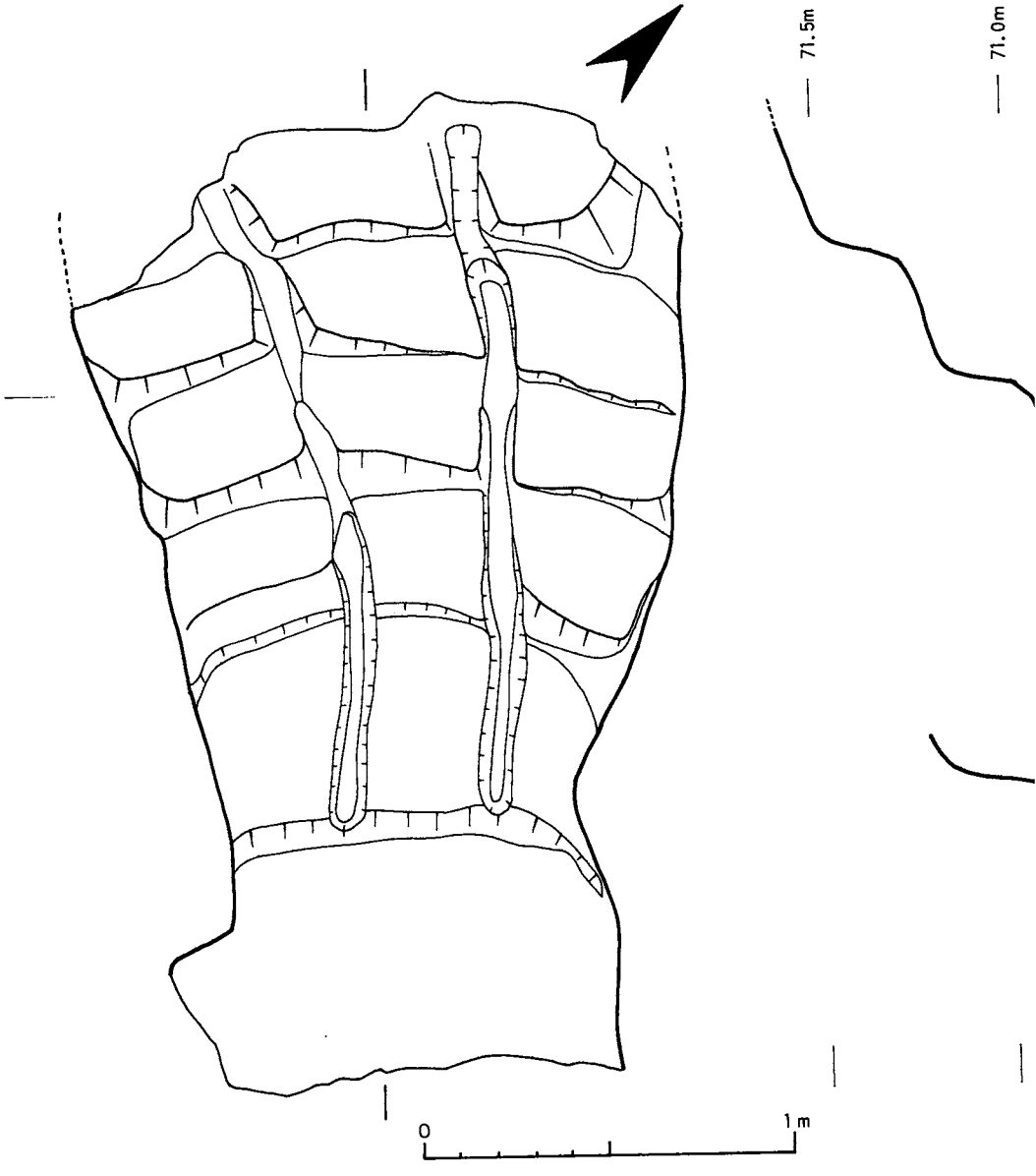
PLAN 2 1号窯平面図・断面図

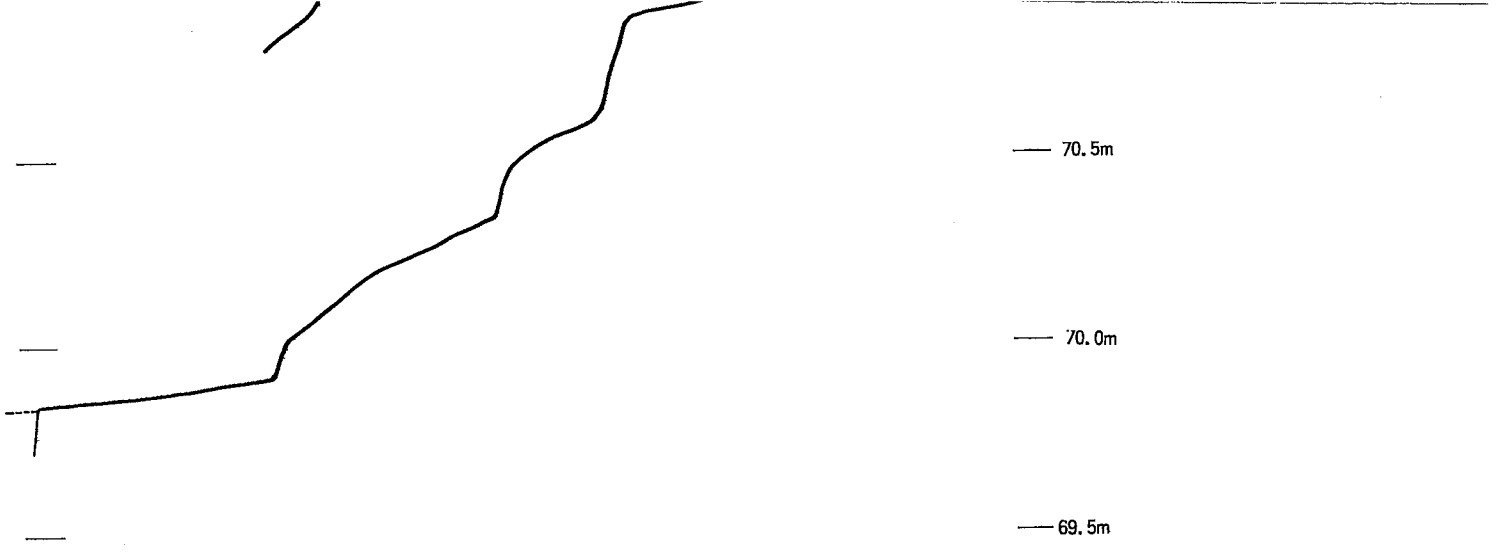




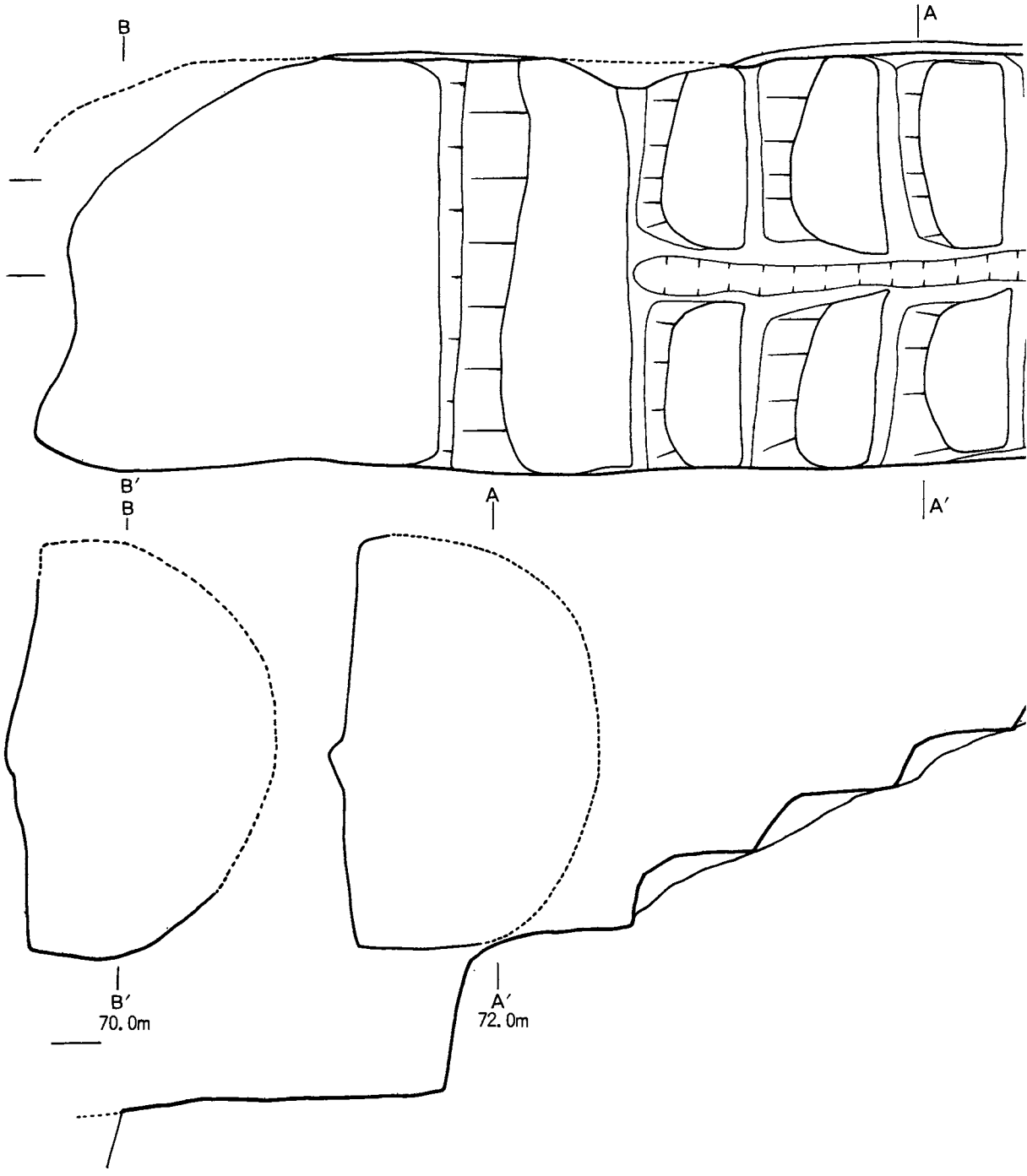

B
B′
B′
71.0m
C
C′
C′
71.0m
D
D′
D′
71.0m

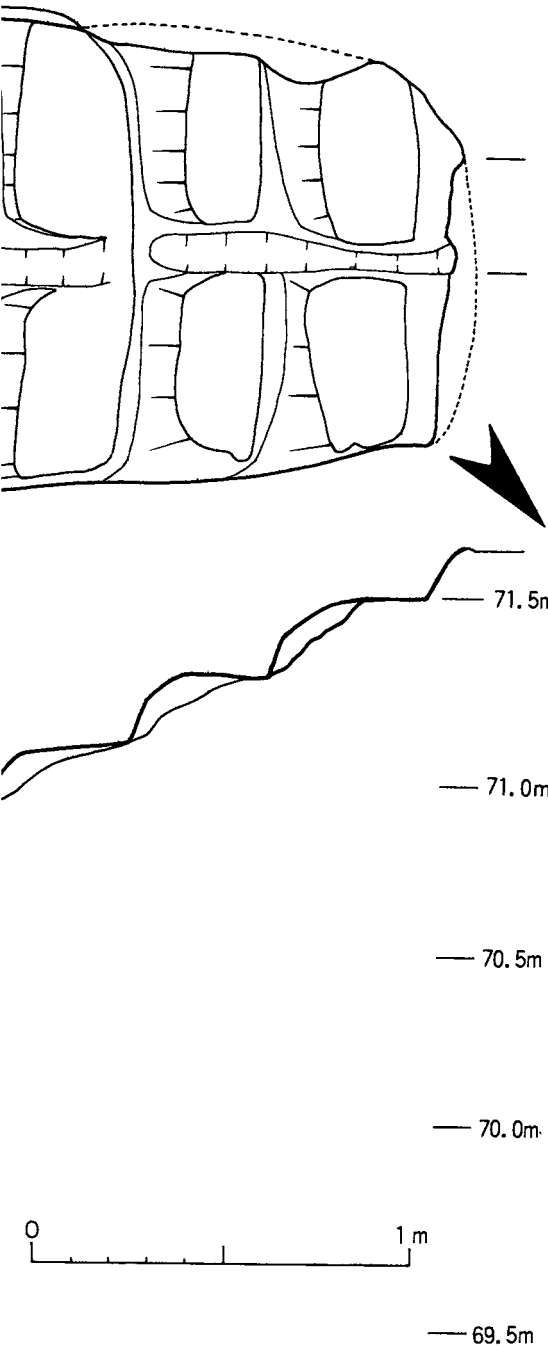
PLAN 3　2号窯平面図・断面図




70.5m
70.0m
69.5m

PLAN 4　3号窯平面図・断面図




71.5m
71.0m
70.5m
70.0m
0
1m
69.5m

別　表

1　平瓦各型式の製作技法一覧表

2　丸瓦観察表

3　平瓦観察表

4　八代郡郷比定一覧表

別表1　平瓦各型式の製作技法一覧表

型式	寸法 (mm)	第1次成形技法	第2次成形技法(叩き目)	叩きしめの順序と方向	凸面調整	側面調整	広端両隅の切除	布の綴じ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
A	全長 303 広端幅 223 狭端幅 213	粘土紐 巻きつけ	木目直交・平行の格子目	広端→狭端 まれに狭端→広端 左回り 円弧A	無し	b・e	無し	有り	無し、または一部ないし全面を指頭によるナデ	精良	不良 ないしはやや不良	黄褐色 にぶい赤褐色	灰原から出土せず
B	全長 350 広端幅 247 狭端幅 240	〃	〃	円弧B	無し または、一部をナデ	b・e	有り	〃	無し	〃	堅緻	青灰色 灰色	軒平瓦a技法に使用される 凹面に凸型台の圧痕あり
C	全長 430 広端幅 293 狭端幅 278	〃	〃	広端→狭端 右回り 円弧A	無し、または側縁2～3cmをタテナデ	b・d	無し	〃	無し、まれに一部をタテ方向にナデる。	砂質	良好	褐色 赤褐色	布目の疎密があるものが多い
D	全長 329 幅 258	〃	〃	広端→狭端 右回り	無し、または一部を左方向にナデる。	b・d・e	有り	無し	無し	精良	やや不良→ 堅緻→	赤褐色 黄褐色 青灰色 灰色	分割界線のみられるものあり
E	不明	〃	不明	円弧A	無し	b	無し	〃	〃	砂質	良好	にぶい褐色 暗褐色	
F	〃	〃	木目直交・平行の格子目	広端→狭端 右回り 円弧A	無し、または側縁と広端縁を2～3cm幅でナデる。	d・e	〃	有り	無し、まれに数条の指頭によるタテ方向のナデ	やや砂質	〃	にぶい褐色 にぶい赤褐色	
G	広端幅 245～264 狭端幅 240	〃	木目に直交する左撚りの太めの縄目	円弧B	無し、または一部をナデる	b・e	有り	無し	無し、まれに一部をナデる	精良と やや砂質	堅緻 やや不良	青灰色 灰色 黄褐色	凹面に凸型台の圧痕あり
H	狭端幅 250	〃	左撚りの細めの縄目	不明	〃	b・d	〃	〃	〃	精良	やや不良	にぶい褐色 赤褐色	
I	全長 356 広端幅 285	〃	木目直交・平行の格子目	広端→狭端 右回り 円弧A	ヨコナデ	b	〃	有り	無し	砂質と やや砂質	〃	黄褐色 赤褐色	分割界線あり 狭端隅を切除したとみられるものあり

1—(1)

型式	寸法 (mm)	第1次成形技法	第2次成形技法(叩き目)	叩きしめの順序と方向	凸面調整	側面調整	広端両隅の切除	布の綴じ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
J	不明	不明	IとHの叩き目	I→H	無し	b	広端部の資料がないため不明	無し	無し、または一部をナデる	精良	やや不良	にぶい褐色 にぶい赤褐色	
K	幅 248	粘土紐巻きつけ	木目直交・平行の格子目	円弧A	一部をナデる	b・c・d	無し	〃	無し	精良と砂質	堅緻 やや不良	青灰色 暗灰色 褐色	
L	不明	〃	KとDの叩き目	K→D	ナデ	d	広端部の資料がないため不明	有り	〃	精良	堅緻	暗灰色	
M	〃	不明	KとGの叩き目	K→G	無し	側面部の資料がないため不明	〃	無し	〃	〃	〃	灰色	
N	〃	粘土紐巻きつけ	木目直交・平行の格子目	狭端→広端 円弧A	ナデ	d	〃	〃	〃	精良 砂質	堅緻 良好	青灰色 にぶい赤褐色 褐色	
O	〃	〃	木目斜交の斜格子目	右回り	〃	c	有り	〃	〃	砂質	良好	赤褐色	
P	〃	不明	木目直交・平行の格子目	C→P	側縁を2cm幅でナデる	d	広端部の資料がないため不明	有り	〃	〃	〃	にぶい赤褐色 暗褐色	
Q	〃	〃	〃	不明	無し	b	〃	〃	〃	〃	〃	灰色 赤褐色	
X	〃	粘土紐巻きつけ	不明	〃	全面を左方向にヨコナデ	b	無し	無し	〃	〃	〃	黄褐色	

別表2　丸瓦観察表

	寸法(mm) 全長×幅	第1次 成形技法	凸面の 調整手法	側面 調整	布目の 経緯本数	布の綴じ 合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
M_1a-1		不明	横ナデ	b	19×22	無	無	砂質 小石含む	良好	褐色	
2		粘土紐	〃	d	16×?	〃	〃	〃	〃	〃	
M_1b-1		不明	〃	b	22×14	〃	〃	やや砂質	〃	暗褐色	
2		不明	〃	a	22×28	〃	〃	〃	〃	赤褐色	側面の凹面側に破面あり
3		粘土紐	〃	〃	30×17	〃	〃	〃	〃	褐色	〃
4		不明	〃	b	不明	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
5		粘土紐	〃	〃	31×21	〃	〃	〃	〃	褐色	
6		不明	〃	〃	18×24	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
M_2a-1	?×134	粘土紐	横ナデ	b	30×30	無	無	やや砂質 小石含む	良好	褐色	玉縁の凹面を面取りする
2	?×139	〃	〃	〃	27×23	〃	〃	やや砂質	〃	〃	
3		〃	〃	—	23×38	〃	〃	精良	堅緻	青灰色	
4		〃	〃	b	24×20	〃	〃	〃 小石含む	良好	赤褐色	
5		〃	〃	e	25×25	〃	〃	砂質 小石含む	〃	暗褐色	
6		〃	〃	b	29×29	〃	〃	精良	堅緻	青灰色	
M_2b-1	?×167 以上	不明	〃	c	29×20	〃	布の皺による指頭による凹線を布目によってナデる	やや砂質	良好	にぶい赤褐色	側面の凹面側に破面あり
2		粘土紐	〃	〃	32×21	〃	無	〃	堅緻	青灰色	〃
3		〃	〃	b	31×21	〃	〃	〃	良好	にぶい赤褐色	
M_3a-1	292×165	粘土紐	横ナデ	e	23×20	有	無	精良	不良	にぶい赤褐色	
2	295×169	〃	ヘラ削り ↓ 横ナデ	〃	18×15	〃	〃	〃	〃	〃	
3	?×165	〃	横ナデ	〃	23×24	〃	指頭によるタテ方向ナデ	〃	〃	〃	
4		不明	〃	〃	17×17	〃	無	〃	〃	〃	
5		粘土紐	〃	c	20×18	〃	〃	〃	〃	〃	
6		〃	〃	e	21×25	無	〃	〃	〃	〃	
7	315×170	〃	〃	〃	16×16	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	〃	〃	18×16	〃	〃	〃	〃	〃	
9		〃	〃	〃	40×42	〃	〃	〃	〃	〃	側面の凸面側に破面あり
M_3b-1	289×146	粘土紐	不明	b	15×17	〃	〃	〃	やや不良	灰褐色	
2	?×135 以上	〃	横ナデ	e	24×25	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
3	282×148	〃	〃	b	18×20	〃	〃	〃	〃	〃	凹面中央に横方向の段がある
4	?×145	不明	〃	〃	22×24	〃	〃	〃	〃	明褐色	
5		粘土紐	〃	e	29×21	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	側面の凸面側に破面が残る

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
1号窯														
H_1a-1	(278) (430)×293	不明	Ⅰ	叩きしめの円弧A 広→狭　左回り	側縁をタテナデ	d	無	12×17	無	無	砂質	良好	にぶい褐色	r＝186㎜ ＜95°
2		〃	Ⅳ	叩きしめの円弧A 広→狭	無	b	—	31×29	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
3		〃	Ⅰ	不明	側縁をタテナデ	〃	無	15×19	〃	〃	〃	〃	褐色	
4		〃	〃	〃	〃	〃	〃	17×16	〃	〃	〃	〃	〃	
5		〃	〃	〃	〃	d	〃	20×20	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色	
6		〃	〃	〃	〃	〃	〃	不明	〃	〃	〃	〃	〃	
7		〃	〃	〃	〃	b	〃	29×29	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	〃	〃	無	〃	〃	不明	〃	タテナデ	〃	〃	〃	
9		粘土紐	Ⅳ	〃	側縁をタテナデ	〃	—	16×23	〃	無	〃	〃	〃	
10		不明	〃	〃	—	〃	—	30×32	〃	〃	〃	〃	〃	
11		〃	Ⅰ	〃	側縁をタテナデ	d	—	12×17	〃	〃	〃	〃	明褐色	ヨコ糸の疎密がある
12		〃	〃	〃	〃	〃	—	13×20	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色	〃
13		粘土紐	〃	〃	無	〃	—	11×？	〃	〃	〃	〃	〃	〃
14		不明	Ⅳ	〃	側縁をタテナデ	〃	—	17×15	〃	〃	〃	〃	〃	
15		粘土紐	〃	〃	側・端縁部をナデ	〃	—	21×18	〃	〃	〃	〃	〃	
16		不明	〃	〃	側縁をタテナデ	〃	—	21×16	〃	〃	〃	〃	〃	
17		〃	〃	〃	無	〃	—	13×20	〃	〃	〃	〃	〃	ヨコ糸の疎密がある
18		〃	〃	〃	側縁をタテナデ	〃	—	12×19	〃	〃	〃	〃	〃	〃
H_1b-1		〃	〃	〃	無	b	—	21×19	〃	〃	〃	〃	〃	
2		〃	〃	〃	〃	〃	—	20×15	〃	〃	〃	〃	〃	
3		〃	〃	〃	〃	〃	—	16×19	〃	〃	〃	〃	明褐色	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
4		不明	Ⅳ	不明	無	b	—	18×17	無	無	砂質	良好	にぶい褐色	
5		粘土紐	〃	〃	〃	〃	—	19×19	〃	〃	〃	〃	暗黒褐色	
6		不明	〃	〃	〃	〃	—	不明	〃	〃	〃	〃	〃	
7		粘土紐	〃	〃	〃	〃	—	17×17	〃	〃	〃	〃	明褐色	
8		〃	〃	〃	〃	〃	—	17×21	〃	〃	〃	〃	黒褐色	
9		〃	〃	〃	〃	—	—	17×19	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色	
10		〃	〃	〃	〃	b	—	18×21	〃	〃	〃	〃	黒褐色	側面に指頭圧痕あり
H_1c-1		〃	〃	〃	〃	d	—	20×17	有	〃	〃	やや不良	にぶい褐色	
2		〃	〃	〃	〃	—	—	12×？	無	1条のタテナデ	〃	〃	暗褐色	ヨコ糸の乱れが激しい
3		〃	Ⅰ	〃	〃	d	—	22×21	〃	無	やや砂質	〃	にぶい赤褐色	
4		不明	Ⅳ	〃	側縁をタテナデ	〃	—	14×18	〃	1条のタテナデ	砂質	〃	暗～明褐色	
5		粘土紐	Ⅰ	〃	無	〃	無	20×17	〃	無	〃	良好	にぶい赤褐色	
6		〃	〃	叩きしめの円弧A 広→狭　左回り	広端縁をナデ	〃	〃	19×19	〃	指頭によるタテナデ(5条)	〃	〃	〃	
7		不明	Ⅳ	不明	広端縁をナデ	〃	—	17×21	〃	無	やや砂質	やや不良	〃	
8		粘土紐	Ⅰ	〃	無	〃	—	19×19	〃	〃	砂質	〃	〃	
9		〃	Ⅳ	〃	〃	〃	—	14×18	〃	〃	〃	〃	〃	
10		〃	Ⅰ	〃	広端縁をナデ	〃	—	19×19	〃	〃	やや砂質	良好	〃	H_4e-1と接合
11		不明	〃	広→狭	無	〃	—	20×17	〃	タテナデ（5条）	砂質	やや不良	赤褐色	
H_1d-1		〃	Ⅳ	不明	〃	—	—	23×24	〃	無	やや砂質	〃	にぶい赤褐色	
2		粘土紐	Ⅰ	〃	一部ナデ	d	無	25×22	〃	〃	〃	〃	〃	
3		不明	Ⅳ	〃	無	〃	—	19×22	〃	〃	精良	〃	〃	
4		〃	〃	〃	〃	—	—	18×16	〃	〃	砂質	〃	〃	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
5		不明	Ⅳ	不明	無	—	—	23×21	無	無	精良	やや不良	黒褐色	
6		〃	〃	〃	〃	—	—	不明	〃	〃	〃	〃	褐色	
7		〃	〃	〃	〃	d	—	18×？	〃	〃	砂質	〃	黒褐色	
8		〃	〃	〃	〃	—	—	22×21	〃	〃	精良	〃	にぶい褐色	
H_1e-1		〃	〃	〃	—	—	—	18×20	〃	〃	砂質	良好	黒褐色	
2		〃	〃	〃	側縁をタテナデ	d	—	20×18	〃	〃	〃	〃	〃	
3		〃	Ⅰ	〃	〃	〃	—	19×18	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
H_1f-1	— ×227	粘土紐	Ⅳ	叩きしめの円弧Aか	無	c	無	29×26	〃	〃	〃	〃	青灰色	歪がある
2 号 窯														
H_2a-1	(240) 350×247	粘土紐	Ⅰ	叩きしめの円弧B	無	e	有	24×29	無	無	精良(白色砂粒含む)	堅緻	青灰色	凹面に突起・段がある r＝143㎜ ＜102°
2	—×(240)	〃	Ⅳ	〃	〃	〃	〃	24×33	〃	〃	〃	〃	〃	凹面に突起がある r＝148㎜ ＜94°
3		〃	〃	〃	ナデ	〃	〃	23×30	〃	〃	〃	〃	〃	凸型台圧痕
4	— ×248	〃	〃	不明	無	〃	〃	27×27	〃	〃	〃	〃	〃	凸型台圧痕 r＝155㎜ ＜90°
5		〃	〃	叩きしめの円弧B	ナデ	〃	〃	25×32	〃	〃	〃	〃	〃	分割突帯痕(深さ3㎜) 突起・側縁に段がある
6		〃	〃	〃	無	〃	〃	24×33	〃	〃	〃	〃	〃	凸型台圧痕あり
7		不明	〃	〃	〃	〃	〃	23×27	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8		粘土紐	〃	不明	〃	b	—	不明	〃	不明	〃	〃	〃	〃 突起あり
9		〃	Ⅰ	〃	ナデ	e	—	22×31	〃	無	〃	〃	〃	凹面側縁に段がある
10		〃	Ⅳ	〃	無	〃	—	22×27	〃	〃	〃	〃	〃	凹面側縁の段、突起あり
11		不明	〃	〃	〃	—	—	24×30	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃
12		粘土紐	〃	〃	ナデ	e	—	24×30	〃	〃	〃	〃	〃	
13		〃	〃	叩きしめの円弧B	側縁をナデ	〃	—	24×30	有	〃	〃	〃	〃	

叩き目による分類	寸　法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎　土	焼　成	色　調	備　考
14		粒土紐	Ⅳ	叩きしめの円弧B	側縁をナデ	e	有	23×25	無	無	精良(白色砂粒含む)	堅　緻	青灰色	
15		〃	〃	不　明	〃	b	—	23×29	有	〃	〃	〃	〃	
H_2b-1	— × 257/—	〃	〃	広→狭　右回り	無	e	—	24×28	無	〃	〃	やや不良	褐　色	r＝148mm　＜102°
2	— × —/244	〃	〃	〃	〃	b	有	24×26	〃	〃	〃	〃	赤褐色	r＝142mm　＜98°
3		〃	〃	不　明	〃	d・b	〃	18×25	〃	〃	〃	堅　緻	青灰色	歪みあり
4		粘土紐	〃	広→狭　右回り	〃	e	—	28×19	〃	〃	〃	やや不良	赤褐色	
5		〃	〃	不　明	〃	b	—	24×27	〃	〃	精　良	〃	黄灰色	
6		〃	〃	〃	〃	e	有	25×28	〃	〃	〃	〃	明褐色	
7		〃	〃	〃	一部ナデ	b	〃	24×28	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	Ⅰ	〃	ナデ	〃	—	26×28	〃	〃	〃	〃	〃	
9		〃	Ⅳ	〃	〃	e	—	22×20	〃	〃	〃	〃	〃	
10		〃	〃	〃	無	b	—	不　明	〃	〃	〃	堅　緻	青灰～明褐色	
11		〃	〃	〃	〃	d	—	17×21	〃	〃	〃	〃	青灰～明褐色	歪みあり
12		〃	〃	〃	ナデ	—	—	24×28	〃	〃	〃	〃	〃	
H_2c-1	213/303×223	〃	Ⅰ	叩きしめの円弧A 広→狭　左回り	〃	d・e	無	16×16	—	全面タテナデ	〃	やや不良	赤褐色	r＝146mm　＜86°
2	— × —/236	〃	〃	〃	無	e	〃	25×22	無	タテナデ	〃	〃	〃	r＝132mm　＜102°
3	— × —/237	〃	〃	〃	〃	b	〃	24×24	—	全面タテナデ	〃	〃	〃	r＝150mm　＜90°
4		〃	〃	〃	〃	e	〃	不　明	—	全面タテナデ	〃	〃	〃	r＝152mm　＜91°
5		〃	〃	〃	〃	〃	〃	18×16	—	〃	〃	〃	にぶい褐　色	
6		〃	〃	〃	〃	〃	〃	不　明	—	〃	〃	〃	黄褐色	
7		〃	〃	〃	〃	b	—	16×16	無	タテナデ	〃	〃	赤褐色	
8		〃	〃	〃	〃	〃	—	17×19	〃	無	〃	〃	〃	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
9		粘土紐	I	叩きしめの円弧A 広→狭 左回り	無	e	—	16×19	無	タテナデ	精良	やや不良	灰褐色	
10		〃	〃	〃	〃	b	—	17×18	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
11		〃	〃	叩きしめの円弧A 狭→広 左回り	〃	e	—	18×18	〃	〃	〃	〃	〃	
12		〃	〃	叩きしめの円弧A	〃	〃	—	18×18	〃	〃	〃	〃	〃	
13		〃	〃	〃	〃	b	—	19×20	〃	〃	〃	〃	〃	
14		〃	〃	〃	〃	〃	—	24×24	有	〃	〃	〃	〃	
H_2d-1	— 356×285	〃	〃	叩きしめの円弧A 広→狭	ヨコナデ	〃	—	20×26	—	無	砂質	〃	にぶい黄褐色	r＝170㎜ ＜99°
2		〃	Ⅳ	不明	〃	〃	有り 狭端剥か？	不明	無	〃	砂質 白色砂粒含む	〃	黄褐色	
3		〃	〃	叩きしめの円弧A 広→狭	〃	〃	—	20×23	〃	〃	〃	〃	〃	分割界線
4		不明	〃	不明	〃	〃	—	20×25	〃	〃	〃	〃	〃	
5		〃	〃	〃	〃	—	—	22×24	〃	〃	〃	〃	〃	
6		粘土紐	〃	〃	〃	b	—	20×24	〃	〃	〃	〃	〃	分割界線
7		不明	〃	〃	〃	—	—	20×24	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	〃	〃	〃	b	有	20×22	〃	〃	〃	〃	〃	
9		〃	〃	〃	〃	〃	—	21×24	〃	〃	〃	〃	〃	
10		粘土紐	〃	〃	〃	〃	—	20×24	〃	〃	〃	〃	〃	
H_2e-1	240 — × —	〃	Ⅲ	叩きしめの円弧B	無	〃	—	22×26	〃	〃	やや砂質 白色砂粒含む	〃	黄灰色～褐色	r＝163㎜ ＜89°
2	— — ×245	〃	〃	不明	〃	〃	有	22×27	〃	〃	精良 白色砂粒含む	堅緻	青灰色	凸型台圧痕あり r＝148㎜ ＜96°
3	— — ×264	〃	〃	〃	〃	b e	〃	24×28	〃	一部ナデ	〃	やや不良	黄褐色	
4		〃	〃	叩きしめの円弧B	〃	b	—	24×28	〃	無	やや砂質 白色砂粒含む	〃	青灰色	
5		〃	〃	不明	〃	e	—	22×23	〃	一部ナデ	やや砂質	〃	にぶい黄褐色	
6		〃	〃	〃	〃	〃	有	不明	—	ナデ	精良 砂粒含む	堅緻	灰色	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
7		粘土紐	Ⅲ	不明	ナデ	b	—	26×32	無	一部タテ方向ナデ	精良 砂粒含む	堅緻	暗灰色	凸型台の圧痕
8		〃	〃	〃	〃	〃	有	26×28	〃	無	〃	〃	〃	〃
9		〃	〃	叩きしめの円弧B	〃	e	—	26×30	〃	〃	〃	〃	青灰色	
10		〃	〃	不明	〃	b	—	24×32	〃	一部ナデ	〃	〃	〃	凸型台の圧痕
11		〃	〃	〃	〃	〃	—	22×30	〃	〃	〃	〃	〃	
12		〃	〃	〃	〃	—	—	不明	〃	一部タテ方向ヘラ削り	〃	〃	〃	
13		〃	〃	〃	無	e	有	28×30	〃	無	砂質	〃	黄灰色	
14		〃	〃	〃	〃	—	—	不明	〃	ナデ	〃	〃	青灰色	
H_2f-1		〃	〃	〃	ナデ	b	—	19×28	〃	無	精良	やや不良	にぶい黄褐色	
2		〃	〃	〃	無	〃	—	不明	〃	ナデ	〃	〃	にぶい褐色	
3		〃	〃	〃	〃	—	—	22×26	〃	無	〃	〃	〃	
H_2g-1	— ×307	〃	Ⅰ	叩きしめの円弧A	〃	d	無	20×18	〃	〃	砂質(1cm大の小石含む)	良好	〃	r＝186mm ＜94°
2		〃	〃	叩きしめの円弧A 広→狭 右回り	ナデ	〃	—	18×18	有	〃	〃	〃	青灰色	
3		〃	〃	〃	不明	〃	—	22×18	無	〃	〃	〃	〃〃	
4		〃	Ⅳ	〃	ナデ	〃	—	18×19	〃	〃	〃	〃	〃〃	
5		〃	〃	不明	無	〃	—	19×19	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色	
6		〃	〃	〃	〃	〃	無	19×16	〃	〃	〃	〃	〃	
7		不明	〃	〃	側縁をタテナデ	〃	—	20×13	〃	〃	〃	〃	黒褐色	
8		〃	〃	〃	〃	〃	無	21×18	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
9		〃	〃	広→狭	〃	—	—	18×19	〃	〃	〃	〃	〃	
10		〃	〃	不明	無	—	—	12×17	有	〃	〃	〃	〃	
H_2h-1		〃	〃	叩きしめの円弧A	ナデ	—	—	?×20	無	〃	精良 白色砂粒含む	〃	灰色	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
2		粘土紐	Ⅳ	叩きしめの円弧A	ナデ	b	無	14×22	無	無	砂質 白色砂粒含む	堅緻	黒灰色	
3		〃	Ⅰ	〃	〃	c	〃	16×26	〃	〃	精良 白色砂粒含む	〃	青灰色 ～赤褐色	
4		〃	Ⅳ	不明	無	d	—	18×24	〃	〃	〃	良好	褐色	
5		不明	〃	〃	ナデ	—	—	28×21	〃	〃	砂質 白色砂粒含む	〃	黒色	
6		粘土紐	〃	〃	〃	c	—	17×19	〃	〃	精良 白色砂粒含む	堅緻	青灰色	
7		不明	〃	〃	〃	d	—	17×24	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	Ⅰ	〃	〃	—	—	28×24	〃	〃	〃	良好	褐色	
9		〃	Ⅳ	〃	不明	—	—	14×22	〃	〃	〃	〃	〃	
10		粘土紐	〃	叩きしめの円弧A	〃	d		15×20	〃	〃	〃	〃	青灰色	
H_2i-1		〃	Ⅰ	〃	無	〃	—	23×26	〃	〃	砂質	〃	にぶい褐色	
2		〃	〃	〃	〃	〃	—	19×14	有	〃	〃	〃	〃	布の乱れ 狭端部で布がずれる→板幅2.4cm
3		〃	〃	叩きしめの円弧A 広→狭 右回り	広端縁をナデ	〃	無	19×17	無	〃	砂質 白色砂粒含む	〃	〃	布の乱れ
4		不明	Ⅳ	不明	側縁をタテナデ	〃	—	15×21	〃	〃	〃	〃	〃	
5		〃	〃	〃	風化にて不明	b	—	20×26	〃	〃	〃	〃	〃	
6		〃	〃	〃	〃	e	—	17×26	〃	〃	〃	〃	〃	
7		〃	〃	〃	〃	b	—	24×26	〃	〃	〃	〃	〃	
8		〃	〃	〃	〃	e	—	20×20	有	〃	〃	〃	〃	
9		〃	〃	〃	〃	b	—	33×32	無	〃	〃	〃	青灰色	
10		〃	〃	〃	〃	e	—	18×24	〃	〃	〃	〃	褐色	
H_2j-1		〃	Ⅱ	右回り	無	—	—	21×26	〃	〃	〃	〃	〃	
2		〃	〃	不明	〃	—	—	20×25	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
3		〃	〃	〃	ナデ	c	—	20×26	〃	〃	〃	〃	にぶい褐色	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
H_2k-1		不明	不明	不明	無	b	—	22×28	無	無	精良	良好	にぶい褐色	
2		〃	〃	〃	〃	〃	—	20×24	〃	〃	〃	〃	〃	
3		〃	〃	〃	〃	〃	—	21×25	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
H_2l-1		粘土紐	〃	—	全面左方向へのヨコナデ	〃	無	20×24	〃	〃	砂質	〃	黄褐色	
2		不明	〃	—	〃	—	—	20×24	〃	〃	〃	〃	〃	
H_2m-1		粘土紐	I	狭→広	左下方へのナデ	d	—	16×20	〃	〃	〃	堅緻	青黒灰色	
H_2n-1		不明	IV	円弧A 広→狭 右回り	無	b	—	21×23	〃	〃	〃	良好	にぶい褐色	
3号窯														
H_3a-1		粘土紐	I	円弧A	無	b	—	17×19	無	一部タテナデ	精良	やや不良	にぶい赤褐色	r＝146mm ＜84°
2		〃	〃	〃 狭→広 左回り	〃	e	無	24×22	〃	ナデ	〃	〃	〃	r＝158mm ＜89°
3		〃	〃	〃 広→狭 左回り	ナデ	〃	—	20×23	〃	一部タテナデ	〃	不良	赤褐色	r＝153mm ＜95°
4		〃	〃	〃	無	〃	無	24×22	〃	無	〃	〃	〃	r＝148mm ＜89°
5		〃	〃	円弧A 狭→広	〃	b（右）e（左）	無	18×19	〃	〃	〃	やや不良	にぶい赤褐色	r＝150mm ＜89°
6		〃	〃	円弧A 広→狭 左回り	〃	b	〃		〃	〃	〃	〃	〃	r＝147mm ＜98°
7		〃	〃	〃	〃	〃	〃	26×22	〃	〃	〃	〃	褐色	叩き板の柄の圧痕
8		〃	〃	〃	〃	e	〃	17×19	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
9		〃	〃	〃	〃	〃	—	18×15	〃	指頭によるナデ	〃	〃	〃	
10		〃	〃	〃	〃	b	〃	16×20	〃	無	〃	〃	〃	あて布痕
11		〃	〃	〃	〃	e（右）b（左）	〃	26×24	〃	指頭によるタテナデ	〃	〃	〃	
12		〃	〃	〃	〃	e	〃	17×18	〃	〃	〃	〃	〃	
13		〃	IV	不明	〃	〃	〃	—	不明	〃	〃	〃	黄褐色	
14		〃	I	円弧A 狭→広 左回り	〃	〃	〃	19×20	無	〃	〃	〃	赤褐色	

17×19

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
15		粘土紐	I	円弧A 狭→広 左回り	無	b	無	22×24	不明	指頭によるタテナデ	精良	やや不良	黒灰色	
16		〃	〃	円弧A 広→狭 左回り	〃	e	—	18×16	無	〃	〃	〃	赤褐色	
17		〃	〃	〃	〃	b	無	23×24	〃	〃	〃	〃	〃	
18		〃	〃	〃	〃	e	〃	17×16	〃	無	〃	〃	〃	
19		〃	〃	〃	〃	b	—	18×18	〃	指頭によるタテナデ	〃	〃	〃	
20		〃	〃	円弧A 狭→広 左回り	〃	e	無	16×20	〃	指頭によるナデ	〃	〃	褐色	
H_3b-1		〃	Ⅳ	不明	ナデ	b	—	27×27	有	無	〃	堅緻	暗褐色	突起 凸型台圧痕
2		〃	〃	叩きしめの円弧B	無	e	—	18×20	無	〃	〃	良好	黄褐色	側縁に段
3		〃	〃	〃	〃	〃	—	24×25	有	〃	〃	〃	褐色	
4		〃	〃	不明	ナデ	〃	—	25×30	無	〃	〃	堅緻	赤褐色 青灰色	凸型台圧痕
5		〃	〃	〃	不明	〃	—	26×28	〃	〃	〃	〃	褐色	〃
6		〃	〃	〃	ナデ	b	—	24×28	〃	〃	〃	〃	黄褐色	
7		〃	〃	〃	〃	e	—	22×29	〃	〃	〃	〃	灰色	
8		〃	〃	〃	〃	b	—	23×27	〃	〃	〃	〃	黄褐色	
9		〃	〃	〃	無	e	—	17×21	〃	〃	〃	良好	褐色	側縁に段あり
10		〃	〃	〃	ナデ	〃	—	21×28	〃	〃	〃	〃	灰色	
11		〃	〃	〃	不明	〃	—	22×26	〃	〃	〃	〃	褐色	
H_3c-1	(250) (329)×(260)	〃	〃	広→狭 右回り	ヨコナデ	b	不明	26×27	〃	〃	〃	やや不良	赤褐色	分割界線（深2㎜） r＝159㎜ ＜93°
2		〃	〃	不明	無	e	無	23×23	〃	〃	〃	〃	褐色	分割界線（深4㎜）
3		〃	〃	〃	〃	b	〃	25×25	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
4		〃	〃	〃	ナデ	〃	—	24×22	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐色	
5		〃	〃	〃	〃	〃	—	—	〃	〃	砂質 白色砂粒含む	〃	褐色	凸面広端縁を縁どる

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
6		粘土紐	Ⅳ	不明	無	—	—	22×21	無	無	精良	堅緻	灰色	
7		〃	〃	〃	不明	b	—	28×32	〃	〃	〃	やや不良	褐色	
8		〃	〃	〃	無	—	—	18×18	〃	〃	〃	〃	黒色灰色	
9		〃	〃	〃	〃	—	—	26×26	〃	〃	〃	〃	褐色	
10		〃	〃	〃	ナデ	e	有	17×24	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
11		不明	〃	〃	無	—	—	25×21	〃	〃	〃	〃	暗褐色	
H_3d-1		〃	Ⅲ	円弧B	〃	b	有	24×26	〃	〃	やや砂質 白色砂粒含む	〃	赤褐色	
2		粘土紐	〃	不明	〃	—	—	23×29	〃	〃	精良	堅緻	灰色	突起　凸型台圧痕
3		〃	〃	〃	〃	b	—	27×26	〃	〃	〃	〃	〃	凸型台圧痕 狭端縁に沿う段
4		不明	〃	〃	〃	—	—	不明	〃	〃	〃	良好	黄灰色	
5		〃	〃	〃	〃	—	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
H_3e-1	— ×250/—	粘土紐	〃	〃	側縁のナデ	b	—	21×23	〃	粘土紐接合部をナデ	〃	〃	褐色	r＝167㎜　＜86°
2		〃	〃	〃	〃	〃	—	不明	〃	無	〃	〃	赤褐色	
3		〃	〃	〃	〃	〃	有	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
H_3f-1		不明	Ⅳ	広→狭　右回り	ナデ	〃	無	20×24	〃	〃	やや砂質	〃	〃	
2		〃	Ⅰ	〃	〃	〃	〃	不明	〃	不明	〃	〃	灰色	分割界線
3		〃	Ⅳ	不明	〃	〃	有	23×23	〃	無	〃	〃	赤褐色	
4		粘土紐	〃	〃	無	—	—	22×26	〃	〃	〃	〃	灰色	
5		不明	Ⅰ	〃	ナデ	b	—	24×26	〃	〃	〃	〃	赤褐色	
H_3g-1		粘土紐	Ⅳ	〃	無	〃	—	30×24	〃	〃	精良	堅緻	暗灰色	
H_3h-1		不明	Ⅰ	円弧A　広→狭 右回り	〃	d	—	15×20	〃	〃	〃	良好	赤褐色	
2		〃	Ⅳ	不明	〃	—	—	18×21	—	不明	〃	〃	暗灰色	

叩き目による分類	寸法	第1次成形技法	第2次成形技法	叩きしめの順序と方向	凸面の調整手法	側面調整	広端両隅の切除	布目の経緯本数	布のとじ合せ目	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
H_3i-1		粘土紐	II	右回り	ナデ	—	有	23×28	無	無	砂質	良好	赤褐色	
H_3j-1		不明	—	不明	〃	〃	—	21×28	有	〃	〃	〃	灰色色	
2		〃	—	〃	無	—	—	22×22	無	〃	〃	〃	赤褐色	
		窯様遺構												
H_4a-1		粘土紐	IV	円弧Bか	ナデ	e	有	28×28	無	無	精良	良好	灰色	突起あり
2		不明	〃	不明	不明	—	—	16×22	〃	〃	〃	やや不良	赤褐色	
3		〃	〃	円弧Bか	〃	—	—	28×32	〃	〃	〃	良好	灰色	
4		〃	〃	不明	〃	e	—	17×20	有	〃	〃	〃	褐色	
5		〃	〃	〃	〃	—	—	16×20	無	〃	〃	〃	〃	
H_4b-1		粘土紐	〃	〃	ナデ	b	—	20×23	〃	〃	〃	〃	暗灰色	
2		不明	〃	〃	無	—	—	29×27	〃	〃	〃	〃	〃〃	
H_4c-1		〃	I	〃	〃	d	—	20×21	〃	〃	やや砂質	〃	にぶい赤褐色	
2		〃	〃	〃	不明	〃	—	20×19	有	〃	〃	〃	〃	
H_4d-1		粘土紐	III	〃	ナデ	—	—	22×30	無	ナデ	精良	〃	灰色	
H_4e-1		不明	IV	〃	〃	b	—	17×15	〃	無	砂質	〃	にぶい赤褐色	
H_4f-1		〃	〃	〃	〃	d	—	不明	〃	不明	精良	やや不良	赤褐色	
H_4g-1		粘土紐	〃	〃	〃	—	—	32×26	有	無	〃	堅緻	暗灰色	
2		〃	不明	〃	〃	d	—	30×32	無	〃	〃	〃	黒灰色	
H_4h-1		不明	〃	〃	無	—	—	29×27	〃	〃	〃	〃	灰色	
H_4i-1		〃	I	〃	〃	—	—	22×19	有	〃	砂質	良好	にぶい赤褐色	

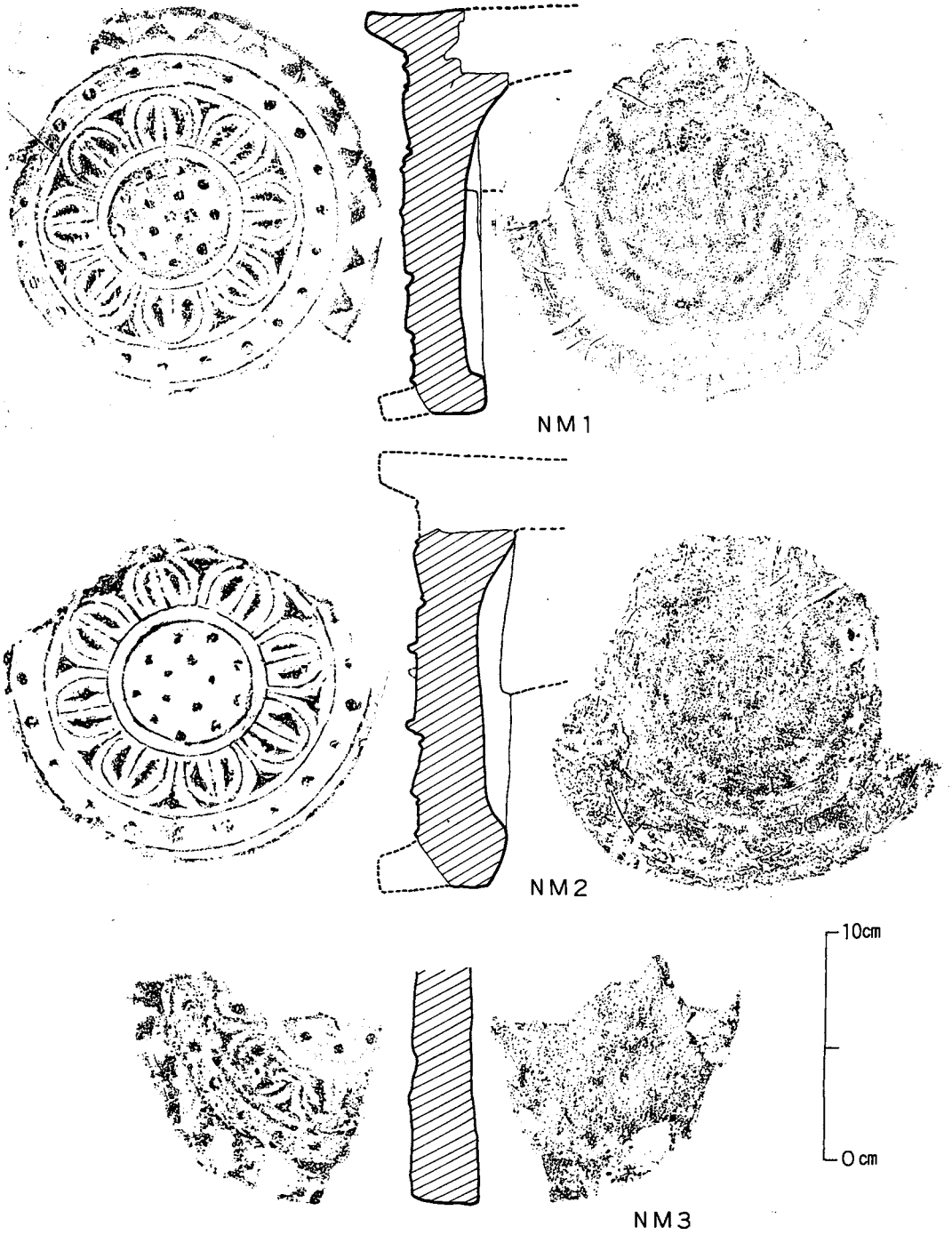
(註) 寸法の左側は全長、右側下は広端幅、右側上は狭端幅で、カッコ内は復原数値である。単位は㎜。
備考欄のrは凹面半径、<は分割角度である。
布目の経緯本数は左側が端縁に平行する糸の本数、右側が側縁に平行する糸の本数である。

別表4　八代郡郷比定一覧表

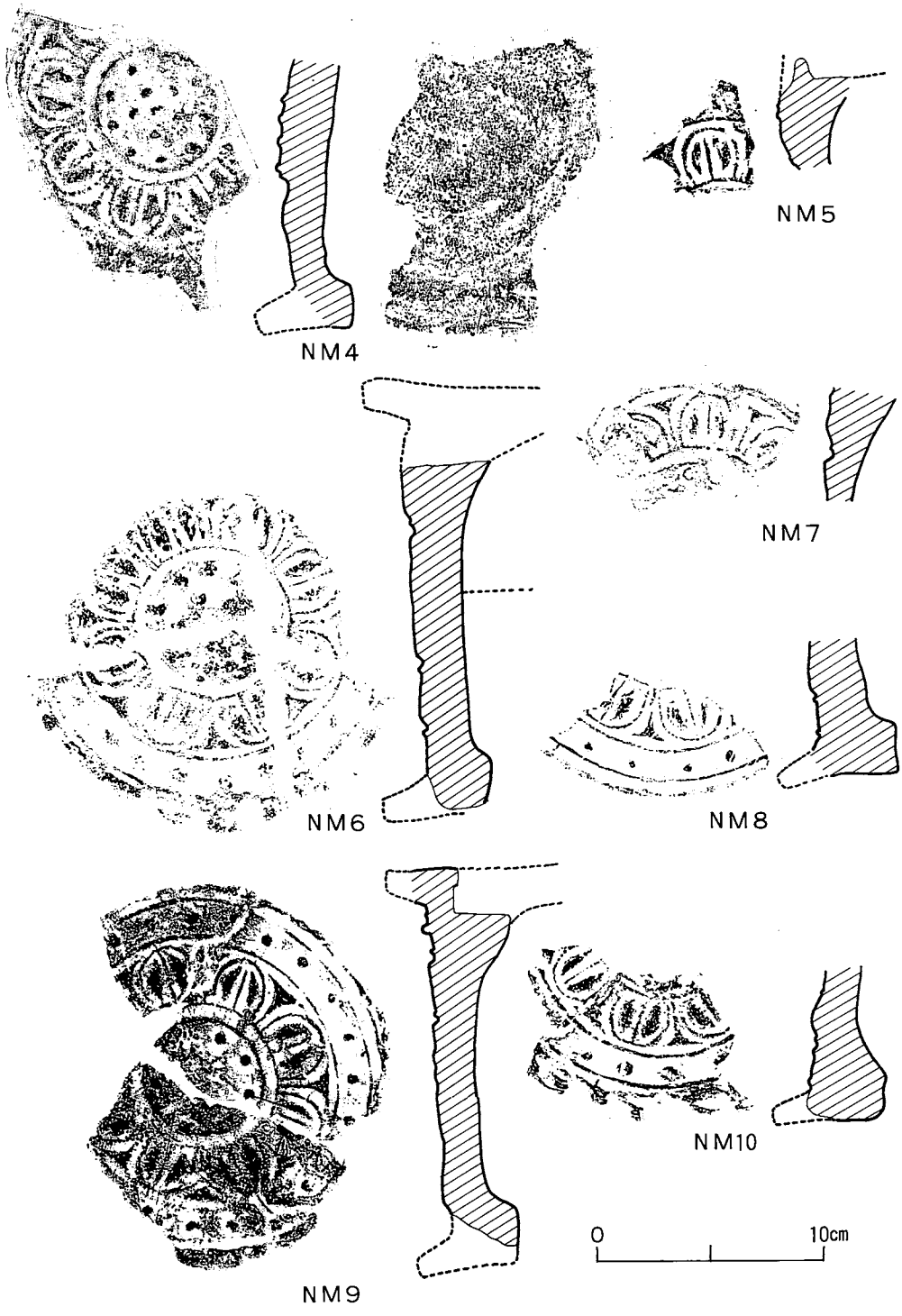
郷名	渋江　松石(1801)	八木田政名(1841)	吉田　東伍(1901)	邨岡　良弼(1902)	松本　雅明(1977)
高田	高田	**タカタ**（高田） 高田（古字多） 郡ノ南ニアリ	**カウダ**（高田） 高田村　植柳村 金剛村（宮地は高田郷に属す）	**多加多**（高田） 今（加字多） 革田の義　敷河内 奈良木　豊原 本野　高下 西高下　大福寺 植柳　（高田郷）	**高田** 八代市妙見町附近
肥伊	抱ゐ→抱伊→ 拵(かこゐ)	**ヒイ**（肥伊） 宮原村傍近の所	**ヒイ**（肥伊） 野津　宮原　有佐 種山 （氷川の西岸）	**比**（肥伊） 上上　上有佐 下有佐　内田 下年田　宮原 （道後　荘一 野津手永）	**肥伊** 八代郡龍北村、宮原、鏡町附近
木行	日置	**木行** 興善寺　河田 片ノ川	**コイヌ**（木行） 龍峰村　太田郷村 （小犬郷）	**古伊奴**（木行） 中野　平島　小路 下村 （小犬郷一 野津手永）	**木行** 八代郡鏡町附近
豊福	豊福	**トヨフク**（豊福） 豊福村	**トヨフク**（豊福） 豊福村　小野村	**登興布久**（豊福） 豊福　下江　仲間 久具　内田　竹埼 （豊福荘一 河江手永）	**豊福** 下益城郡松橋町南部、益南村附近
小川	小川	**小川** 北小川村 南小川村	**ヲガハ**（小川） 小川町　河江村 海東村　吉本村 部田など	**乎加波**（小川） 南小川　北小川 東海東　西海東 南海東　北海東 （甲佐郷一 河江手永）	**小河** 下益城郡小川町附近

図　面

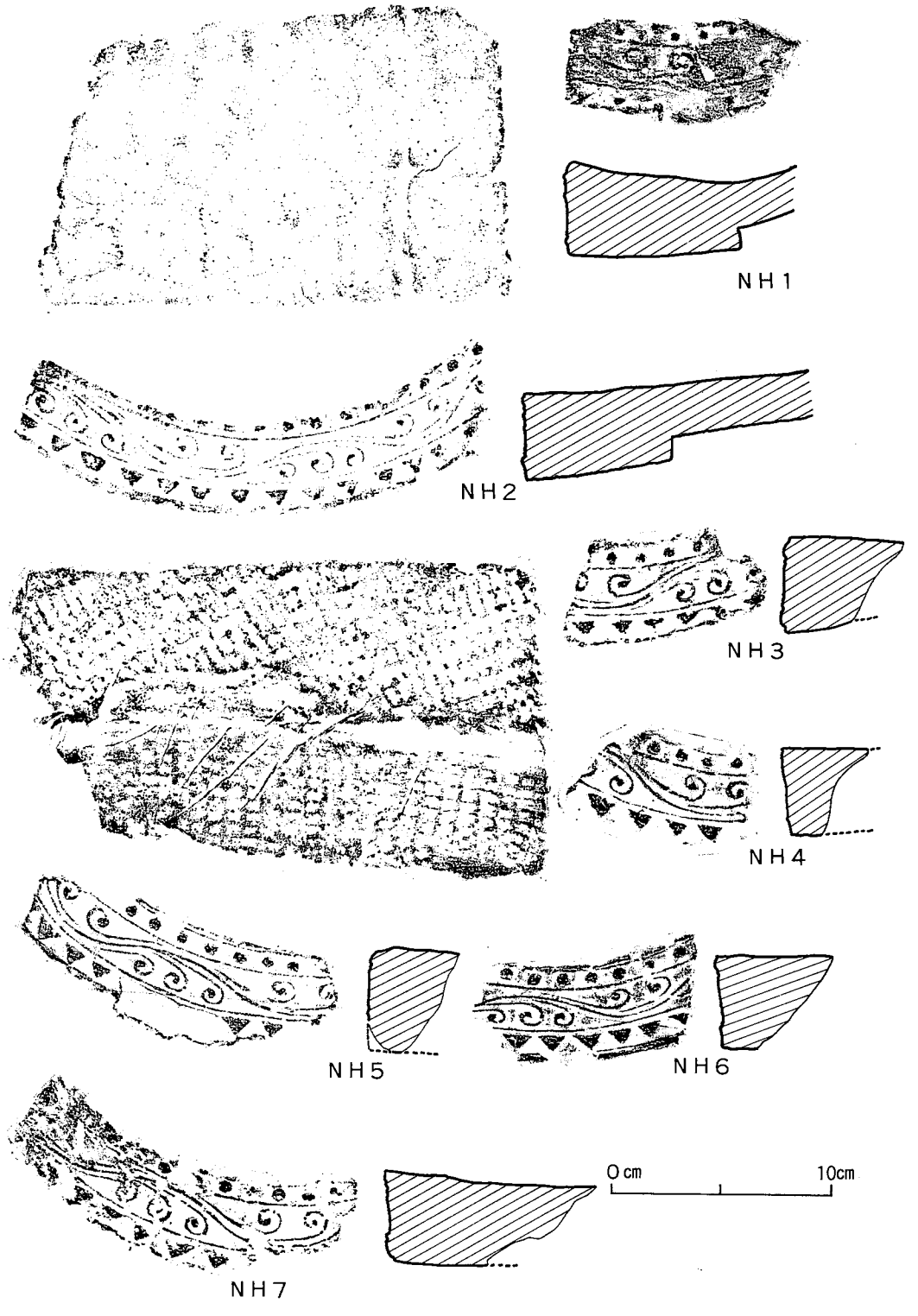
図面1　軒丸瓦実測図(1)　1：3



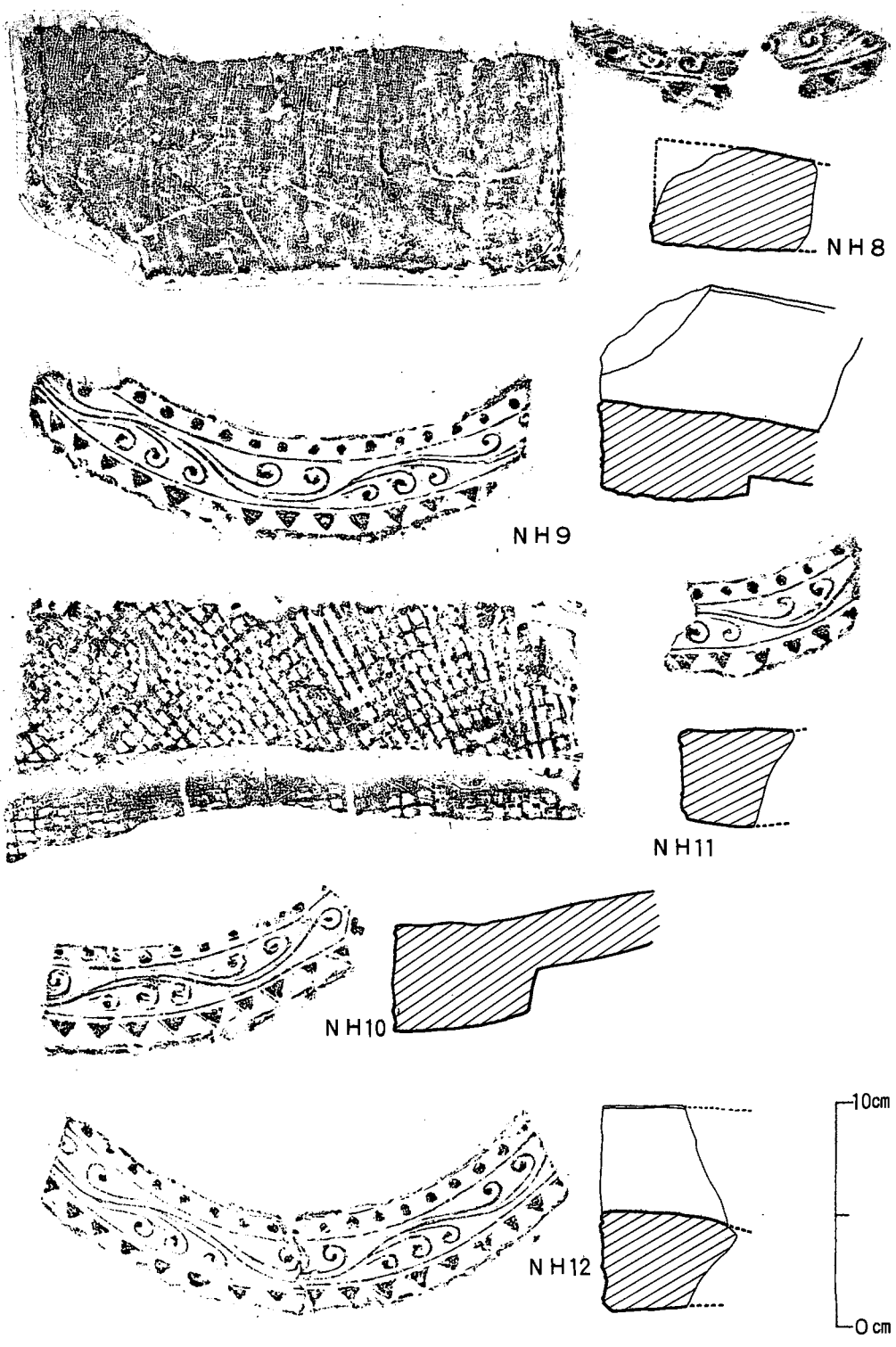
図面２　軒丸瓦実測図(2)　１：３



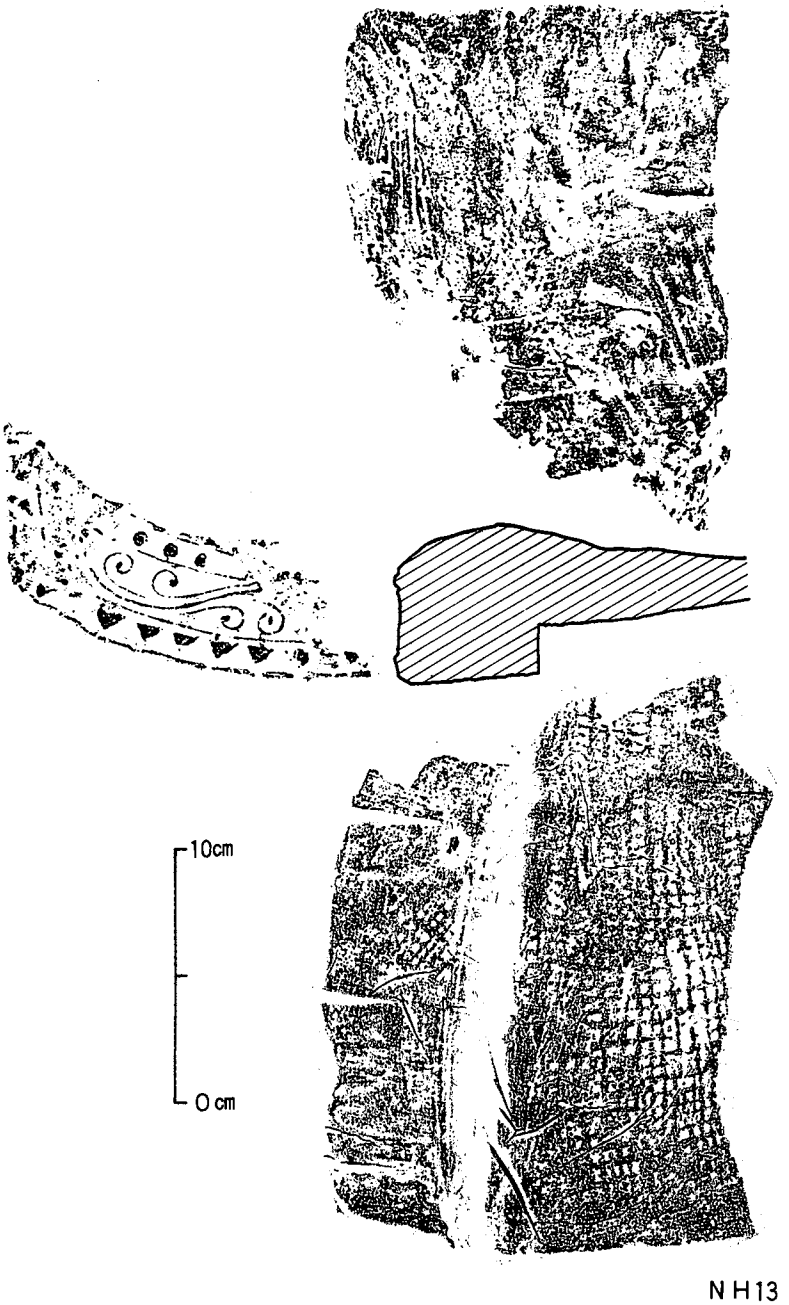
図面3　軒平瓦実測図(1)　1：3



図面4　軒平瓦実測図(2)　1：3

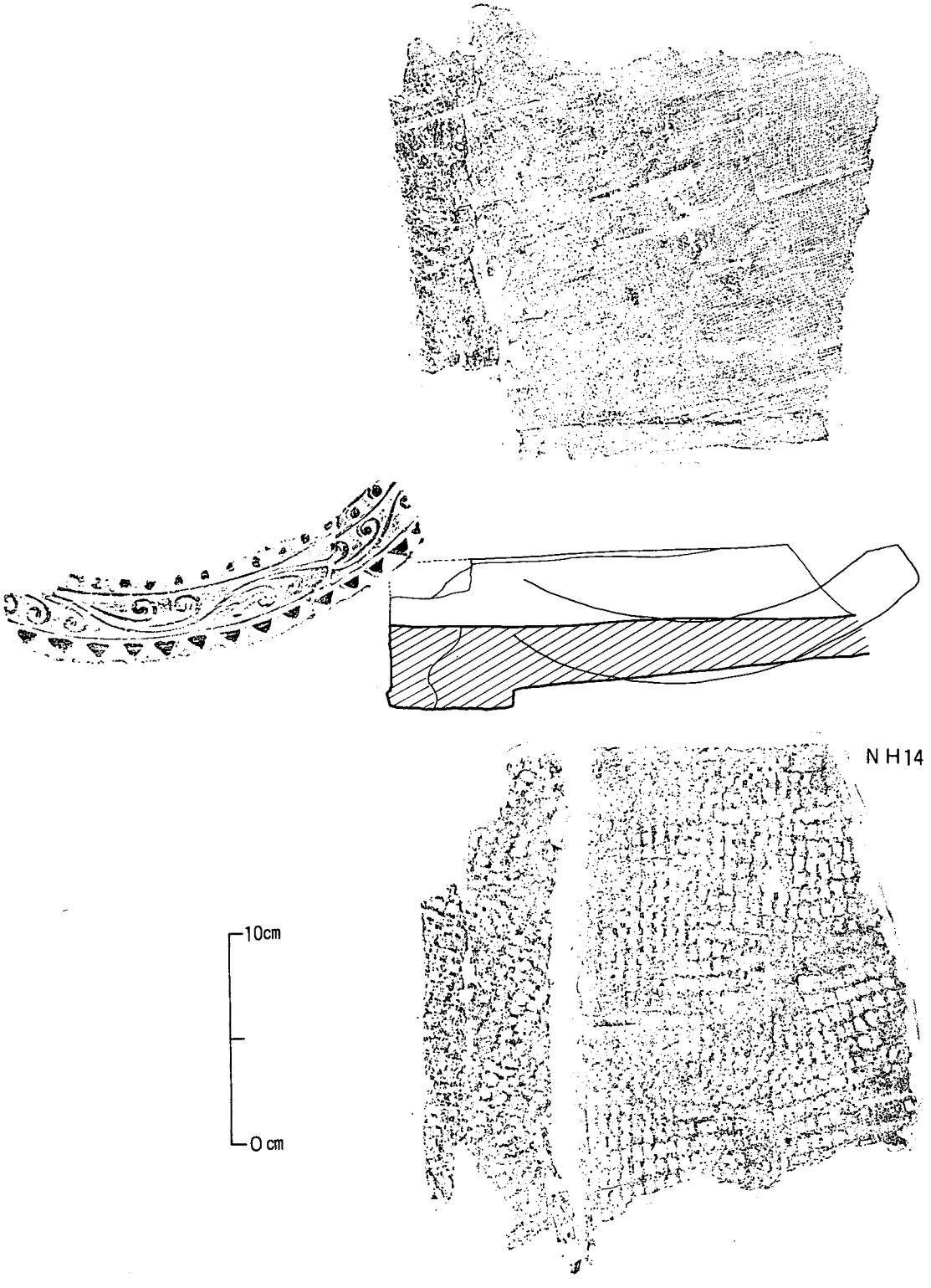


図面5　軒平瓦実測図(3)　1：3

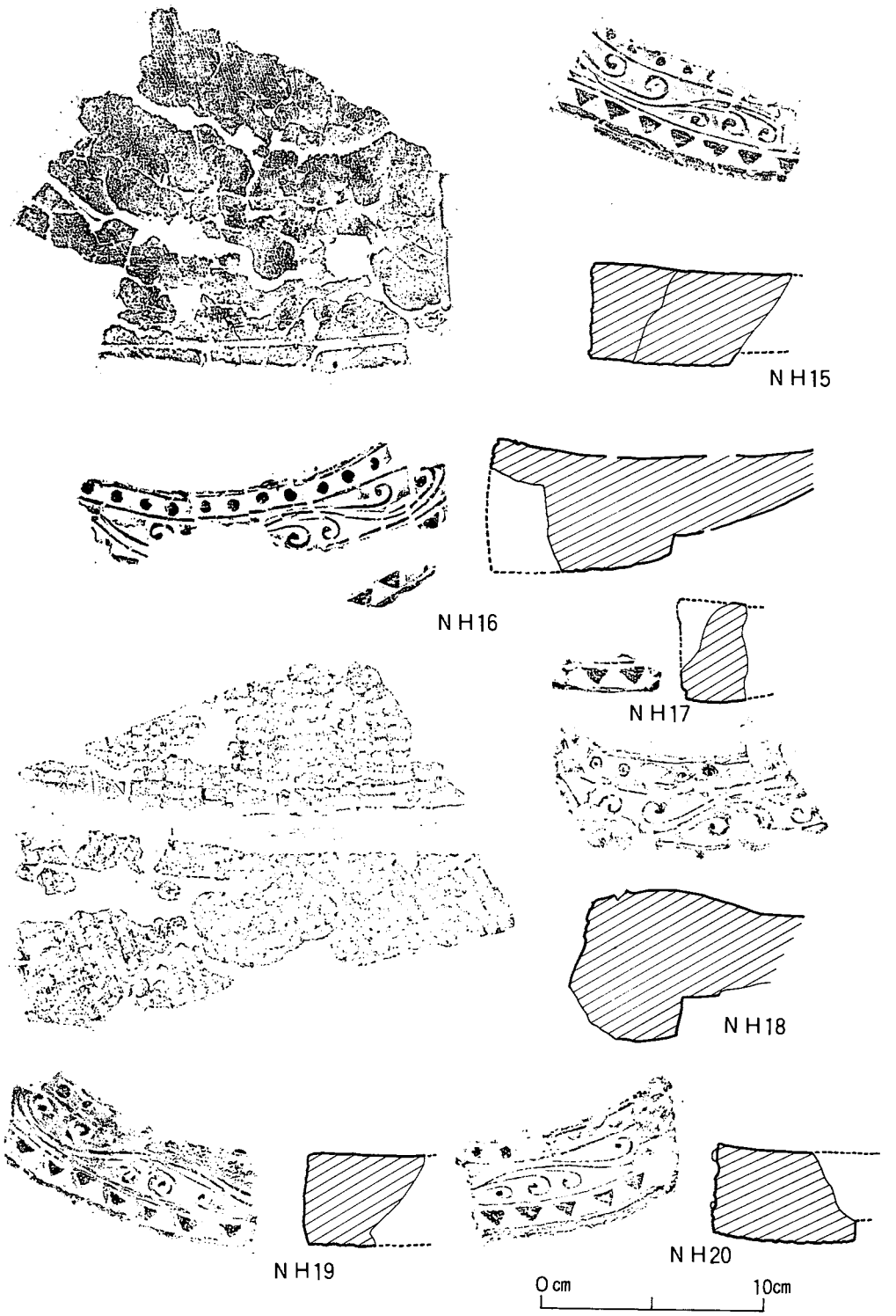


NH13

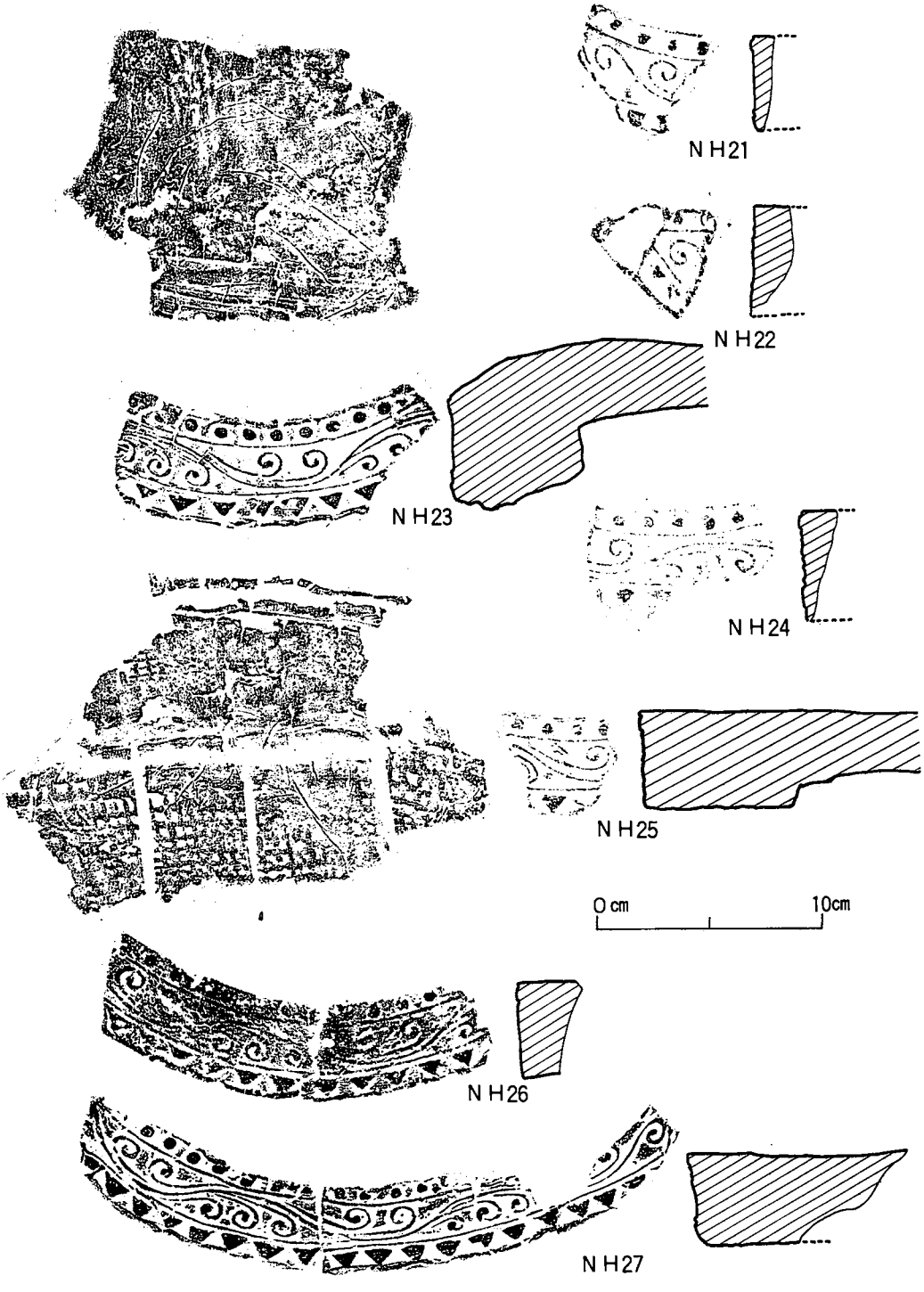
図面6　軒平瓦実測図(4)　1：3



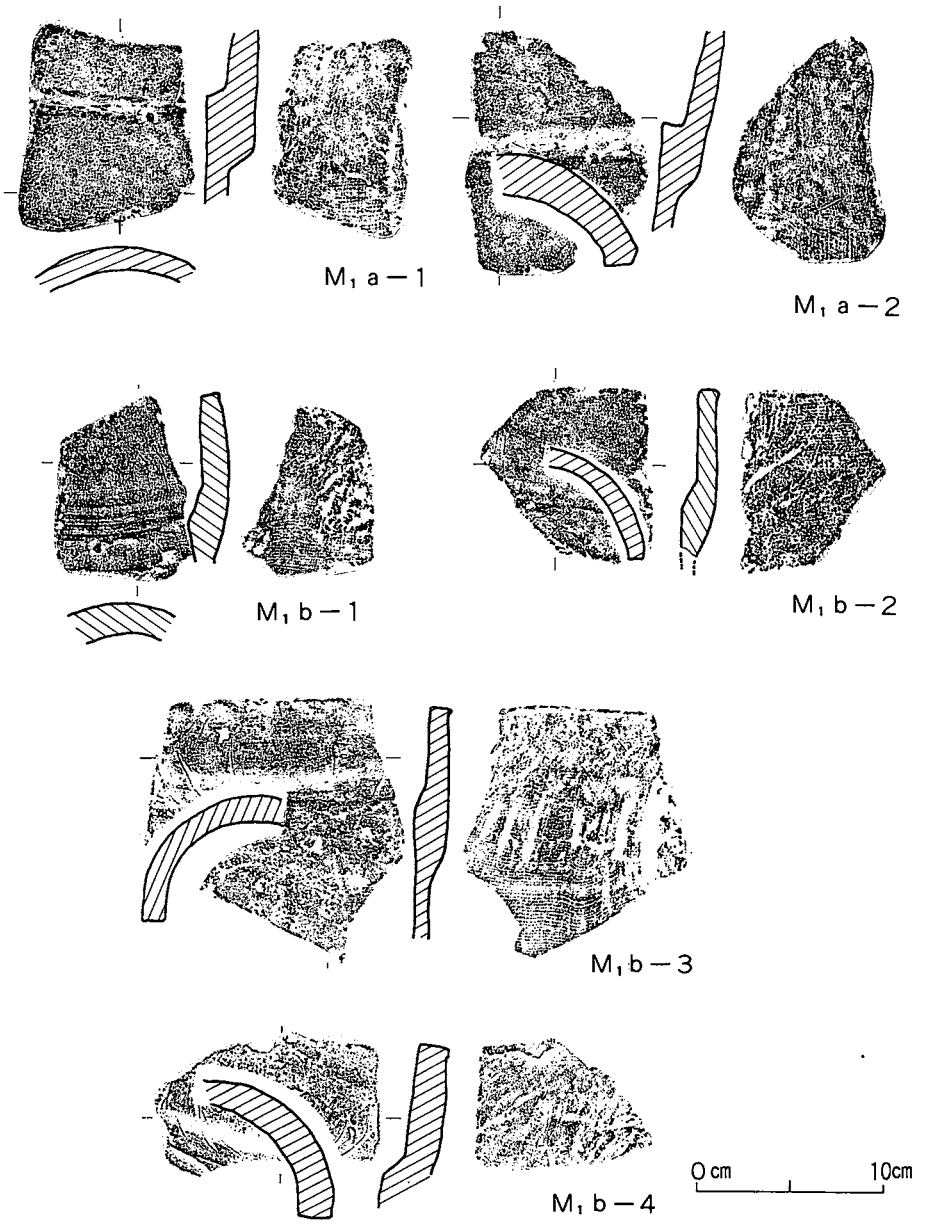
図面７　軒平瓦実測図(5)　１：３



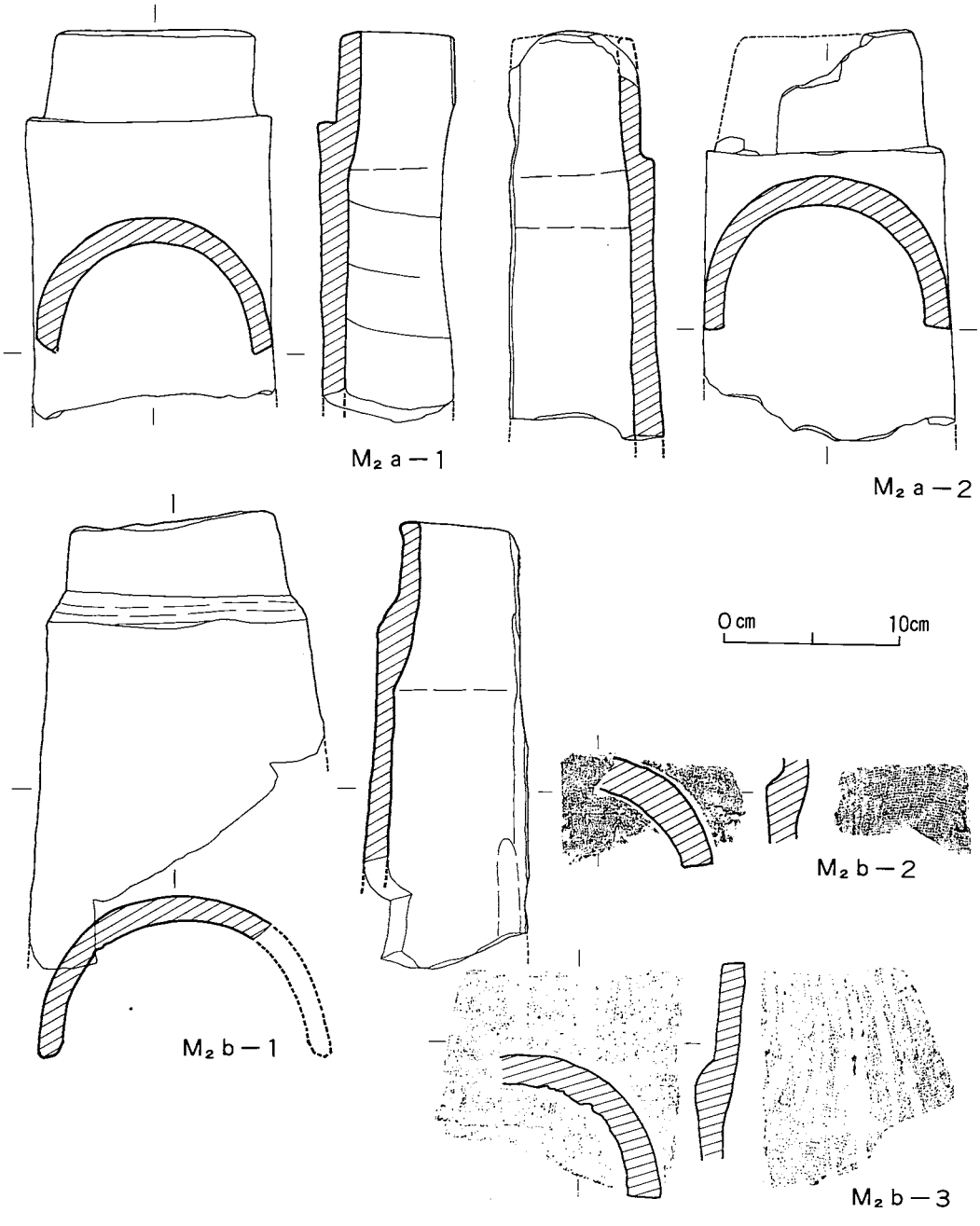
図面8　軒平瓦実測図(6)　1：3



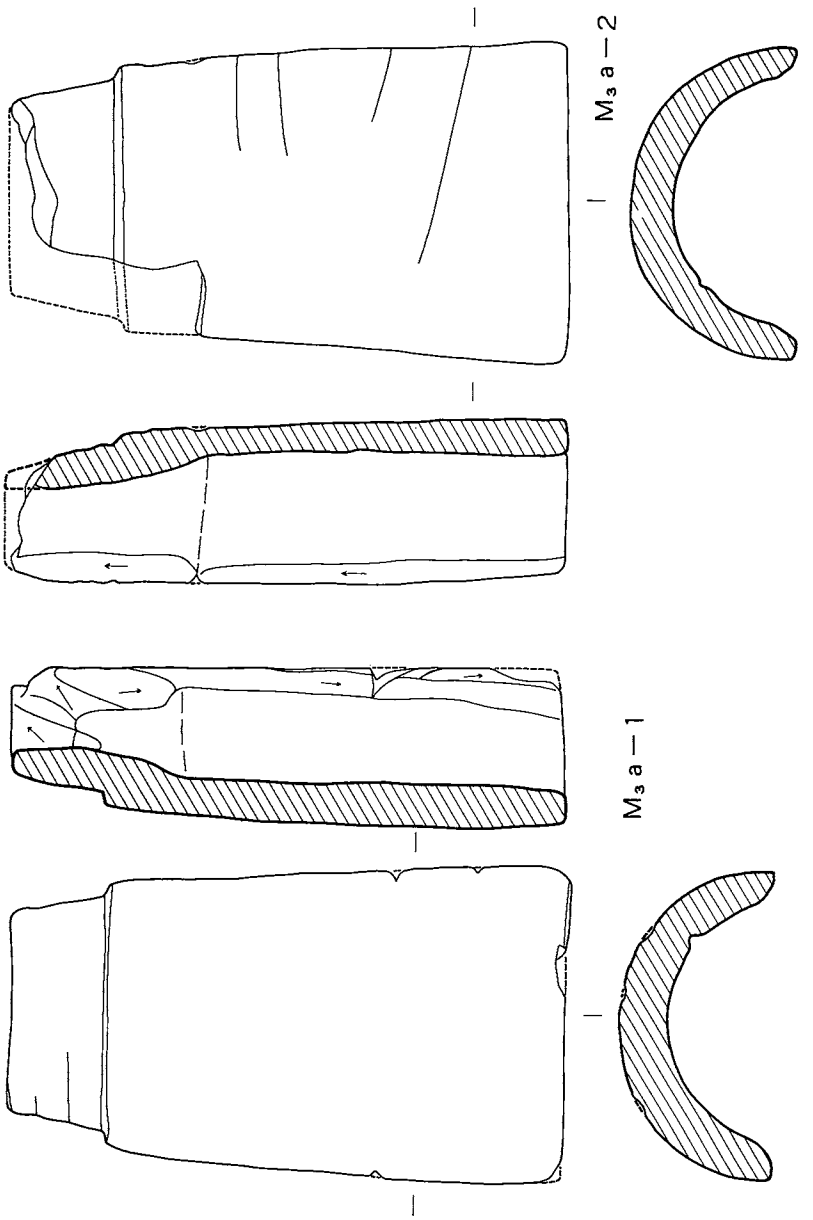
図面9　1号窯出土丸瓦実測図　M_1 a・b類　1：4



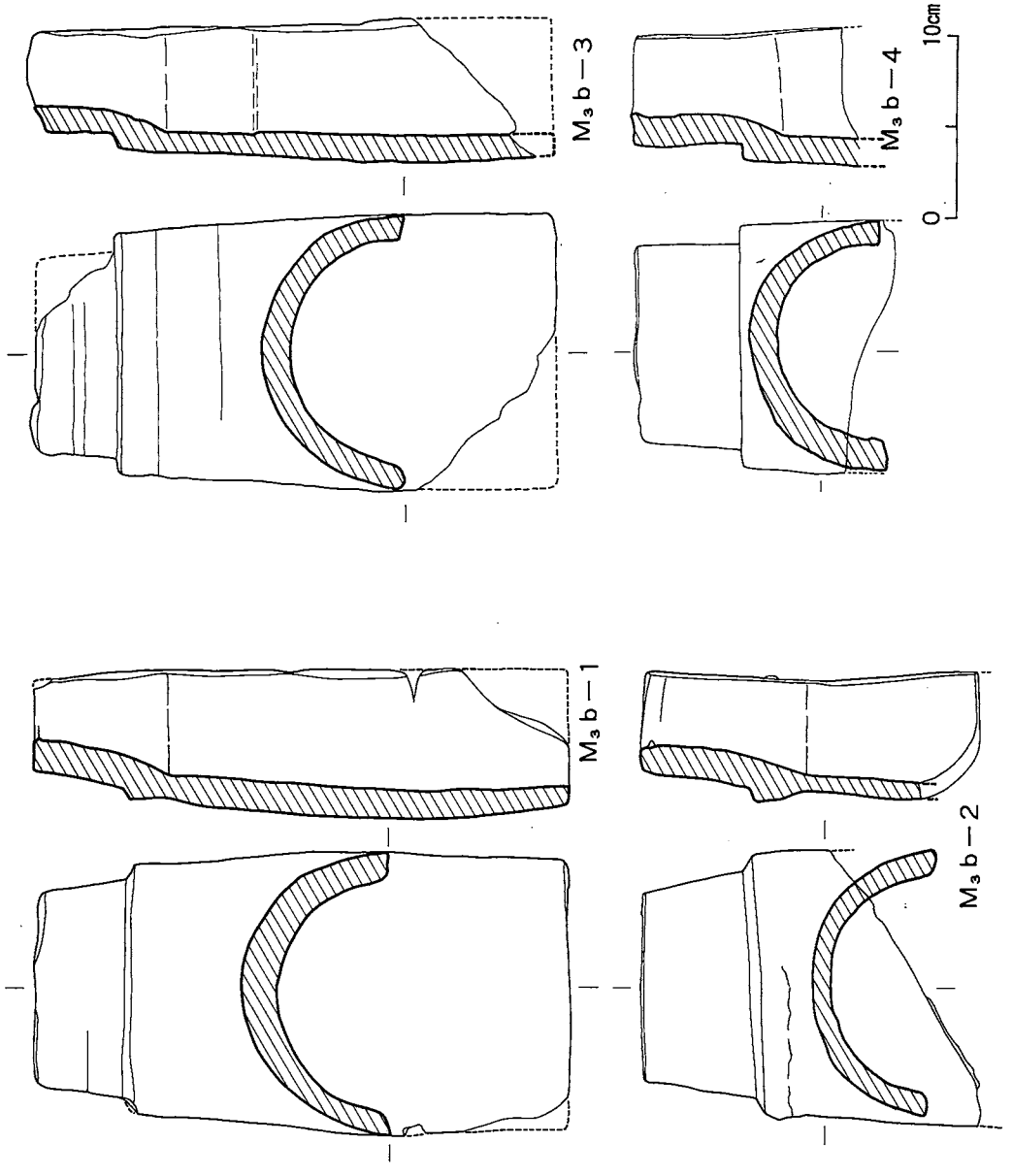
図面10　2号窯出土丸瓦実測図　M_2a・b類　1：4



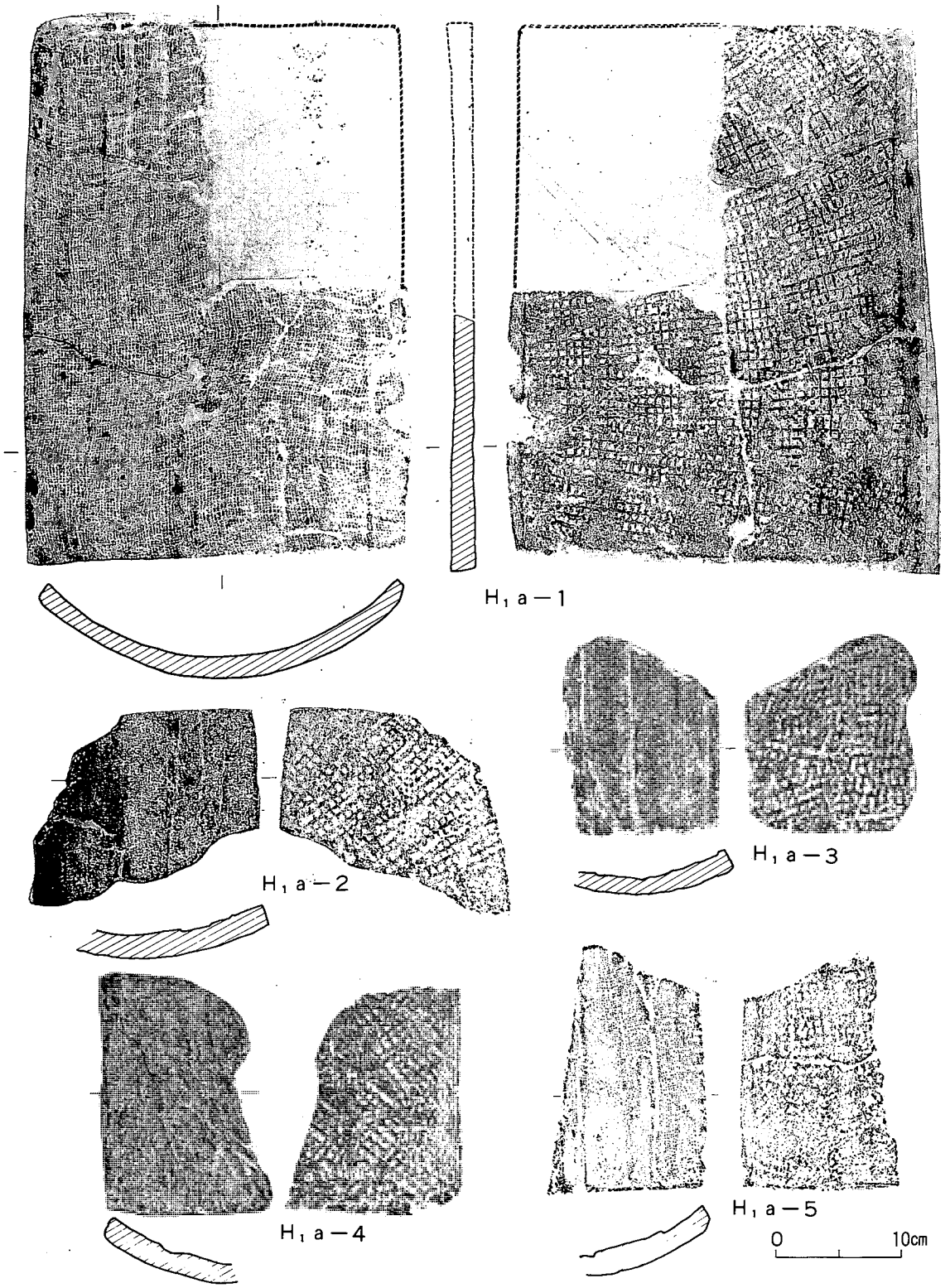
図面11　3号窯出土丸瓦実測図(1)　M_3a類　1：4



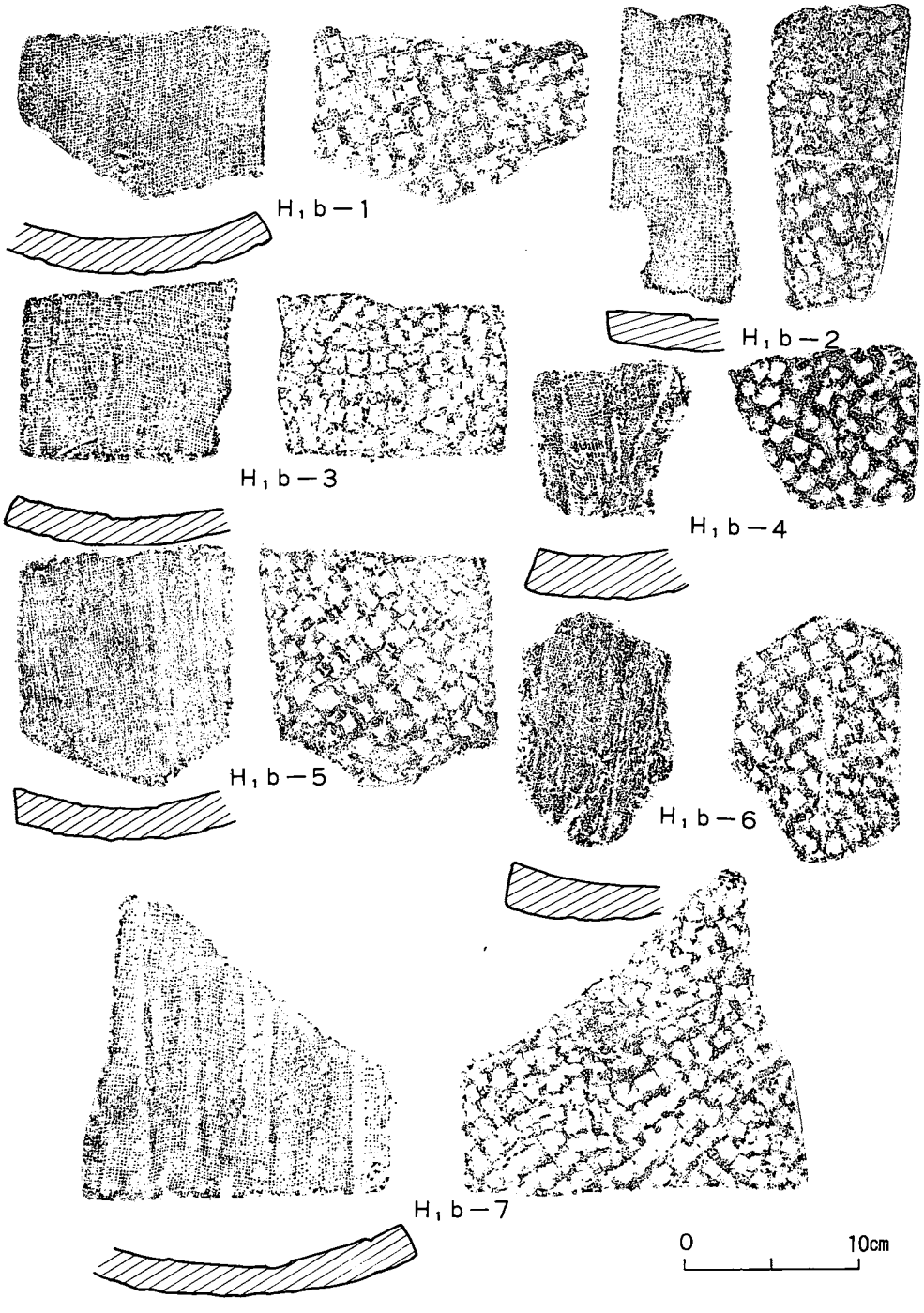
図面12　3号窯出土丸瓦実測図(2)　M_3 b 類　1：4



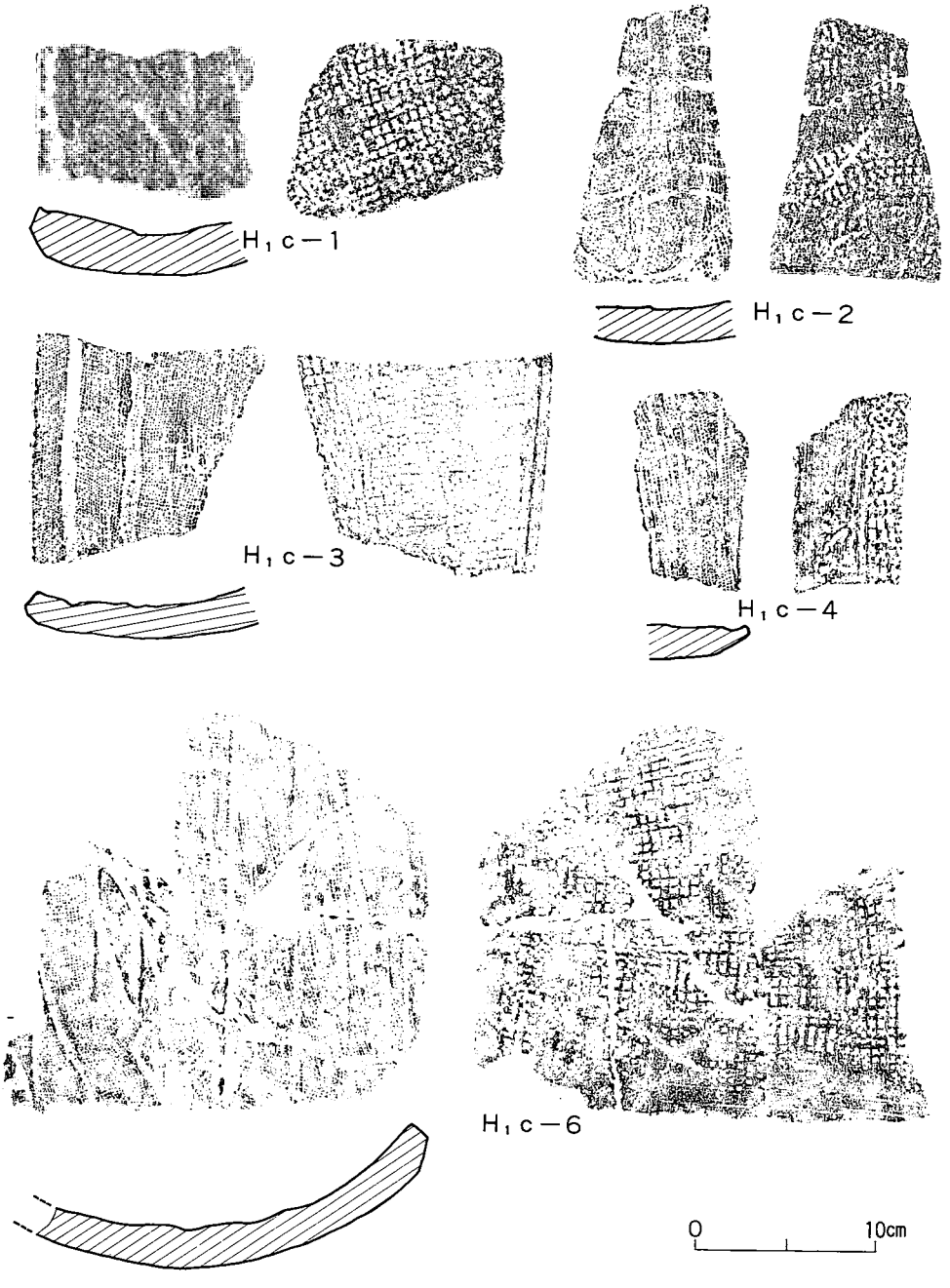
図面13　1号窯出土平瓦実測図(1)　H_1a類　1：5



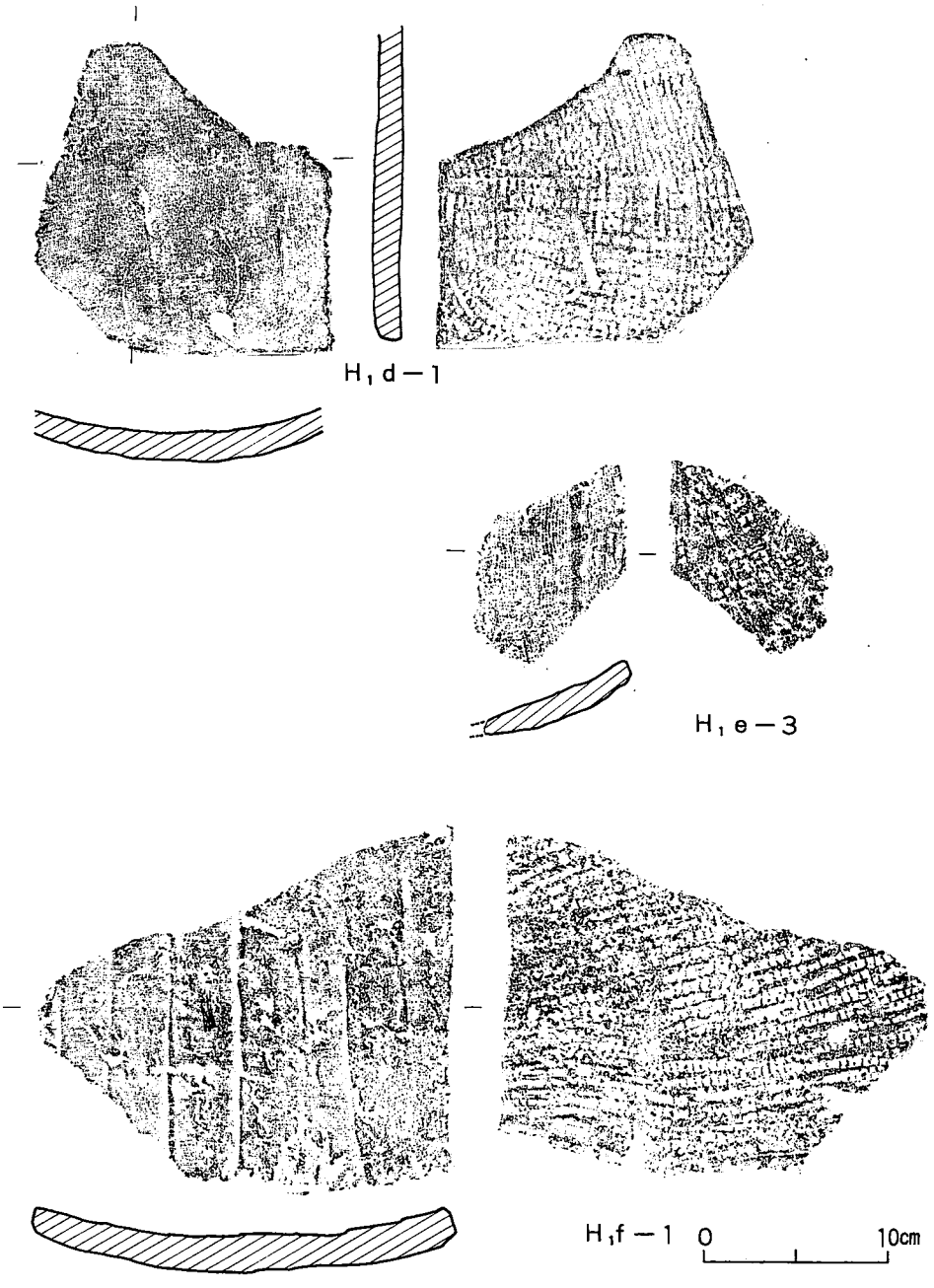
図面14　1号窯出土平瓦実測図(2)　H₁b類　1：4



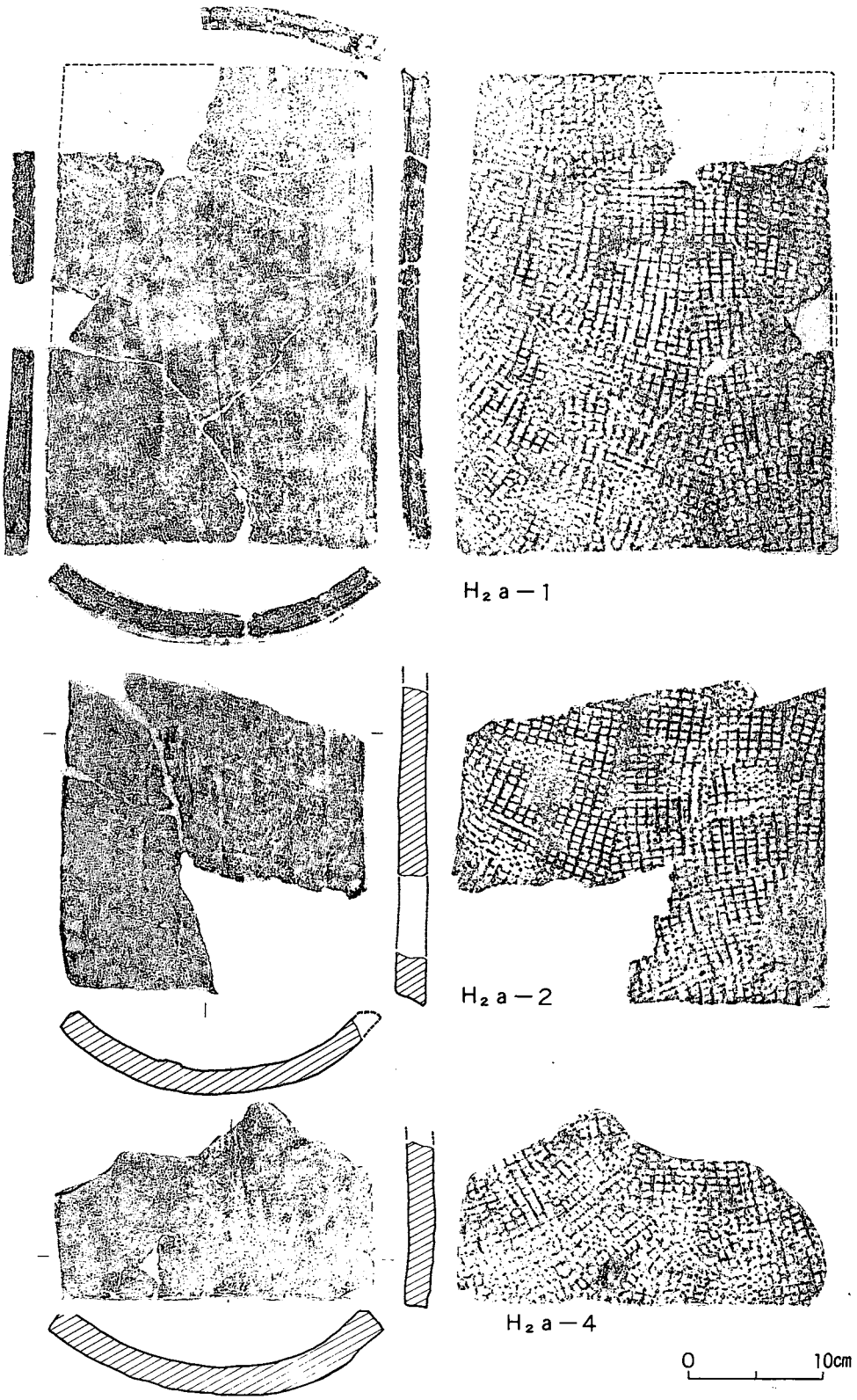
図面15　1号窯出土平瓦実測図(3)　H_1c類　1：4



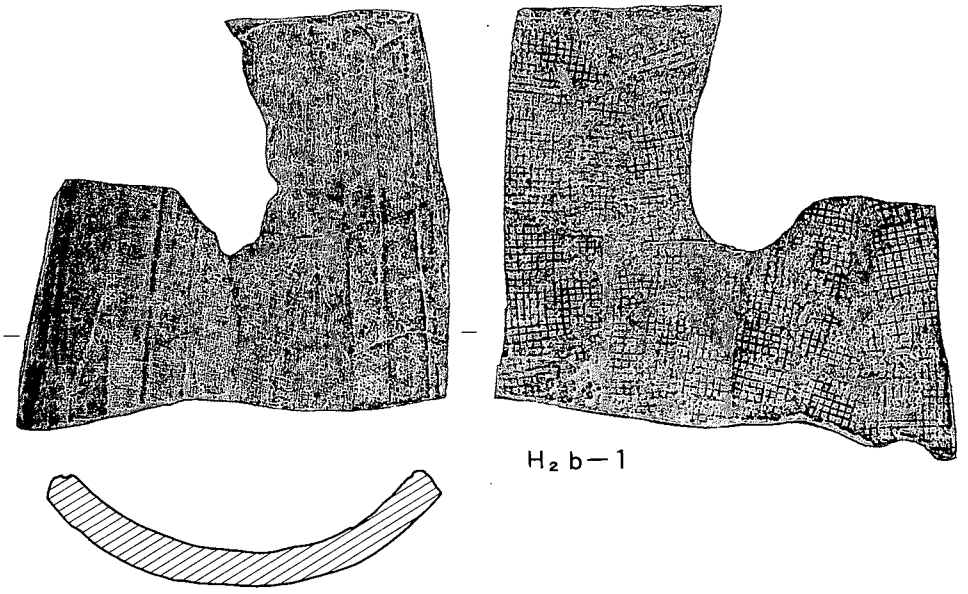
図面16　1号窯出土平瓦実測図(4)　H₁d～f類　1：4



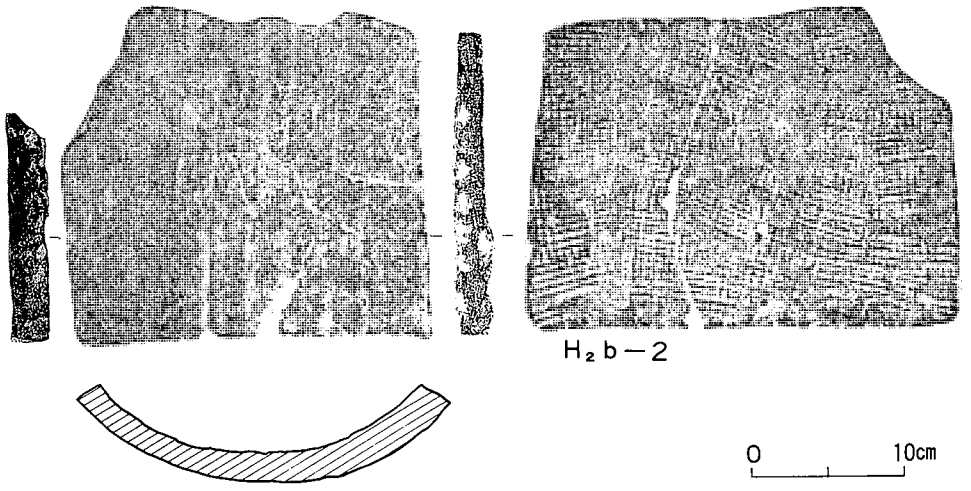
図面17　2号窯出土平瓦実測図(1)　H_2 a類　1：5



図面18　2号窯出土平瓦実測図(2)　H_2b類　1：5



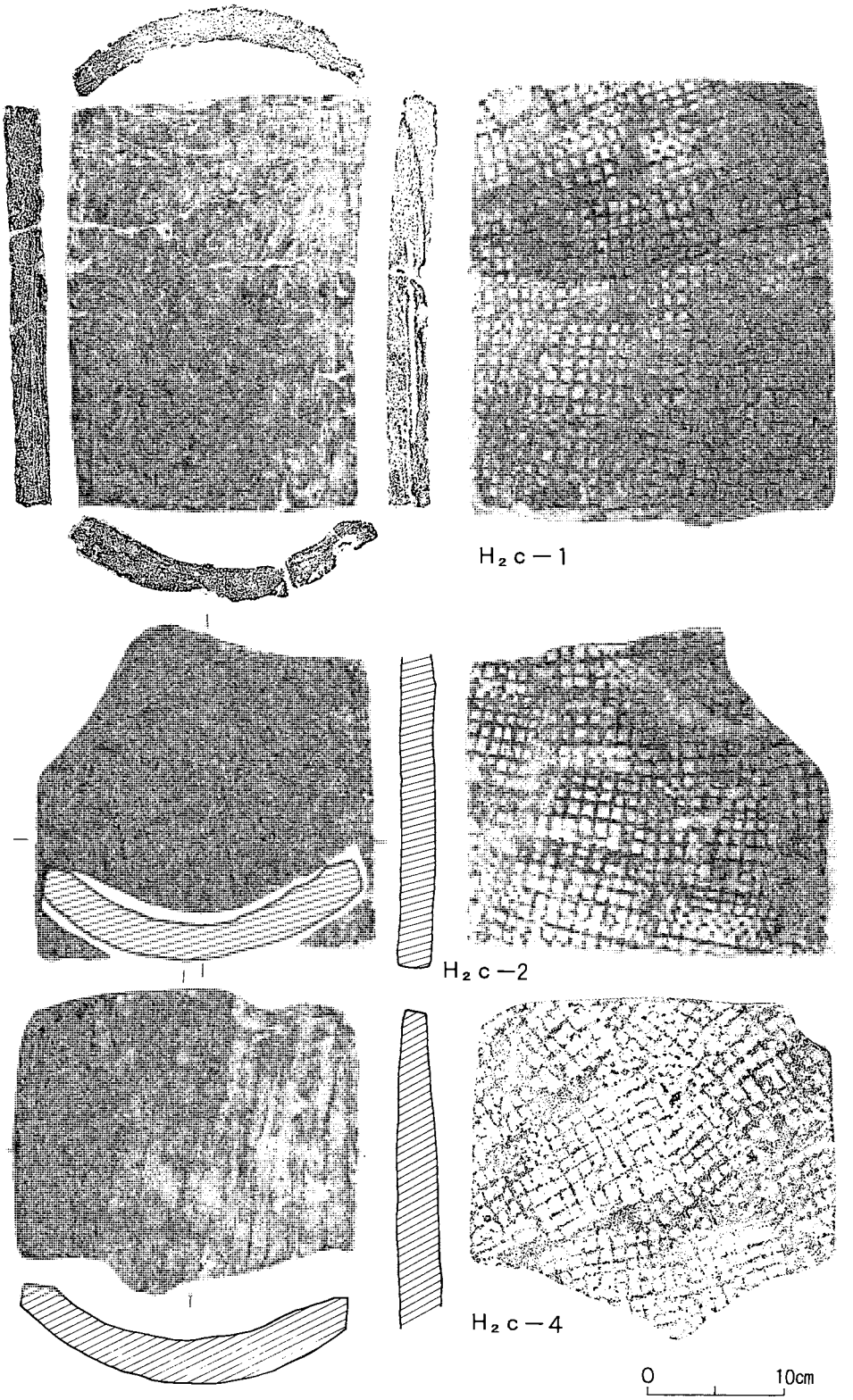
H_2b－1



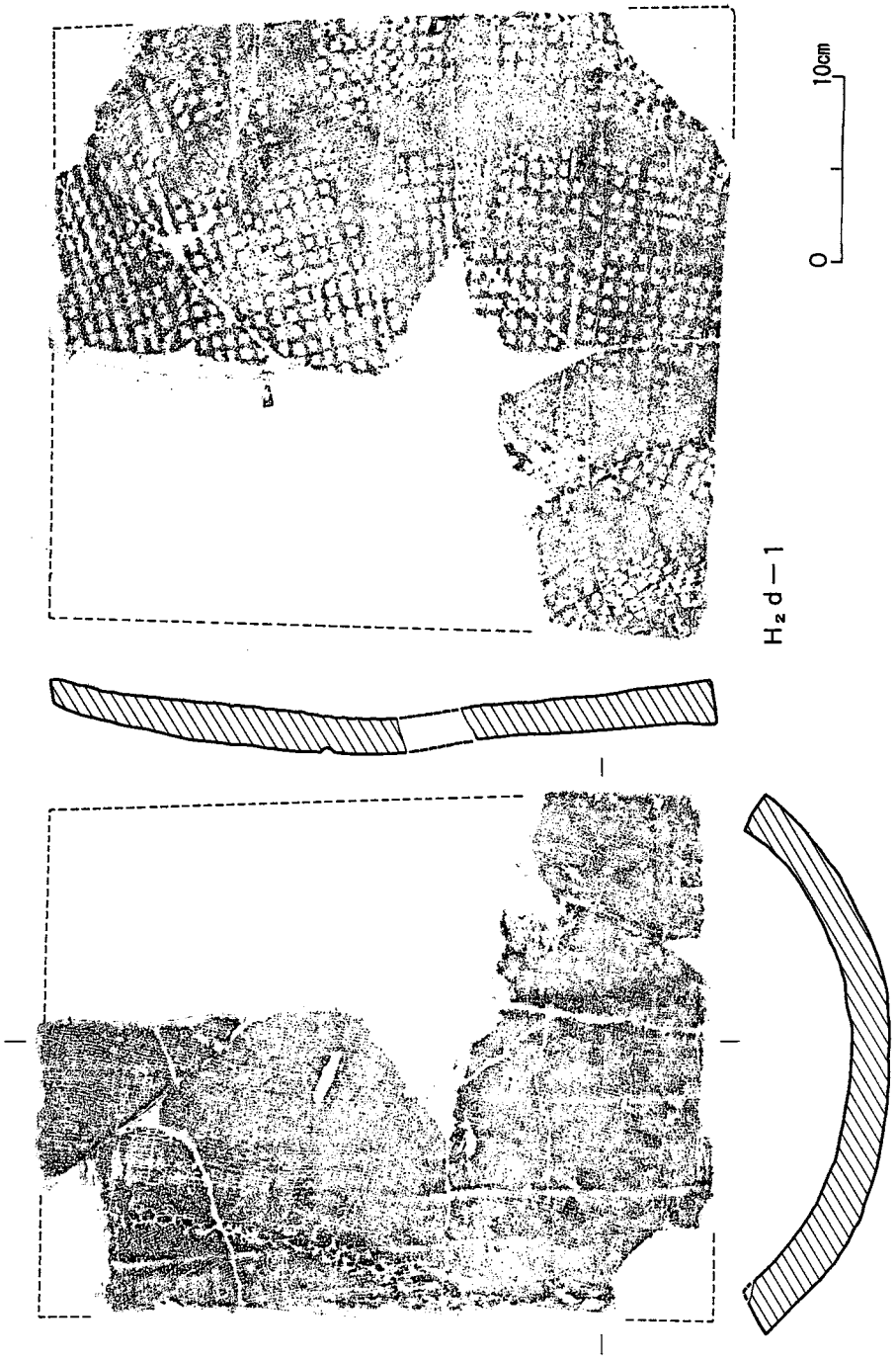
H_2b－2

0　10cm

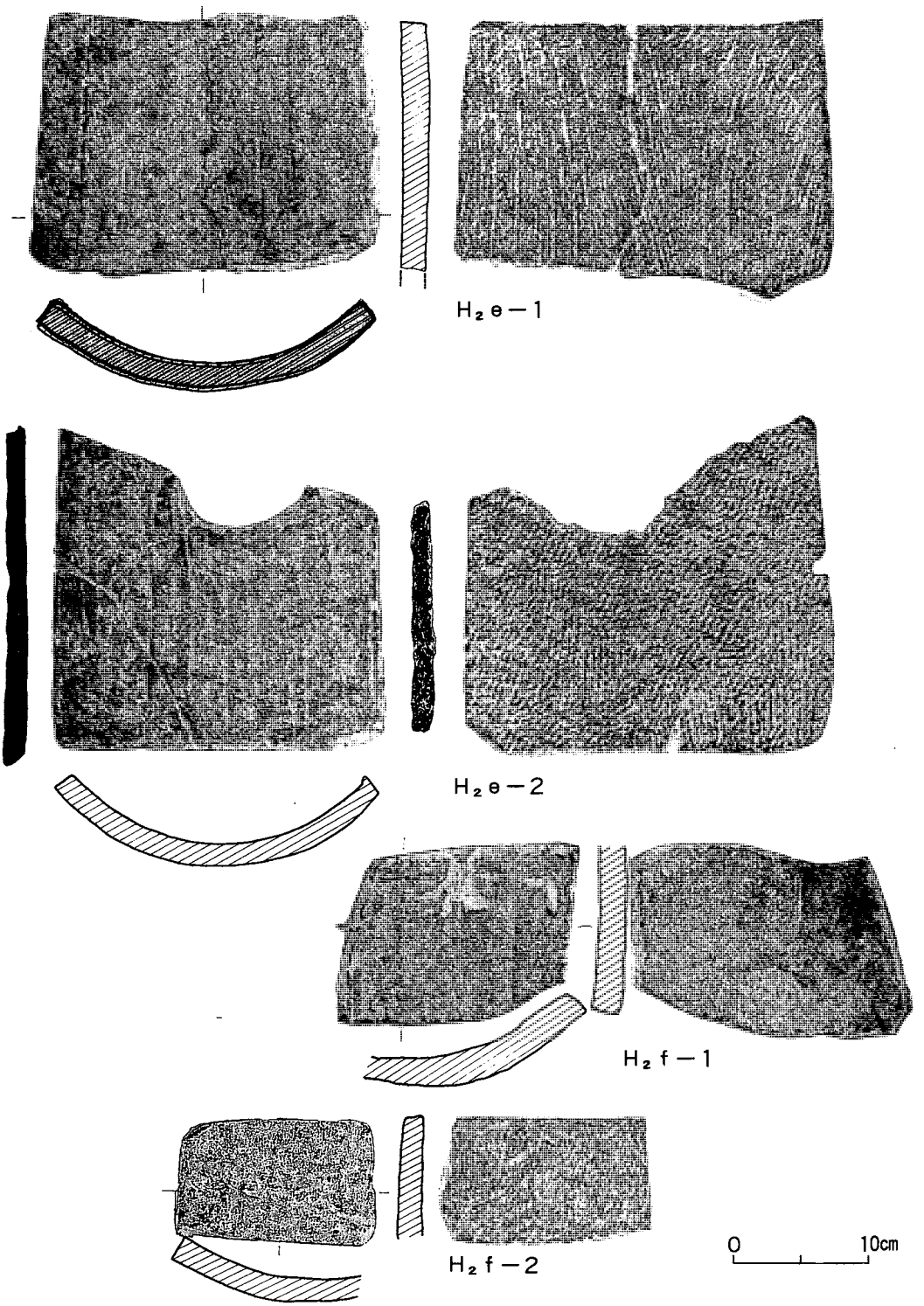
図面19　2号窯出土平瓦実測図(3)　H_2c類　1：5



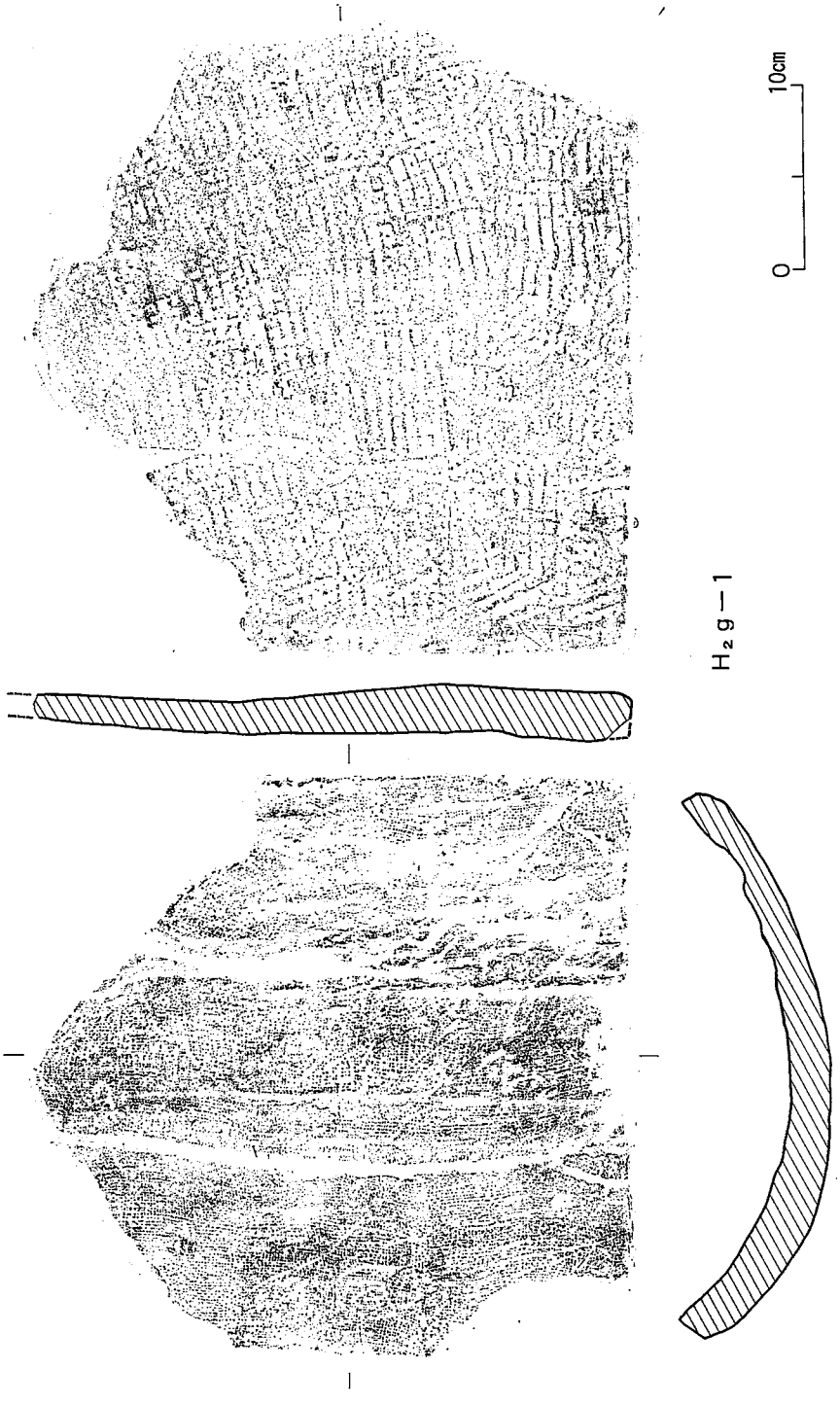
図面20　2号窯出土平瓦実測図(4)　H_2d類　1：4



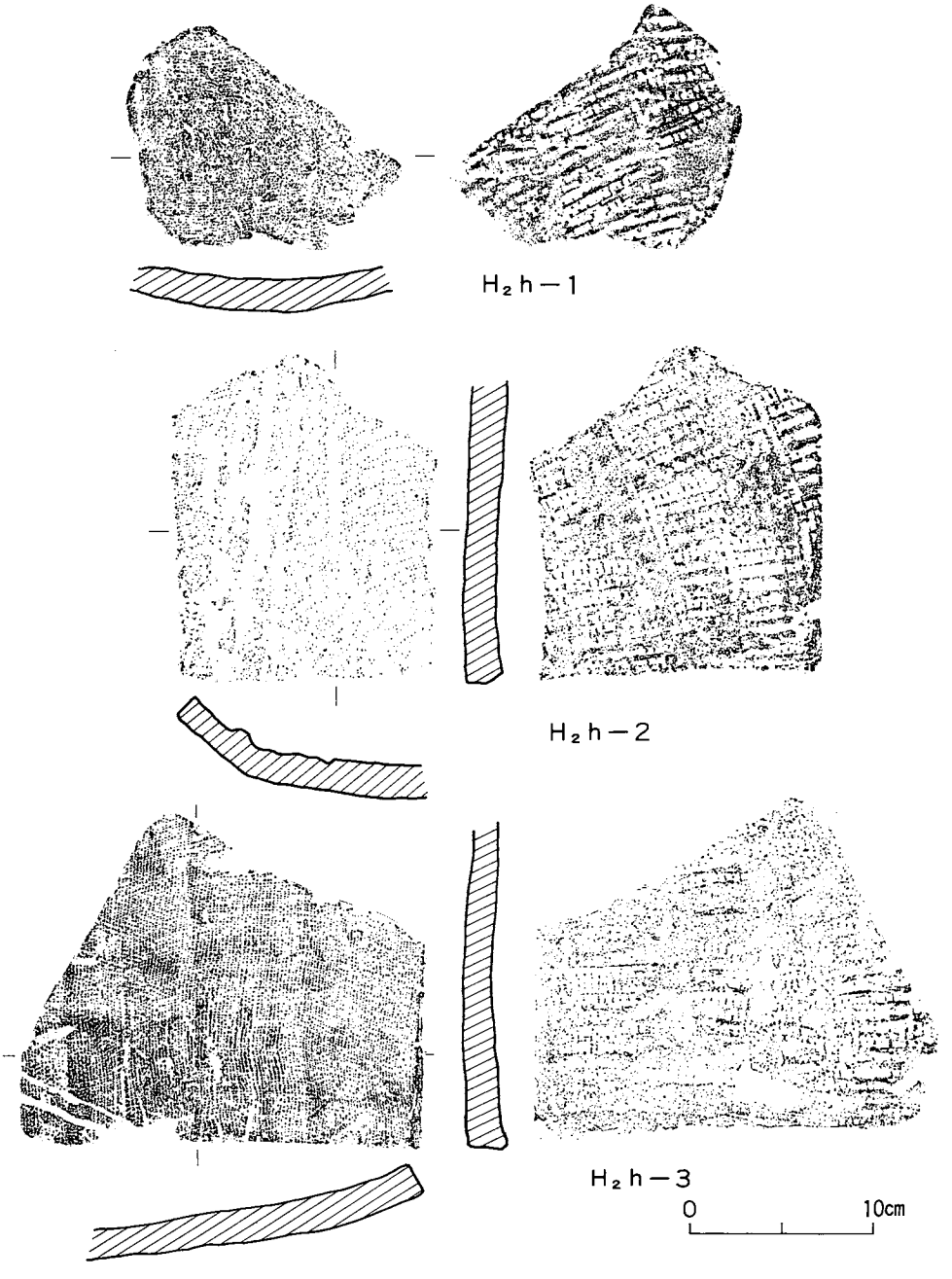
図面21　2号窯出土平瓦実測図(5)　H_2e・f類　1：5



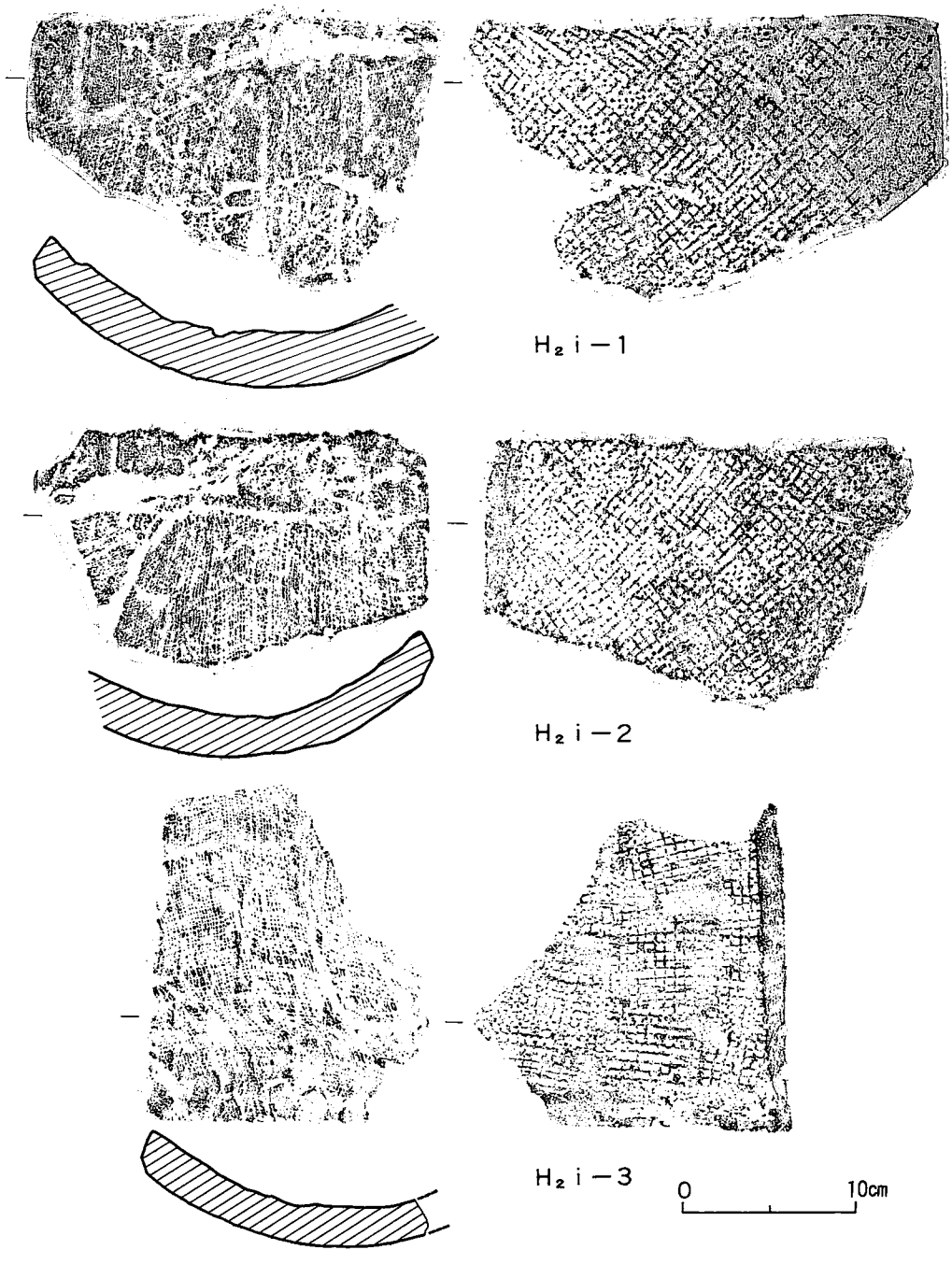
図面22　2号窯出土平瓦実測図(6)　H_2g類　1：4



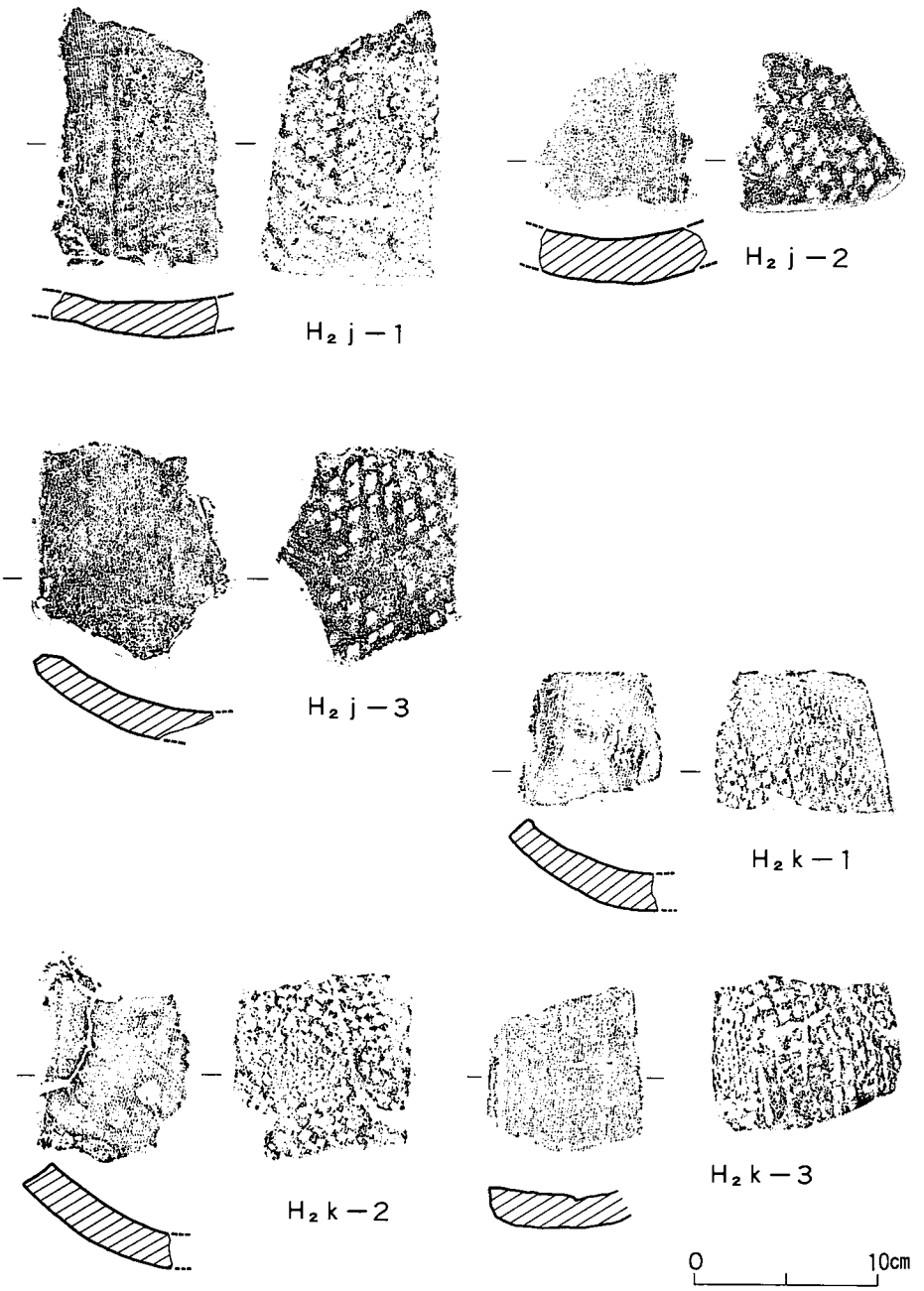
図面23　2号窯出土平瓦実測図(7)　H_2h類　1：4



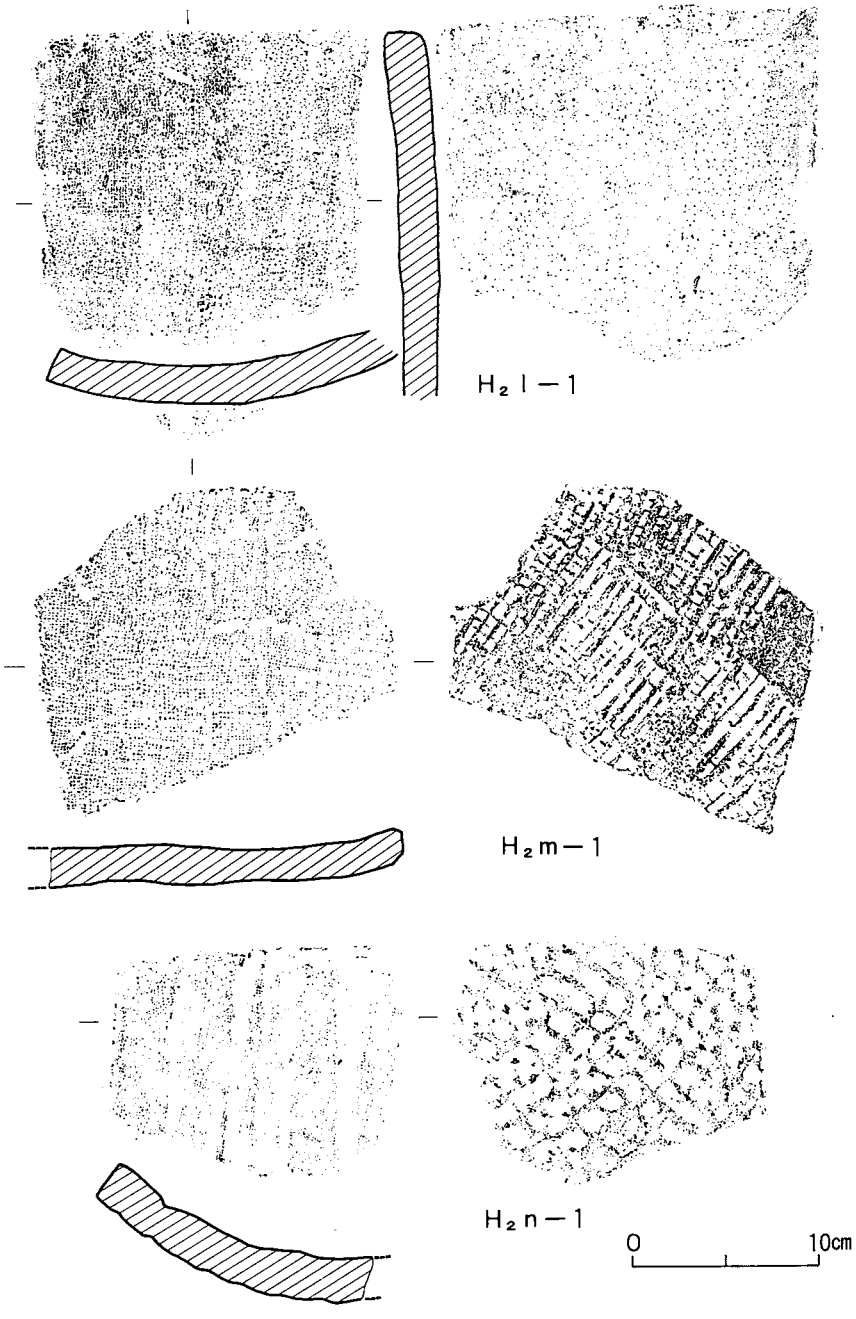
図面24　2号窯出土平瓦実測図(8)　H_2 i 類　1：4



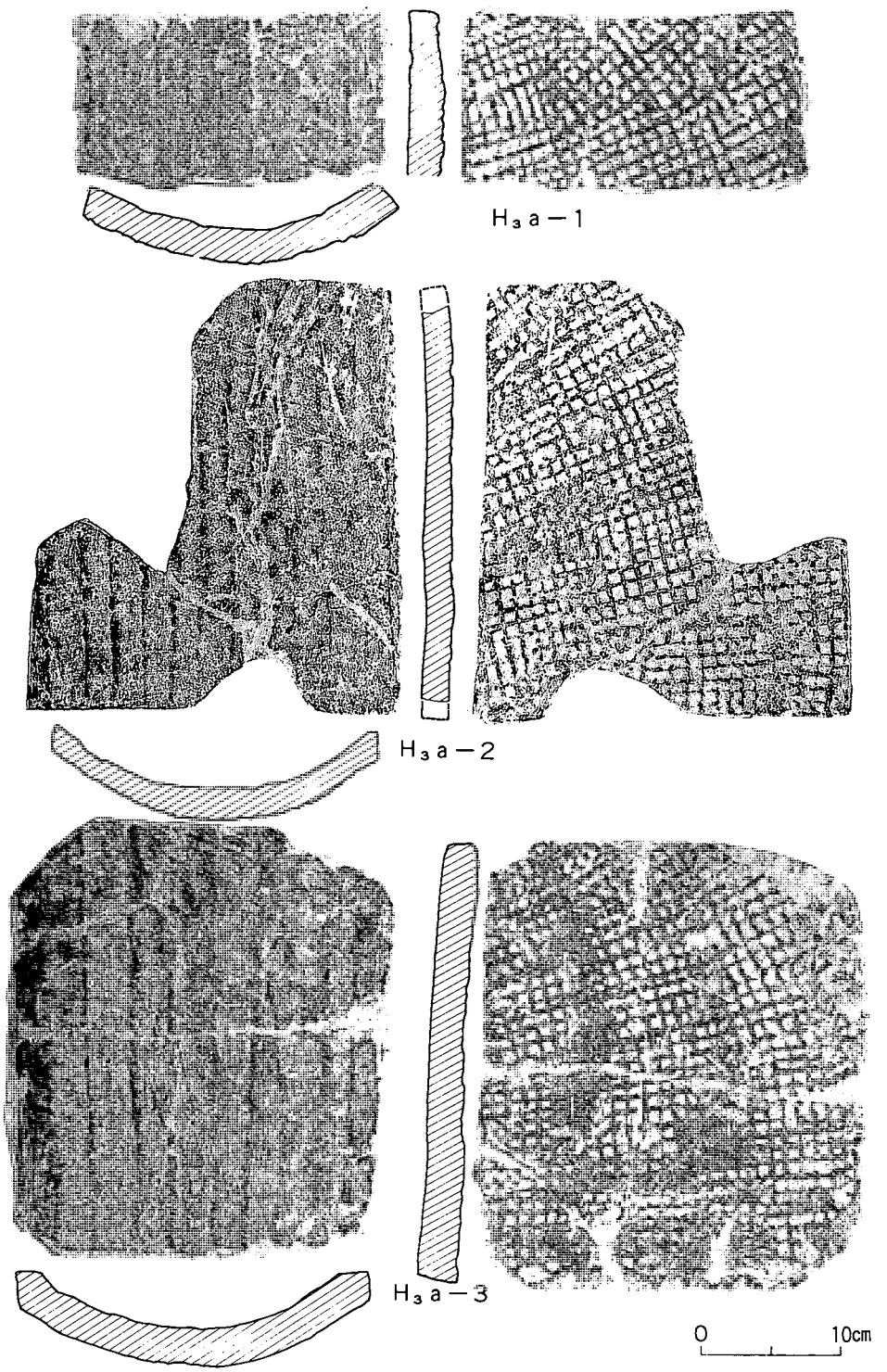
図面25　2号窯出土平瓦実測図(9)　H_2 j・k類　1：4



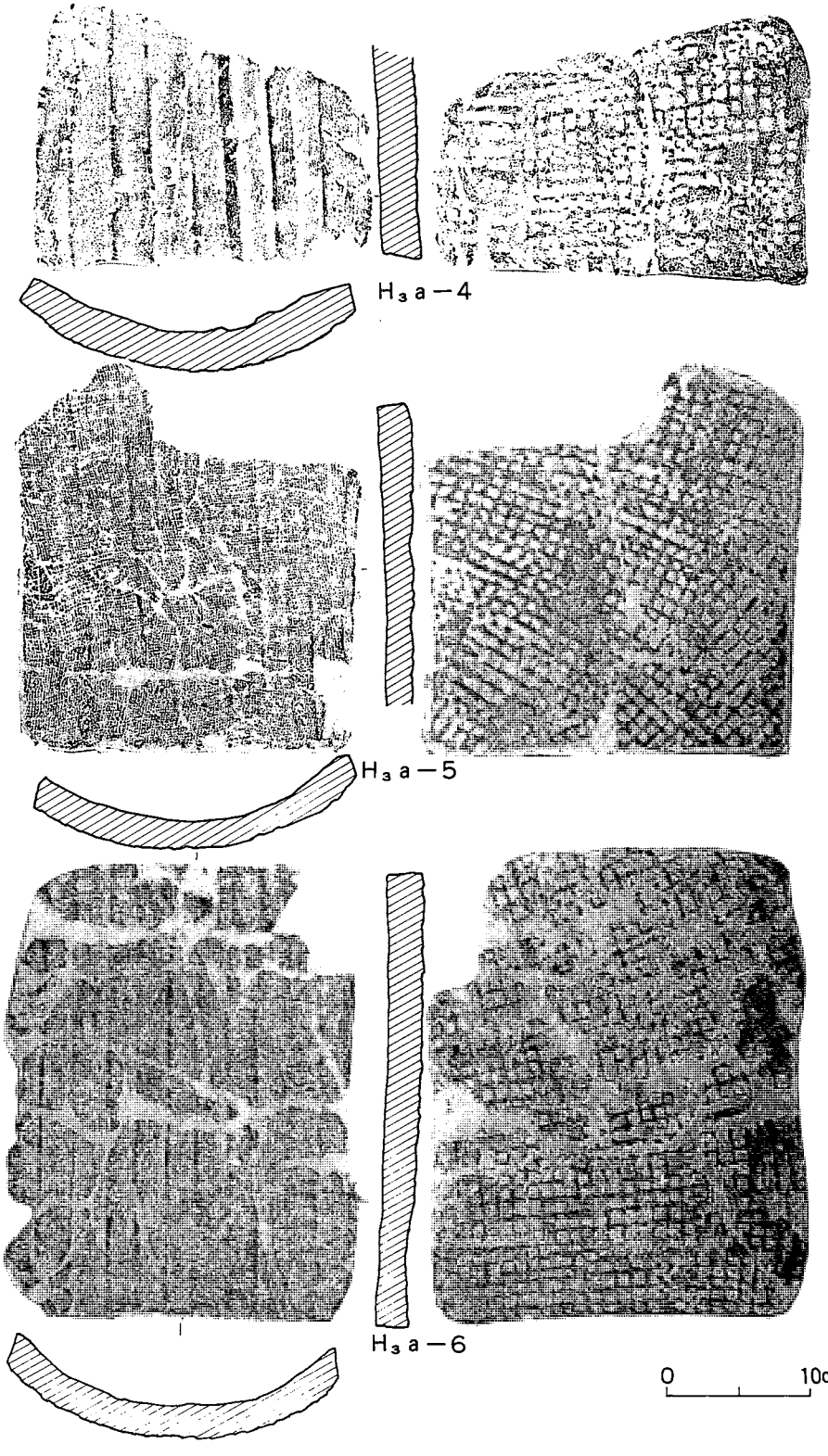
図面26　2号窯出土平瓦実測図(10)　H_2 l・m・n類　1：4



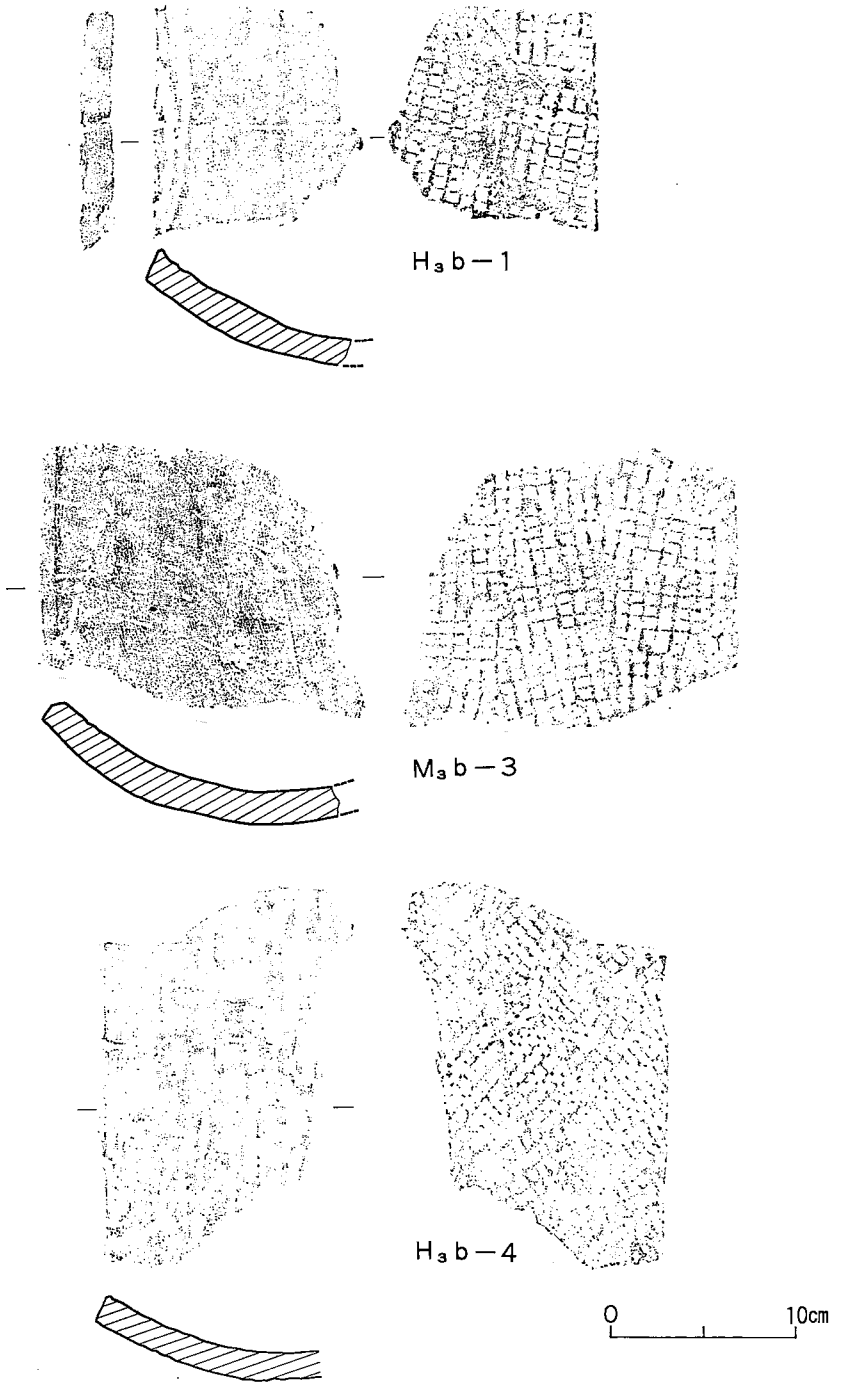
図面27　3号窯出土平瓦実測図(1)　H_3a類　1：5



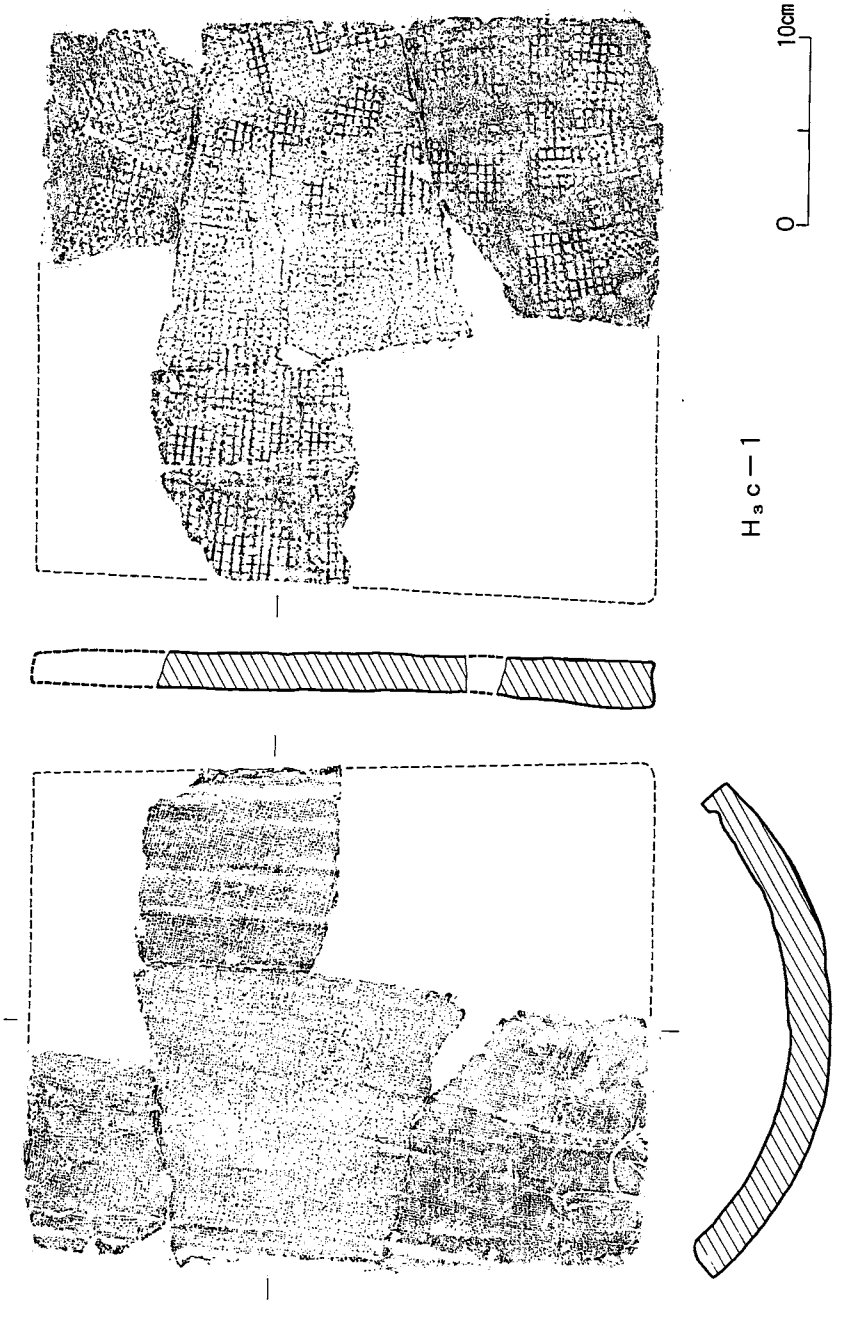
図面28　3号窯出土平瓦実測図(2)　H_3a類　1：5



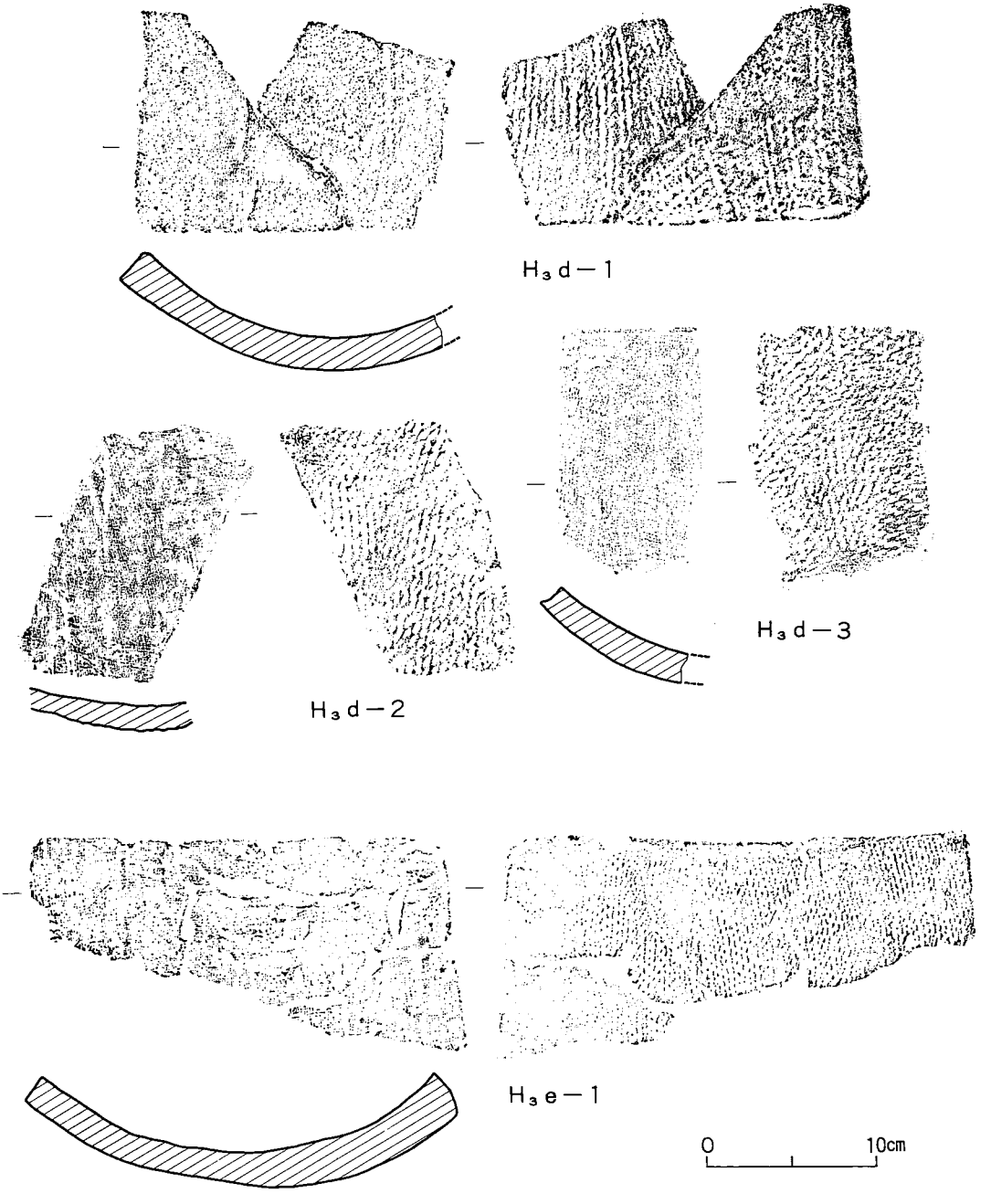
図面29　3号窯出土平瓦実測図(3)　H_3b類　1：4



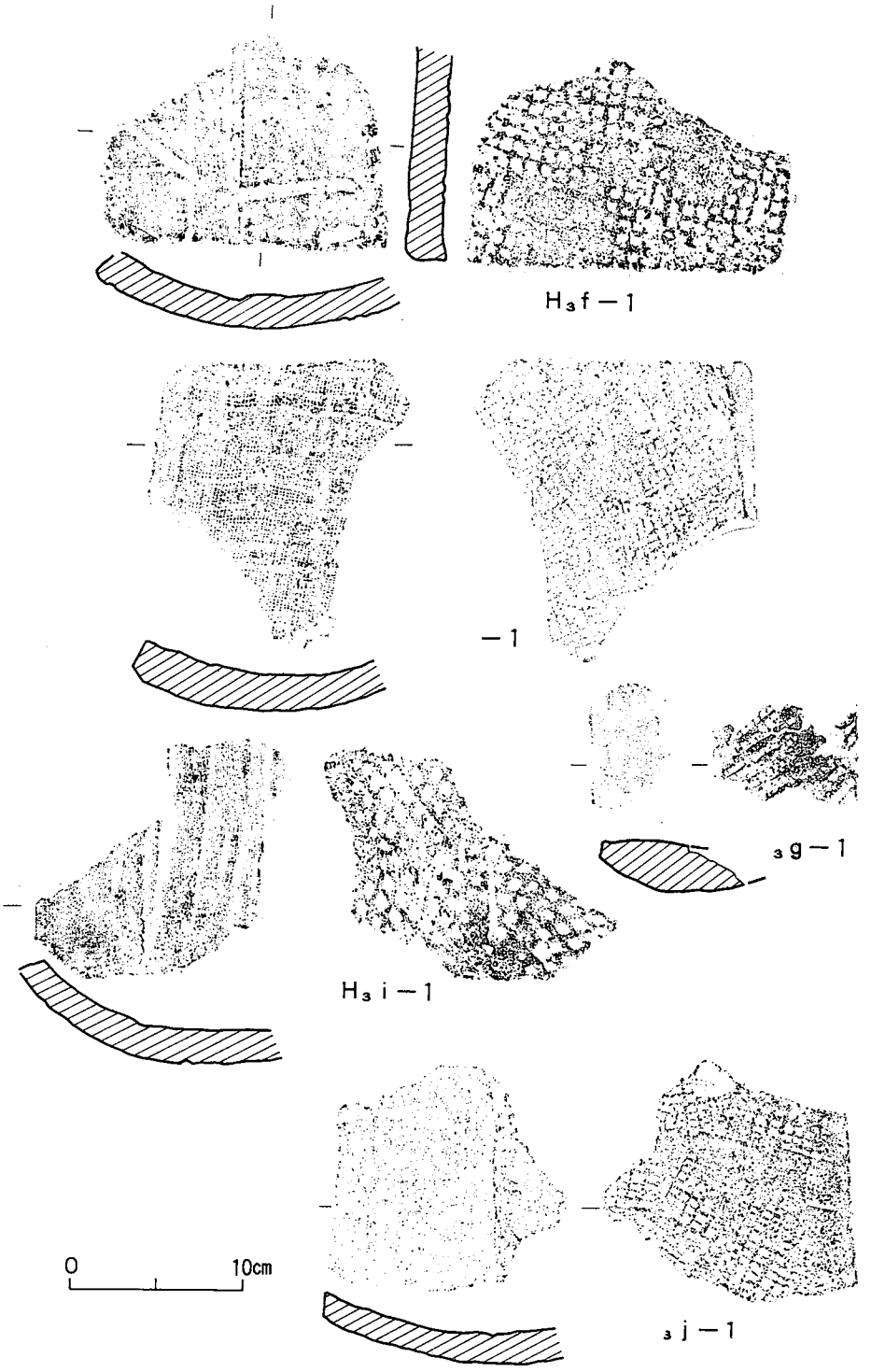
図面30　3号窯出土平瓦実測図(4)　Hₐc類　1：4



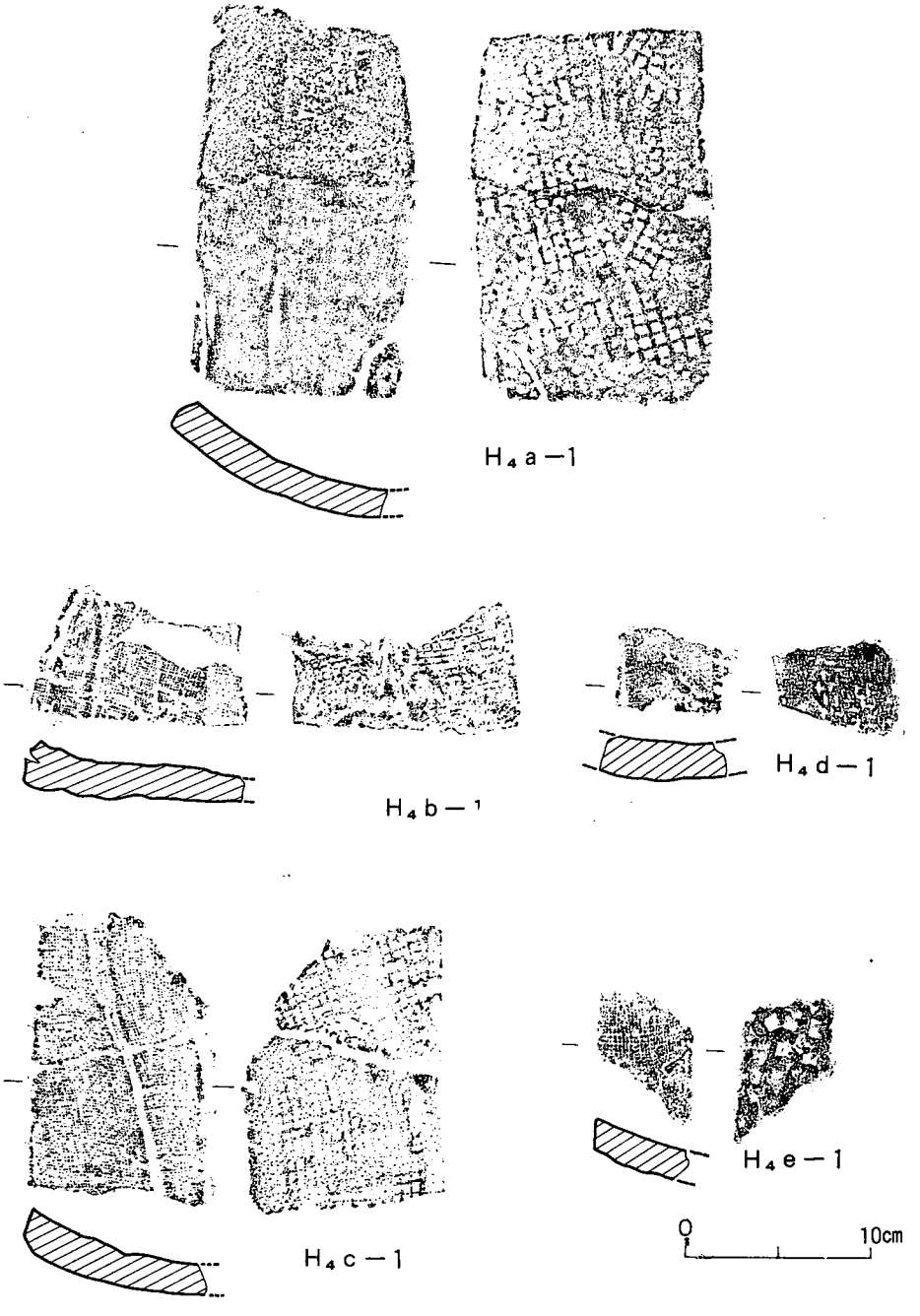
図面31　3号窯出土平瓦実測図(5)　H_3d・e類　1：4



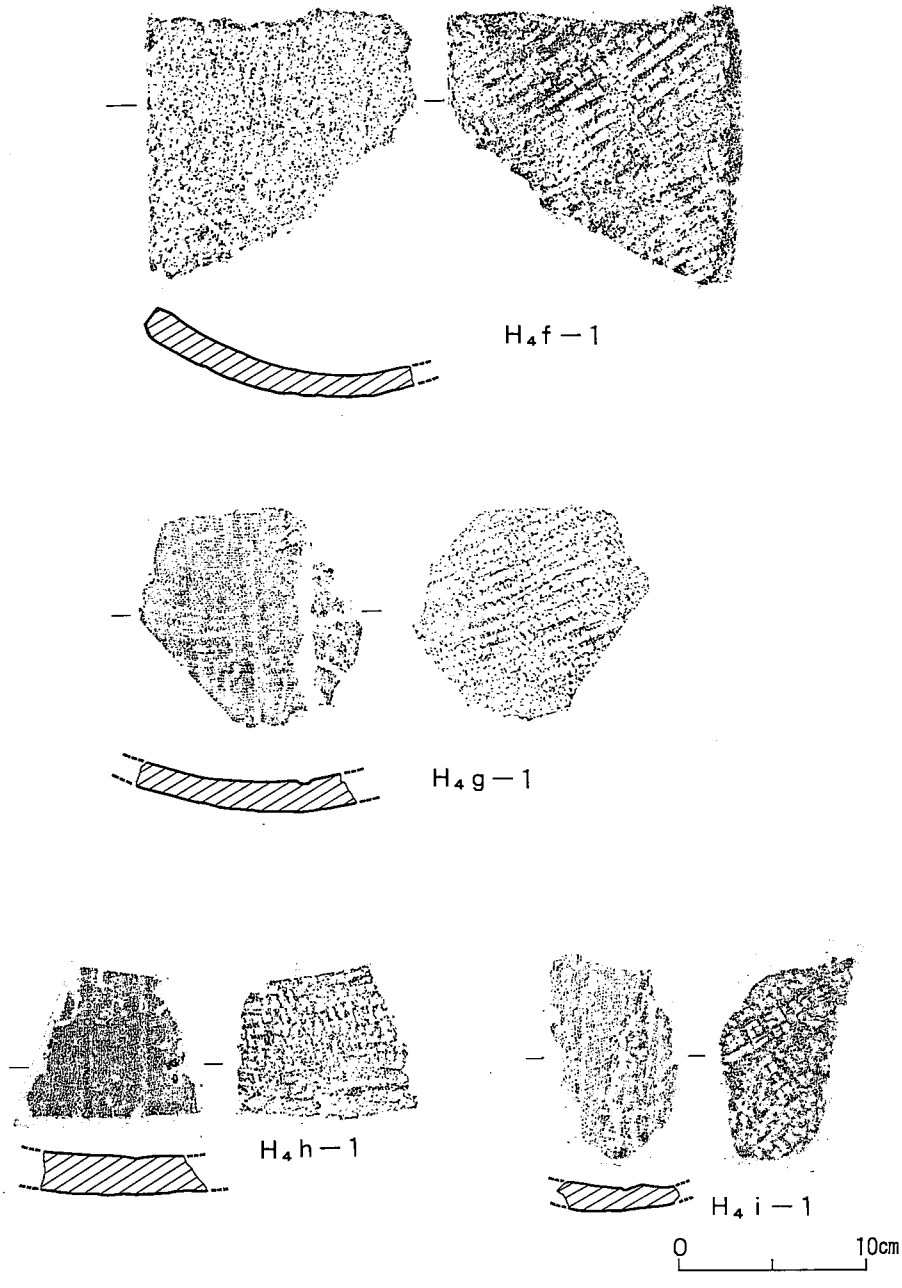
図面32　3号窯出土平瓦実測図(6)　H_3f～j類　1：4



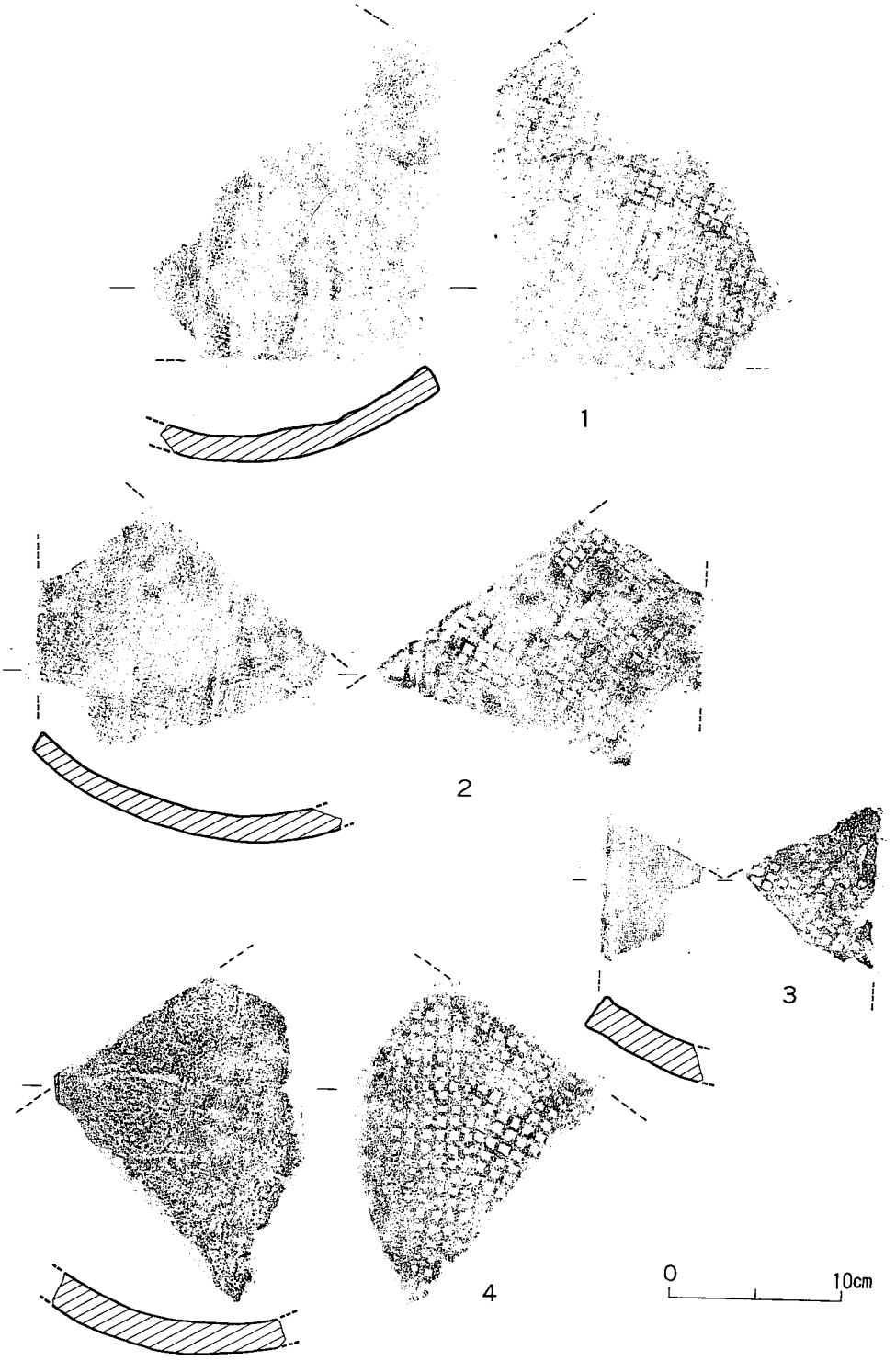
図面33　窯様遺構出土平瓦実測図(1)　H_4a～e類　1：4



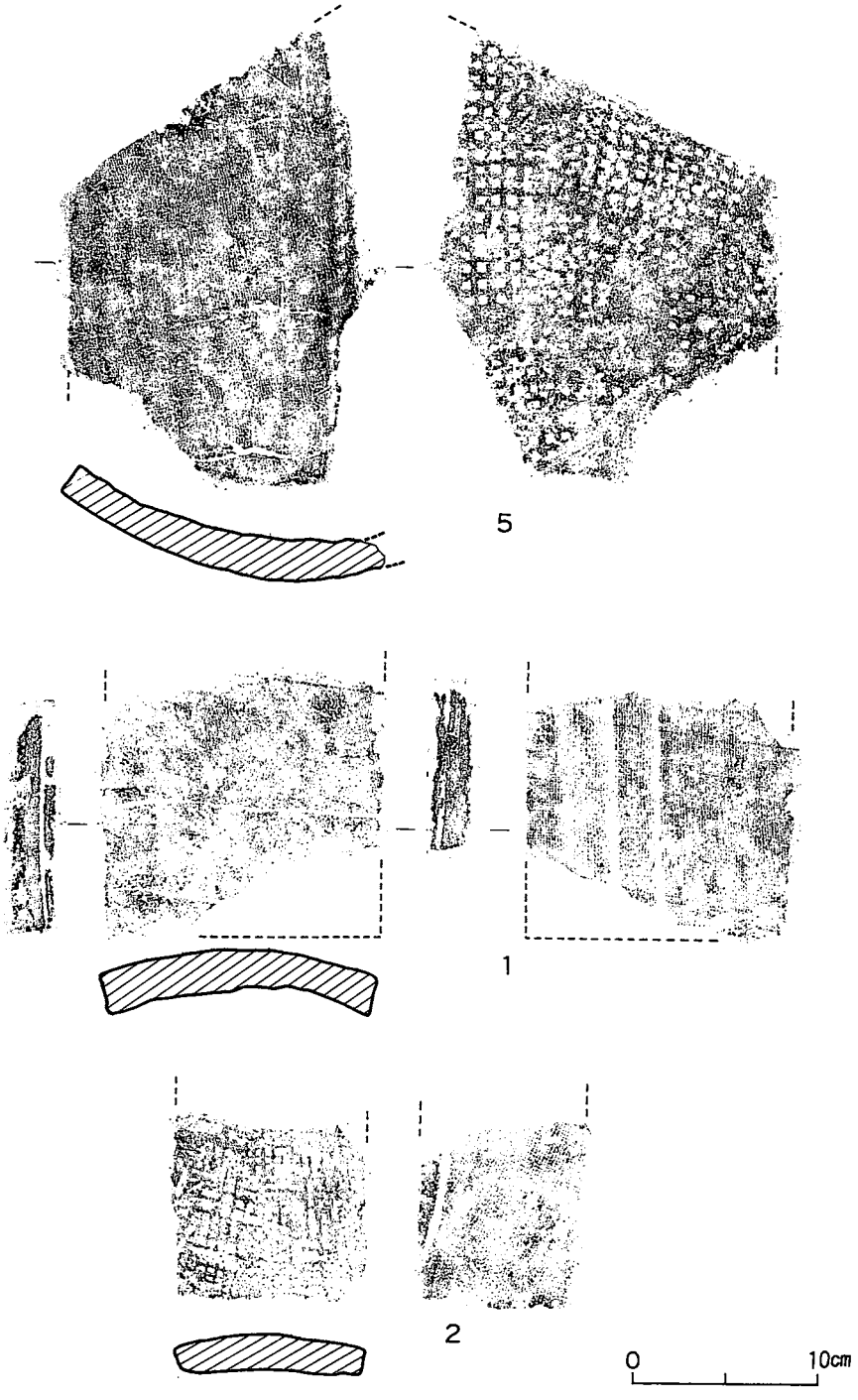
図面34　窯様遺構出土平瓦実測図(2)　H_4 f～i 類　1：4



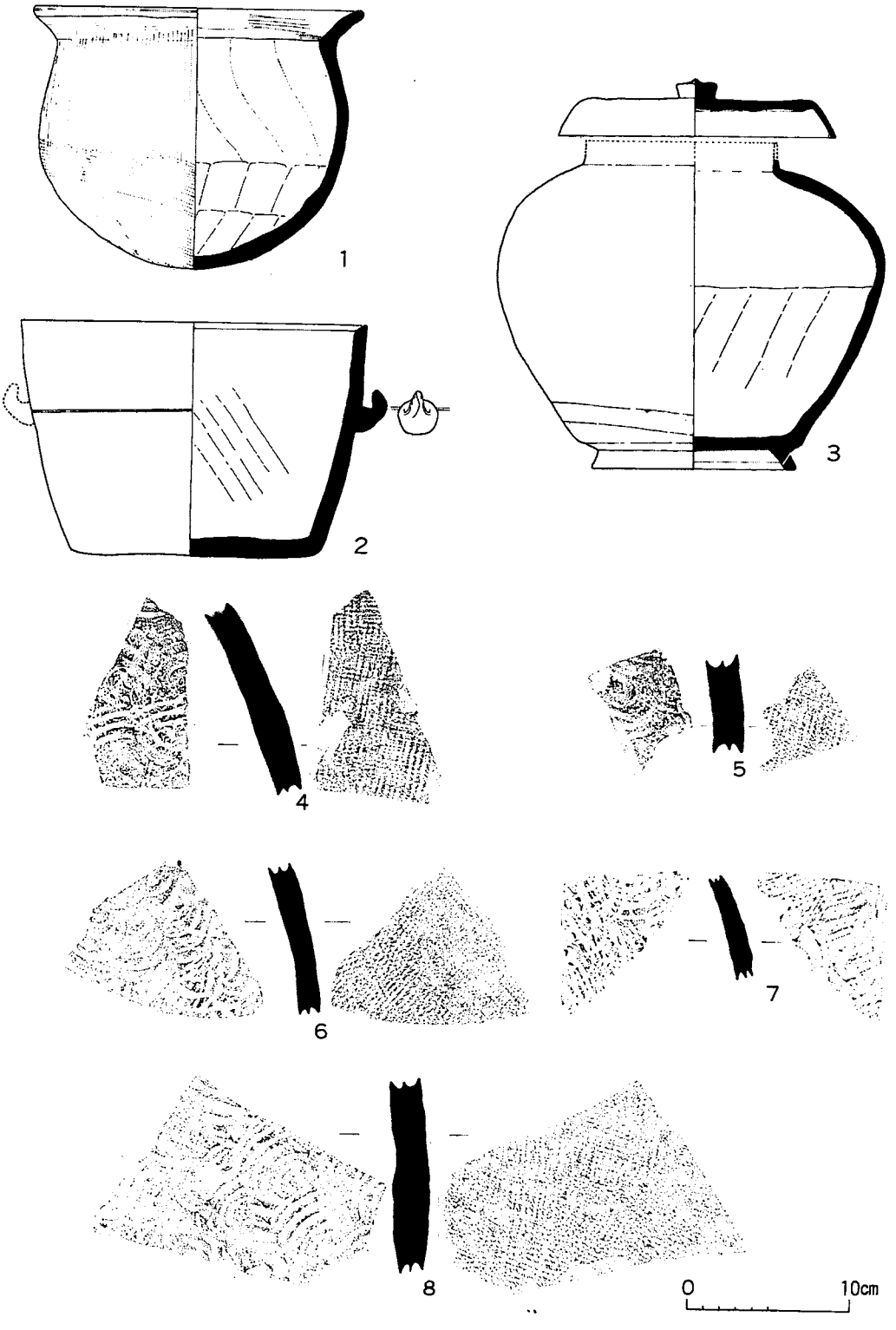
図面35　2号窯出土隅切平瓦実測図　1：4



図面36　3号窯出土隅切平瓦・2号窯出土熨斗瓦実測図　1：4

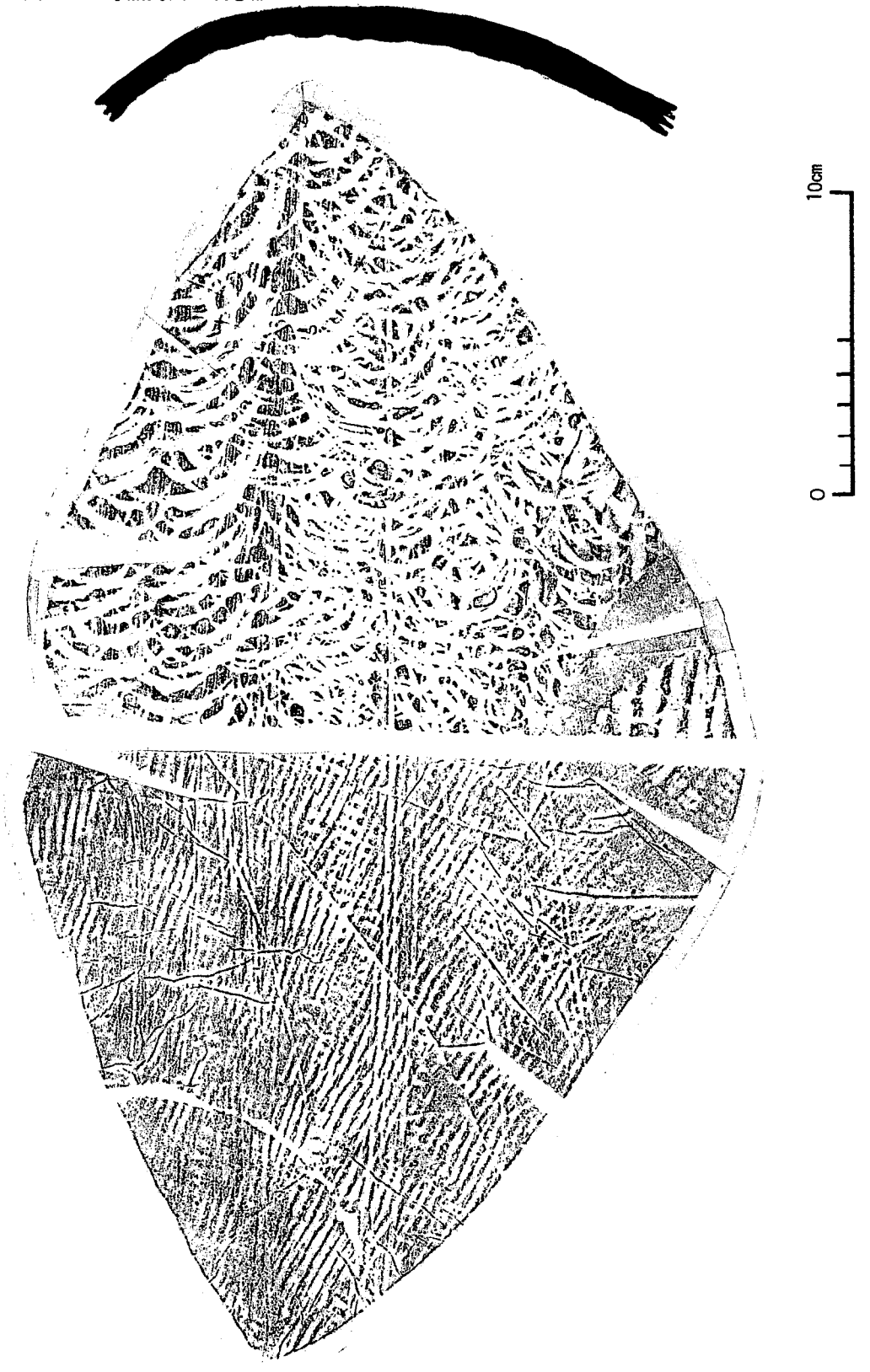


図面37　窯内・１溝・13区出土土器　１：４

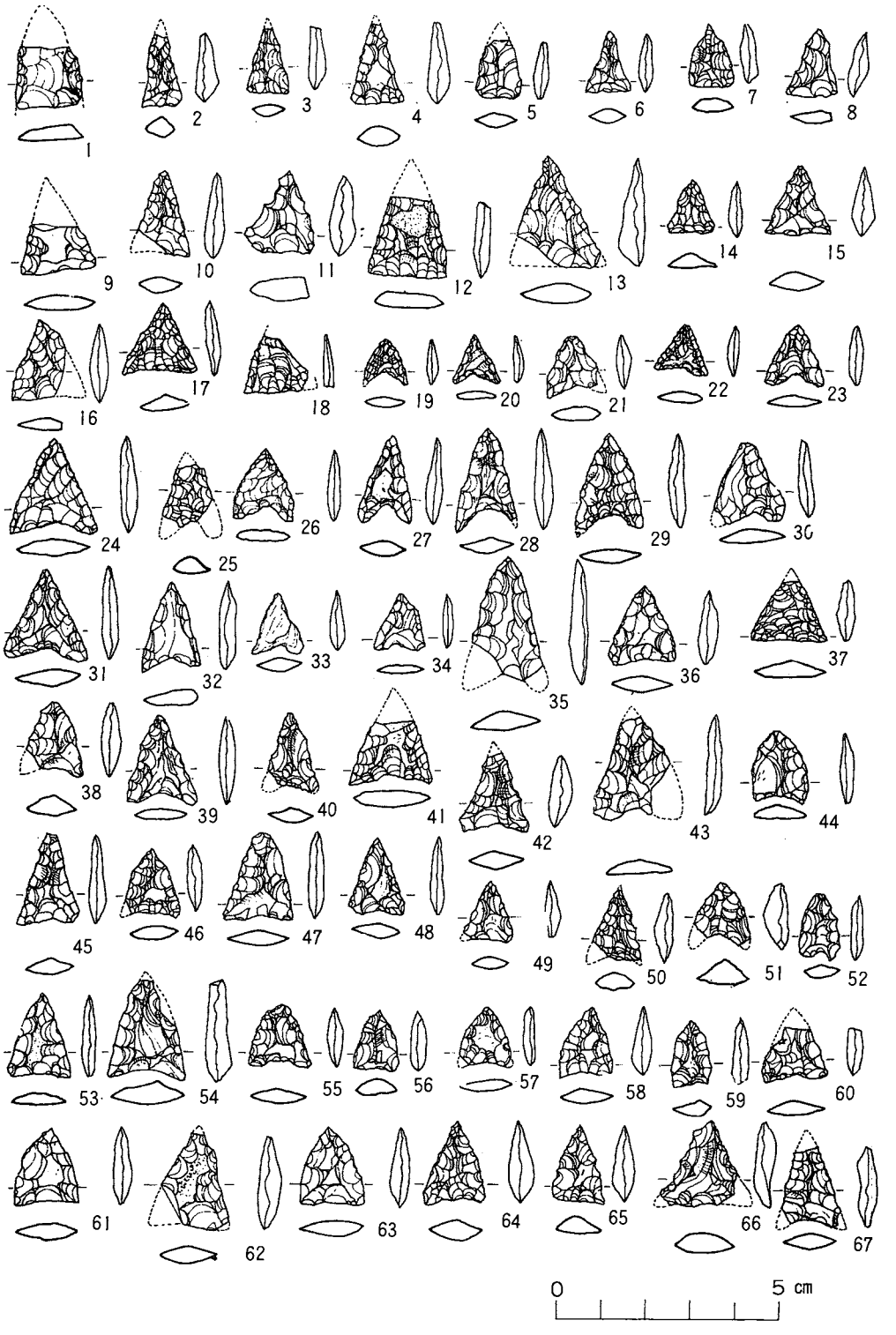


１は２号窯、２は３号窯、３・４・６・８は13区、５は１溝出土

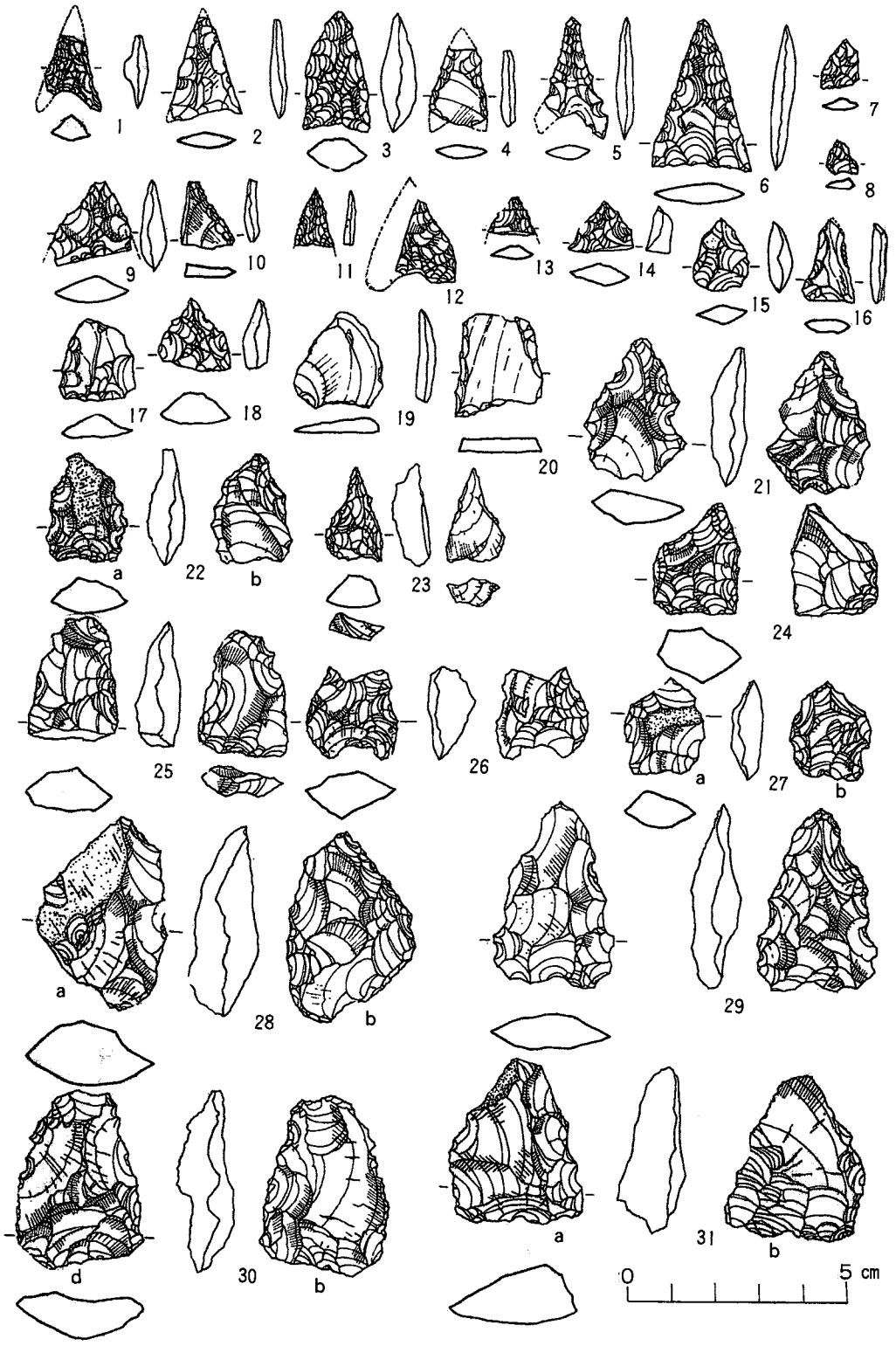
図面38　２号窯内出土須恵器



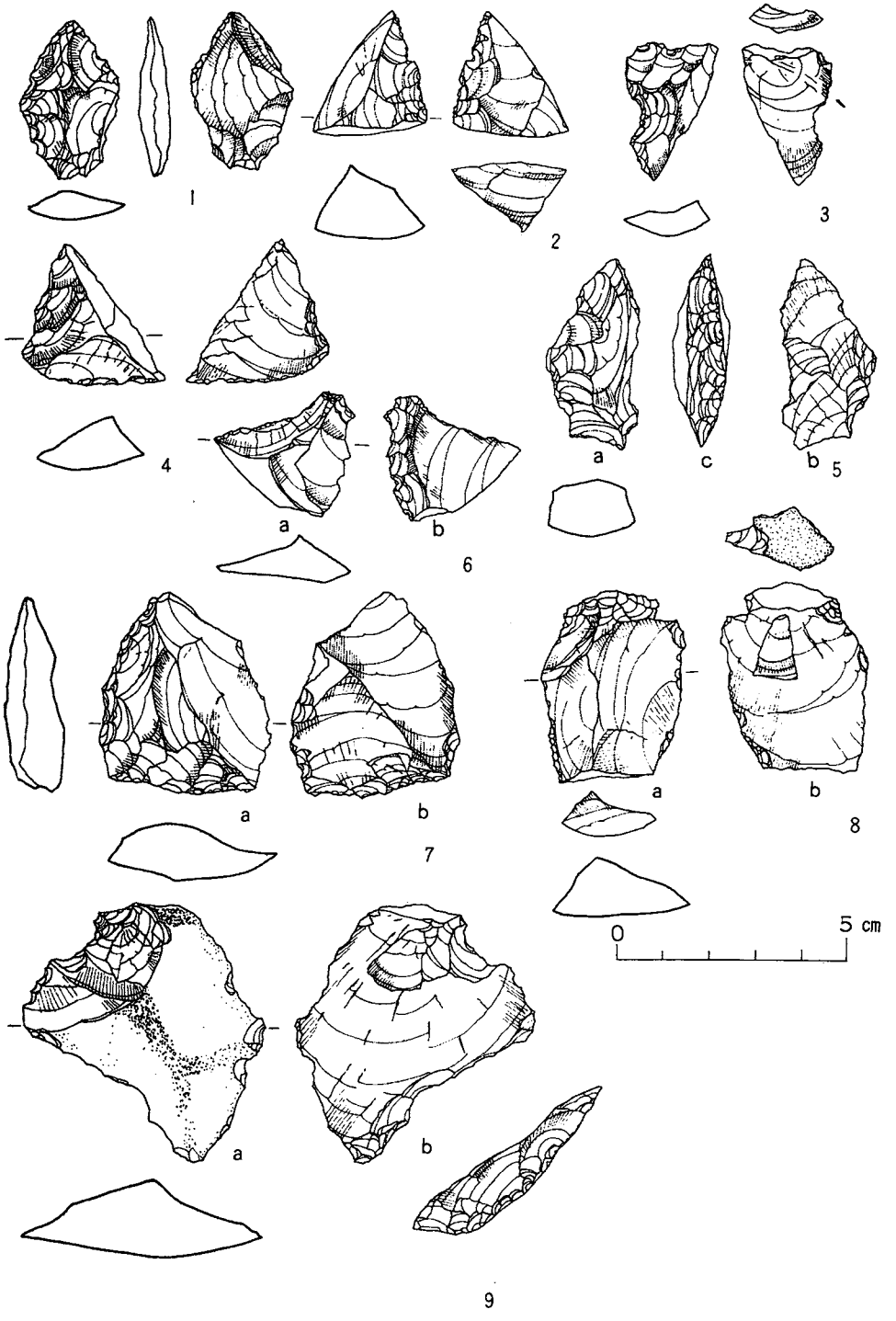
図面39　石器実測図(1)　2：3



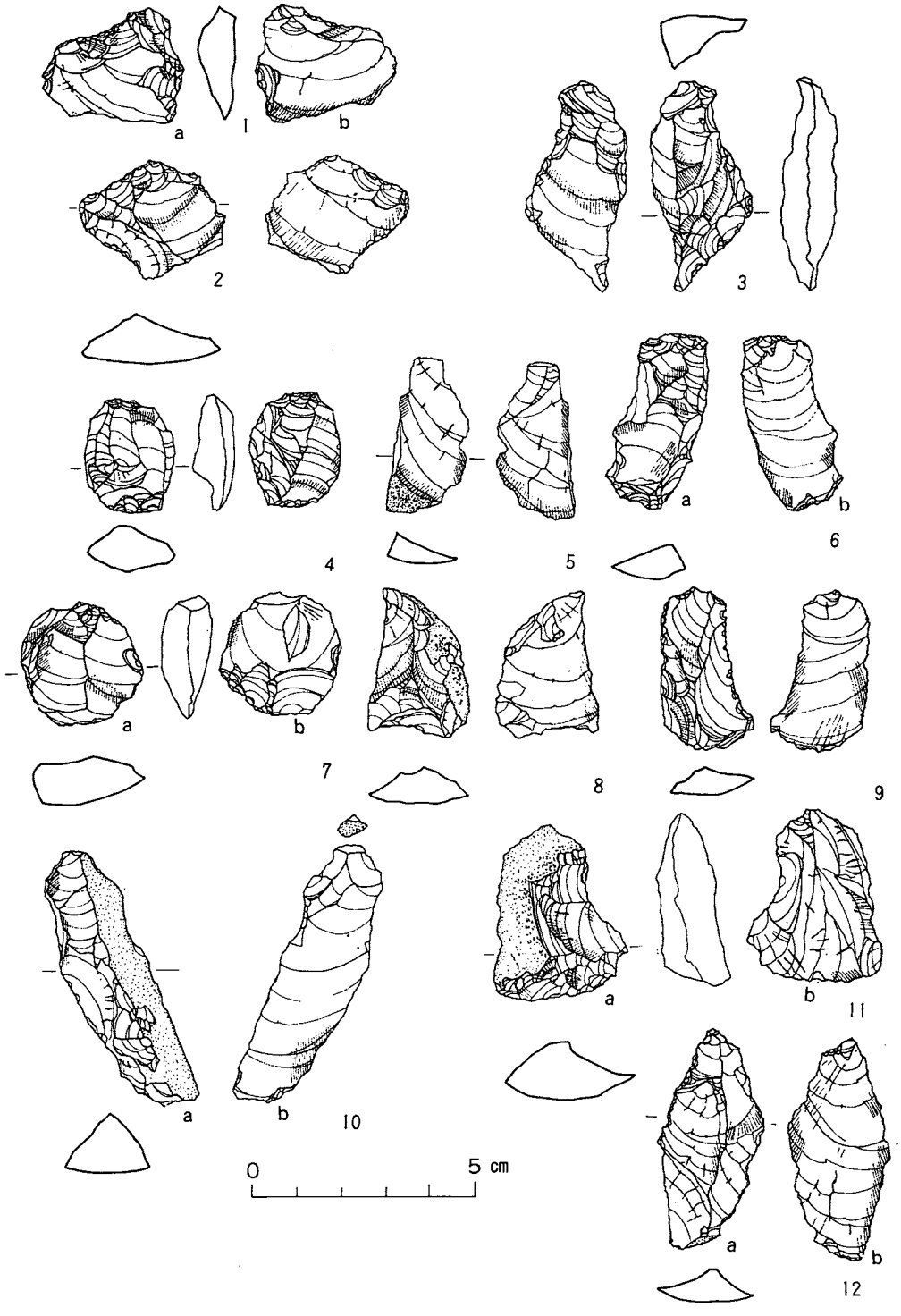
図面40　石器実測図(2)　2：3



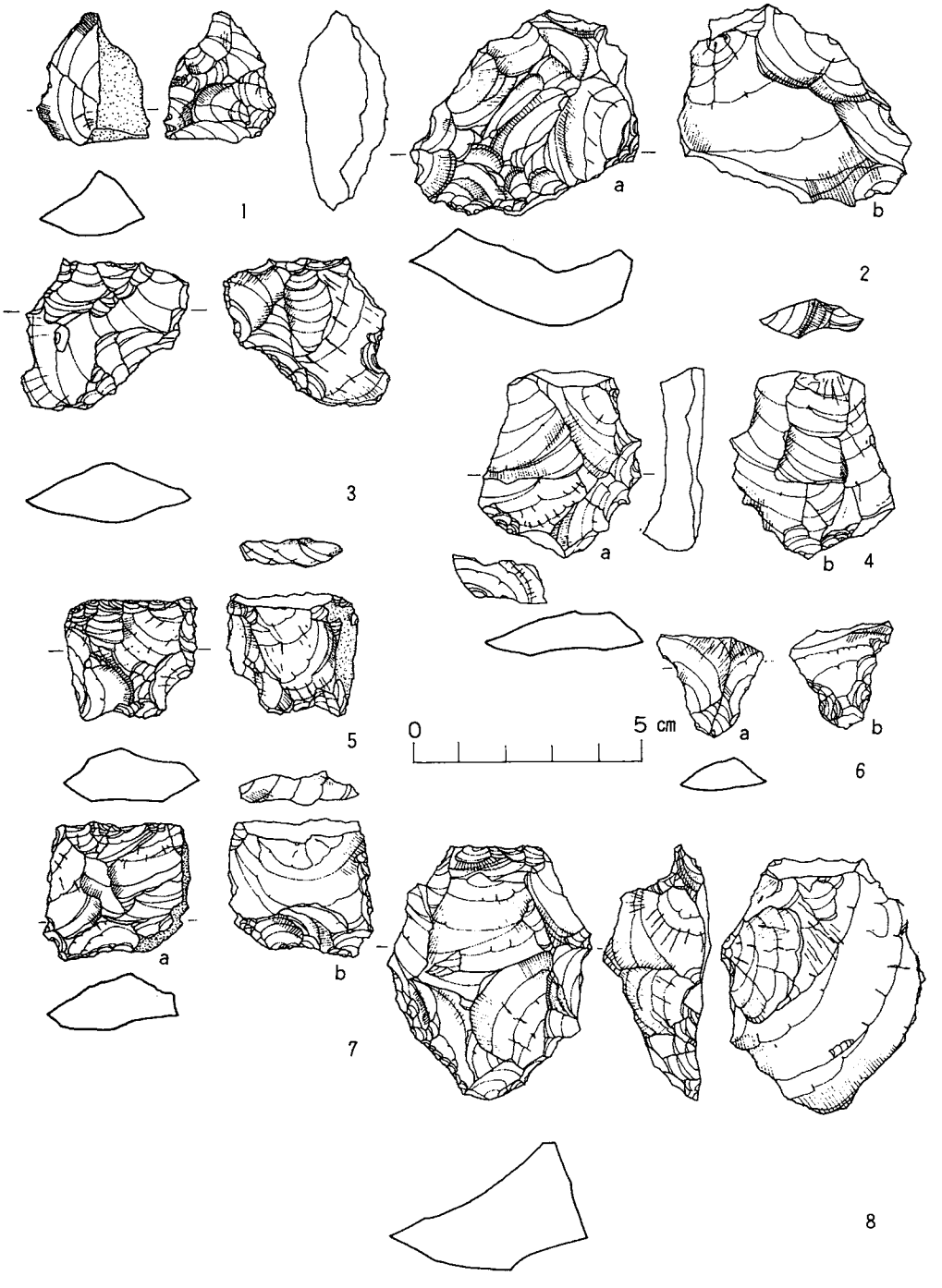
図面41　石器実測図(3)　2：3



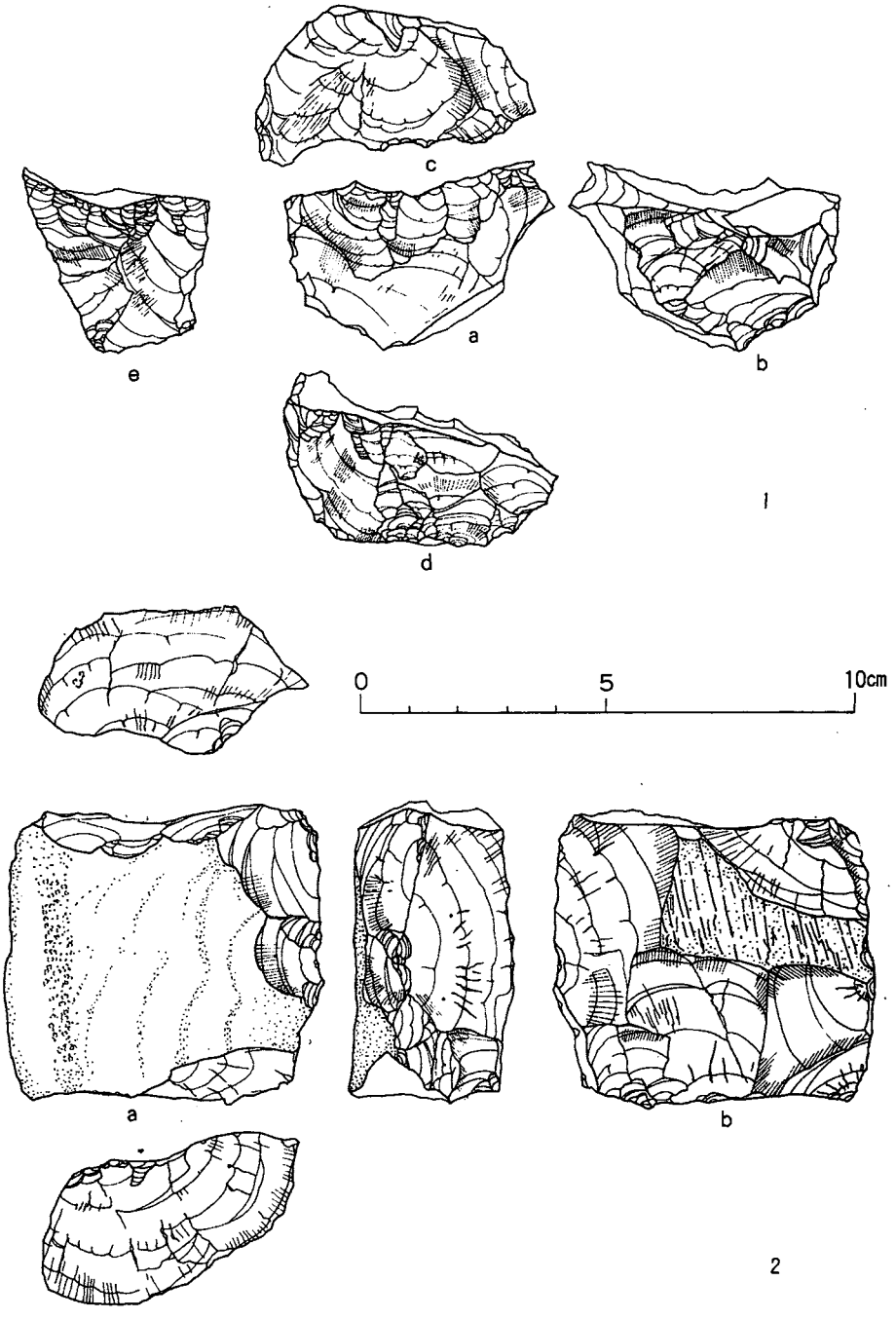
図面42　石器実測図(4)　2：3



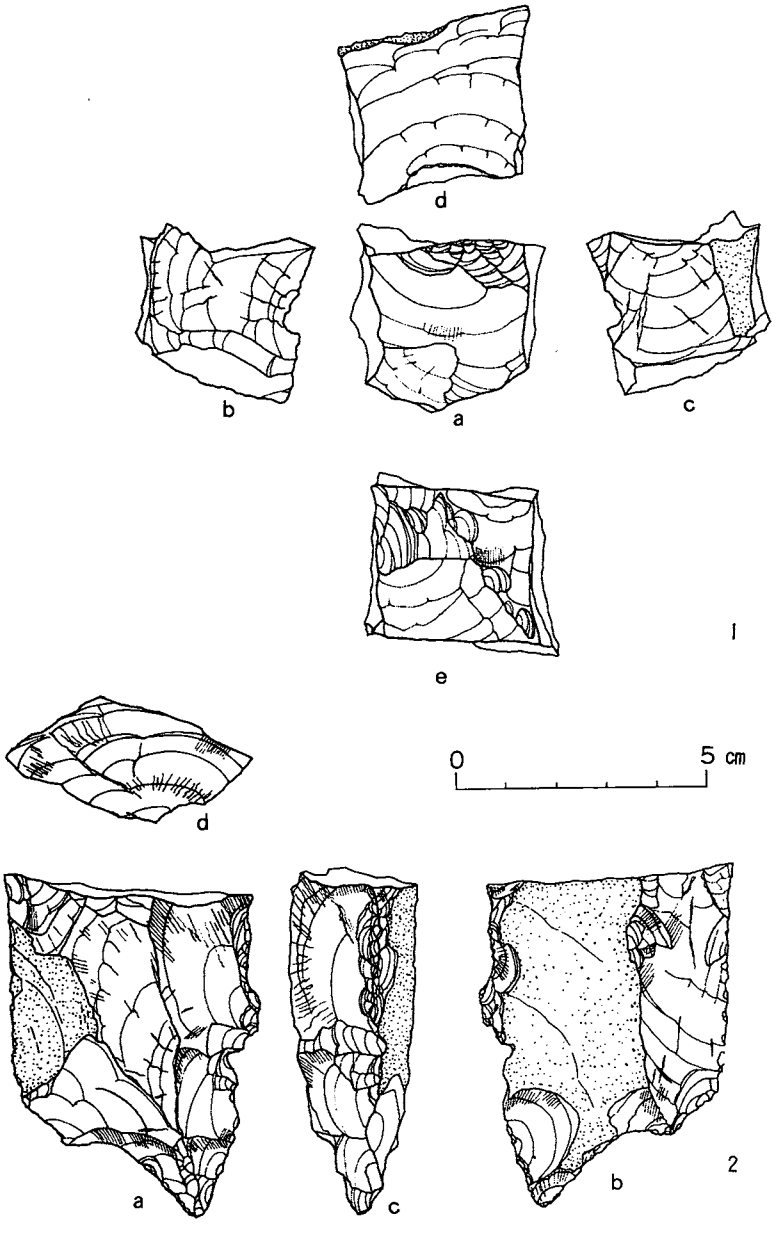
図面43　石器実測図(5)　2：3



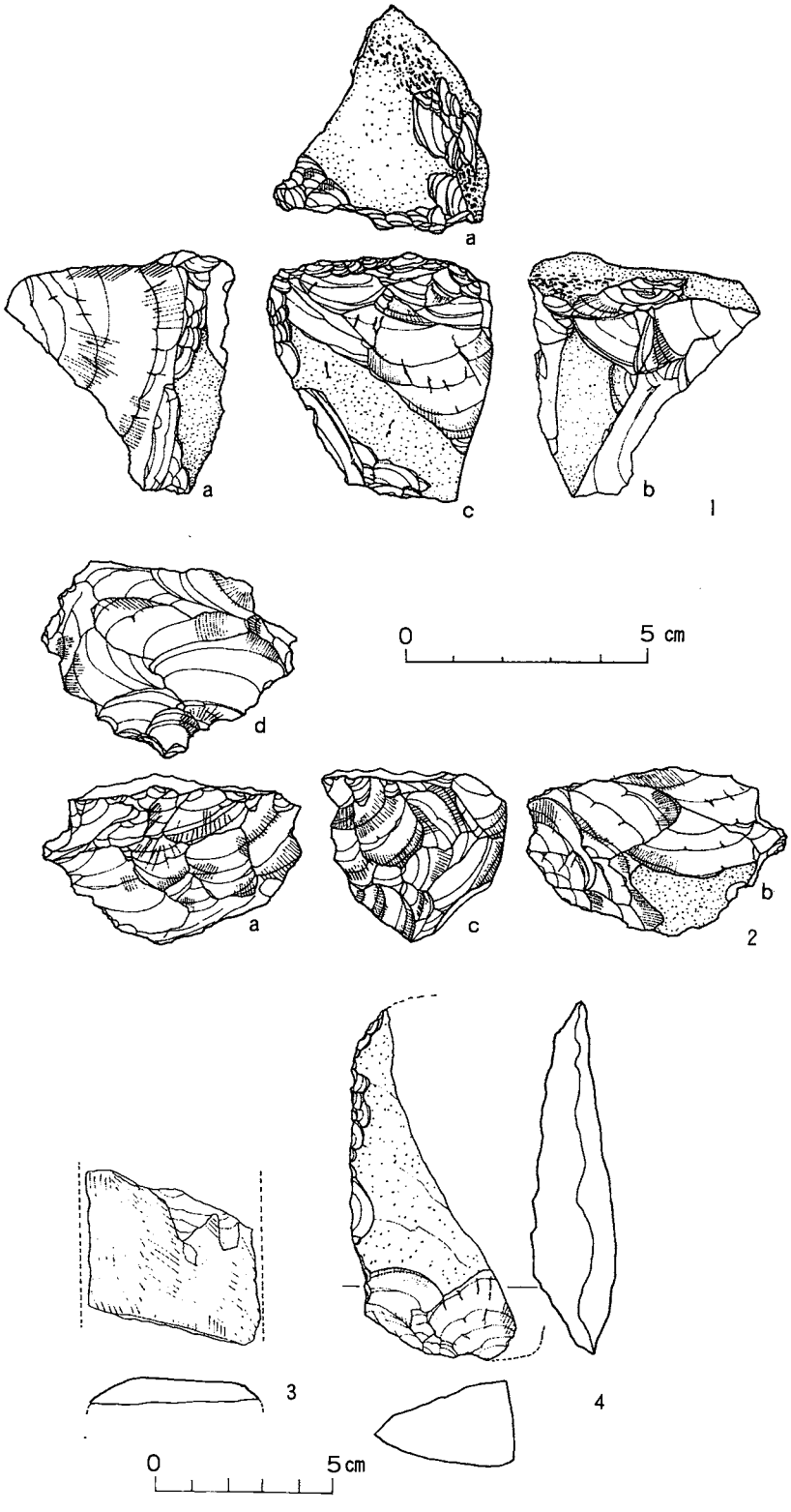
図面44　石器実測図(6)　2：3



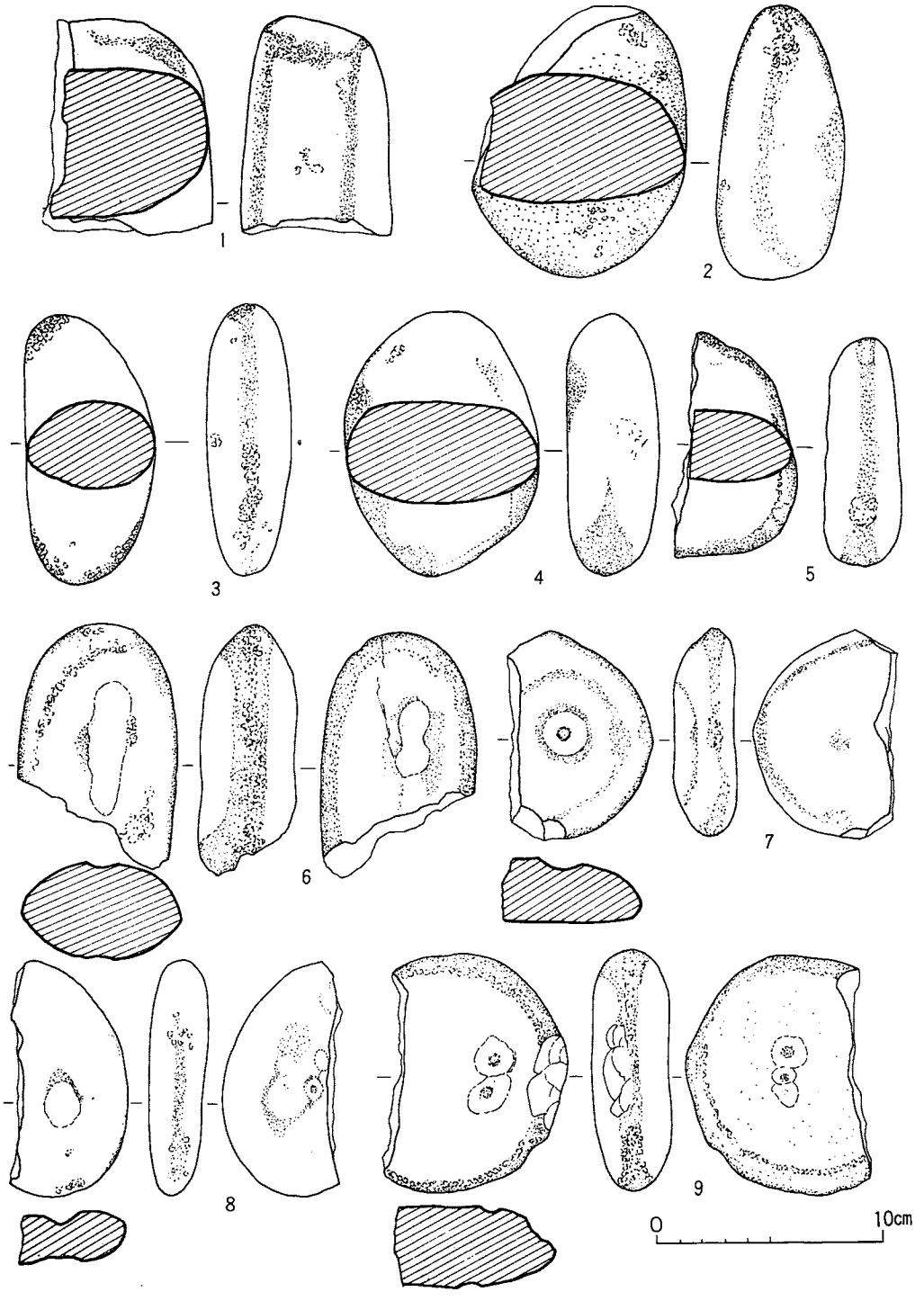
図面45　石器実測図(7)　2：3



図面46　石器実測図(8)　2：3



図面47　石器実測図(9)　1：3



図面48　石器実測図(10)　1：3

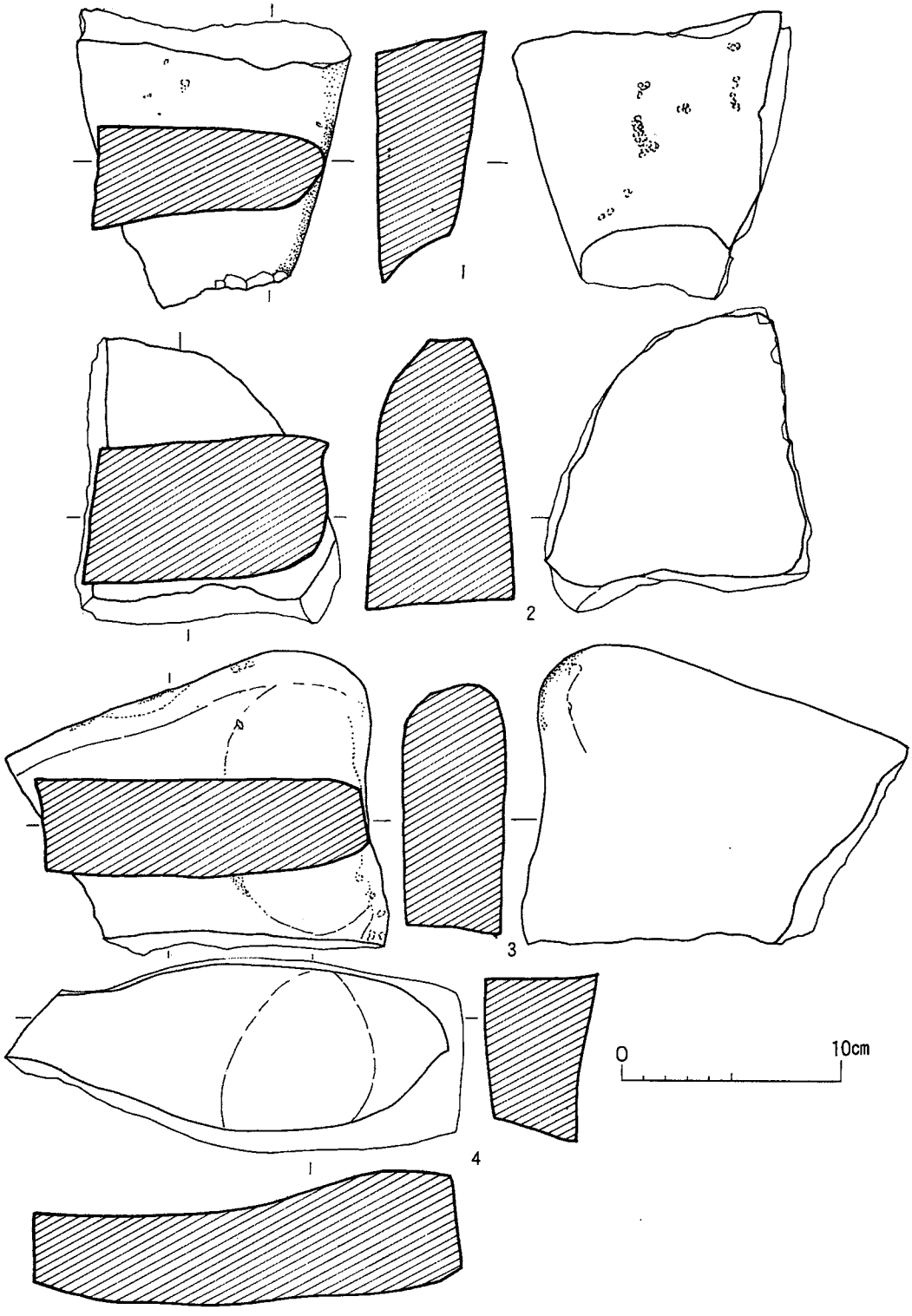


図　版

PL. 1 軒 丸 瓦

NM1

MN1

NM2

NM2

NM9

MN9

PL. 2　軒丸瓦・蔵骨器・須恵器

1

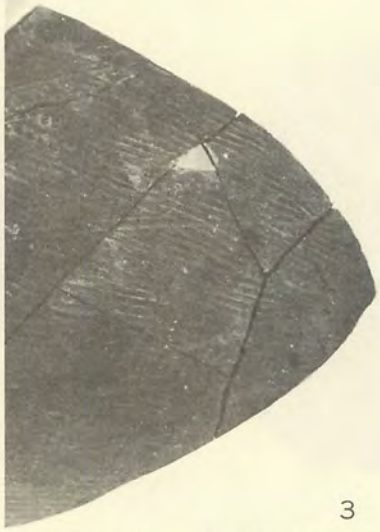
NM4

NM4

2

NM6

3



3

NM8

NM10

1　陳内廃寺出土軒丸瓦　　2　平原３窯内出土土器　　3　平原２窯内出土土器

PL. 3 軒 平 瓦

NH2

NH25

NH25

NH2

NH26

NH2

NH26

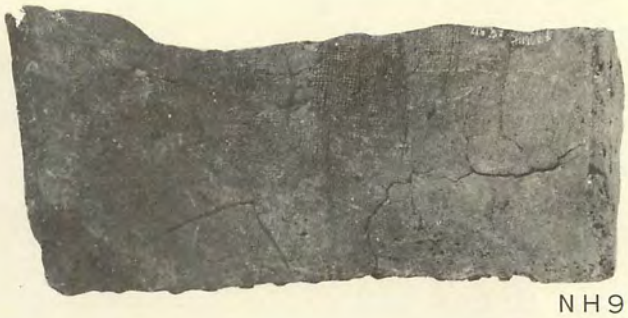
NH18

NH12

NH18

PL. 4 軒 平 瓦

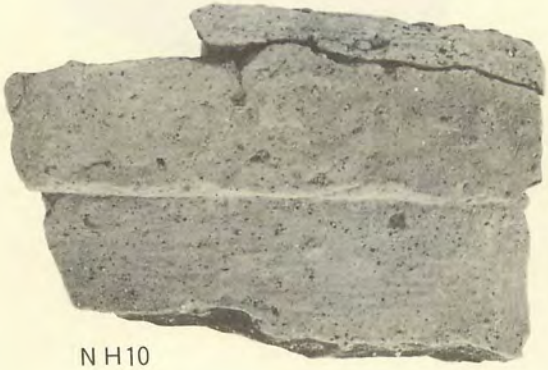
NH10



NH9

NH10

NH9



NH10

NH9

NH10

NH15

NH10

NH15

NH15

PL. 5 軒 平 瓦

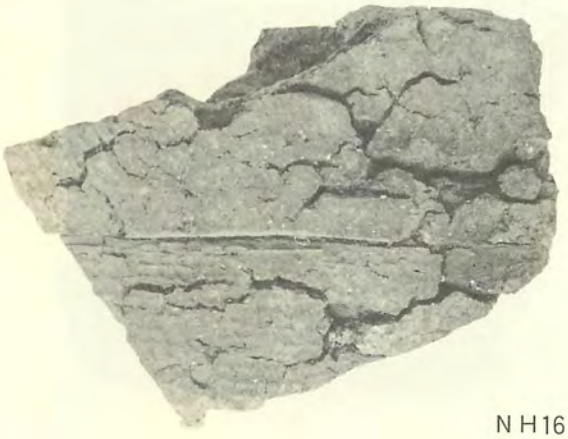
N H23

N H16

N H23

N H16

N H23



N H16

N H23 N H23

N H16

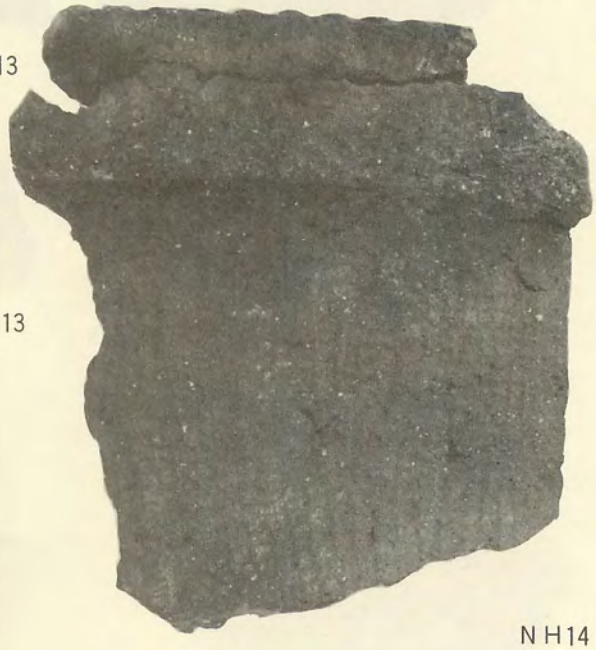
N H12

PL. 6 軒 平 瓦

NH13

NH14

NH13



NH14

NH13

NH14

NH13

NH19

NH21

NH22

NH6

NH3

PL. 7　1・2号窯出土丸瓦

M_1 a－1

M_1 a－2

M_1 b－3

M_2 a－1

M_2 b－1

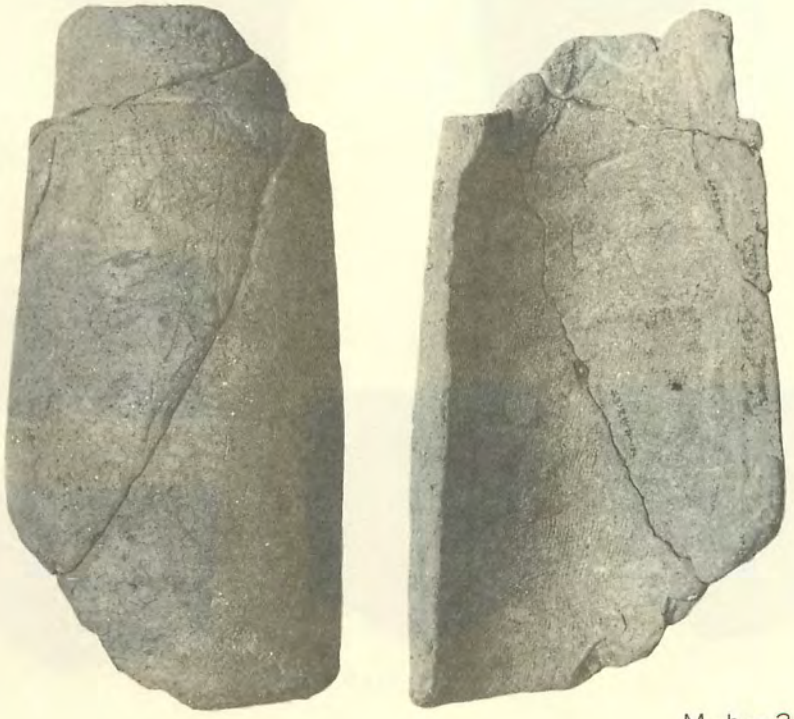
PL. 8　3号窯出土丸瓦（M_3 a 類）

M_3 a－1

M_3 a－2

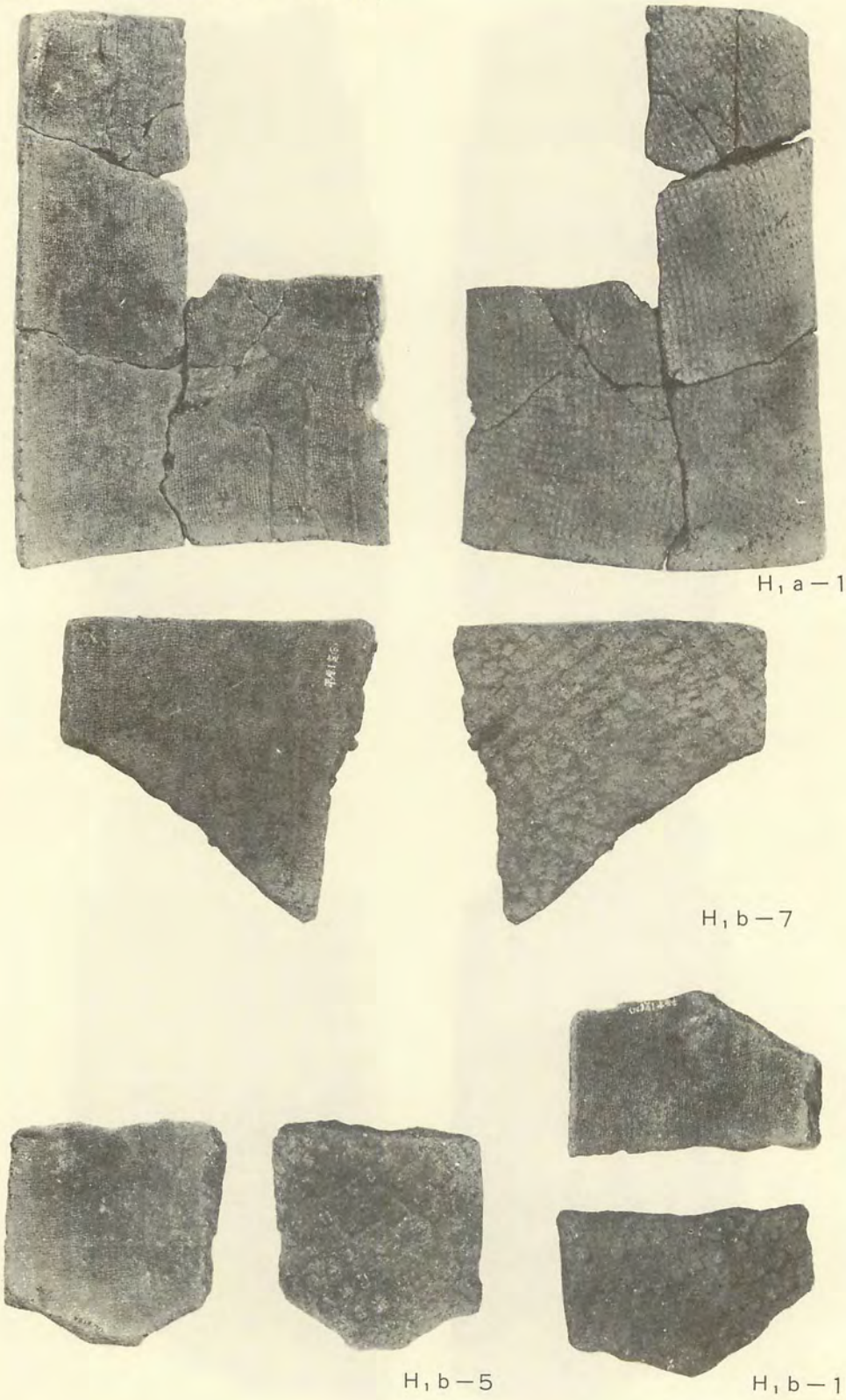
PL. 9　3号窯出土丸瓦（M_3 b 類）

M_3 b－1



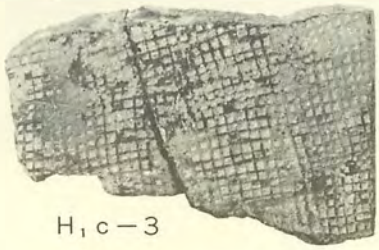
M_3 b－2

PL. 10　1号窯出土平瓦（H_1a・H_1b類）



PL. 11　1号窯出土平瓦（H_1 c～H_1 f 類）

H_1 c－6



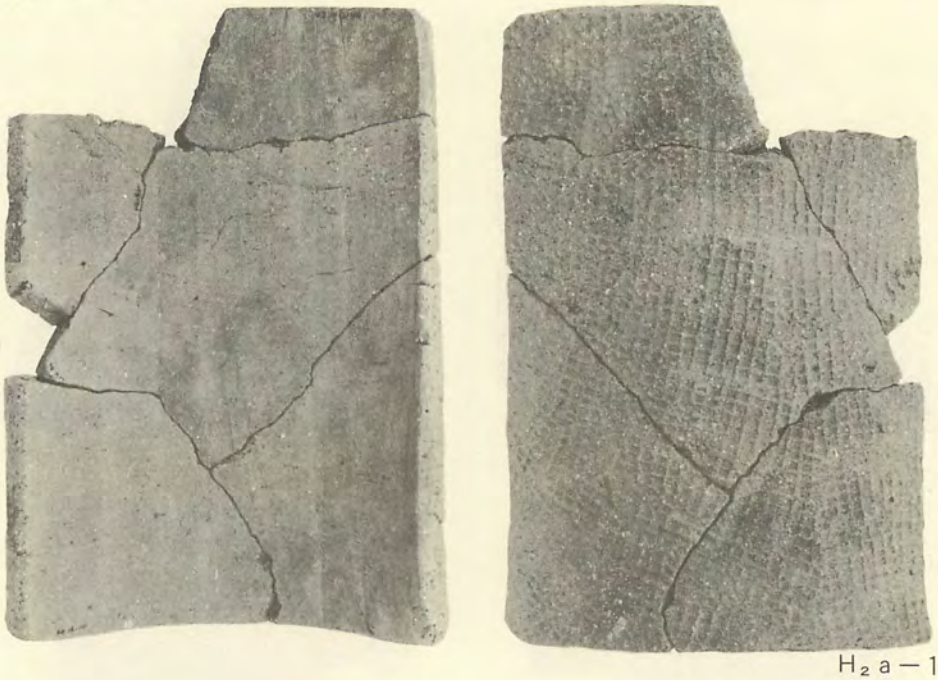
H_1 c－3

H_1 d－1

H_1 e－3

H_1 f－1

PL. 12　2号窯出土平瓦（H_2 a 類）

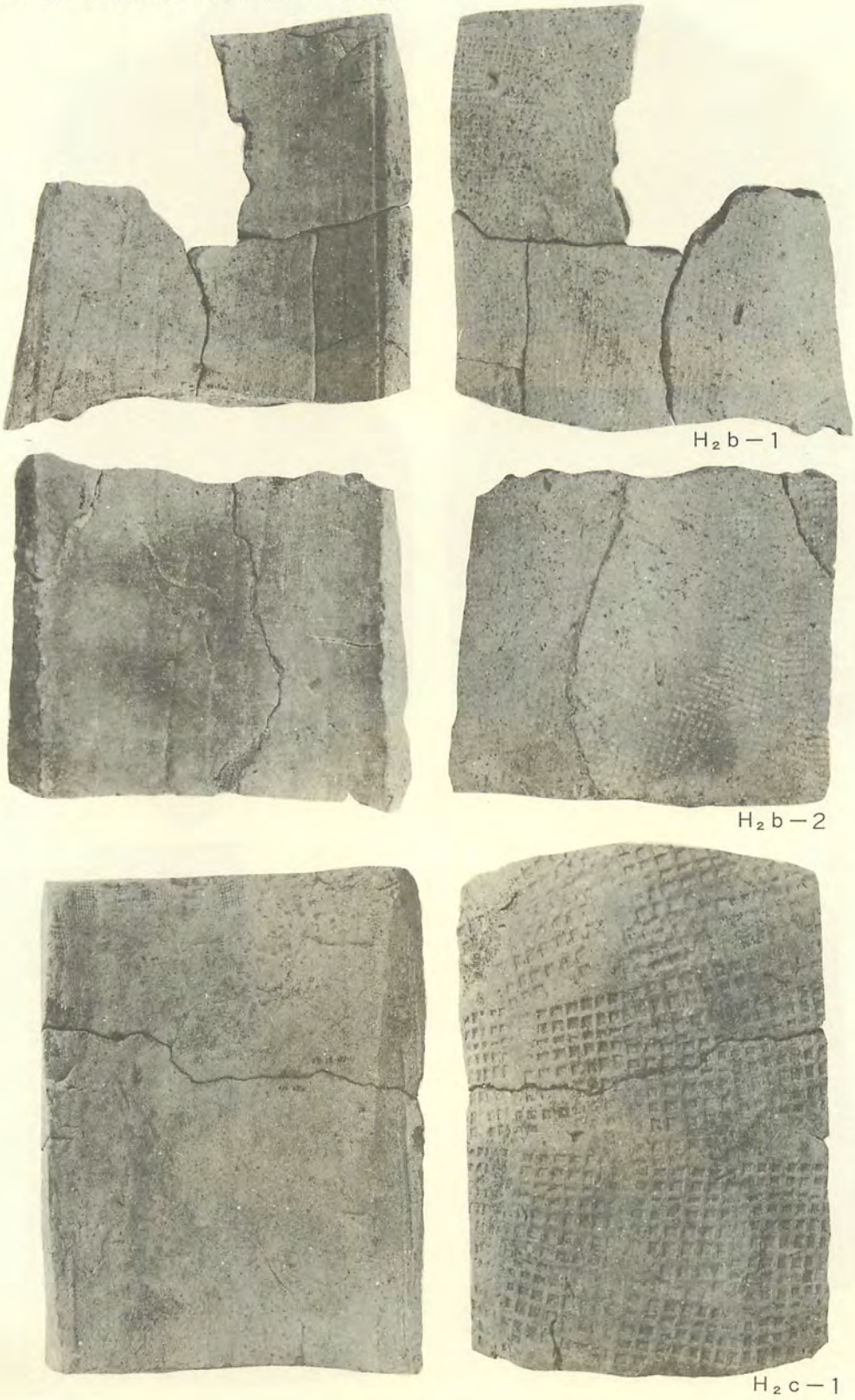


H_2 a－1

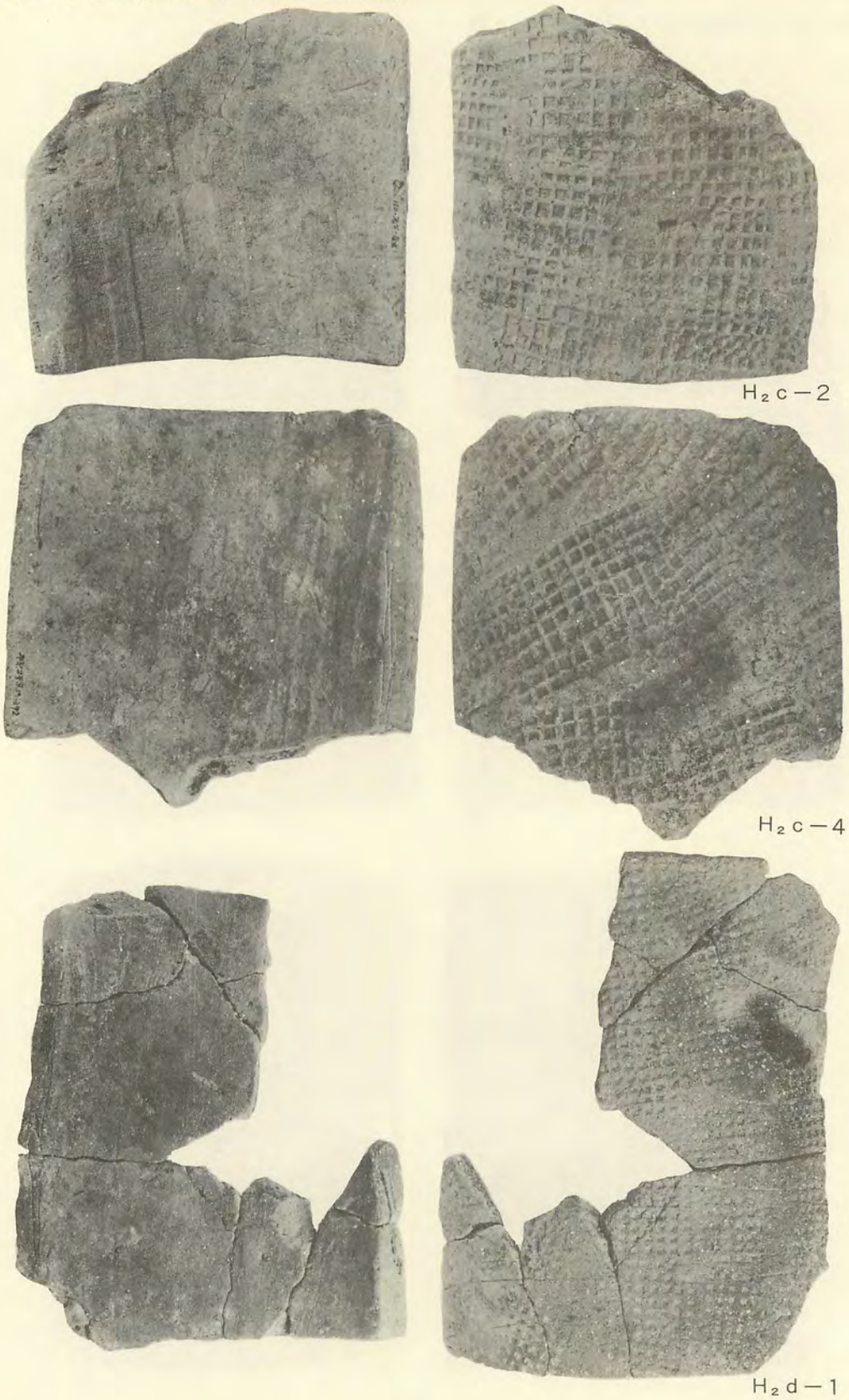
H_2 a－2

H_2 a－4

PL. 13　2号窯出土平瓦（H_2b・H_2c類）



PL. 14　2号窯出土平瓦（H_2c・H_2d類）



PL. 15　2号窯出土平瓦（H_2e・H_2f類）

H_2e-1

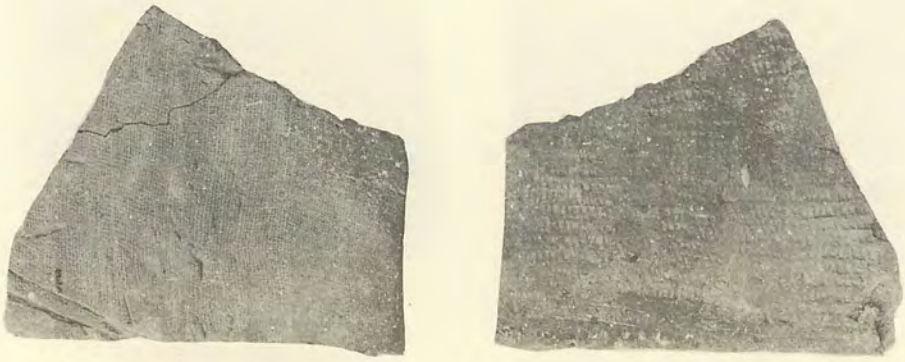
H_2e-2

H_2f-1

H_2f-2

PL. 16　2号窯出土平瓦（H_2g～H_2i類）

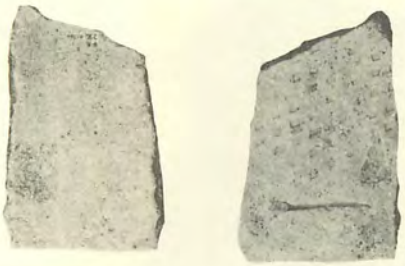
H_2g-1



H_2h-3

H_2i-1

PL. 17　2号窯出土平瓦（H_2 j～H_2 n類）



H_2 j－1

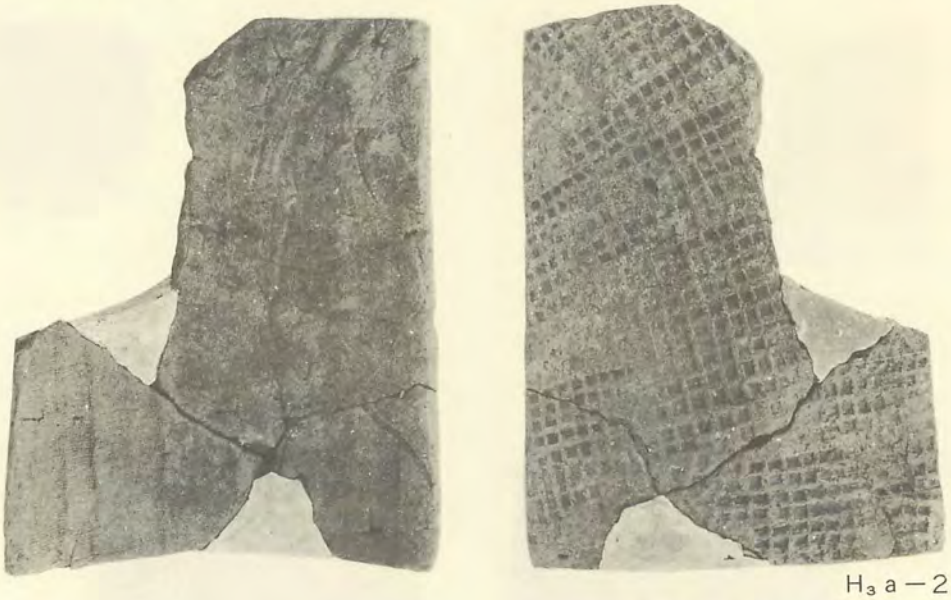
H_2 k－1

H_2 l－1

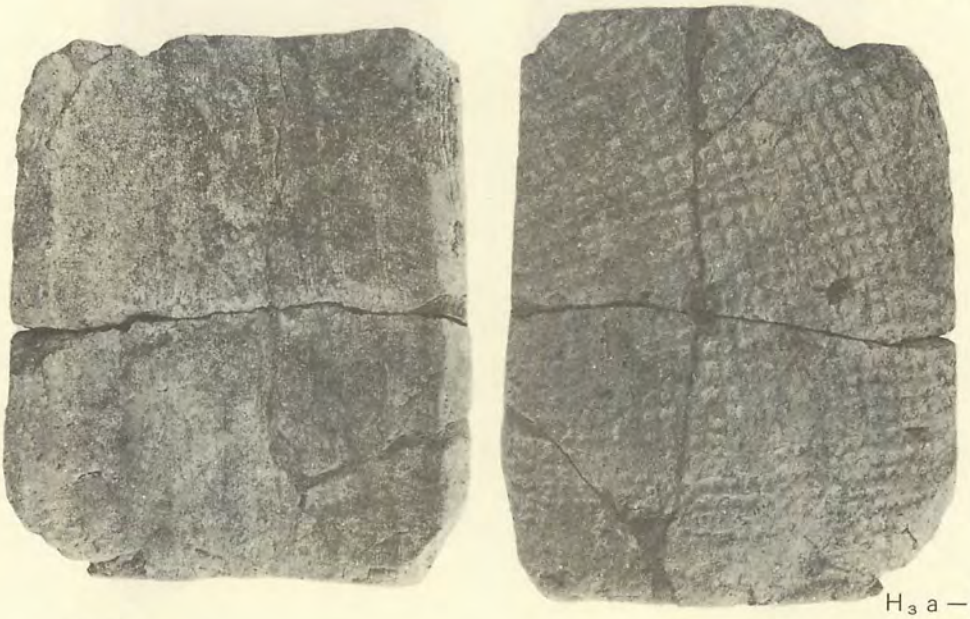
H_2 m－1

H_2 n－1

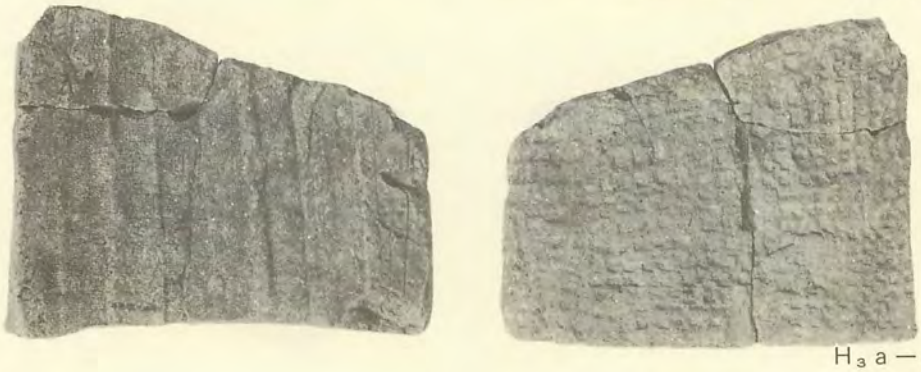
PL. 18　3号窯出土平瓦（H_3 a 類）



H_3 a－2

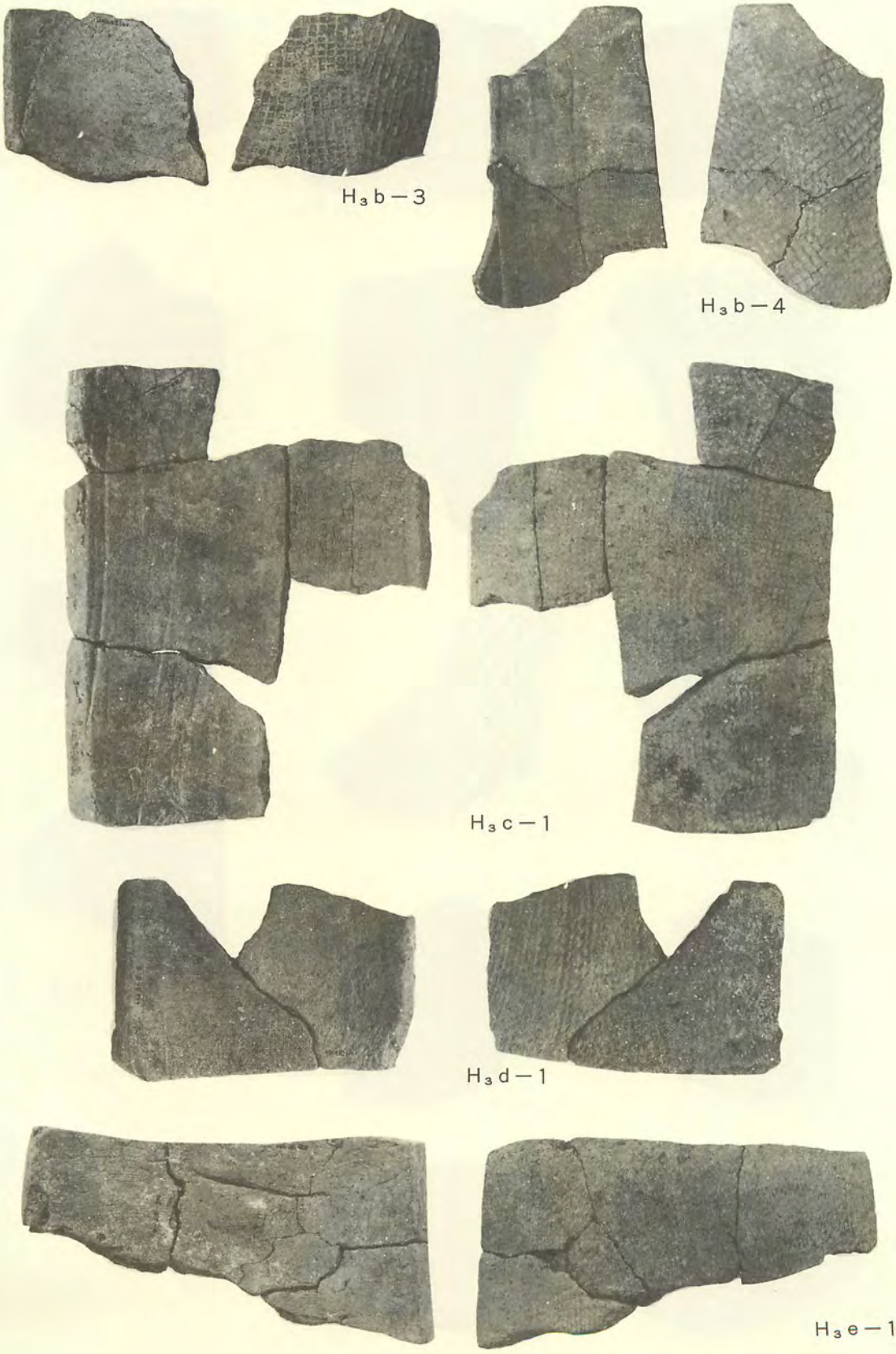


H_3 a－3

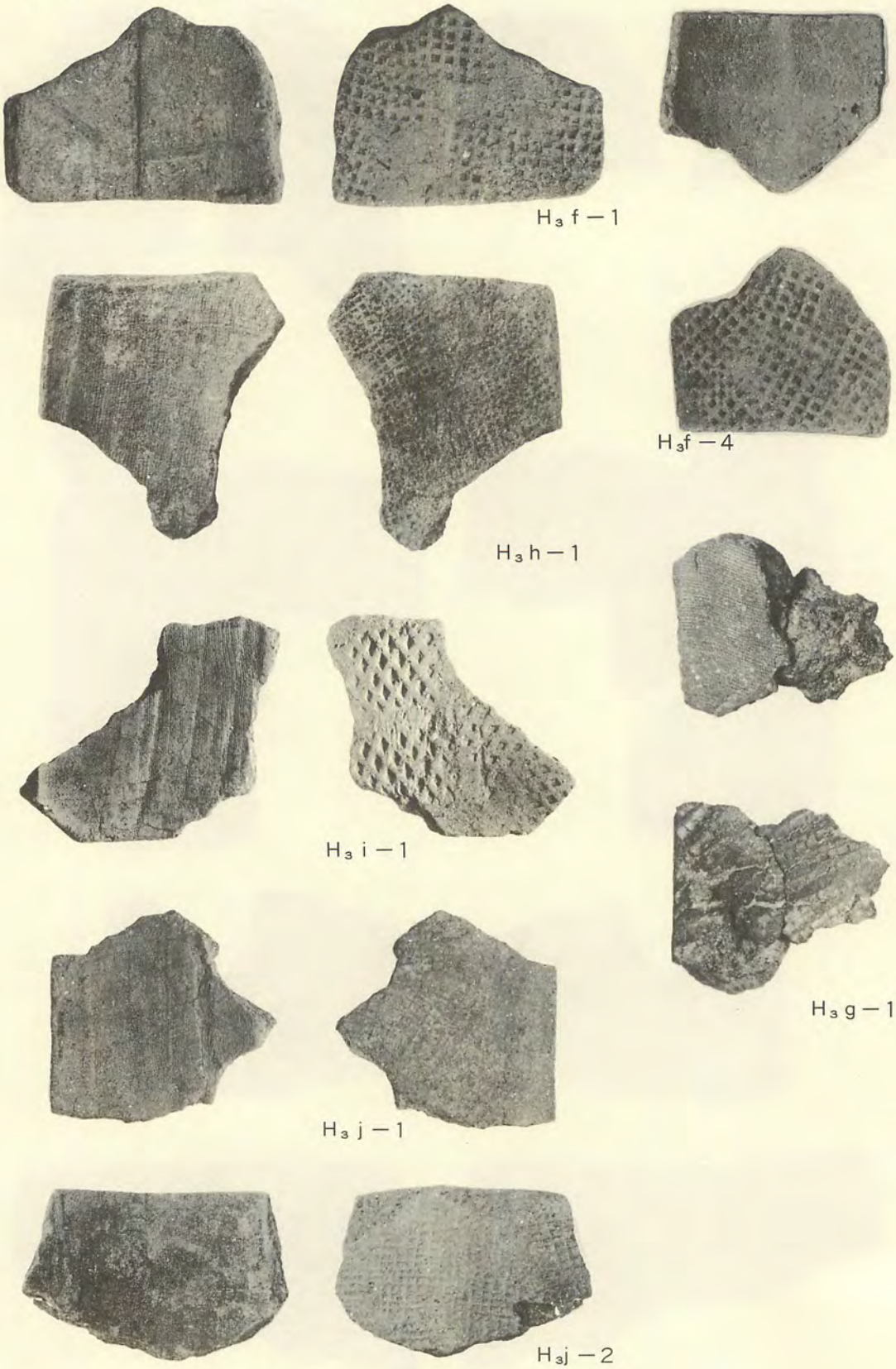


H_3 a－4

PL. 19　3号窯出土平瓦（H_3b～H_3e類）



PL. 20　3号窯出土平瓦（H_3f～H_3j 類）

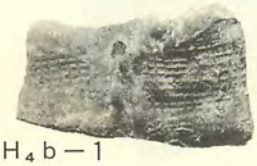


PL. 21 窯様遺構出土平瓦

H_4a－1

H_4d－1

H_4e－1



H_4b－1

H_4h－1

H_4c－1

H_4f－1

H_4g－1

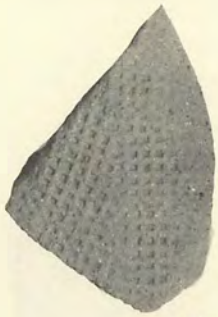
H_4i－1

PL. 22 道 具 瓦

隅切平瓦1

隅切平瓦3

隅切平瓦2



隅切平瓦4

隅切平瓦5

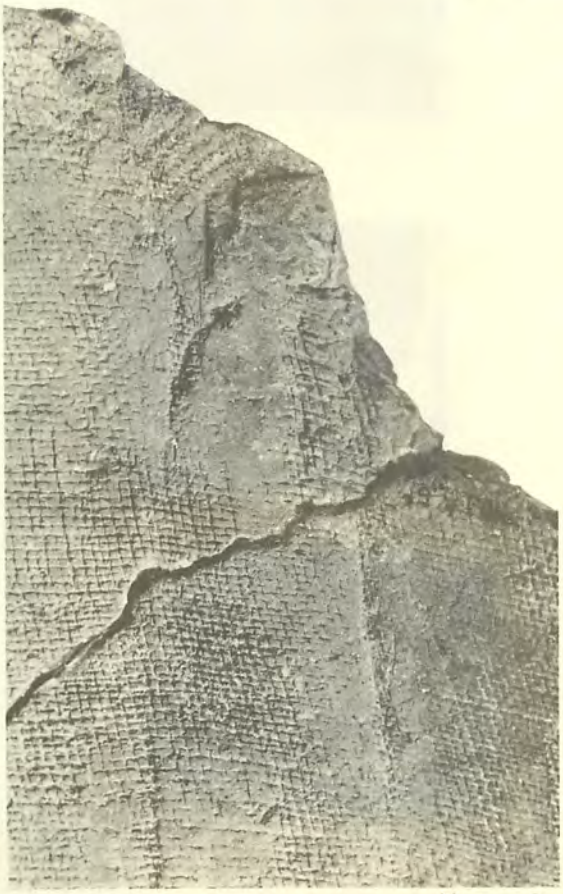
熨斗瓦1

熨斗瓦2

PL. 23 凸型台圧痕

H_2 a－2

H_2 a－3



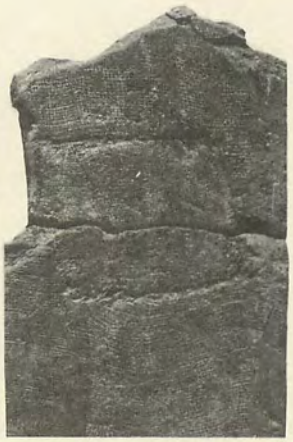
H_2 e－2

H_2 a－1

PL. 24　造瓦資料（1～5）・渡鹿廃寺跡出土平瓦（6・7）

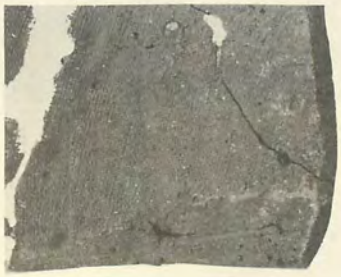
1

2



3

4



5

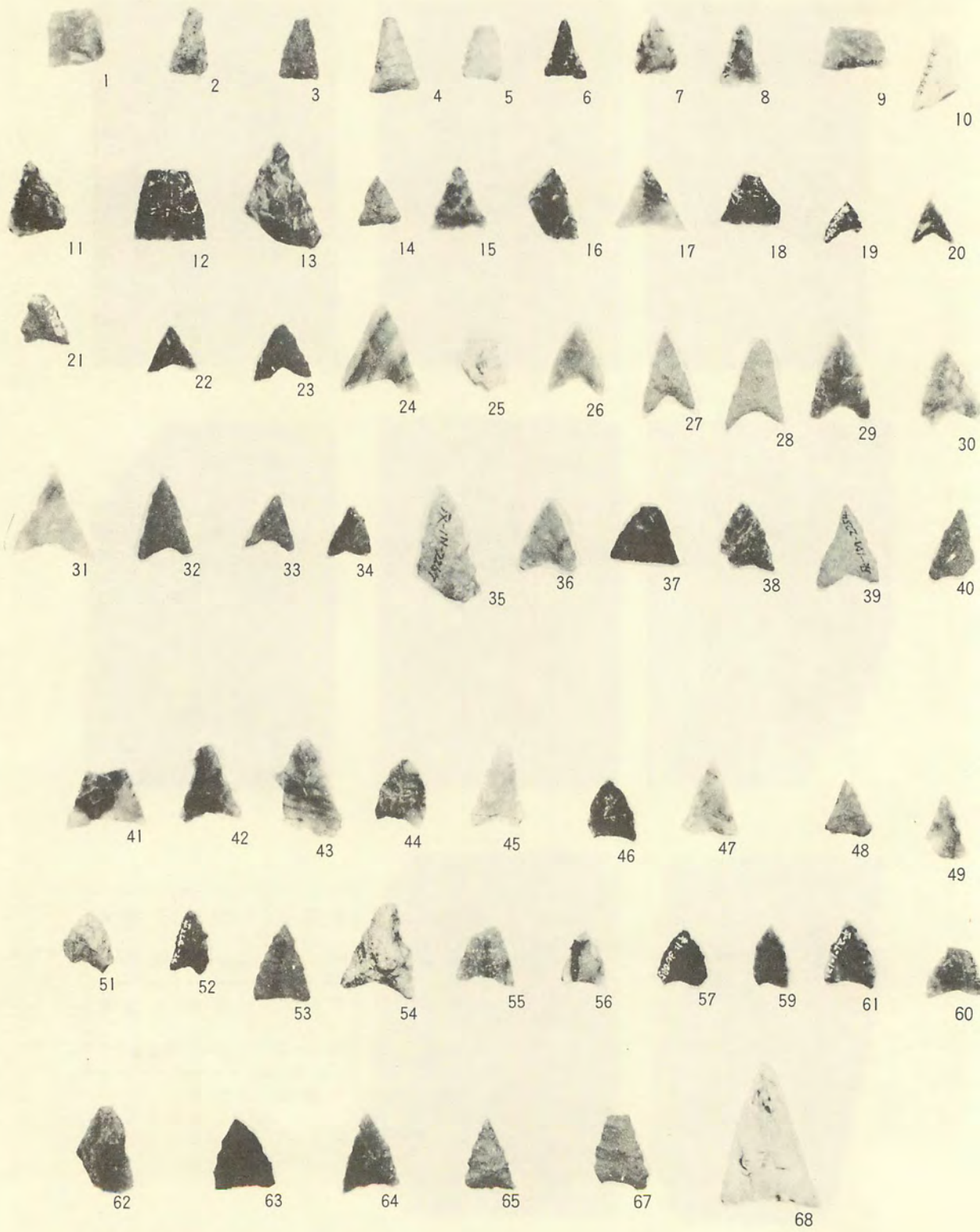
6

7

PL. 25　平瓦各型式の布の綴じ合せ目

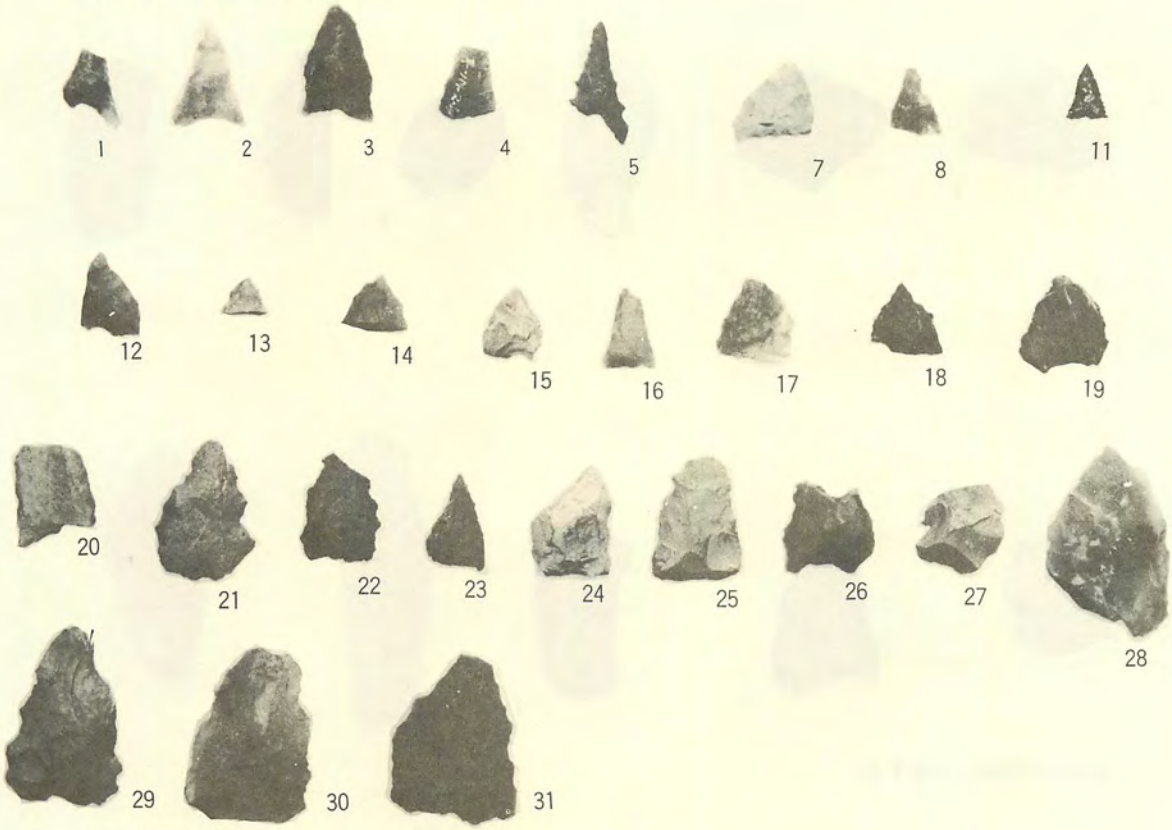
A 型式 H_3 a−21	B 型式 H_2 a−13	C 型式 H_2 g−2
F 型式 H_2 j−2	I 型式 H_2 d−1	L 型式 H_4 g−1
P 型式 H_4 i−1	Q 型式 H_3 j−1	

PL. 26　石　　鏃



番号は図面39と対応する（但し68は図面40の６）

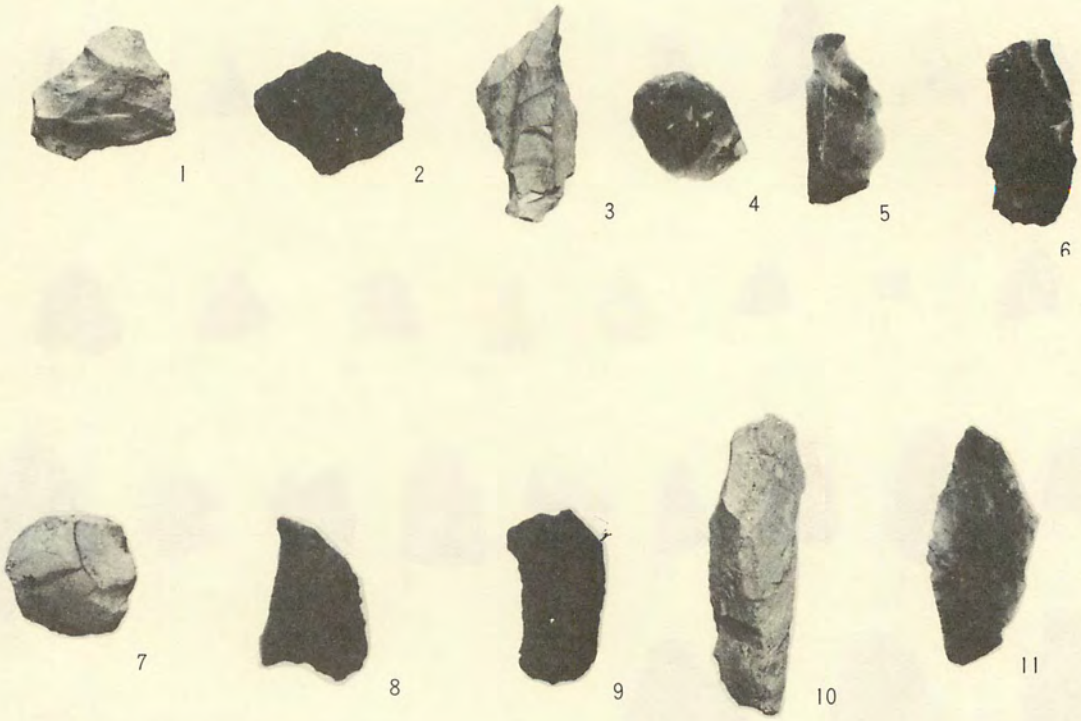
PL. 27　石鏃・二次加工剝片・スクレーパー



番号は図面40と対応する

番号は図面41と対応する

PL. 28　2次加工剝片・楔形石器・剝片



番号は図面42と対応する

番号は図面43と対応する

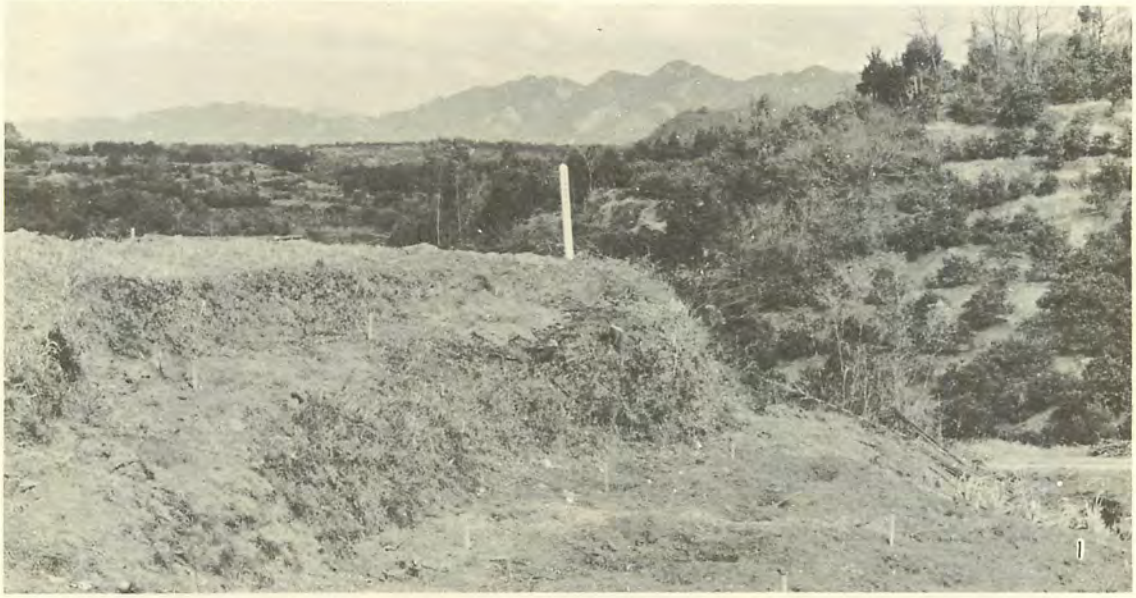
PL. 29　石核・磨石

1・2は図面44　3・4は図面45　5・6・16は図面46　7～15は図面47と対応する

PL. 30 遺跡遠景

1　瓦窯址を東より見る　　2　南の山腹よりみる　　3　南の谷下より見る

PL. 31　遺跡内各所

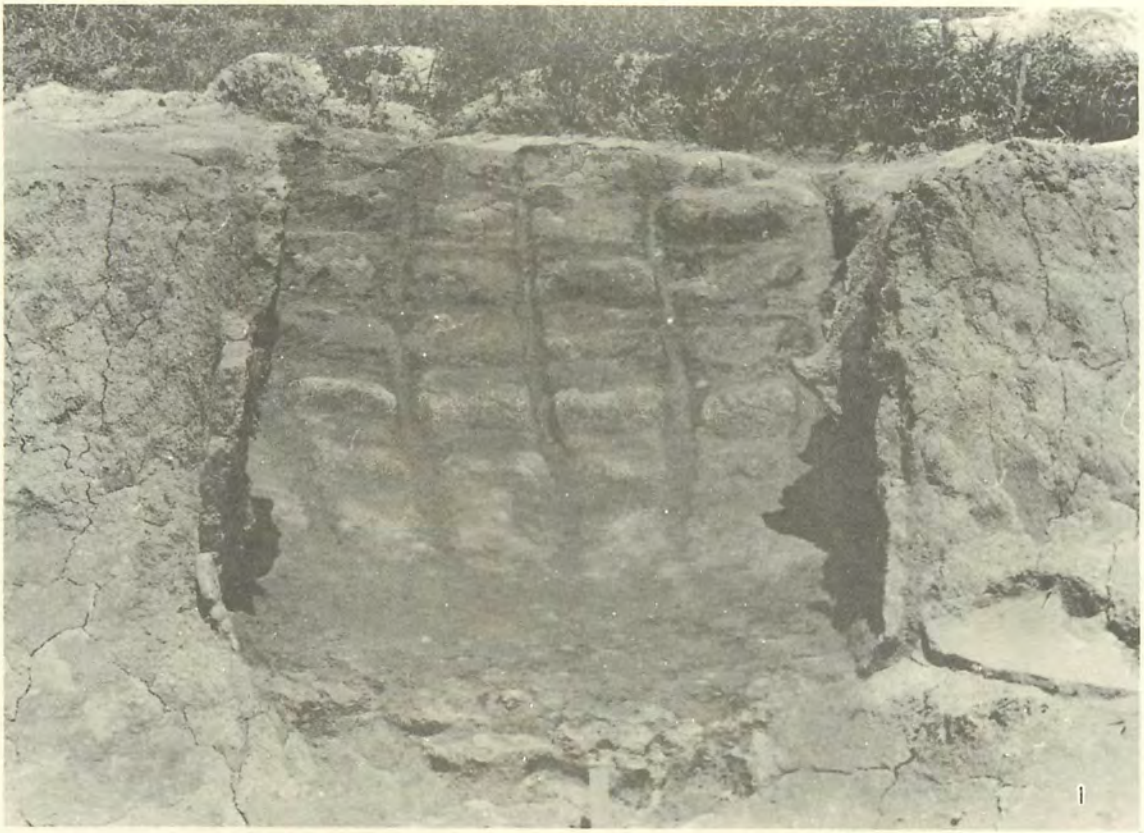


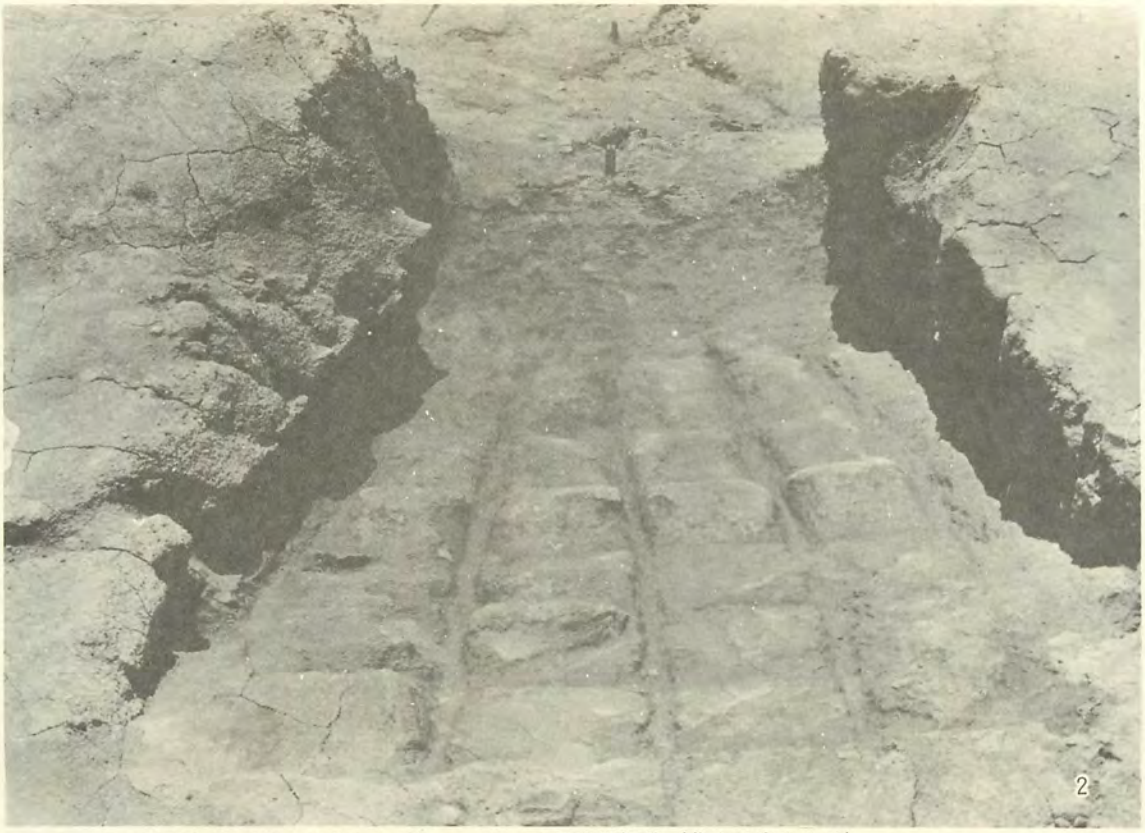
1　調査前の瓦窯址　　2　調査地最高所　　3　調査地西側の谷

PL. 32　1　号　窯

1　1号窯（北より南をみる）　　2　1号窯（南より北をみる）

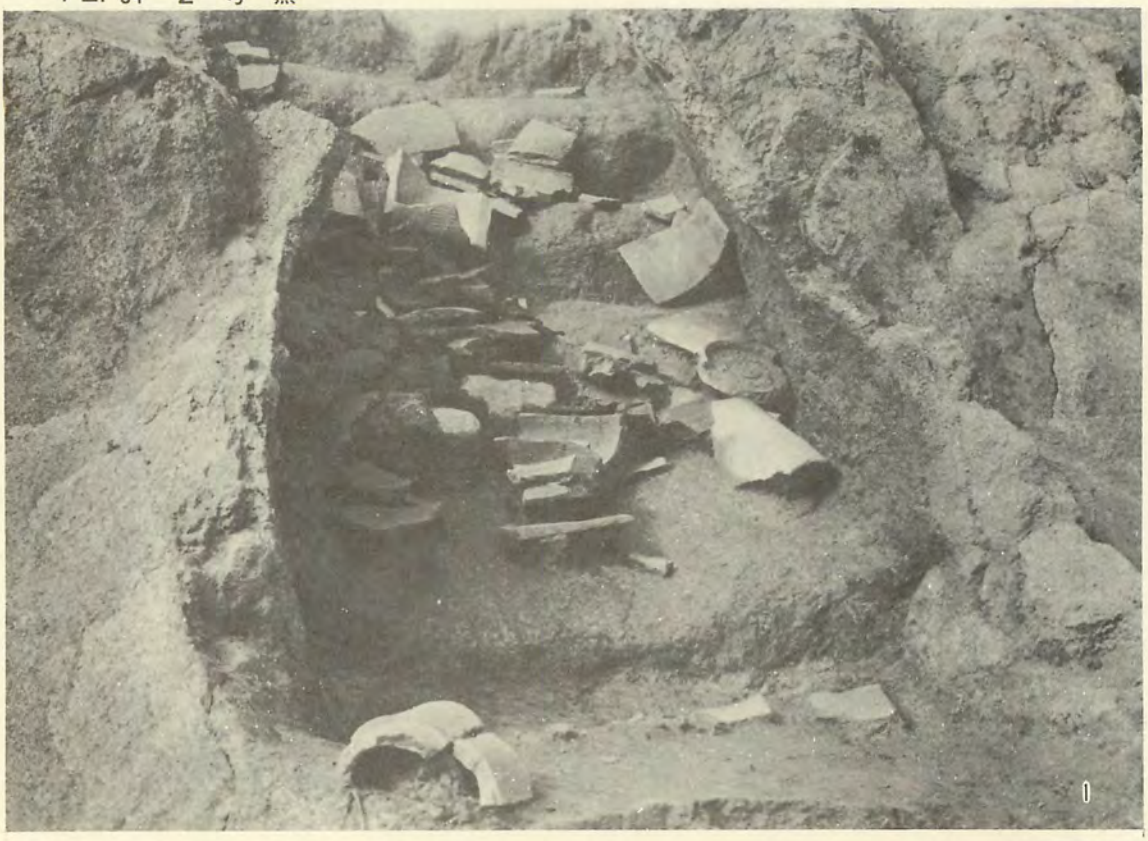
PL. 33　1　号　窯





1　1号窯発掘後（南より北をみる）　　2　1号窯発掘後（北より南をみる）

PL. 34　2　号　窯

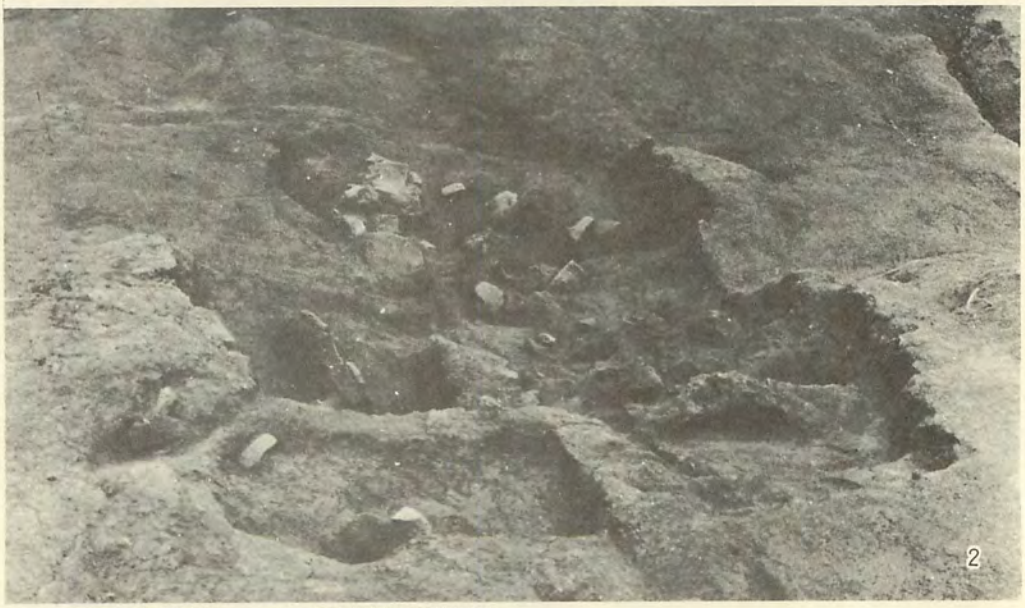


1　２号窯床面密着瓦　　2　２号窯発掘後（南より北をみる）

PL. 35　3　号　窯

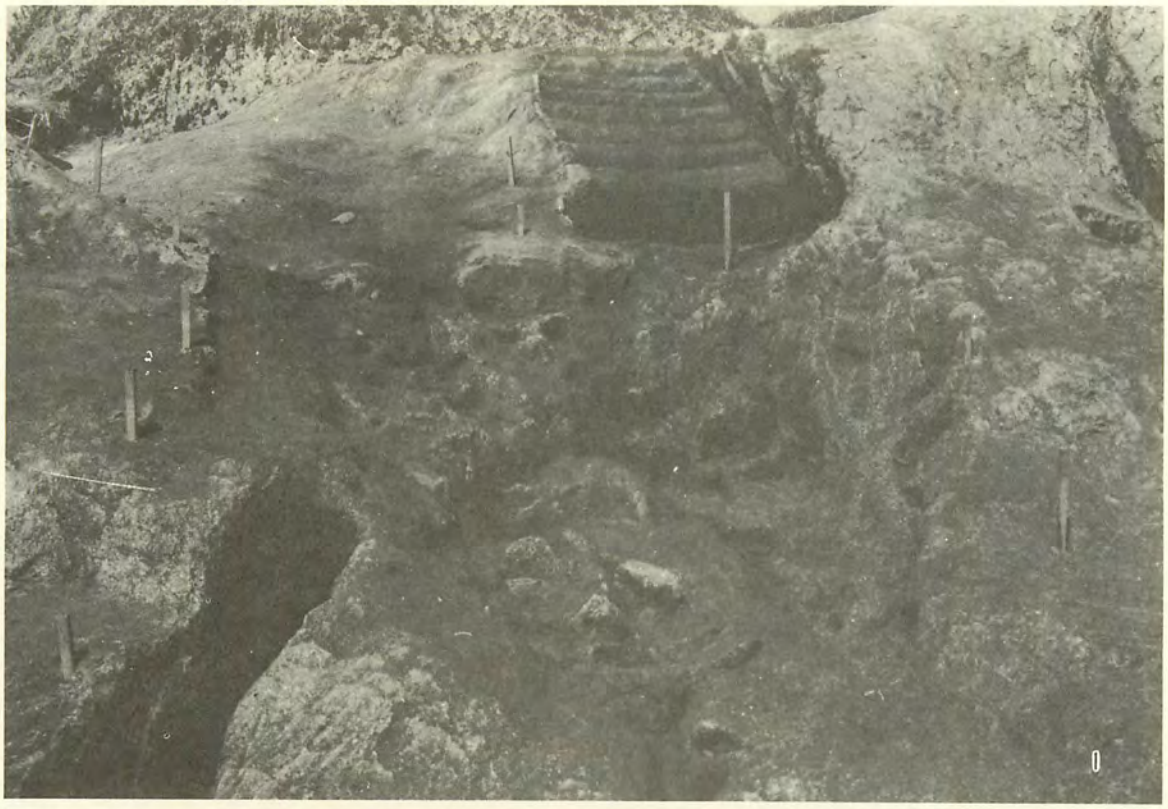
1　3号窯発掘後（上から下をみる）　　2　3号窯瓦出土状態

PL. 36　1号窯・窯様遺構



1　1号窯と窯様遺構　　2　窯様遺構の断面図

PL. 37　3号窯・3号窯前方部



1　3号窯と前方部　　2　3号窯前方部

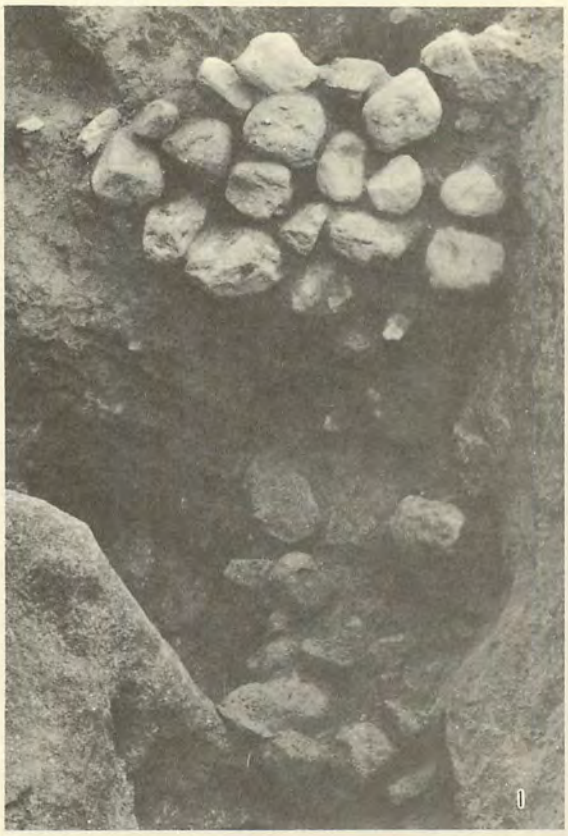
PL. 38　1　　溝

1　溝断面図　　2　1溝と3号窯

PL. 39　灰原・柱穴

1　灰原と1～3号窯　　2　柱穴群

PL. 40 石　　組



1　1石組　　2　2石組　　3　2溝の底(蔵骨器出土状態)

PL. 41　土　　壙

1　1土壙　　2　2土壙

付　論

肥後の古瓦―技法と系譜― …… 村田多津江・甲元　眞之
肥後・平原瓦窯跡と出土瓦当の検討……小田富士雄・武末　純一
平原窯跡付近の地質学的所見 …… 長谷　義隆・高橋　俊正
プロトン磁力計による磁気探査 …… 保存科学研究会
楳谷寺・神園山瓦窯址 ……三島　格

肥後の古瓦 ―技法と系譜―

村田 多津江*・甲元 眞之**

熊本県、すなわち旧肥後国には、縄文時代から古墳時代までの遺跡が数多く存在し、それらの遺跡に関する考古学的研究が積み重ねられてきた。しかし 古墳時代以降、すなわち歴史考古学といわれる分野においては、かなりの資料が存在するにもかかわらず、いま一歩立ち遅れた観がある。

熊本県内の古瓦について、最初に考古学的考察を加えられたのは、下林繁夫氏であった。下林氏は、大正15年、『熊本県下における古代礎石と古瓦』と題する報文を発表、国分寺・古府中・浄水寺跡・陳内・明言院・悟真寺・十蓮寺・立願寺・渡鹿・正院厳島神社・瀬戸坂・豊国社跡・熊本城の古瓦の紹介を行った文献がいくつか発表されたが、いずれも表採資料によるものであった。

しかし、戦後になってから、遺跡の発掘調査が本格的にすすめられ、古瓦資料は飛躍的に増加した。

昭和29年の立願寺廃寺、昭和32年～33年の陳内廃寺、昭和34年～35年の渡鹿廃寺、昭和35年の興善寺、昭和41年の肥後国分尼寺、昭和46年の肥後国分寺など、発掘調査が続々と実施された。殊に、調査活動の中心にあった松本雅明氏は、その調査報告を次々に発表され、肥後の古瓦及び古代遺跡の研究の基礎を築かれるとともに、従来、表採資料の紹介にとどまっていた古瓦研究を大きく進展されたのであった。

現在、肥後国内における古瓦出土地は、125ケ所に及んでいる。

125ケ所の内訳は、寺院跡26ケ所、官衙跡11ケ所、窯跡15ケ所、散布地69ケ所となっている。このうち、軒先瓦を出土する遺跡に限ってみても、その数は30ケ所を越え、その大半は寺院跡である。

寺院跡を中心に出土する古瓦を概観・分類するにあたって、製作技法の説明から始めることにする。

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鴟尾・棰先瓦・隅木先瓦・熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦・螻羽瓦・鳥衾などがあり、磚もこれに準ずる。この中で、量的に多く技法的な分析がなされているのは、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の４種である。

平瓦には、桶巻き作りと一枚作りがある。桶巻き作りは、桶様の模骨に布をはり、その上に粘土をまわして叩きしめたものであり、粘土ひと巻きによりできる枚数によって、２～４枚作りに分けられる。一枚作りは、平瓦一枚の大きさの凹型、もしくは凸型の台の上に布を敷き、粘土をつめて叩きしめるものである。

* 熊本大学文学部大学院

** 熊本大学文学部助教授

桶巻き作りでは、①平瓦の側面部に内面（布目のある方）から切断のための切込みがある。②粘土板の重ね目がある。③粘土紐を巻き上げた痕跡がある。④布の継ぎ目がある。のいずれかで判断でき、一枚作りは、側面に布目が及ぶことで判明する。

桶巻き作りは、飛鳥時代からみられ、全国にその技法が及んだ。一枚作りは、白鳳の頃畿内に出現したが、周辺には及んでいない。熊本では、すべて桶巻き作りで製作されている。

桶巻き作りには、一枚の粘土板を番線で切りだしたもの（糸切り痕をとどめることで知られる）と、粘土紐を巻き上げて作るものとがあり、陳内廃寺では両者が共存し、国分尼寺では後者が多い。

丸瓦には、行基葺丸瓦・行基葺方形丸瓦・玉縁付丸瓦の３種がある。行基葺方形丸瓦は南滋賀廃寺など白鳳期の一部の寺院にみられるにすぎない。

丸瓦の作り方は、平瓦と同種で、２～４㎝幅の板（模骨）を桶状につないで布を巻き、粘土をまわして叩きしめたもので、内面に切断のための切込みを入れて２分割して作る。

丸瓦にも、一枚の粘土板をめぐらすものと、粘土紐を巻き上げるものの２種類があり、国分尼寺の丸瓦は後者でつくられる。

なお、豊前地方では、模骨は板ではなく竹で桶状のものを作り、丸瓦の製作にあたったことが知られるものが多い。

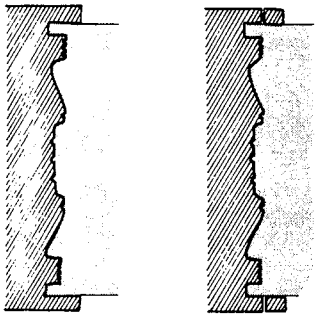
平瓦・丸瓦ともに凸面は叩き板でしめられるが、この叩き板の文様により、縄叩き・格子叩きがあり、さらに叩きのあとへラナデを施して無文になったものもある。なお、九州では、この叩きの文様に青海波文などがみられることがあり、須恵器工人の製作になるものと認められ、７世紀後半を上限とする須恵器工人の瓦作りへの参加の証跡は、平安時代の末期まで各地に認められるところである。

軒先瓦の製作技法、とりわけ瓦当文様の成形については近藤喬一氏の研究があり、今それを要約してゆこう。これは、瓦当文様を表出するための木笵の被せ方により分類したものであり、軒丸瓦に例をとると次のようになる。

A型　木笵が瓦当面の外縁外周まで及ぶもの。従って、外周に範痕が残される。これは、木笵が一枚の場合と、文様の彫りが深い時には二枚の場合とがある。二枚重ねの笵の場合には、外縁外周に⊥状の笵痕が残ることで確かめられる。

B型　木笵が瓦当面の外縁外端までのもので、外端に一部笵痕が残る。

C型　木笵が瓦当文様の内区までしかなく、笵痕は内区外端、多くの場合、外縁の内側で認められる。こ



A　型

の結果、外縁は不整円形となり、次に述べる一本造りの方法と組み合わさる時には、瓦当文様まで切断される場合もある。

こうした近藤氏の分類と、次に述べる瓦当面と筒の接合方法によって、大まかな技法の分類が可能となる。

Ⅰ型　外枠被せB型の木笵を使い、まず文様面の凹凸がなくなるほど粘土を入れて文様を出し、さらに瓦当の厚さを増すための粘土を加える。次に、円筒形の筒を、木笵の外側から、瓦当文様の一番突出した部分と同じか、あるいはそれよりもやや深く置き、瓦当と筒が接合しやすいように外側から叩きを加える。最後に、丸瓦と同様な形に筒を縦半分切断する。

Ⅱ型　外枠被せB型の木笵を使い、瓦当の厚さほどの粘土を笵につめて瓦当を形成し、丸瓦を瓦当外縁にそって接合した後、内外面に支持土をめぐらす。

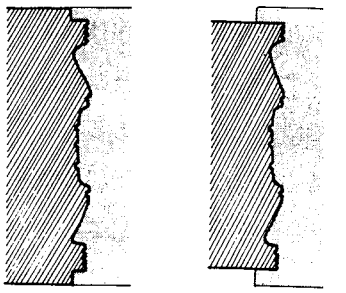
Ⅲ型　外枠被せA or and B型の笵に、まず瓦当文様を表出するだけの薄い粘土を入れ、次に丸瓦を瓦当裏面に置き、さらに瓦当面の厚さになるように裏面に粘土をつぎたし、筒の内外面に支持土を加える。

Ⅳ型　外枠被せA or and B型の笵に瓦当面の厚さほどの粘土をつめて瓦当を形成し、裏面の瓦当外周より、やや内側に半円形の溝をほって、そこに丸瓦をさし込むもの。最後に筒内外に支持土を加え補強する。

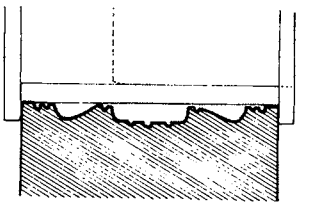
Ⅴ型　これは、いわゆる一本造りと称されるもので、細かくは2種に分類しうる。

Ⅴ－1型　瓦当面の厚さが薄い瓦当をつくる。模骨に粘土を巻き、さらに頂部にも粘土を加えて叩きしめ、次に頂部に瓦当面をはり合わせる。最後に丸瓦の筒になるように余分の筒を切断する。

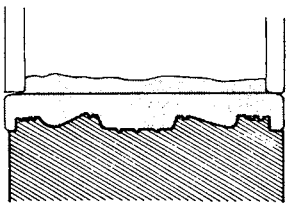
Ⅴ－2型　模骨の周囲と頂部に粘土をまき、C型の木笵を上から押えつけて瓦当文様をつくり、



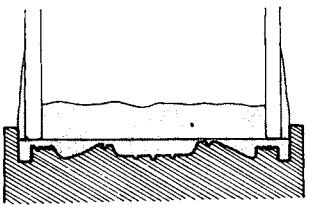
B　型　　C　型



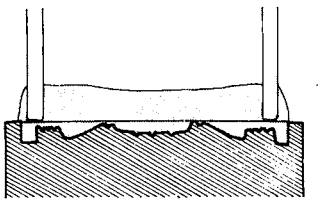
Ⅰ　型



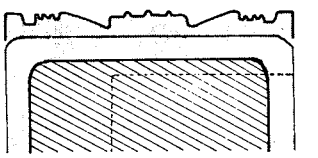
Ⅱ　型



Ⅲ　型



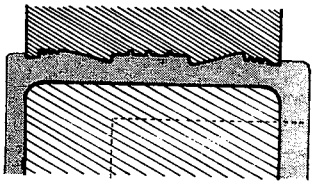
Ⅳ　型



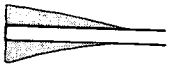
Ⅴ－1型

筒の余分な所を切断するもの。

軒平瓦の瓦当面の製作技法は、軒丸瓦に準ずる。但しA型は少く、ほとんどはB型である。瓦当と平瓦の接合のやり方では、次の4種がある。

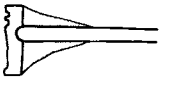


V－2型

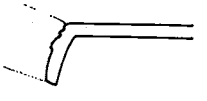


Ⅰ型

Ⅱ型



Ⅲ型



Ⅳ型

Ⅰ型　一枚の平瓦の下部に顎となる粘土帯を付加して瓦当部をつくり、これを笵に入れて軒平瓦を形成する。この場合、付加した顎部と本体の平瓦の接合をよくするために、顎に叩き痕が認められる。なお、この変形として一枚の平瓦の上・下に粘土帯加えるものもちる。

Ⅱ型　木笵に瓦当の厚さほどの粘土をつめて瓦当部をつくり、平瓦を接合して、上・下面から支持土を加え、軒平瓦をつくる。

Ⅲ型　木笵に瓦当の厚さほどの粘土をつめ、その裏面に溝をほって、先端を加工した平瓦をさし込み、上・下に支持土を加える。

Ⅳ型　一枚の平瓦の先端部を木笵に押し込んで瓦当面をつくり、そのまま平瓦を折り曲げて軒平瓦をつくる。これは特殊なやり方で、平安時代中期末に京都近隣で使われた手法で、さほどの広がりはみせていない。

九州地方でみられる軒丸瓦は、上述したⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ型の接合方法でつくられるもののみである。そのうちⅡ型については、今のところよく分らない。Ⅰ・Ⅲ型は木笵の彫りが深いもの、いいかえれば、外縁が高く、内区文様が隆起したり、外縁内側に鋸歯文などの文様を配するタイプに多い。陳内廃寺では、このⅠ・Ⅲ・Ⅳ型のいずれもが、軒平瓦とセットの型で出土している。単弁8葉の蓮華文軒丸瓦はⅠ型、老司タイプの複弁8葉蓮華文軒丸瓦はⅢ型、鴻臚館タイプの複弁8葉蓮華文軒丸瓦はⅣ型である。すなわち、陳内廃寺にみられる瓦の製作技法が、熊本における瓦の製作技法のすべてといってよい。熊本における軒丸瓦の下部の裏面に外縁と同様に凸状の突出がみられる。すなわち、Ⅰ型では筒の切断が瓦当よりも高い所で行われた時におこるものであり、Ⅲ型では、外縁内側の鋸歯文を表出するために、笵の外縁部にまず粘土紐をあて、次に内区等の文様帯に粘土をつめ、筒を置いた後に内部に粘土を枠よりも低くつめたためにおこるものである。このことからⅢ型の場合、木笵が二枚重ねて使われた可能性もあるが、その証跡は、今指摘することはできない。

Ⅰ型の接合法でつくられた瓦は、陳内廃寺の他に、浄水寺・岡遺跡・池辺寺・興善寺・託麻郡家跡にみることができ、Ⅲ型は十蓮寺・浄水寺・国分寺・国分尼寺・田島廃寺・中村廃寺・菊池郡家跡・立願寺廃寺・稲佐廃寺・平原窯跡・興善寺・渡鹿廃寺などで出土している。Ⅳ型は鴻臚館タイプの瓦がそれにあたり、陳内廃寺・浄水寺・国分寺・国分尼寺・古保山廃寺・稲佐廃寺・興善寺などでの出土をみる。

軒平瓦は熊本の場合、ほとんどが、重弧文軒平瓦にその典型をみるように、一枚の平瓦の下部に顎として粘土帯を付加してつくるものであり、この伝統が永く引き継がれてゆく。

畿内での瓦の技法は変遷をみてゆくと、Ⅰ→Ⅲ→Ⅳ型の変化をたどりうるが、熊本では最も古いと思われる陳内廃寺に3種が共存し、浄水寺や興善寺にも出土していることなどからすれば、技法がほとんど時代差なく存することとなる。従って、これらの技法が一番古くからみられる陳内廃寺での、平・丸瓦との組合せの分折によって、共存が真なのか、時代差が真なのか把握しうるのではないか。

以上の製作技法上の特徴を中心に各遺跡出土の古瓦の系統をたどってみることにする。

今、寺院跡を中心に出土する軒先瓦について概観すると、大きく3つの系統をたどることができるようである。すなわち、

(1)陳内廃寺系古瓦

(2)立願寺廃寺系古瓦

(3)肥後国分寺系古瓦

の3系である（文末瓦当拓本参照）。

陳内廃寺系古瓦に含まれるものは、陳内廃寺出土の老司式複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット（1・2）・鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット(3・4）・単弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット（7・8）の3種の古瓦と、それぞれを祖形として派生したと考えられる次の古瓦である。

○平原瓦窯跡出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット（18・9）

○託麻郡家跡出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦（9～11）

○渡鹿廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット2種類(12・13、14・15)及び複弁6葉蓮華文軒丸瓦と鋸歯文軒平瓦のセット（16・17）

○興善寺廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒丸瓦のセット（20・21）及び、単弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット（22・23）

○浄水寺跡出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行庫草文軒平瓦のセット（24・25）

以上が含まれる。

このうち、特に注目されるのは、渡鹿廃寺出土複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセットのである。軒丸瓦は、いわゆる鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦の外縁に鋸歯文を施した

形をとるが、これは陳内廃寺における老司式複弁８葉蓮華文軒丸瓦と鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦が、お互いに影響じた結果と考えられる。また、軒丸瓦にみられる唐草の向きの逆転は、祖形となった陳内廃寺の均整唐草文軒平瓦が、すでに逆転現象を示していることを考えると、文様の伝わり方を考える上で興味深い。

興善寺廃寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦は中房の蓮子数が著しく多くなり、蓮弁端が離れ一見単弁風であるが複弁を意図したものと考えられ、また外縁に線鋸歯文を施してあることから、陳内廃寺出土の老司式古瓦からの派生とみなした。軒平瓦についても、均整であるにもかかわらず、そのモティーフは老司系の扁行唐草文の片側半分を折り返したものと考えられるので、これも陳内廃寺系とした。

立願寺廃寺系古瓦には、立願寺廃寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒丸瓦のセット５種類（26・27、28・29、30・31、32・33、34・35）と単弁８葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット（36・37）及び、それらから変化したと思われる稲佐廃寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦（38）、複弁８葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット（40・41）、高橋町出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦（48）が含まれる。

肥後国分寺系古瓦には、肥後国分寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット（50・51）、複弁４葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット（57・58と同形）、肥後国分尼寺出土の単弁８葉蓮華文軒丸瓦（73と同形）及びその変化形態を含む。

肥後国分寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦の変化形態としては、託麻郡家跡出土の複弁８葉蓮華文（63）、古保山廃寺出土の複弁８葉蓮華文軒丸瓦（61）、十蓮寺出土複弁８葉蓮華文軒丸瓦２種類（64・66）、菊池郡家出土の複弁蓮華文軒丸瓦（69・70）等が含まれる。

複弁４葉蓮華文軒丸瓦の変化形態と考えられるものには、肥後国分寺出土の単弁蓮華文軒丸瓦４種（53～56）、田島廃寺出土単弁蓮華文軒丸瓦（71）、池辺寺出土単弁17葉蓮華文軒丸瓦（78）等が含まれる。

肥後国分尼寺出土の単弁８葉蓮華文軒丸瓦の系統には、池辺寺出土の単弁８葉蓮華文軒丸瓦（73）、岡遺跡出土の単弁８葉蓮華文軒丸瓦（75）、浄水寺跡出土の単弁蓮華文軒丸瓦（77）等が含まれる。

以上のように、肥後の古瓦は、陳内廃寺、立願寺廃寺、肥後国分寺、国分尼寺の創建を契機として、展開されていったのであるが、それは、およそ、どれくらいの時期にあてられるであろうか。

まず、陳内廃寺は、老司式・鴻臚館式・単弁形式の３種類のセットを持つ。

老司式は、藤原宮式を祖形とすることと、大宰府の整備の過程で成立したことを考えるとその時期は、およそ８世紀初頭と考えられる。

鴻臚館式は、興福寺の瓦に似ているが、それより先行するといわれ、やはり８世紀のごく早

い時期のものであろう。

陳内廃寺においては、どちらもあまり変化しない形で受容されている点、陳内廃寺が法起寺式（特に、金堂が東に開く観世音寺式）の伽藍配置をとる点など、観世音寺の影響を強く受けていることは、うたがいない。

観世音寺の性格を考えれば、陳内廃寺は、その創建年代をさかのぼることはないと思われる。

おそらくは、観世音寺、大宰府政府の造営が、ほぼ完成した時期に、肥後へ、大宰府からの工人集団の移動があったものと思われる。

従って、陳内廃寺の創建は、早くとも８世紀前半と思われる。

なお、単弁８葉蓮華文軒丸瓦及び重弧文軒平瓦については、不明な点が多いが、松本雅明氏のいうように、補修瓦と考えられるが、老司式と鴻臚館式は、その伝播の状況から考えて、あまり時期を異にせずに使用されたと思われることから、単弁軒丸瓦の時期は、さらに下るものと思われる。

肥後国分寺に関しては、『続日本紀』に次の記載がある。天平勝宝８年（756)12月「己亥・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土左・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向等26国、国別に灌頂幡一具、道場幡49首、緋綱２条を領ち下す。以って周忌の御斎荘餺に充て、用ひ了れば金光明寺に収め置き、永く寺物と為し、事に随ひて出し用ひよ。」

これによると、756年までには、国分寺の主要堂宇は完成していたものと思われる。

立願寺廃寺の創建に関しては、指標となるものに欠けるが、肥後国分寺・国分尼寺にみられる、複弁４葉蓮華文軒丸瓦の蓮弁と外区にめぐらした唐草の手法が、おそらく立願寺廃寺の軒丸瓦の影響を受けたものと思えることから、国分寺の創建時には、すでに完成していたのではないだろうか。

浄水寺跡に関しては、境内に残されている石碑の碑文により、その創建年代は、790年であることがわかっている。

奈良時代前半の陳内廃寺の建立にはじまった肥後の寺院造営は、ほぼ時を同じくして、立願寺廃寺、国分寺・国分尼寺の完成をみたものと思われる。

陳内廃寺は、その出土瓦の種類が限られていることから、存続期間は、あまり長くはなかったのであろう。

それに対して、国分寺からは、軒丸瓦９種軒平瓦９種が、現在まで知られている。

この軒瓦の種類の多さは、存続期間が長期に及んだことを示すとともに、国分寺の創建・修復に際して、肥後国内各地からの瓦の供給があったことを示すものではないだろうか。

先に述べた、３つの古瓦の系統のうち、最も広範に展開しているのは、国分寺系の古瓦であった。

井上薫氏は、『奈良朝仏教史の研究』の中で、国分寺の造営を三期に区分し、第1期を天平9年～20年、第2期を天平勝宝元年～天平宝字7年、第3期を天平宝字8年～延暦3年としている。井上氏によれば、第一期は、封戸・正税・寺田・寺地などを施入し、国司と国師を督励するとともに、催検使を派遣し郡司に造営を主当させるように命じた時期であり、第2期は、郡司ら地方豪族による協力があらわれ、造営がかなり進歩した国もある時期、第3期は、ほぼ国分寺の完成した時期とされている。

肥後国分寺の創建は、第2期にあたり、その造営に対する郡司らの地方豪族の協力のあらわれが、瓦の供給にあったのではないだろうか。

従って、国分寺の造営が、一段落した時点に、逆に、郡司層による寺院造営が活発になった結果が、古保山廃寺、託麻郡家跡、十蓮寺、菊池郡家跡にみられる、国分寺系古瓦の分布にあらわれているのであろう。

こうして、奈良時代中期から後期にかけて、最も活発となった、肥後の寺院造営は、浄水寺の建立によって、ひとつの区切りを与えられた形になる。

浄水寺は、肥後において、ただ1例、私寺であることが、はっきりしている寺院である。しかも、この寺は、その碑文から明らかなように、826年には、400町に近い私有地（荘園）を有していた。それは、墾田をさかんに行った結果であるが、それだけの権威と財力をこの寺院が持っていた、その経済的な裏づけはなんであったか。それは、八の瀬戸・西山・陳ノ平といった巣林山に広がる窯跡群と、当尾・川床・びわだ・曲野といった松橋方面に広がる窯跡群とを掌握していたからであろう。

この一大窯業地帯は、古墳時代後半から、奈良・平安時代、さらには中世にまで至る、肥後の窯業の中心となった地域である。

この経済力を背景として、荘園を殖していった浄水寺は、828年、定額寺院としての地位を得るまでに至ったのである。

参考文献

原田敏明編　『熊本県の歴史』　文画堂　1959　東京

井上　　薫　『奈良朝仏教史の研究』　吉川弘文館　1966　東京

九州歴史資料館編　「九州の古瓦と寺院」　九州歴史資料館　1974　福岡

松本雅明編　『城南町史』　城南町史編纂会　1965　熊本

松本雅明編　『九州の古瓦―飛鳥から江戸初期まで―』　熊本日日新聞社　1965　熊本

小田富士雄　「九州に於ける大宰府系古瓦の展開(1)～(4)」　九州考古学1・2・5・6・13号　九州考古学会　1957～1961　福岡

熊本市文化財調査委員会編　『熊本市西山地区埋蔵文化財調査報告書』・『熊本市東部地区埋蔵文化財調査報告書』・『熊本市南部地区埋蔵文化財調査報告書』　熊本市教育委員会　1969・1973・1975　熊本

松本雅明　「興善寺廃寺調査報告」　熊本県文化財調査報告第一集　熊本県教育委員会　1961　熊本
松本雅明　『田島廃寺調査報告』泗水町教育委員会　1972　熊本
下林繁夫　「熊本県下における古代礎石と古瓦」　熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第3冊　熊本県 1926　熊本
平安博物館『平安京古瓦図録』雄山閣　1977　東京

軒丸瓦一覧表

（　）内は推定

	内　　区	中　房	外区内縁	外区外縁	出土地	同形瓦
1	複弁８葉蓮華文	１＋５＋10	珠　文	鋸歯文	陳内廃寺	
3	〃	１＋４＋８	〃	素　縁	〃	
5	〃	—	〃	鋸歯文	〃	
6	単弁８葉蓮華文	—			〃	
7	〃	4		重圏文	〃	
9	〃	〃		—	託麻郡家	
10	〃	〃		—	〃	
11	〃	〃		重圏文	〃	
12	複弁８葉蓮華文	１＋４＋８	珠　文	鋸歯文	渡鹿廃寺	
14	〃	〃	〃	〃	〃	
16	複弁６葉蓮華文	（１＋６）	〃	〃	〃	
18	複弁８葉蓮華文	１＋５＋９	〃	〃	平原窯跡	
20	〃	(37)	〃	〃	興善寺廃寺	
22	単弁８葉蓮華文	4		重圏文	〃	
24	複弁８葉蓮華文	１＋８＋８	—	—	浄水寺跡	
26	〃	21		鋸歯文	立願寺廃寺	
28	〃	１＋５＋10	珠　文	—	〃	
30	〃	１＋６	唐草文	鋸歯文	〃	
32	〃	—	〃	—	〃	
34	〃	—	〃	鋸歯文	〃	
36	単弁８葉蓮華文	—		—	〃	
38	複弁８葉蓮華文	（１＋５＋９）		素　縁	稲佐廃寺	
40	〃	—	唐草文	〃	〃	
42	唐　草　文	—		—	〃	
43	〃	—		素　縁	〃	
44	単弁蓮華文			〃	〃	
46	〃	１＋４		〃	中村廃寺	
48	複弁８葉蓮華文	（１＋８）	唐草文	〃	高橋町	
49	鬼　面　文		〃	〃	立願寺廃寺	
50	複弁８葉蓮華文	１＋４＋８	珠　文	〃	肥後国分寺	肥後国分尼寺
52	〃	—	〃	〃	〃	
53	単弁８葉蓮華文	（１＋６）		〃	〃	
54	〃	—	唐草文	〃	〃	
55	〃	—	〃	〃	〃	
56	単弁10葉蓮華文	１＋４		重圏文	〃	池辺寺付近
57	複弁４葉蓮華文	１＋５	唐草文	素　縁	宮園遺跡	肥後国分寺・国分尼寺
61	複弁８葉蓮華文	１＋８	珠　文	〃	古保山廃寺	
63	〃	（１＋８）	〃	〃	託麻郡家	
64	〃	１＋７＋７	〃	〃	十蓮寺	
66	〃	１＋６＋９	〃	〃	〃	
69	（　〃　）	—	〃		菊池郡家	
70	（　〃　）	（１＋７）	—	—	〃	
71	単弁８葉蓮華文	１＋４		重圏文	田島廃寺	
73	単弁８葉蓮華文	１＋６	唐草文	素　縁	池辺寺跡	肥後国分尼寺
75	〃	１＋６		〃	岡遺跡	
77	（　〃　）	—		〃	浄水寺跡	
78	単弁17葉蓮華文	１＋７		〃	池辺寺跡	肥後国分尼寺

（註）　番号はＰ192～199の古瓦拓影の番号と対応する。

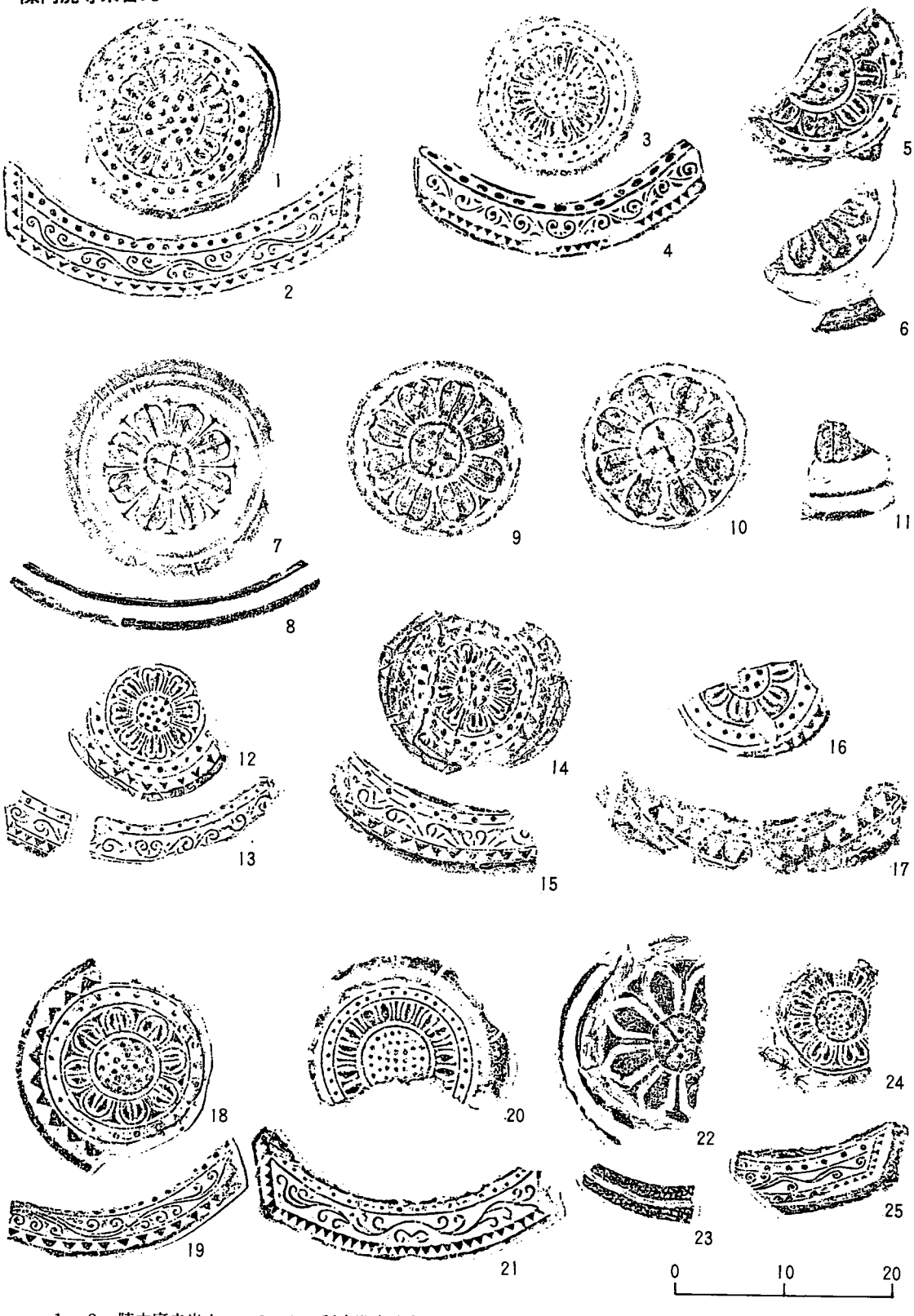
軒平瓦一覧表

（　）内は推定

	内区	上外区	下外区	脇区	断面形	出土地	同形瓦	軒丸瓦との組合せ
2	扁行唐草文	珠文	鋸歯文	鋸歯文	段顎	陳内廃寺		1
4	均整唐草文	〃	〃		〃	〃		3
8	重弧文				〃	〃		7
13	均整唐草文	珠文	鋸歯文	鋸歯文	段顎・無顎	渡鹿廃寺		12
15	〃	〃	〃	〃	バチ形顎	〃		14
17	鋸歯文	〃	珠文	—	段顎	〃		16
19	扁行唐草文	〃	鋸歯文	—	〃	平原窯跡		18
21	均整唐草文	〃	〃	鋸歯文	〃	興善寺廃寺		20
23	重弧文				〃	〃		22
25	扁行唐草文	珠文	鋸歯文	鋸歯文	〃	浄水寺跡		24
27	〃	鋸歯文	—	—	〃	立願寺廃寺		26
29	〃	珠文	鋸歯文	鋸歯文	無顎	〃		28
31	〃	〃	〃	〃	段顎	〃		30
33	〃	—	〃	〃	—	〃		32
35	〃	素縁	素縁	素縁	—	〃		34
37	重弧文				（無顎）	〃		36
39	扁行唐草文	素縁	素縁	素縁	段顎	稲佐廃寺		
41	〃	珠文	〃	—	〃	〃		40
45					—	〃		44
47					段顎	中村廃寺		46
51	（均整唐草文）	珠文	珠文		〃	肥後国分寺	肥後国分尼寺	50
58	均整唐草文	〃	〃	珠文	〃	肥後国分尼寺	肥後国分寺	
59	〃	〃	〃	—	—	〃		
60	〃	〃	〃	珠文	段顎	託麻国府跡		
62	（〃）	〃	—	—	—	古保山廃寺		61
65	扁行唐草文	〃	鋸歯文	—	段顎	十蓮寺		64
67	〃				〃	〃		
68	〃				〃	〃		
72	〃	素縁	素縁	素縁	〃	田島廃寺		71
74	唐草文	鋸歯文	鋸歯文	—	—	池辺寺跡		73
76	〃	素縁	素縁	素縁	段顎	岡遺跡		75

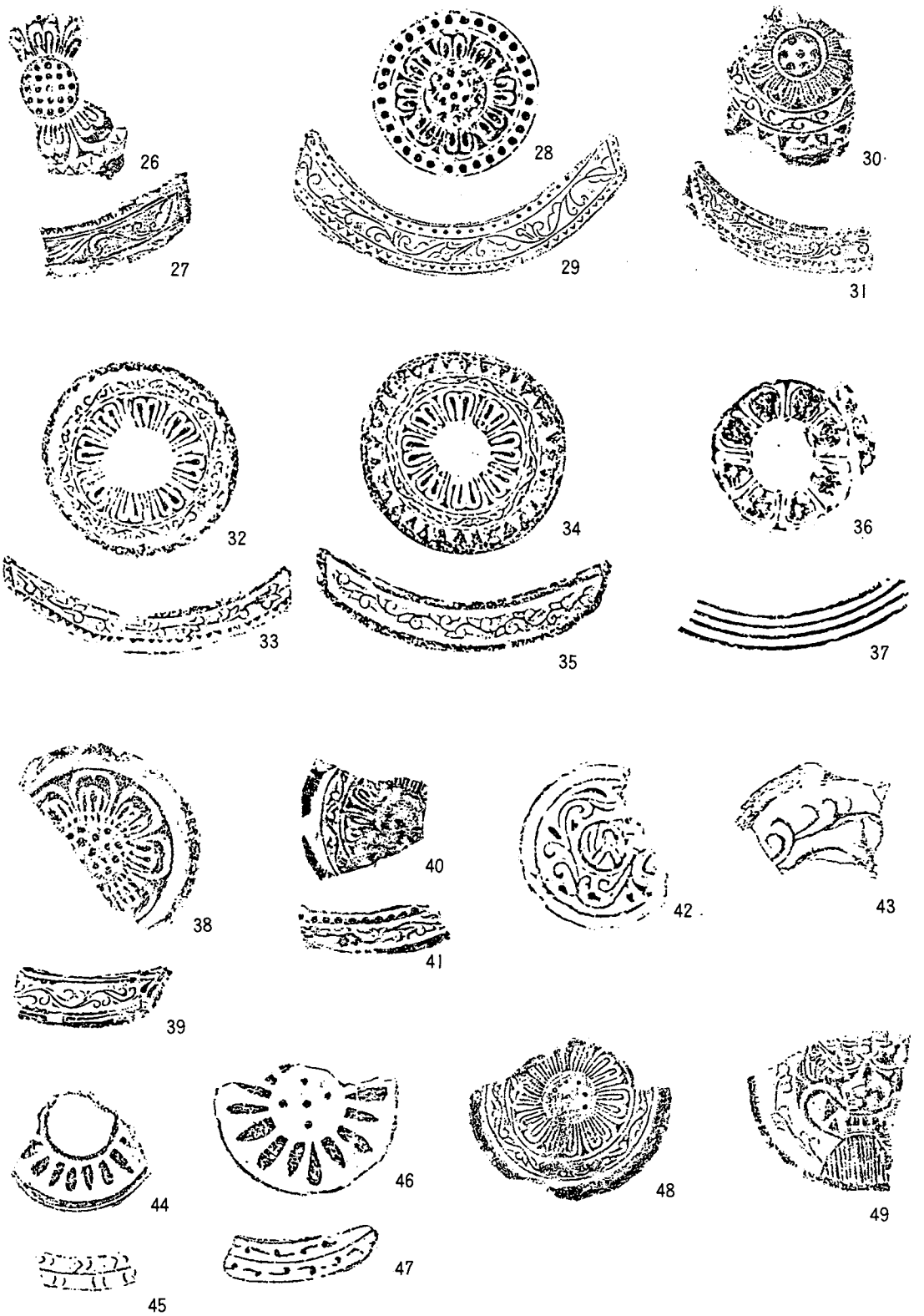
（註）　番号はP192～199の古瓦拓影の番号と対応する。

陳内廃寺系古瓦



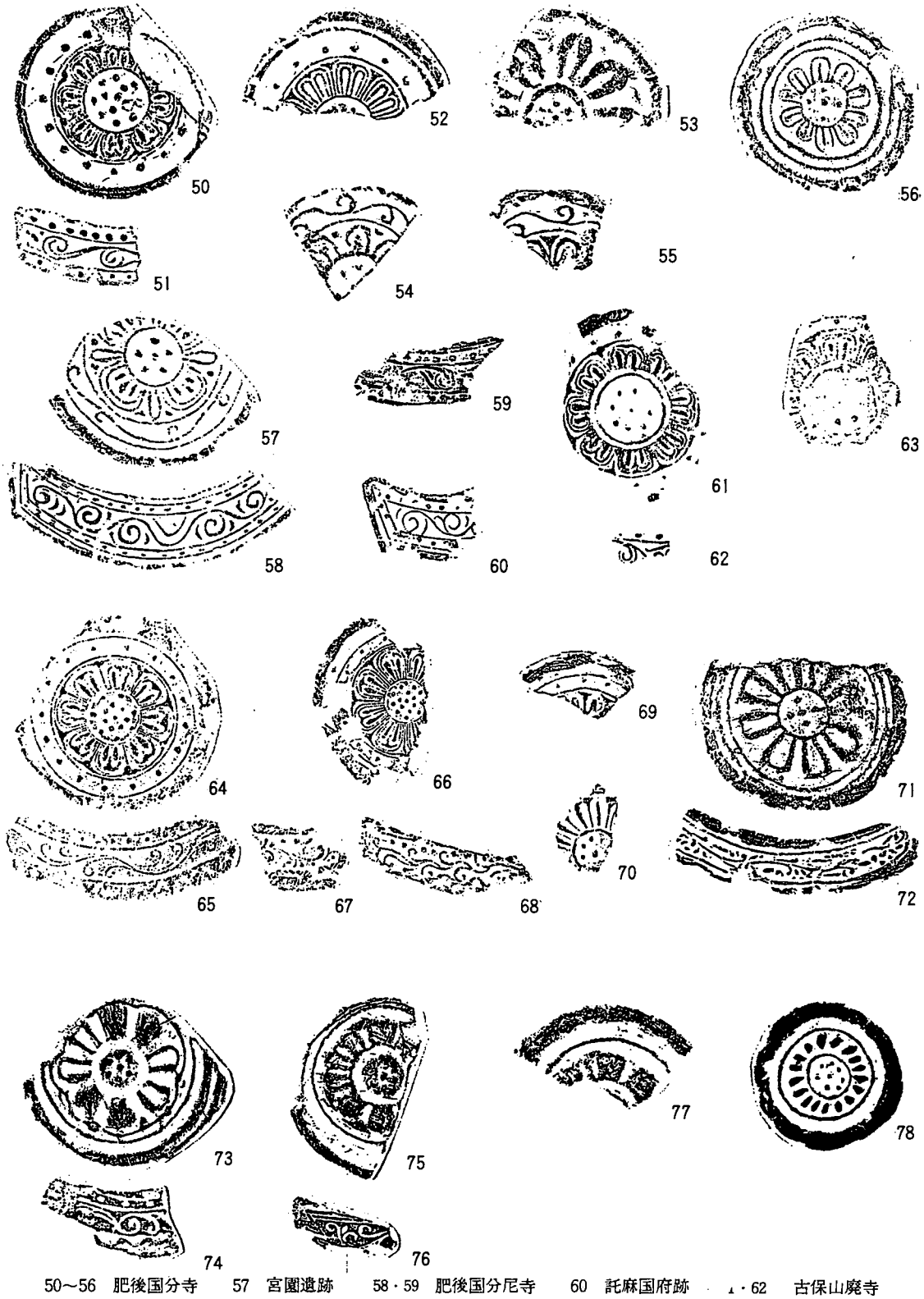
1～8　陳内廃寺出土　　9～11　託麻郡家跡出土　　12～17　渡鹿廃寺出土　　18・19　平原窯跡出土
20～23　興善寺廃寺出土　　24・25　浄水寺跡出土

立願寺廃寺系古瓦



26～37・49　立願寺廃寺　　38～45　稲佐廃寺　　46・47　中村廃寺　　48　熊本市高橋町

肥後国分寺系古瓦

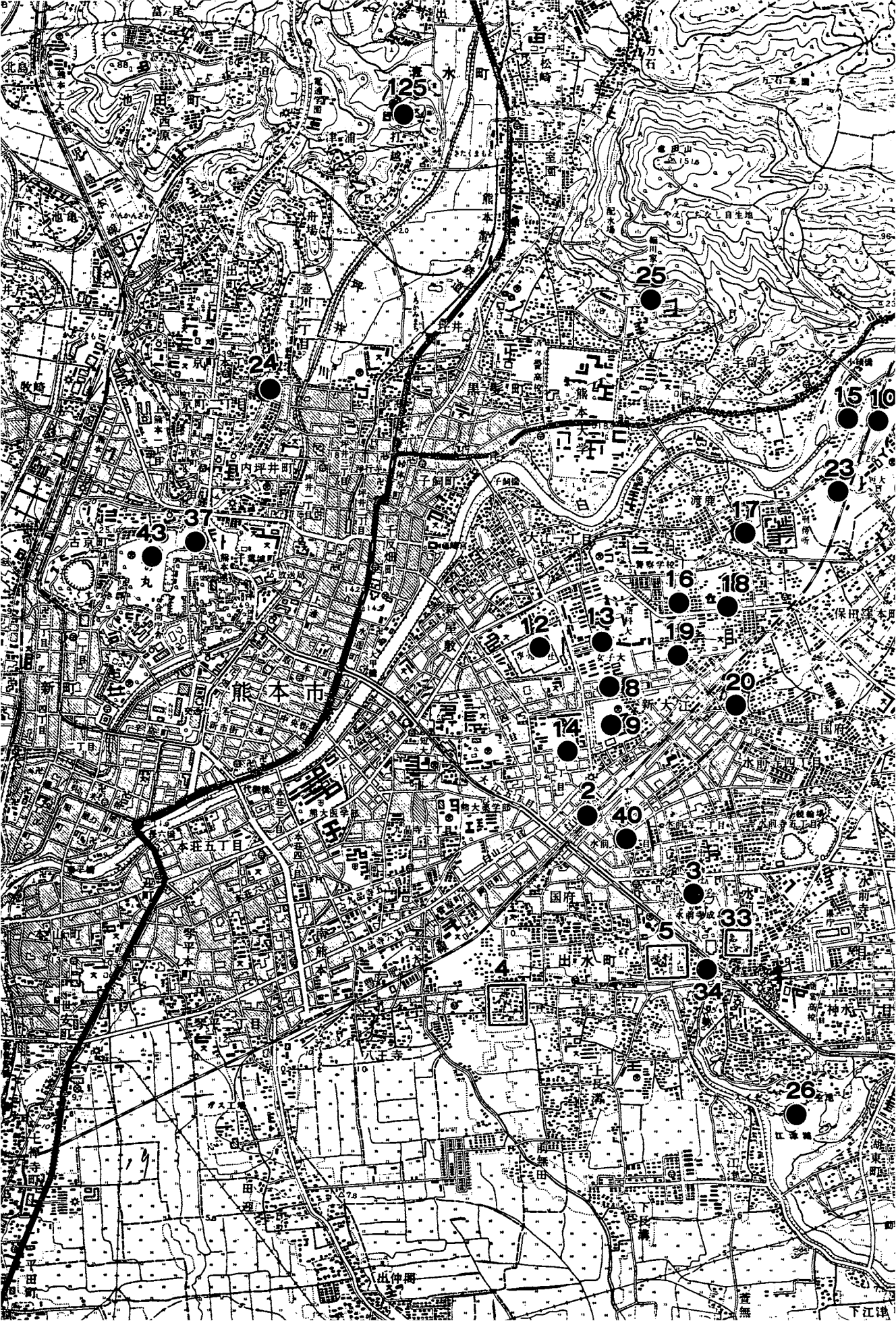


50～56　肥後国分寺　57　宮園遺跡　58・59　肥後国分尼寺　60　託麻国府跡　61・62　古保山廃寺
63　託麻郡家跡　64～68　十蓮寺　69・70　菊池郡家跡　71・72　田島廃寺　73・74・78　池辺寺
75・76　岡遺跡　77　浄水寺跡

大和町
高田町
三加和町
植柳町
玉名郡
大牟田市
荒尾市
菊水町
鹿本郡
山鹿市
菊鹿町
鹿本町
七城町
菊池市
旭志村
菊陽町
西合志町
合志町
大津町
長陽村
西原村
久木野村
長洲町
玉東町
横島町
玉名郡
天水町
北部町
河内町
有明町
島原市
熊本市
益城町
嘉島町
御船町
飽託郡
天明町
宮崎町
富合村
甲佐町
宇土市
宇土半島
中央村
豊野村
知光町
布津町
天草郡
三角・熊本間フェリー(熊本)
有明フェリー(多比良—長洲)

三角大矢野海辺県立公園
インフェリー（島原—松島）
西有家町
有家町
角町
大矢野町
104
103
83
121
82
小川町
竜北町
八代線
102
101
宮原町
柳陽村
61
61
126
八代市
62
63
65
64
60
66
松島町
有明町
上天草市
姫戸町
栖本町
倉岳町
竜ヶ岳町
田浦村
坂本村
五木村
球磨
日奈久
球磨
105
多良木町
深田村
岡原村
免田町
相良村
山江村
球磨村
上村
錦町
人吉市
宮北町
地蔵村町
水俣市
天草諸島
御所浦島
天草国立公園
熊本県八代市

北川部町
河内町
花園町
荒尾
大蔣陣
茶園場
谷尾崎
四方池原
戸坂
横手町
池上町
新村
加茂町
1
35
36
42
41
11
上高橋町
下高橋
高野辺田
下代町
上代町
城山
御馬出
半田町
白川
土河原
蓮台寺町


熊本市
熊本大学
熊本駅
熊本城
国府
出水町
新大江
水前寺
八王寺
出仲間
下江津
江津
25
1
24
15
10
23
17
43
37
16
18
12
13
19
8
20
9
14
2
40
3
33
5
34
4
26

熊本県内古瓦出土地名表

	遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
1	池辺寺跡	熊本市池の上町平字柿の木ビラ	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・鬼瓦	松本雅明・済々黌高校 熊本博物館	熊本史学11号　西山P55
2	熊中通遺跡	熊本市出水町国府字代継	散布地	布目瓦	熊本博物館	肥後上代文化史　東部P160
3	水前寺廃寺	熊本市出水町今	寺院址	軒平瓦・布目瓦		東部P221 熊本史学12号
4	肥後（託麻）国府	熊本市出水町国府本村	国府址	軒平瓦・布目瓦・鬼瓦片	熊本大学・松本雅明	南部P53
5	肥後国分寺跡	熊本市出水町今	寺院址	軒丸瓦・軒平瓦	熊本大学・熊本博物館	南部P71
6	北上・北上B遺跡	熊本市石原町平252～257	散布地	布目瓦片		東部P17
7	古屋敷遺跡	熊本市画津町字古屋敷	散布地	布目瓦	東光彦・熊本博物館	東部P211
8	大江新町遺跡	熊本市新大江1丁目	散布地	布目瓦片		東部P131
9	熊高敷地遺跡	熊本市新大江1丁目	散布地	軒丸瓦・軒平瓦		東部P159
10	新南部A遺跡	熊本市新南部町	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P25
11	新南部B遺跡	熊本市新南部町	散布地	布目瓦片	熊本博物館	東部P26
12	大江遺跡	熊本市大江3丁目	散布地	布目瓦片	東光彦	東部P158
13	大江青葉遺跡	熊本市大江2丁目	散布地	布目瓦片		東部P158 大江青葉遺跡調査報告
14	大江東原遺跡	熊本市大江6丁目	散布地	布目瓦片		東部P159
15	小関原（上段）遺跡	熊本市大江渡鹿小関原	散布地	布目瓦片		東部P33
16	杉ノ木遺跡	熊本市大江渡鹿	散布地	布目瓦		東部P158
17	辻遺跡	熊本市大江渡鹿辻	散布地	布目瓦片	東光彦・熊本博物館	東部P133
18	渡鹿廃寺A地点（託麻郡家址）	熊本市大江渡鹿上の原	郡家址	布目瓦・軒丸瓦	熊本博物館・熊本大学	東部P133・熊本県報3 熊本市史
19	渡鹿廃寺B地点（託麻郡寺）	熊本市大江村の上	寺院址	布目瓦・軒平瓦 軒丸瓦・鬼瓦	熊本博物館・熊本大学	東部P143・熊本県報3 熊本市史

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
20 南平上遺跡	熊本市大江南平上	散布地	布目瓦片		東部P130
21 小山窯跡（楳谷寺瓦窯跡）	熊本市小山町楳谷寺	窯址	布目瓦	熊本博物館・熊本女子大学	東部P71
22 中山窯跡	熊本市小山町中山	窯址	布目瓦		東部P80
23 北久根山遺跡	熊本市北久根山	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P131・肥後上代文化史
24 大道寺廃寺	熊本市京町柳川	寺院址	軒丸瓦・布目瓦・軒平瓦		北部P46
25 小峰遺跡	熊本市黒髪町下立田	散布地	布目瓦	熊本大学	熊本史学9号
26 上江津遺跡	熊本市神水町地先上江津湖	散布地	布目瓦片		東部P212
27 二王堂	熊本市神水町八丁馬場入口	散布地	布目瓦		東部P215
28 上ノ原遺跡	熊本市健軍町	散布地			
29	熊本市健軍町健軍神社境内	散布地	布目瓦・軒平瓦		文化財情報No.55
30 鳥井原遺跡	熊本市健軍町	散布地	布目瓦片		
31	熊本市健軍町ミョウゲンジ屋敷下	散布地	布目瓦	熊本博物館	昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書
32 くらこうじ遺跡	熊本市白藤町	散布地	布目瓦	熊本博物館	
33 陣山廃寺（肥後国分尼寺）	熊本市水前寺公園	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	熊本大学・熊本博物館	南部P94
34 宮園遺跡	熊本市出水1丁目	散布地	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	熊本県教育委員会	
35	熊本市高橋町	散布地			
36	熊本市高橋町堂園	散布地	軒丸瓦片	熊本博物館	
37 千葉城町遺跡	熊本市千葉城町	散布地	布目瓦	高木敏幸	

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
38 神園山窯址群	熊本市長嶺町神園	窯址	布目瓦		東部P73・熊本県報3
39 迎八反田遺跡	熊本市長嶺町迎八反田	散布地	布目瓦		東部P121
40 西水前寺町遺跡	熊本市西水前寺町	散布地	布目瓦	東光彦・熊本博物館	東部P161
41 飽田国府	熊本市二本木延命寺	国府址	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦丸瓦		南部P62・熊本市史
42 石塘遺跡	熊本市二本木町	散布地	布目瓦	熊本博物館	熊本史学12号
43 監物台遺跡	熊本市二の丸町	散布地	布目瓦	乙益重隆・熊本博物館	
44 帯山遺跡	熊本市保田窪本町	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P127
45 保田窪遺跡	熊本市保田窪本町	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P128
46 岩崎遺跡	玉名市岩崎池田674	散布地	布目瓦		
47 蓮華院浄光寺跡	玉名市築地	寺院址	布目瓦	川原弘海	
48 田島遺跡	玉名市中田島	散布地	布目瓦	玉名高校	
49 稲荷山薬師堂遺跡	玉名市繁根木宮中	散布地	布目瓦・軒平瓦・軒丸瓦鬼瓦・鬼面瓦	玉名高校	日本考古学協会第26回総会研究発表要旨
50 玉名郡家址	玉名市立願寺字山	郡家址	布目瓦		
51 立願寺廃寺	玉名市立願寺塔の尾	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦鬼瓦	玉名高校	日本考古学協会彙報　別篇4 第15回総会研究発表要旨
52	菊池市イシャドン坂	散布地	布目瓦		熊本県の歴史
53 西寺遺跡（菊池郡家）	菊池市西寺	郡家址	布目瓦・軒丸瓦	熊本大学	熊本県文化財調査報告5
54 南園遺跡	菊池市西寺南園	散布地	布目瓦	田中儀信	菊池文化財調査票
55 正観寺地蔵堂遺跡	菊池市隈府正観寺	散布地	布目瓦	川上勇輝	熊本県文化財調査報告5

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
56 推定山鹿郡家	山鹿市桜町	散布地	布目瓦・軒平瓦		熊本県の歴史・熊本史学18号
57 中村廃寺跡	山鹿市中村	寺院址	軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦	山鹿博物館・鹿本高校	熊本史学18号
58 東鍋田遺跡	山鹿市鍋田西原	散布地	布目瓦片		熊本県文化財調査報告31
59	宇土市古保里	散布地	布目瓦		
60 能寺廃寺	八代市古麗町能寺	寺院址	軒丸瓦		夜豆志呂31号
61 興善寺廃寺	八代市興善寺町興善寺明言院	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼面軒丸瓦	日隈正道・熊本県文化課 熊本博物館	龍峰村誌 熊本県文化財調査報告1
62 石原五反田廃寺	八代市宮地町字石原五反田	寺院址	布目瓦・軒丸瓦	八代市社会教育課 宮地小学校・江上敏勝	
63 勧行寺跡	八代市宮地町宮地小畑	寺院址	布目瓦・軒平瓦	江上敏勝	八代市郷土史研究史料 夜豆志呂31号
64 中宮護神寺跡	八代市妙見町宮地谷	寺院址	布目瓦・軒丸瓦	盛高靖博・江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
65 妙見上宮跡	八代市妙見町宮地横嶽上宮	神社址	布目瓦・軒丸瓦	内田辰雄・江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
66 妙見中宮跡	八代市妙見町宮地中宮南平	神社址	布目瓦	江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
67 柚の木遺跡	飽託郡北部町柚の木	散布地	布目瓦	熊本大学	
68 稲佐廃寺跡	玉名郡玉東町稲佐切畑399	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	玉名高校・熊本大学	熊本県の歴史
69 西安寺址	玉名郡玉東町西安寺	寺院址	布目瓦		熊本県文化財調査報告8
70 正院遺跡 (山本郡家)	鹿本郡植木町（山本）正院	郡家址	軒丸瓦・布目瓦		熊本県の歴史
71	鹿本郡植木町富応	散布地	布目瓦		第二高校考古学部「部報」VOL. 7
72	鹿本郡菊鹿町黒蛭	散布地	布目瓦		
73 鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町米原	城址	布目瓦・軒丸瓦	熊本県教育委員会	熊本県の歴史　文化財情報No.54

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
74 岡遺跡	菊池郡泗水町田島岡	散布地	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	坂本記念館	菊池文化財調査票
75 田島廃寺	菊池郡泗水町田島字坂口	寺院址	軒丸瓦・軒平瓦	坂本記念館	田島廃寺発掘調査報告
76	菊池郡泗水町住吉	散布地	布目瓦		
77 欠番					
78 四面神社遺跡	菊池郡七城町打越	散布地	軒平瓦・布目平瓦		
79 十蓮寺跡	菊池郡七城町水次	寺院址	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦丸瓦	熊本大学・山鹿博物館	熊本県文化財調査報告5
80 御手洗神社	上益城郡甲佐町安平	散布地	布目瓦	緒方勉	
81	上益城郡益城町塔の平	散布地	布目瓦		
82	下益城郡小川町正院	散布地	布目瓦		
83 年の神遺跡	下益城郡小川町北小野	散布地	丸瓦・平瓦		
84 沈目遺跡	下益城郡城南町沈目	散布地	布目瓦片		沈目
85 沈目立山遺跡	下益城郡城南町沈目	散布地	布目瓦片		沈目立山
86 陳内窯跡	下益城郡城南町陳内本村	窯址	平瓦・軒平瓦	城南町公民館・熊本大学	城南町史
87 陳内廃寺	下益城郡城南町陳内道の上北前田	寺院址	布目瓦	城南町公民館・熊本大学	城南町史
88 益城国府推定地	下益城郡城南町陳内舞の原	国府址	布目瓦	城南町公民館・緒方勉	
89 山上蔵司	下益城郡城南町陳内	倉址	布目瓦		城南町史
90 上ノ原遺跡	下益城郡城南町塚原字上ノ原	散布地	布目瓦		
91 東亀島瓦窯址	下益城郡城南町鰐瀬東亀島	窯址	布目瓦		城南町史

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
92 益城郡家跡（大明神遺跡）	下益城郡城南町鰐瀬宮の前	郡家址	布目瓦	松本雅明・城南町公民館	城南町史
93 陣の平窯跡	下益城郡中央町大沢水西山	窯址	布目瓦	本田営三・熊本大学	
94 西山窯跡	下益城郡中央町大沢水西山	窯址	布目瓦	本田営三	
95 平原窯跡	下益城郡富合町平原本庄	窯址	瓦	城南町公民館・熊本大学	城南町史
96 浄水寺	下益城郡豊野村下郷寺村	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼瓦	豊野村公民館・熊本大学	城南町史 熊本県文化財報告3
97 八の瀬戸窯跡	下益城郡豊野村下巣林八の瀬戸	窯址	鬼瓦・軒平瓦	豊野村公民館・熊本大学	城南町史
98 峯尾原窯跡	下益城郡豊野村上巣林峯尾原	窯址	布目瓦	本田営三・城南町公民館	城南町史
99 古保山廃寺	下益城郡松橋町古保山池尾	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	松橋公民館・城南町公民館 熊本大学	熊本史学13号・城南町史
100 弁天廃寺	下益城郡松橋町		軒丸瓦		
101 平原窯跡	八代郡宮原町	窯址	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦 丸瓦	熊本県文化課	
102 法道寺跡	八代郡龍北町野津法道寺	寺院址	布目瓦		八代郡誌
103 禿島遺跡	天草郡大矢野町維和大桜	散布地	布目瓦		熊本史学50号
104 成合津遺跡	天草郡大矢野町登立字御庄屋田	散布地	布目瓦		熊本史学50号
105 高山窯跡	球磨郡深田村大字深田字椛木	窯址	軒平瓦・平瓦	深田村（熊本博物館寄託）	熊本県の歴史 供給先は勝福寺か
106 十連寺窯跡	荒尾市平山小路	窯址	布目瓦	荒尾市教育委員会	
107 番丈窯跡	荒尾市樺下横打	窯址	軒平・丸・平瓦	熊本博物館	熊本の歴史2（熊日新聞社）
108 田畑窯跡	飽託郡北部町下硯川田畑・小園	窯址	丸瓦・平瓦		
109 大塚遺跡	玉名市立願寺大塚（大塚古墳項部）	散布地	布目瓦1点	熊本県教育委員会	

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
110	玉名市永徳寺（菊池川河川敷）	散布地	軒丸・軒平・丸・平瓦	徳本　明	
111 世尊寺跡	玉名郡玉東町木葉白木字折口	寺院址	布目瓦	玉東町教育委員会	
112 凡導寺跡	山鹿市蒲生福原	寺院址	平瓦	山鹿博物館	
113	(伝)菊池市隈府菊池神社境内		軒丸瓦	菊池神社	熊本県史跡名勝天然記念物 調査報告P342 十蓮寺出土のものか
114 長嶺遺跡	熊本市長嶺町541－1	散布地	布目瓦	熊本市教育委員会	
115	鹿本郡植木町山本山口	散布地	布目瓦		
116 皮籠石遺跡	飽託郡北部町和泉川東	散布地	布目瓦		
117 中山五輪塔遺跡No.6墓壙	熊本市小山町中山	中世墳墓	布目瓦２点	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告36集
118 二本木グランド遺跡	熊本市二本木３丁目	散布地	布目瓦		
119 久保遺跡	上益城郡御船町豊秋久保	散布地	丸瓦８点	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告18集
120 西天神原遺跡	下益城郡城南町平野西天神原	推定益城軍団跡	布目瓦１点	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告32集
121 中小野遺跡	下益城郡小川町中小野	寺院址？	軒丸瓦１点	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告39集
122 上山神遺跡	上益城郡御船町御船上山神	散布地	布目瓦		
123 吹上遺跡	上益城郡御船町豊秋	散布地	布目瓦		
124 古閑遺跡	上益城郡益城町古閑	散布地	布目瓦	熊本県教育委員会	
125 天福寺跡	熊本市清水町打越	寺院址？	布目瓦		北部P22
126 川田京坪遺跡	八代市川田町西字京坪	散布地	軒平瓦	熊本県教育委員会	熊本県文化財調査報告46集

備考欄の東部・南部・西山・北部とは熊本市文化財調査報告書の各巻を示す。

この地名表は村田・甲元両氏作成のものを基にし、広瀬正照氏作成のものを追加した。なお追加分等については富田紘一・東光彦・緒方勉・上野辰男・松本健郎・高木正文・江本直・田添夏喜・桑原憲彰・徳本明・豊崎晃一・平山修一・丸山武水・福田正文・吉田雅人・橋本誠二・坂田幸之助・西住欣一郎、他の多くの諸氏の御教示を得た。地名表中No.41の飽田国府には延命寺跡の瓦類を含ませている。

肥後・平原瓦窯跡と出土瓦当の検討

小田富士雄*・武末純一**

1977年3月、熊本県教育委員会文化課の好意によって熊本県八代郡宮原町に所在する平原瓦窯跡の現地調査と出土古瓦を見学することができた。本窯跡の構造、生産瓦については肥後地方のみならず、もっと広く九州地方全体の立場に立って検討すべき必要があることを痛感したのであったが、今般調査報告書の作成にあたって所見を求められたので、上述のような立場からとりまとめ、さらに年来考えていた関連する問題について言及してみたいと思う。現地見学の段階から御配慮いただいた県文化課の隈昭志、島津義昭、江本直、高木正文の諸氏に感謝申し上げる。

1．瓦窯の構造からみた系譜

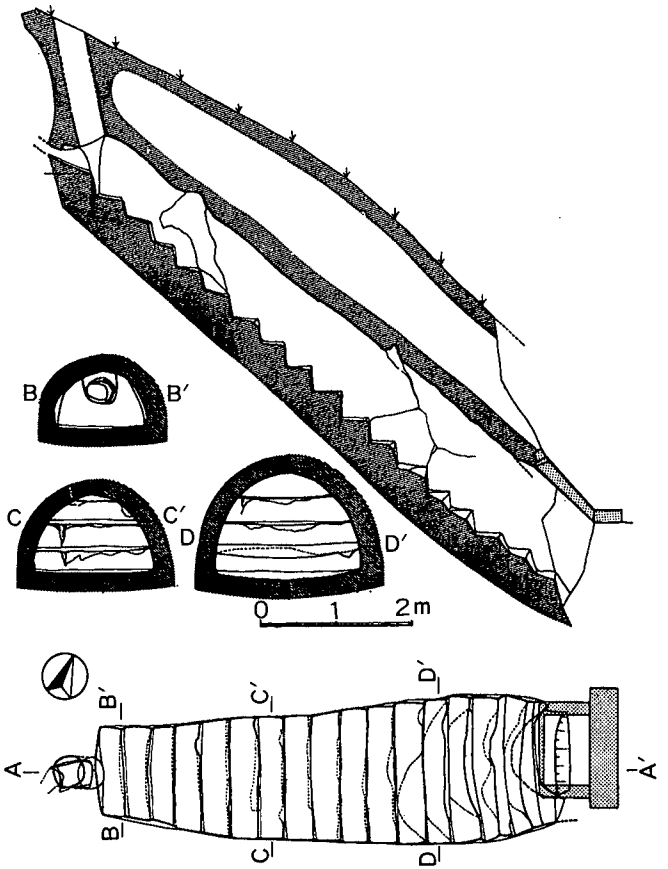
発掘調査された瓦窯跡は計4基であるが、1977年3月に実見した際の所見と同年2月に熊本県教委で発刊した速報[1]によれば、いずれも地下式の階段式登窯である。焼成室の上方は削平されていて完全ではないが、それにしても通常の階段式登窯にくらべれば全長が短かく、また傾斜の大きいものがある印象は否定できない。窯跡個々の構造の詳細については調査者の報告にまつこととして、ここでは本窯跡の系譜についてふれておこう。

わが国における階段式登窯の出現は大和・飛鳥寺の創建においてであった。造瓦の初見は崇峻紀元年（588）にみえる百済からの瓦博士の渡来である。これが直接的には飛鳥寺の建立にかかわるものであり、その瓦窯は近くの丘陵に設営された刳抜きの階段式登窯であった。[2] しかもこれと同形式の窯跡が百済の故地扶余で発見されている[2]ことは、その後のわが国各地で発見されている同系瓦窯の系譜をここに求めることができるのである。

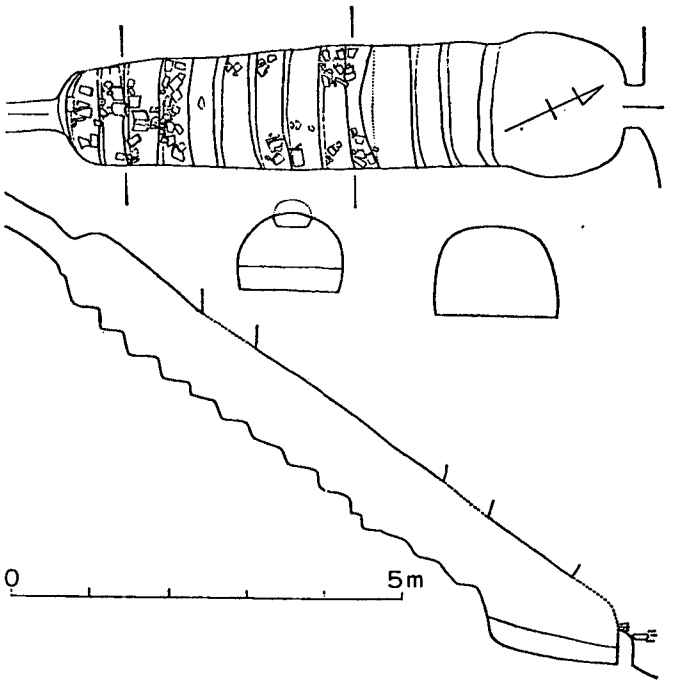
九州では福岡市・老司瓦窯、福岡県築上郡太平村・友枝瓦窯、福岡県田川市・天台寺瓦窯、熊本県下益城郡城南町・陳内窯跡などが初期の階段式登窯としてあげられ、いずれもそれぞれの地域の初期佛教寺院の創建に関係した瓦窯である。[3] それ以前の須恵器窯跡には階段式は一例も認められないので、九州の初期寺院の出現にともなって登場したものであったことは疑いないであろう。これらのうち老司瓦窯は1936年に採土工事によって発見され、[4] 当時発見に立会った鏡山猛先生によれば、階段式登窯と判断されたと聞いているが、完全な発掘調査を行っていないのが惜しまれる。老司瓦窯の生産瓦当は筆者が老司Ⅰ式と称しているもので大宰府政庁や観世音寺などに供給されている。[5] 友枝瓦窯は垂水廃寺の供給屋瓦を生産し、新羅系、百済系の瓦当が発見される。[6] 天台寺瓦窯も天台寺廃寺の供給瓦を生産しており、新羅系瓦当が発見されている。[6] 陳内窯跡[7]は次項に述べるように陳内廃寺[8]の供給屋瓦を生産しており、大宰府系古瓦

＊　北九州市立歴史博物館

＊＊　北九州市立歴史博物館



2．友枝第1号瓦窯跡（福岡）



1．陳内瓦窯跡（熊本）

Fig. 1　階段式瓦窯参考図
（『日本の考古学』Ⅵ及び『垂水廃寺』より転載）

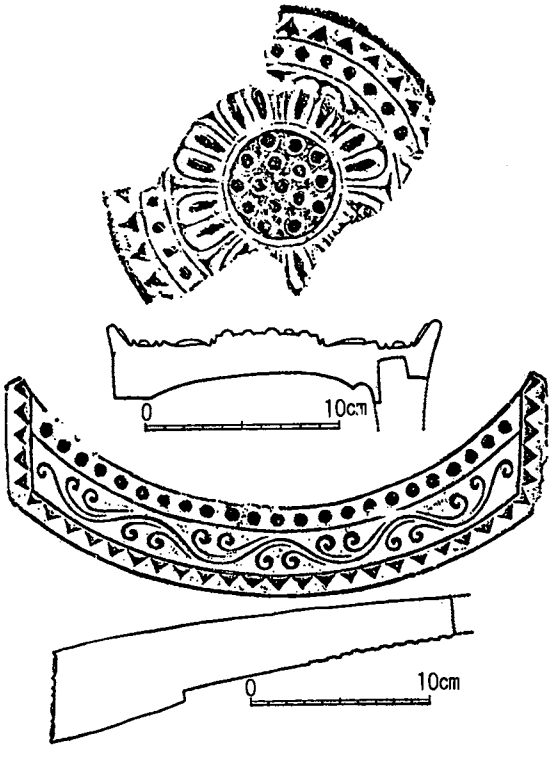
（老司系、鴻臚館系）が発見されている。したがってこれらの瓦窯は古いものでは７世紀後半にまでさかのぼり、操業の下限も八世紀前半より下らないのである。

友枝瓦窯[9]は全長８メートルに及び17段から成る刳抜き式登窯である。天台寺瓦窯[3]は全長５メートル、７段以上から成る半地下式登窯である。陳内窯跡[7]は全長７メートル余で13段から成る刳抜式登窯である。

肥後地方における老司系古瓦を出土する寺院は後述するように玉名市・立願寺廃寺[5]と陳内廃寺[8]があるが、立願寺廃寺の創建瓦窯は未見である。立願寺廃寺は陳内廃寺より創建年次がややさかのぼるかと思われるので、陳内窯跡以前に階段式登窯が導入されている可能性がのこされている。構造的にみて九州地方に出現したこれらの初期の階段式瓦窯はきわめて類似性が強い。後述する瓦当の比較からして、平原瓦窯が陳内瓦窯より後出的位置にあることは明らかであるから、陳内瓦窯に大宰府系瓦窯の導入から定着期としての評価を与えるとすれば、平原瓦窯は肥後に定着して展開した段階のものということができよう。とくに窯内階段部を１～２条の溝が焔道から燃焼部にむかって設けられているごときは初見である。焔道から流入する雨水の排水のためか、また焼成時の炕道的意味を導入したものとみるか筆者自身まだ定見を得るにはいたっていない。

2．瓦当文様からみた年代観

本窯跡で発見されている瓦当は複弁八葉軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦の一組である。筆者のいう大宰府系古瓦のうち、老司式古瓦と称しているセットである[5]。福岡市老司瓦窯の資料を指標として命名したものである。この形式の軒丸瓦文様の特徴は、中房内蓮子が１－５－10の配置をとり、珠文をめぐらす外区の外にさらに斜立する周縁を設け、ここに外行陽起鋸歯文をめぐらしている点である。次に軒平瓦文様の特徴は、波状の扁行唐草文を主文とするが、主軸となる１本の波状線をすえ、波文の上下に頭部を巻きこんだ唐草２個づつを配し、七単位で構成されている。但



Fig．２　老司Ⅰ式瓦当文（福岡市・老司瓦窯）

し主軸の両端は巻いているので左右両端の単位では三個の唐草となる。そして各単位では右側に尾を流しているが、右端のみは左に流している。外区は左右と下に外行陽起鋸歯文、上に珠文を配する。このような特徴をもった老司瓦窯出土のものを筆者は老司Ⅰ式としている。

先ず軒丸瓦から検討をはじめよう。老司Ⅰ式においてさらに詳細なことを言うならば、中房蓮子はその一つ一つが周囲に円圏をめぐらしていること、外区珠文と周縁鋸歯文の数が各々32個であって、蓮弁、珠文、鋸歯文の間にはFig. 3 左に示すような図割配置の関係がみられる。

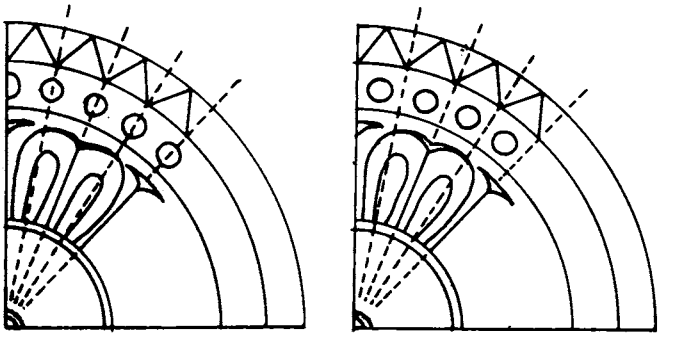


Fig. 3 老司Ⅰ・Ⅱ式軒丸瓦文様図割対照図

次に筑前国分寺瓦窯の軒丸瓦に代表される老司Ⅱ式では、中房蓮子が1－5－9となって外周の蓮子一顆を減じている。さらに外区珠文の配置がⅠ式と同数ながらFig. 3 右に示すように放射図割線上にのらず、その中間に配置される。したがって周縁鋸歯文との関係も鋸歯文一個に対して珠文一個が対応する配置がとられることになる。

次に平原窯跡の軒丸瓦を以上のような方法で観察してみると、先ず中房蓮子は1－5－9の配列であり、蓮子を囲む円圏は消失している。次に外区の珠文は22個、周縁の鋸歯文は24個で、Ⅰ・Ⅱ式にみる珠文、鋸歯文各々同数の32個にくらべて減少している。いまⅠ・Ⅱ式に準じて間弁を通過する放射状図割線によって瓦当面を八等分してみると、鋸歯文は各区3個あて配されるが、珠文にいたっては図割線上にのるものは一ケ所で、他は図割線に接近したり二珠文の中間を通過したりという無秩序

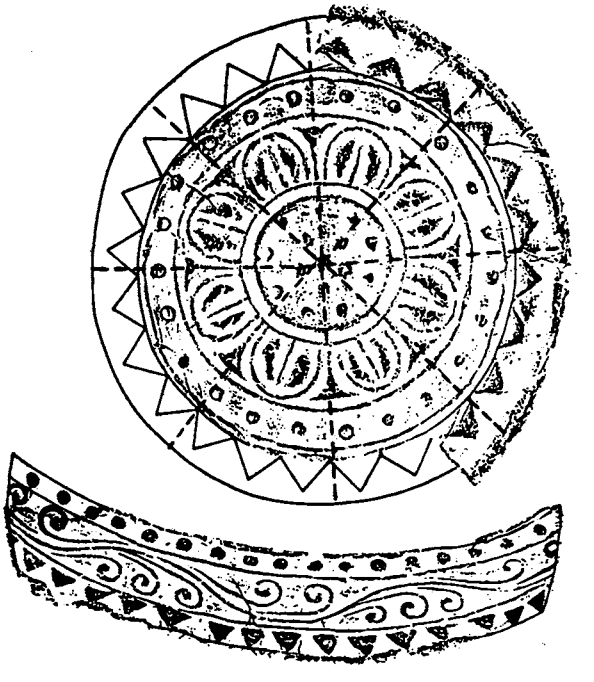


Fig. 4 平原瓦窯跡出土瓦当文様図割

性がみられる。したがって中房の蓮子配置からみれば平原窯跡例はⅡ式よりさかのぼらない。また珠文、鋸歯文の規則性が失われている点もこのことを支持するものであろう。外区珠文の減少ということは瓦当径がⅠ・Ⅱ式よりやや小さくなったこともさることながら、珠文の間隔密度が粗になっていることと関係がある。一般に九州地方では奈良時代も後半期になるとそれ以前にくらべて瓦当径が小さくなり、外区珠文の間隔も大きくなる傾向があることと付合している。Ⅱ式に属する筑前国分寺瓦窯の資料は国分寺の創建時に使用されているので、文献史料の方面から天平18年（746）～天平勝宝８年（756）以前に比定されることは別に推考したことがある[10]。したがって平原瓦窯跡例がそれ以降であることは先ず疑いないところである。

ところで肥後地方に老司式軒丸瓦が伝播した時期はさらにさかのぼる。その最古のものは玉名市・立願寺廃寺の資料であろう[5]。これは周縁を欠いているが、中房蓮子の配置、間弁・珠文・鋸歯文の図割関係などはⅠ式と同じであるが、蓮子を囲む円圏はみられない。次に位置づけられるのは下益城郡城南町・陳内廃寺の資料である[8]。これは瓦当径も老司Ⅰ・Ⅱ式に匹敵する

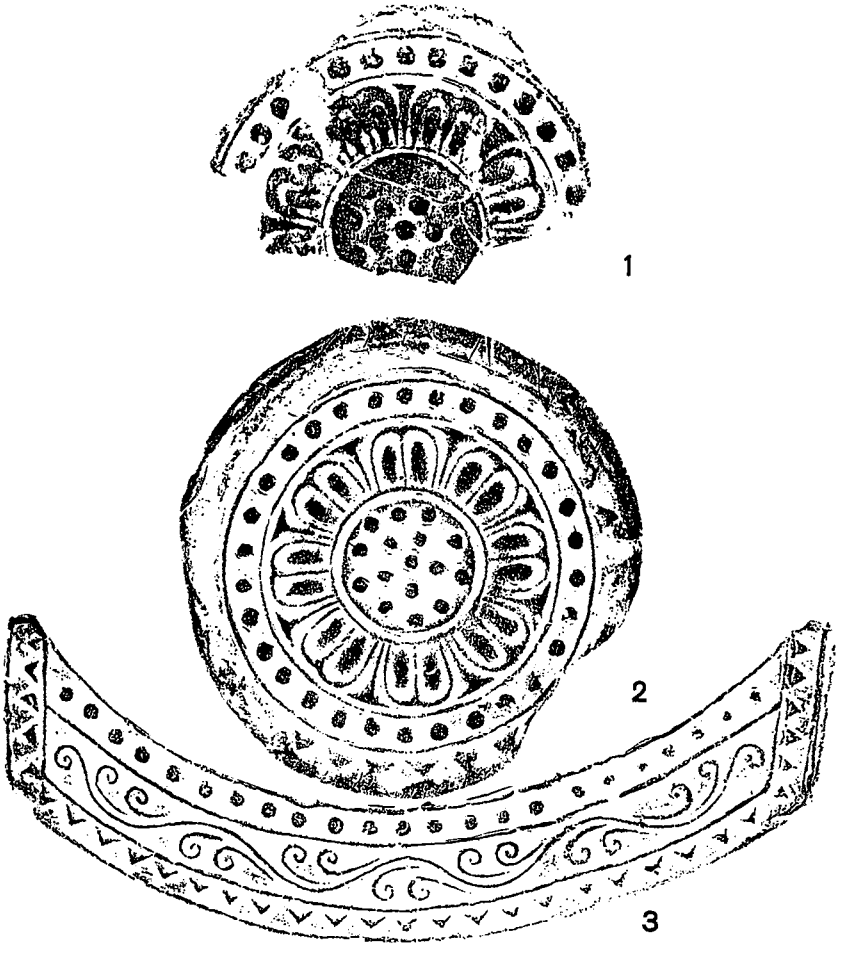


Fig. 5　肥後地方の老司系瓦当文様拓影　1：立願寺廃寺　2・3：陳内廃寺

ものであるが、中房蓮子はⅠ式配置であり、間弁・珠文・鋸歯文の図割関係はⅡ式を踏襲しているが一部にやや乱れを生じている。したがって立願寺廃寺例はⅠ式亜型、陳内廃寺例はⅠ式亜型かⅡ式併行型として位置づけることができよう。かくして肥後地方における老司系軒丸瓦の瓦当文様の推移は

〔筑　前〕老司Ⅰ式 ⟶ 老司Ⅱ式
〔肥　後〕　立願寺廃寺 ⟶ 陳内廃寺 ⟶ 平原瓦窯跡

となろう。

次に老司Ⅰ式軒丸瓦では主文様は七単位の唐草文を連続し、外区は上縁珠文23個、下縁鋸歯文23個、左右縁鋸歯文各々５個という配置である。さらにⅡ式になると主文様はⅠ式をほとんど踏襲しながらも唐草の表現に雄健さがなくなり、やや形式的に惰した傾向がみられる。外区の珠文・鋸歯文にも２～３個の増減が生じている(Fig.6上)。

Fig.　6　各地の老司系軒平瓦文様
上：筑前国分寺(Ⅱ式)　中：豊後国分寺　下：薩摩国分寺

平原瓦窯跡の軒平瓦は瓦当の左右長がⅠ・Ⅱ式にくらべて短かくなることは軒丸瓦の小形化と相応ずるものであろうが、瓦当面の左右両端の唐草文が中途で切断されている。このことは瓦当幅と完全な文様を一致させようという基本型が守られなくなったことを意味するものであり、瓦当幅がより優先するようになったことを示すものであろう。珠文・鋸歯文が粗になることも軒丸瓦の場合と照合できる。この傾向は主文様にもあらわれ、唐草は五単位に構成され、唐草の尾部の流れも右から左となってⅠ・Ⅱ式と逆方向となる。さらに単位数が二単位減じたことは瓦当幅の小形化に負うところ大きいであろうが、そのために一単位の唐草文に空間が多くなることを考慮してか、２個から３個に増加している。ただし中央の一単位のみは２個のままである。

九州地方の老司系古瓦の流通が８世紀中頃の国分寺建立を直接の契機としている地域が多いことは別に論じたことがある[11]。ただし筑前・筑後・肥前・肥後地方にはⅠ式またはⅠ式亜型が発見されるところからみて、国分寺以前にすでに流通したことが考えられる。ところが、豊前・豊後・薩摩地方では国分寺の創建屋瓦に初登場し、それらはⅡ式以降の様式に属している。な

かでも豊後国分寺跡ではⅡ式のほかに平原瓦窯跡例と同じ左流れの唐草文軒丸瓦があることが注目されるのである(Fig. 6 中)。しかし両者対照してみるに、豊後国分寺跡の場合は唐草文の表現はきわめて類似しているが、庫草文の各単位別にみると最右側の一単位のみ3個で他は2個づつの構成となり計6個の単位となっている。さらに左右の二単位分は唐草の尾部を右に流している点で、Ⅰ・Ⅱ式と平原窯跡例を折衷した形態であるといえよう。したがって平原瓦窯跡タイプと豊後国分寺跡タイプの軒平瓦は肥後と豊後の地域においてそれぞれⅠ～Ⅱ式から変成されたものであったと考えざるをえない。また豊前国分寺跡、薩摩国分寺跡(Fig. 6 下)ではそれぞれ右流れと左・右流れ併用というちがいはあるが、蕨手状に巻く頭部が珠点に簡略化されていることは最とも変化著しいものといえよう。したがって九州各地の国分寺でそれぞれ個性ある受容方式をとっていたことがうかがわれるであろう。

ところで肥後地方の老司系軒平瓦で平原窯跡より古式に属するものに上述の陳内廃寺の資料がある。これはすべての点で老司Ⅰ式に対比できるものと、きわめてそれにちかいものの二者があるが、後者については詳細に点検すれば、右より二つめの唐草文単位が3個の唐草となっている点が異なっている。したがって厳密にはⅠ式亜型としてあつかうべきものである。このような変化は上述した陳内廃寺軒丸瓦の位置づけと同じ結果が得られることになってきわめて好都合である。したがって平原窯跡の軒平瓦はやはり直接の粗型を陳内廃寺資料に求むべきであることが確認されたわけであって、その年代観も平原瓦窯軒丸瓦と同じところに比定してなんら不都合はないという追検証をはたしたわけである。

3. 肥後における老司系古瓦・同系瓦窯の流入

老司系古瓦のセットが九州に最初に出現したのは太宰府とその周辺の地域であった。老司Ⅰ式瓦を生産した最古の窯跡は福岡市老司瓦窯であり、これは階段式の登窯であった。

肥後における老司系古瓦は上述したように立願寺廃寺、陳内廃寺にⅠ式ないしⅠ式亜型が発見されているので、太宰府地方で老司Ⅰ式が盛行し、Ⅱ式が出現する以前にⅠ式瓦が流入していることはまず疑いないところである。

ところで肥後地方で老司系古瓦が生産されたことを知りうるのは下益城郡城南町の陳内瓦窯跡があり、あらたに今回の平原瓦窯跡が知られた。陳内瓦窯跡は陳内廃寺の創建屋瓦を生産した階段式登窯であることはすでに述べたとおりである。したがって肥後地方においては奈良時代前期を下らない時期に、老司Ⅰ式の古瓦と瓦窯の形式がほとんど直輸入したことがうかがわれたのである。このような状況は九州各地の大宰府系古瓦の出現と生産という観点から対比してみるとき、肥後地方が特に他地域より古く現われていることが注目されるのである。このような現象の背後には肥後地方にあってはいちはやく大宰府文化受容に並々ならぬ関心を示していたことがうかがわれるであろう。

そこでこの問題に関して筆者が年来関心をもっているのは肥後国守道君(公)首名(おふとな)の治績であり、一部ふれたこともある。[11] いま首名に関する史料を年代順に列挙してみると、

○文武天皇四年（七〇〇）六月甲午(一七)

（前略）道君首名。（中略）撰定律令。賜祿各有差。（続日本紀）

○大宝元年（七〇一）六月壬寅(一)朔。（続日本紀）

令正七位下道君首名説僧尼令于大安寺。（続日本紀）

○和銅四年（七一一）四月壬午(七)

（前略）正六位上（中略）道君首名（中略）従五位下。（続日本紀）

○和銅五年（七一二）九月乙酉(一九)

以従五位下道君首名。爲遣新羅大使。（続日本紀）

○和銅六年（七一三）八月辛丑(一〇)

従五位下道公首名至自新羅。（続日本紀）

○和銅六年（七一三）八月丁巳(廿六)

（前略）従五位下道君首名爲筑後守。（続日本紀）

○靈亀元年（七一五）正月癸巳(一〇)

（前略）道君首名並従五位下（下略）。（続日本紀）

○養老二年（七一八）正月庚子(五)

（前略）従五位上道君首名正五位下。（続日本紀）

○養老二年（七一八）四月乙亥(一一)

筑後守正五位下道君首名卒。首名少治律令。暁習吏職。和銅末。出爲筑後守。兼治肥後國。勸人生業。爲制條。教耕營。頃畝樹菓菜。下及雑肫。皆有章程。曲盡事宜。既而時案行。如有不遵教者。隨加勘當。始者老少竊怨罵之。及収其實。莫不悦服。一両年間。國中化之。又興築陂池。以廣漑灌。肥後味生池。及筑後往々陂池皆是也。由是。人蒙其利。于今温給。皆首名之力焉。故言吏事者。咸以爲稱首。及卒百姓祠之。（続日本紀）

○承和二年（八三五）正月癸丑(七)

左京人遣唐史生道公廣持賜姓當道朝臣。和銅年中。肥後守正五位下道君首名。治迹有聲。永存遺愛。廣持是首名之孫也。（続日本後記）

○貞観七年（八六五　）十一月二日己卯

詔贈正五位下道公首名従四位下。首名是良吏也。今追賞焉。（三代實録）

また天宝勝宝三年（751）十一月編者序文あるわが国最古の詩集といわれる『懐風藻』のなかに首名の詩一首が収められている。

正五位下肥後守道公首名　一首 年五十六

五言、秋宴一首

望苑商氣艶　鳳池秋水清　晩燕吟風還　新雁拂露驚

昔聞濠梁論　今辨遊魚情　芳莚此僚友　追節結雅聲

以上の首名に関する史料を通覧すれば、彼は大宝律令の選定、遣新羅使などの重要な仕事を果したのち、和銅６年（713）８月から養老２年（718）４月卒去するまで筑後国守と肥後国守を兼任し、代表的な律令官人として政治・経済の振興に力をつくし、死後も永く追慕されたのであった。当時の大陸事情にも明るく、また文人としての才にも長じていた。おそらく八世紀初頭の肥後地方において、新興大宰府の整備にいち早く対応でき、かつ大宰府の文化をこの地方に引きいれることの可能な地位と権力と見職をそなえていた人は彼をおいては先ず考えられないところであろう。立願寺廃寺、陳内廃寺などが肥後における最古の佛教寺院として出現し、それが著しく大宰府文化の初期の様相を呈している点をあわせ考えるならば、大宰府文化をまずこの地方に移植すべく努力した最初の人であったろうと推測することは国守在任中の治績に照してみても無理のないところと思われる。このような背景のもとに半島系の新しい技術を導入した階段式瓦窯が陳内瓦窯として出現し、さらに平原瓦窯の段階では肥後タイプともいえるような形態にまで定着したのであった。

なお、肥後における首名関係の遺跡については中川斎氏の報文[12]があるので参照されたい。

（1978. 3．18稿了　文責：小田）

註１）「熊本の文化財調査―九州自動車道と文化財第１号―」・1977

２）『飛鳥寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報五）・1958

３）小田富士雄「窯業―九州」（『日本の考古学』Ⅵ）・1967

４）鏡山猛「北九州近況」（考古学雑誌26―１）・1936

５）小田富士雄「大宰府系古瓦の展開」（『九州考古学研究・歴史時代篇』）・1977

６）小田富士雄「豊前における新羅系古瓦とその意義」（『九州考古学研究・歴史時代篇』）・1977

７）松本雅明編『城南町史』第二章第二節三・1965

８）『城南町史』第二章第一節二・1965

９）森田勉・高橋章ほか『垂水廃寺発掘調査報告書』（新吉富村文化財調査報告書第２集）・1976

10）小田富士雄「国分寺の成立」（『九州考古学研究・歴史時代篇』第一部第一章第二節）・1977

11）小田富士雄「初期寺院跡研究の成果」（『九州考古学研究・歴史時代篇』第一部第一章第一節）・1977

12）中川斎「熊本における道君の遺蹟」（日本談義86号・1958）「再び道君の遺蹟に就いて」（日本談義90号・1958）

平原窯跡付近の地質学的所見

長谷　義隆*・高橋　俊正**

1．はしがき

筆者らは、熊本県教育庁文化課の委嘱により、昭和51年9月25日および昭和52年　月　日、九州縦貫自動設工事予定地にある立神遺跡・平原窯跡および岩立古墳付近の地質学的観察を行なった。ここに観察の概要をとりまとめ報告する。

2．平原窯跡およびその周辺

この地域の基盤岩は宮原花崗閃緑岩である。本岩は、風化作用をうけて著しく脆弱になっており、平原窯跡付近ではマサ状を呈している。窯跡はマサ状になった部分に設けられたものである。

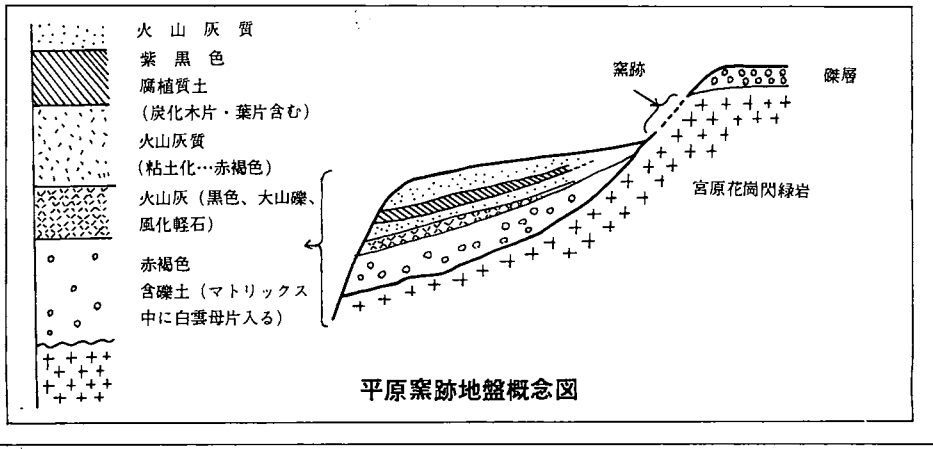
高位段丘に対比されると考えられる礫層は、宮原花崗閃緑岩を不整合に覆い、海抜約80m付近に分布する。礫種は、チャート、砂岩などの古期岩類に由来するものである。チャート以外の礫は、一般に極度に風化をうけたいわゆる〝くさり礫〟である。

宮原花崗閃緑岩および高位段丘（？）礫層を削剝して形成された斜面上には、赤褐色含礫土が堆積している。これは崖錐性の堆積物であると考えられる。基質は砂および粘土から構成されており、しばしば白雲母片を含んでいる。したがってその起源は宮原花崗閃緑岩に求められる。また含有される礫は、チャート、砂岩などの亜円礫～円礫で、高位段丘（？）礫が再堆積したものと考えられる。

黒色火山灰層は、厚さ30～50cmで、火山礫および風化した軽石を含むガラス質火山灰である。天然木炭を含む部分がある。

その上位には厚さ約80cmで、粘土化した赤褐色火山灰層が重なり、さらに厚さ約50cmの紫黒色腐植質土となる。この腐植質土中には、炭質木片および葉片が認められる。

腐植質土より上位は、褐色火山灰層（厚さ25cm以上）であり、最上位は表土となっている。



平原窯跡地盤概念図

*　熊本大学理学部
**　熊本大学教養部

プロトン磁力計による磁気探査

遺　跡　名：平　原　遺　跡

所　在　地：熊本県八代郡宮原町

使用器材：測機舎プロトン磁力計

測定日時：51年8月4日～51年8月11日

測　定　者：保存科学研究会

（担当　河　原　忠　司）

（担当　木　村　芳　朗）

測　定　範　囲：約7,000㎡

詳細に測定した範囲：約 700㎡

高圧線による測定不能範囲：約2,600㎡

1．遺跡について

本遺跡は窯跡を中心にした遺跡で、その面積は約10,000㎡に及ぶ。このうち調査区画の設定してある約 7,000㎡について、その区画に従って調査した。

本遺跡は、人家や道路からは離れているが、遺跡の北西端を高圧線が走っており、これが大きな影響を与えることは否めない。

2．測定方法

以上の遺跡の条件から、高圧線がどのような範囲まで影響を与えているかを知る必要があり、先づ、その為の調査を行った。

遺跡に設定された4m毎の区画を北から南に測定した。この調査で、高圧線の影響の範囲を知ると共に、遺跡全体の大まかな状況を知ることが出来た。

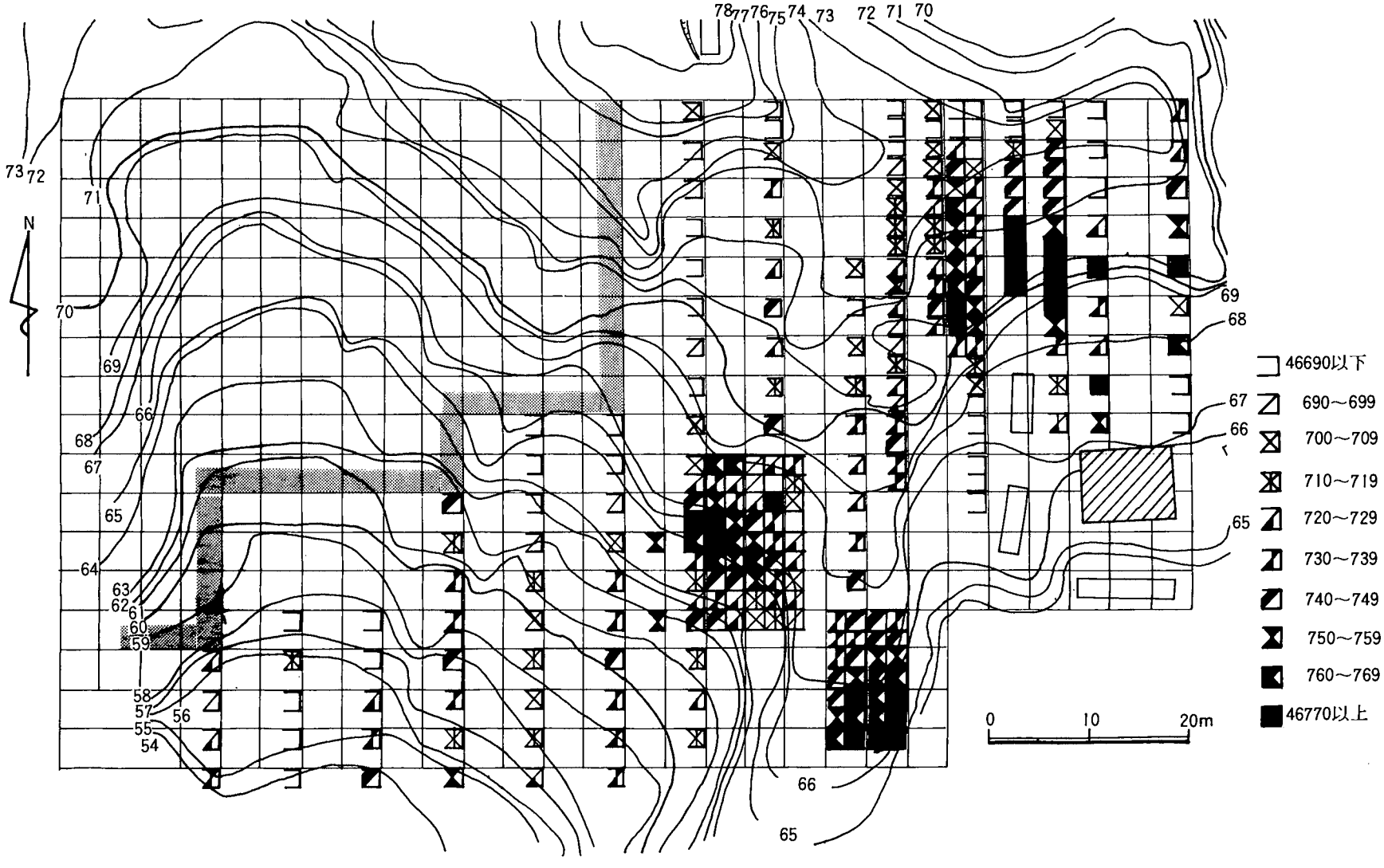
その結果、約 2,600㎡については高圧線の為に全く測定不能だったり、一応測定は出来てもバラツキがひどくて測定データを信用できないことが分った。

その 2,600㎡を除くと、他は一応測定可能である。最初の測定結果を見ると、当然のことながら、窯跡付近に於て高い値を見る他、2～3の地点に於て、高い値を示すことが分った。そこで、その3点に於て、より詳細なテストを行った。

3．測　定　結　果

測定結果は別紙の通りです。黒が強く見える所が高い値のでた所です。

それぞれの記号には、それの意味する絶体値を注記していますが、その数値より全体の傾向、


N
46690以下
690～699
700～709
710～719
720～729
730～739
740～749
750～759
760～769
46770以上
0
10
20m

磁場の勾配の方に注目して下さい。

① 窯跡付近で高い数値がでるのは当然ですが、他に２ケ所高い数値のでる所があります。

② 全体的に南側の調査区端で若干高い値を示す傾向があります。

③ 高い値を示していない所には考古学的な遺物がないと断定は出来ません。

②については、おそらく地層の変化によるもの、即ち、磁気を含んだ土が下側の方に多く堆積していることが考えられます。

③についてですが、それは次のような理由からです。

御承知のように地球全体が強い磁気を持っています。それは所によって異りますが、日本では

程度の値を示します。しかしその値は絶体的なものではなく、例えば太陽の活動などにより日々刻々変化しています。その数値は変化の少い時でも20^{γ}～30^{γ}から50^{γ}位にはなるようです。ところで、窯跡の場合は100^{γ}以上の勾配を見るのでその探査は比較的に容易なのですが、他の考古学的遺物の場合10^{γ}～20^{γ}といった低い値しか示しませんので、地球磁場の日変化の中に吸収されてしまうわけです。私達も一応の補正を行ってはいますが、その補正だけでは遺物の有無の断定は、現段階ではできません。

楳谷寺・神園山瓦窯址

三島　格*

位　　置　飽託郡託麻村大字小山・大字神園（現熊本市小山町および長嶺町神園）

調査期間　昭和41年12月25日～29日

調 査 者　日本考古学協会生産技術特別委員会窯業部会（責任者　三島格）
上野辰男・伊藤圭二・佐藤伸二・緒方勉・杉村彰一・隈昭志・東光彦・小田富士雄・乙益重隆・原口長之・松本雅明・田辺哲夫・松村正一・敷島・嘉悦・佐藤(哲)・板楠・田中ら

熊本市周辺の古代窯業地帯は、肥時国府や国分寺などの、造瓦生産とも関連する重要な問題をもっている。学史的には、下林繁夫(1926年)の「神園山より得たりという」瓦に対する見解がもっとも古い。(註１)下林は渡鹿で発見されたものが、神園山まで運ばれその地で捨てられたのだろうと考えた。その根拠は、神園山には「遺跡の考ふ可きものを見ず」というにあった。

戦後にいたり上野辰男・東光彦・乙益重隆氏(註２)らの踏査により、小山山・神園山・立田山などの山麓に、瓦窯址が相ついで発見され、下林が材料不足のまま考えたこととは反対の、生産流通コースが想定されているが、具体的には、どの瓦窯址が国分寺とむすびつくのかなどの、細部にわたっては明らかにされていない。本調査の目的の一つもこの点においた。

(1) **楳谷寺瓦窯址**（Ｆｉｇ．１・２）

楳谷寺北側背後丘陵斜面に構築された、半地下式の窯で、等高線（93～94m）に斜交している。後代の破壊がかなり激しいが、燃焼室と焼成室の大部分の遺存していたことは幸いであった。構造上注意すべき点の一つは、燃焼室の床面全域が平面ではなく、その中央部に同室全長にわたって幅18～40cm、深さ６～12cm余の浅い溝状の遺構をもつ点である。溝の肩から上も斜面となるが、側壁と交わる面は平面である。一側は後世の破壊により欠失するが、同じ構造であったろうと推測する。この溝状の構造が後世のものでないことは、先端が焼成室にくいこんでおり、同部がことに加熱赤変していることからも証される。溝の中には灰が堆積する。溝の一端がラッパ状に開くことからも、熱効率上昇のための施設であろうと考える。

焼成室は奥壁に向ってすぼまるが、地くずれのために同部と煙出し部は発掘を中止した。同室の手前１ｍ余の床面は水平で、次第に傾斜をとるが、きわめて緩傾斜で平窯に属する。無段である。先述の燃焼室中央の溝に直交するごとく、丸瓦がおかれていた。丸瓦・平瓦の外に焼成室・燃焼室からも少量の須恵器があり、壺形には耳つき壺がある。

現地において、出土瓦の整理にあたられた東光彦氏（熊本市立博物館）は、発掘終了時にリポートを寄せられたが、重要な部分を次に抄録する。

＊　前福岡市歴史資料館館長

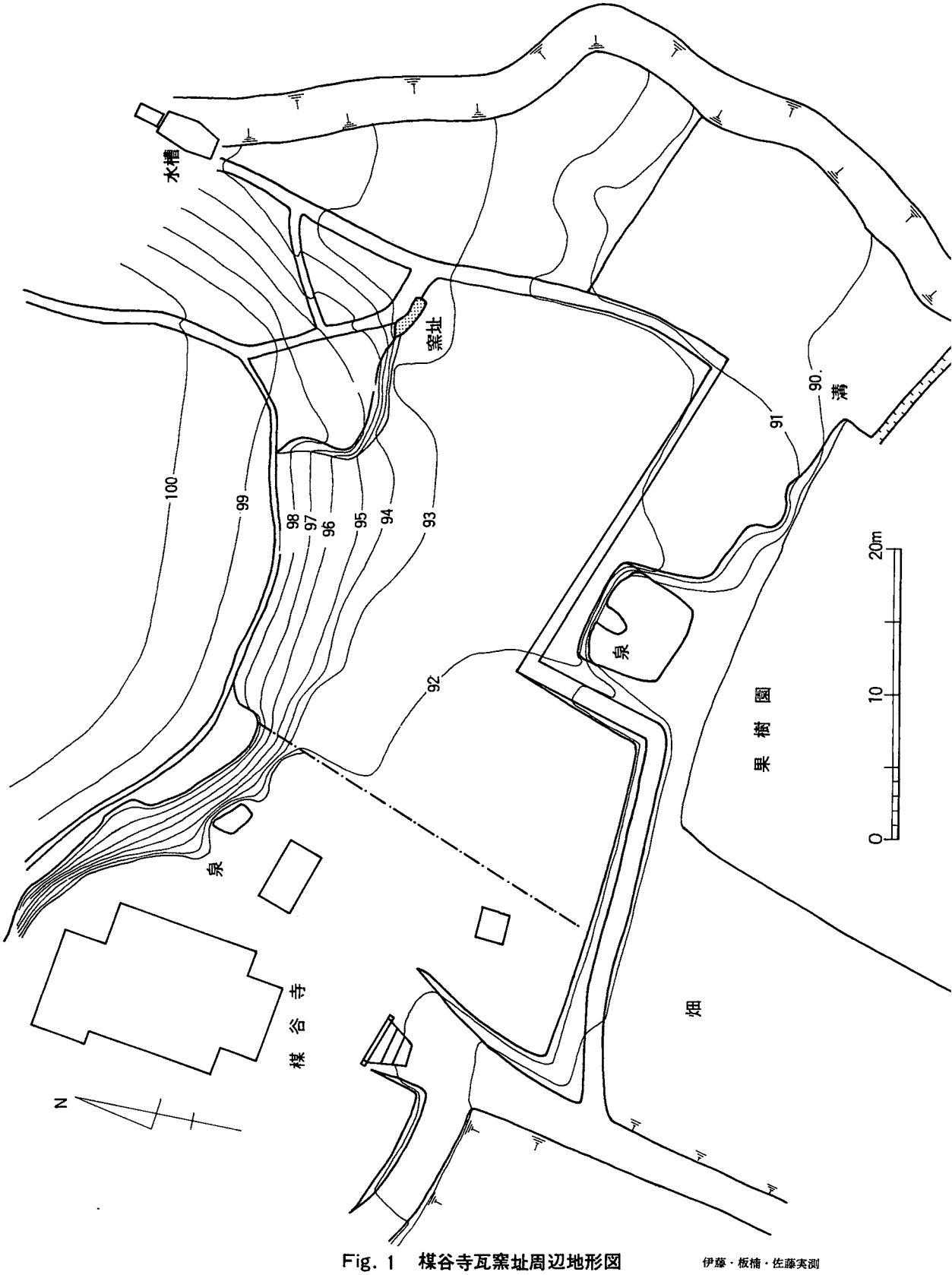


Fig. 1　楳谷寺瓦窯址周辺地形図　　伊藤・板楠・佐藤実測

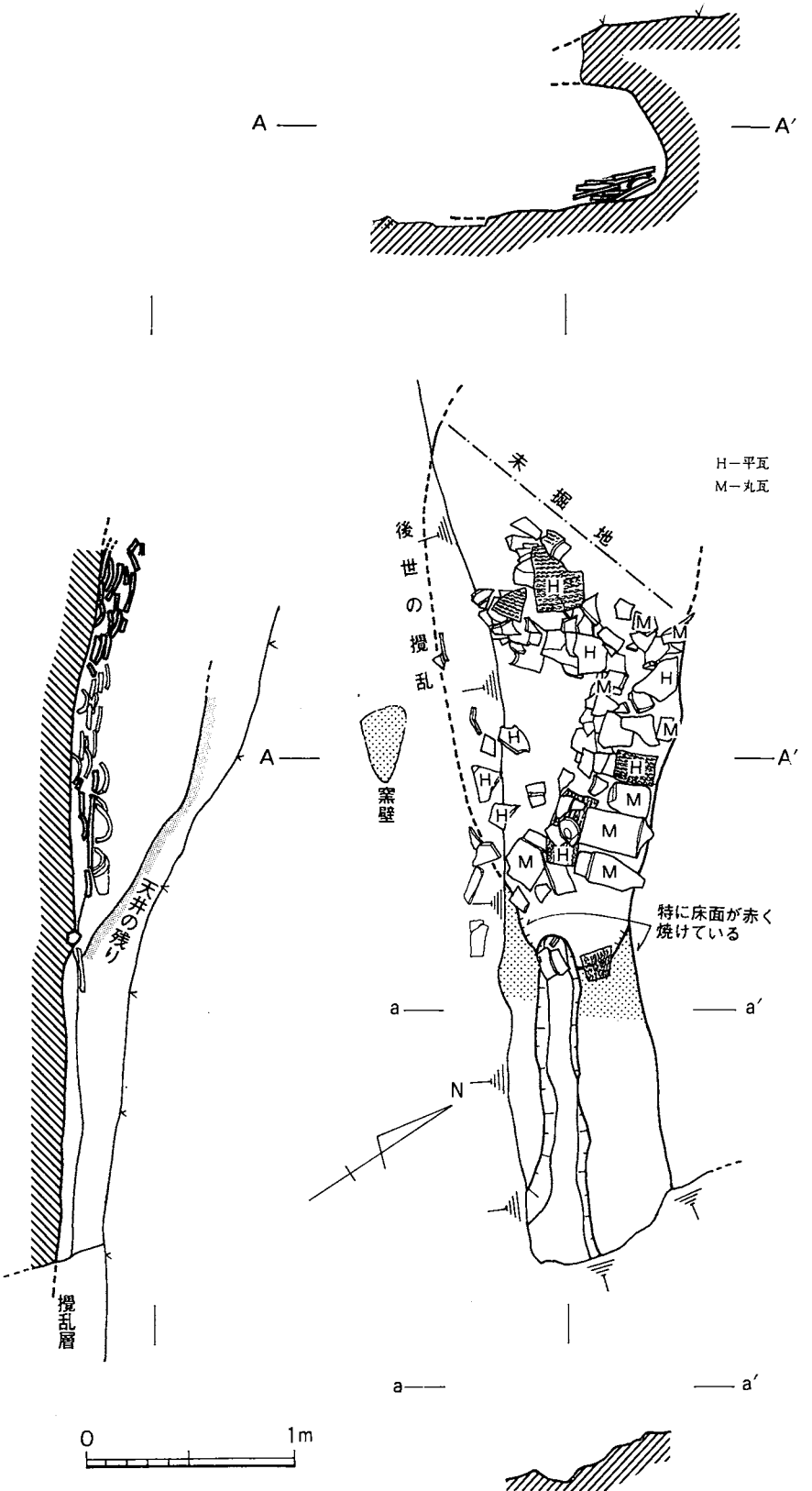


Fig. 2　楳谷寺瓦窯址実測図　　田中・小林・敷島・永松実測

(イ) 平瓦、丸瓦ともに縄目、布目を認めるが、縄目が主である。縄目の方向は長軸に平行であり、横方向、斜方向に走るものはほとんどない。格子目文はない。確実な無文もない。

(ロ) 熊本女子大（乙益重隆）・熊本市立博物館所蔵のものを加えても、肥後国分寺の瓦と、お。おむね符号するが、渡鹿廃寺址の瓦とは大きく異なる。

(ハ) 楳谷寺窯出土瓦と渡鹿との相異点の主なるものは、後者では平瓦において、格子目文をみとめかつそれが主力ないしは縄目とほぼ等量である点である。前者では格子目はみられない。

東氏による、渡鹿廃寺瓦とは異なり国分寺瓦とは符号するという指摘は重要である。さらに今次の発掘で明かになった、本窯の平面形が楕円形を呈しながら平窯でしかも一種のロストル状の施設をもつという構造上の特色も重大である。九州におけるロストル式平窯の設置は、国分寺建立事業が行なわれた奈良時代以降であり、肥前・薩摩・豊前国分寺瓦窯はすべて平窯で、筑後国分寺瓦窯も立地状況から平窯であることが、小田富士雄氏(註3)により明かにされているが、本窯出土の瓦の一致と上記構造は、小田氏の説をさらに補強するものと言えよう。ただ立地位置が平地ではなく、丘陵のすそ部分につくられ平面楕円形の登り窯となるべきところを平面形はそのままで、ロストル式平窯である点が、官窯としての楳谷寺窯址の特色ともいえよう。本窯の年代を8世紀中頃と考える。

(2) **神園山瓦窯址**（Fig. 3）

神園山の南斜面、諏訪神社前を通って平山に抜ける道路の左手の谷合に2基並存する。さきの下林氏実見の古瓦が、いずれに伴なうものか、あるいはさらに存在するのか確認できない。手前の1窯を仮りに1号とよび調査したが、灰原は事情により調査しなかった。防空壕により奥壁部は二次的に掘られているが、窯の形状をいちじるしく変改していない。排土の結果焼成室からの瓦の出土は少量で、最上層から完形の滑石製石鍋1個、土師碗1個及び糸切り底皿を得た。

これらの遺物は福岡市多々良遺跡・和白遺跡などの遺物を考えると、11世紀の年代を考えてよい。この土器と本瓦窯とは、直接関係はない。一括資料として後日紹介する予定である。

註(1) 下林繁夫「熊本県下に於ける古代礎石と古瓦」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』3 1926年 熊本
註(2)1 乙益重隆「飽託郡小山戸島村小山山」『肥後上代文化史』1954年 熊本
2 乙益重隆「須恵器と瓦窯址」『熊本県史 総説編』1965年 熊本
3 『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表』県教委 1963年 熊本
4 三島格「須恵器、瓦窯址地名表」『須恵器の窯址』三井グリーンランドシリーズ3 1966年 荒尾
註3 小田富士雄「窯業—九州」『日本の考古学』6 1967年 東京

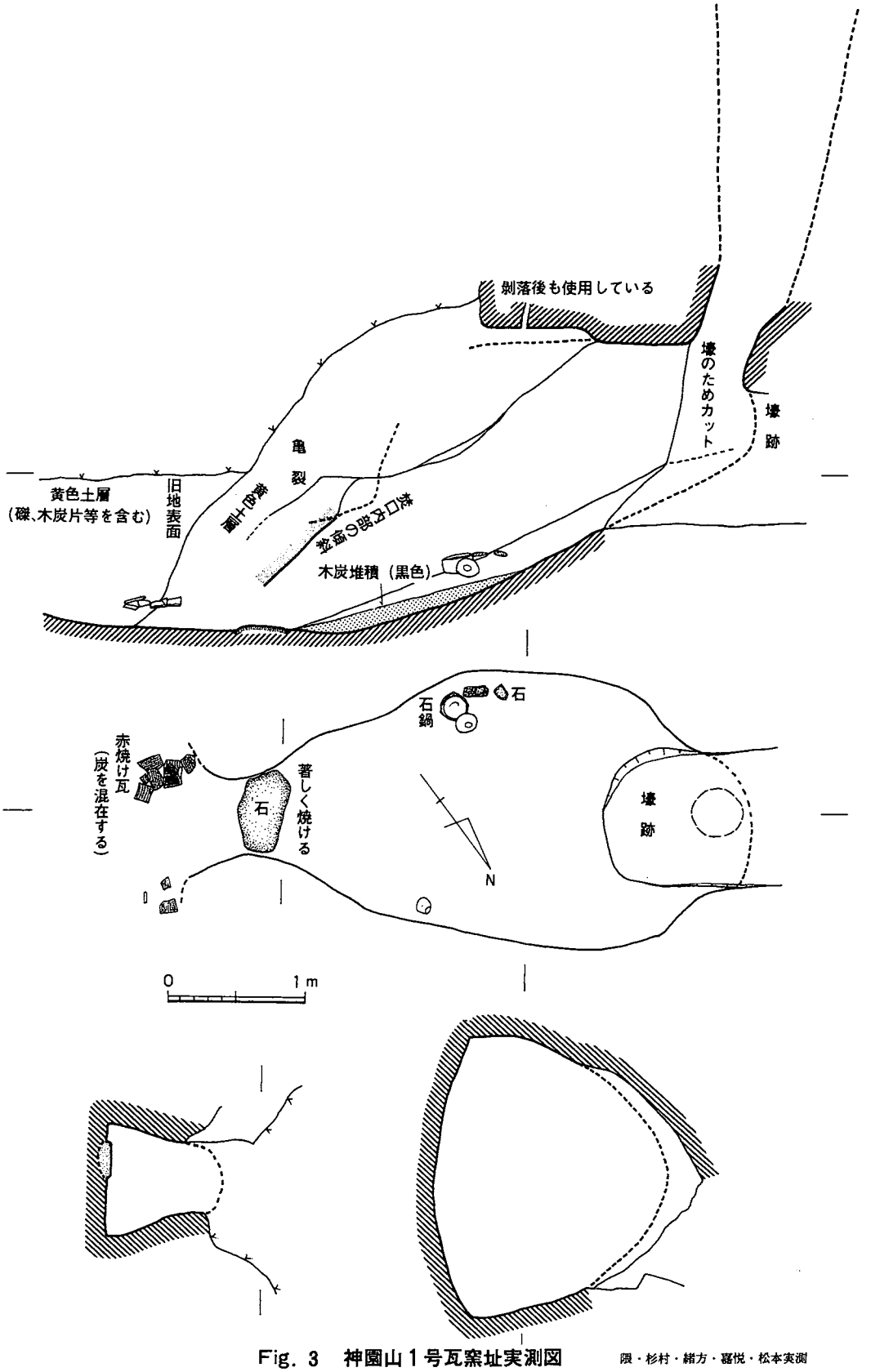


Fig. 3　神園山１号瓦窯址実測図　　隈・杉村・緒方・嘉悦・松本実測

〈補記〉　上記の拙文は、昭和41年の調査を48年に要約したもので、古代寺院と瓦の流通関係について、当時にあってはいうべきことをいっていたとは思うが、14年後の現在では、物の用に立つべくも非ずと思うが、厚意に甘える。ただ発掘責任者として、以下の訂正と謝罪をする義務がある。訂正について…神園山窯出土の土師椀1を瓦器椀2と、同器の年代を12世紀後半～13世紀初頭と証正する。(註1)但し、この年代は本窯の操業年代とは無関係どある。発掘最終日の12月29日、松村正一氏の厚意で二窯の出土瓦を、荒尾三井グリーンランドに運び保存した。同氏の名は調査者名の中にある。昭和54・55年に松本健郎氏（県文化課)・荒尾市教委平島廣幸氏および三島が同園を訪れ探索したが発見できず、松村氏にも事情を訊いたが同氏退職後の紛失であるらしく、手がかりを得ない。発掘現場で作製された別掲東光彦氏による出土瓦についてのリポートが、今では唯一の記録となった。紛失の責任は最終的には、責任者である三島にある。

ただし、前出の瓦器椀および滑石製石鍋などは、三島が保管している。

註1　森田勉「九州地方の瓦器椀について」考古学雑誌59－2　1973年　東京

遺跡名	全長	燃焼部			燃焼部と焼成室の境		焼成室			天井高	煙道長	焼成室床面積 ㎡	備考
		平面形	最大幅	奥行	幅	高さ	床傾斜角	最大幅	奥行				
楳谷寺瓦窯址	400＋α	（長方形）	72＋α	140＋α	60＋α	焼成室のにずに斜方わか傾する	0～10°	(134)	260＋α	60＋α	未発掘のため不明	1.69＋α	燃焼部に幅18～30cm、深さ10cm前後の溝あり。主軸に直交する形で丸瓦が出土。
神園山1号瓦窯址	410＋α	以削半分を上除されて不明	80＋α	40＋α	52	段差し石なり敷あ	16～27°	194	370	1次→(168) 2次→180	240＋α	5.19	焼成室より石鍋、糸切り底皿、瓦器碗を出土。

瓦窯構造計測表　全長は水平距離で現存長を示す。(　　)は推定値を示す。

久保遺跡

—熊本県上益城郡御船町所在遺跡の調査—

序　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し、調査の報告書を刊行しております。その一つとして昭和50年には熊本県文化財調査報告書第18集「久保遺跡」を刊行しましたが、この報告書に未報告でありました「石器」について、今回報告することになりました。石器は主に旧石器時代と縄文時代のものですが、なかでも旧石器時代の遺跡は県内では数少なく、大変貴重な資料の報告であります。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、日本道路公団当局の御理解と御協力をはじめとして、炎天下のもと御指導いただきました別府大学文学部橘昌信助教授と学生の方々、さらには地元の人々の御協方を賜わりました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和55年3月31日

熊本県教育長

井　本　則　隆

例　　言

1．この報告書は昭和48年度に日本道路公団の九州縦貫自動車道路建設に伴う事前調査として実施した、上益城郡御船町久保遺跡の発掘調査における「石器」に関する報告書である。今回報告を行う「石器」以外については熊本県文化財調査報告書第18集「久保遺跡」で報告を行っている。

2．遺跡名については、当初、久保遺跡の南側を小坂西遺跡と称していたが、前記の報告書で久保遺跡としてまとめられているので、混乱を防ぐため久保遺跡として統一しておきたい。すでに旧石器関係等の書物に小坂西遺跡として記載されたものもあるが以上のことにつき御承知おき願いたい。

3．発掘調査は熊本県教育委員会が主体となり実施したもので、調査は別府大学文学部橘昌信助教授の指導のもとに行った。

4．調査地での実測は別府大学学生和田利徳、森永弘太、西哲広、森田孝志、井上秀文が行い、写真撮影は橘昌信助教授が行った。

5．遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫で行い、実測、写真撮影および本稿の執筆と編集は江本　直が行った。なお、本稿の一部には橘　昌信助教授の玉稿をいただきました。深く謝意を表します。

6．遺物は熊本県文化財収蔵庫に保管している。（江本）

目　　次

本 文 目 次

序　　文

例　　言

第Ⅰ章　序　　説…… 4

1．調査の経緯…… 4

2．調査の経過…… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置および環境…… 7

第Ⅲ章　調　　査…… 9

1．調査地とトレンチ設定について…… 9

2．層　　位…… 9

第Ⅳ章　出土遺物について…… 15

1 .出土状況について…… 15

2．Ａ地区出土の石器…… 18

3．Ｂ地区出土の石器…… 21

4．Ｂ地区周辺採集の石器…… 34

5．久保遺跡の細石核 …… 39

第Ⅴ章　む　す　び…… 46

表 目 次

表１　石器出土数一覧表（Ａ地区）…… 15

表２　石器出土数一覧表（Ｂ地区）…… 15

表３　採集資料器種別一覧表…… 16

表４　石材別割合表…… 16

表５　出土遺物一覧表（001～023）…… 41

表６　出土遺物一覧表（024～046）…… 42

表７　出土遺物一覧表（047～069）…… 43

表８　出土遺物一覧表（070～092）…… 44

表９　出土遺物一覧表（093～107）…… 45

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 6
第２図　Ａ地区Ａ－１トレンチ西側断面図…… 11
第３図　Ａ地区Ａ－１トレンチ北側断面図…… 11
第４図　Ｂ地区Ｂ－１トレンチ南側断面図…… 11
第５図　Ｂ地区Ｂ－５～８トレンチ南側断面図…… 13
第６図　Ｂ地区Ｂ－５～８トレンチ西側断面図…… 13
第７図　Ｂ地区トレンチ平面図…… 17
第８図　Ｂ地区土坑墓実測図…… 17
第９図　石器実測図（001～006）…… 19
第10図　石器実測図（007～013）…… 20
第11図　石器実測図（014）…… 22
第12図　石器実測図（015～023）…… 23
第13図　石器実測図（024～029）…… 24
第14図　石器実測図（030～039）…… 25
第15図　石器実測図（040～049）…… 26
第16図　石器実測図（ 050～053）…… 27
第17図　石器実測図（054～060）…… 28
第18図　石器実測図（061～068）…… 30
第19図　石器実測図（069～077）…… 31
第20図　石器実測図（078～084）…… 32
第21図　石器実測図（085～089）…… 33
第22図　石器実測図（090）…… 35
第23図　石器実測図（091～095）…… 36
第24図　石器実測図（096～103）…… 37
第25図　石器実測図（104～107）…… 38

図 版 目 次

図版１　上：Ａ地区遠景（Ｂ地区から）…… 51
　　下：Ａ地区Ａ－２トレンチ…… 51
図版２　上：Ａ地区Ａ－１トレンチ…… 52
　　下：Ａ－１トレンチ調査風景…… 52
図版３　上：Ａ－１トレンチ西側断面…… 53
　　下：Ａ－１トレンチ西側断面…… 53
図版４　上：Ａ－１トレンチピット遺構…… 54
　　下：Ａ－１トレンチ石器出土状況…… 54
図版５　上：Ｂ地区遠景（Ａ－１トレンチから）…… 55
　　下：Ｂ地区周辺遺物採集地…… 55
図版６　上：Ａ地区Ａ－２トレンチ…… 56
　　下：Ｂ地区Ｂトレンチ…… 56
図版７　上：Ｂ地区土坑墓…… 57
　　下：Ｂ地区土坑墓…… 57
図版８　出土石器（001～006）…… 58
図版９　出土石器（007～013）…… 59
図版10　出土石器（014）…… 60
図版11　出土石器（015～023）…… 61
図版12　出土石器（024～029）…… 62
図版13　出土石器（031～039）…… 63
図版14　出土石器（040～049）…… 64
図版15　出土石器（050～053）…… 65
図版16　出土石器（054～060）…… 66
図版17　出土石器（061～068）…… 67
図版18　出土石器（069～076）…… 68
図版19　出土石器（078～084）…… 69
図版20　出土石器（085～089）…… 70
図版21　出土石器（090）…… 71
図版22　出土石器（091～095）…… 72
図版23　出土石器（096～103）…… 73
図版24　出土石器（104～107）…… 74

第Ⅰ章　序　　説

1　調査の経緯

日本道路公団からの委託を受けて、熊本県教育委員会は、昭和48年５月23日から上益城郡御船町久保遺跡の発掘調査を開始した。この遺跡の発掘調査を担当していた文化課近延謙調査員が周辺の表採を行った際に石器を採集し、高木正文学芸員も石器の採集地を確認した。石器の中には先土器時代の細石刃や石核、縦長剝片があり、県内では数少ない先土器時代の貴重な遺跡であることが判明した。石器が採集される地点は二ケ所あり、小坂西遺跡Ａ・Ｂ地点と仮称した。７月５日　隈　昭志文化財調査係長も現場を確認し、発掘調査を実施すべき事務処理を進め、調査は工事が行なわれる前の８月に実施される予定となった。

Ａ地点は九州縦貫自動車道の用地内であったがＢ地点は用地外であった。地主の熊本市田崎町在住緒方三郎氏の了承を得て同時に発掘調査を行うことになった。

課内で検討した結果、調査は筆者が行うことになったが、筆者は同年４月から下益城郡城南町沈目遺跡の発掘調査を担当しており、両遺跡の調査を同時に行うことは不可能な状態であった。そこで、別府大学文学部橘　昌信助教授に御指導を依頼し、学生の参加を得て発掘調査を実施することになった。

発掘調査は昭和48年８月15日から８月31日まで17日間を予定した。調査の組織は下記に示すとおりである。　（江本）

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　岩崎辰喜（熊本県文化課長）
　　田辺哲夫（元熊本県文化課長）

調査総括　隈　昭志（熊本県文化課文化財調査係長）

調査主任　江本　直（熊本県文化課学芸員）

調査事務局　田辺宗弘（熊本県文化課長補佐）
　　浜田　勝（元熊本県文化課長補佐）
　　村田一美（元熊本県文化財調査係長）
　　村上孝司（熊本県文化課管理係長）

専門調査員　橘　昌信（別府大学文学部助教授）

参加学生　和田利徳　森永弘太　西　哲広
　　森田孝志　井ノ上秀文（以上別府大学文学部）

整　理　上野辰男（熊本県文化課主幹）
　　山城仁恵（熊本県文化課嘱託）
　　熊本県文化財収蔵庫

調査協力者　緒方三郎（熊本市田崎町）
　　銀杏砂利株式会社

2　調査の経過

昭和48年８月15日、現地に調査者が集合して調査を開始する。調査者に加えて地元の作業者５名が加わり、Ａ地区とトレンチの設定場所と周辺の雑木、雑草の除去作業を行う。Ａ地区のトレンチは２ケ所に設けＡ－１トレンチ、Ａ－２トレンチと称した。午後には表土剝ぎ作業を開始した。

８月17日、緒方勉、高木正文調査員が来訪。調査は第Ⅱ層を掘りはじめたが定形的な石器の出土は見られなかった。

８月18日、須恵器の蔵骨器が出土し、Ａ－１トレンチは人為的な堆積がなされた場所である可能性が強まる。したがって正確な層位は把握はできないと判断された。

８月19日　Ａ－２トレンチにおいても、Ａ－１トレンチと同じく人為的な堆積が行なわれた可能性が強まり、近くの南側の斜面に須恵器がまとまった状態で出土するところがあり、両トレンチに見られる人為的な堆積土は、古墳の封土ではないかと考えられた。

８月22日　Ａ－１トレンチ、Ａ－２トレンチとも第Ⅳ層までの掘り下げを行いＡ地区の調査を終了し、新たにＢ地区の調査を行うことにした。

８月25日　Ａ地区の土層図の実測と遺物の取り上げ作業を終えた。Ｂ地区では、Ｂ－１～４トレンチとＢ－５～８トレンチの２ケ所を設けた。

８月27日　いずれからも定形的な石器の出土はなく、二次堆積した層序状態と判断され、Ａ地区と同じく層位的な把握はできないと判断した。また土坑を検出し、比較的新しい時期の撹乱を多く受けていると思われた。

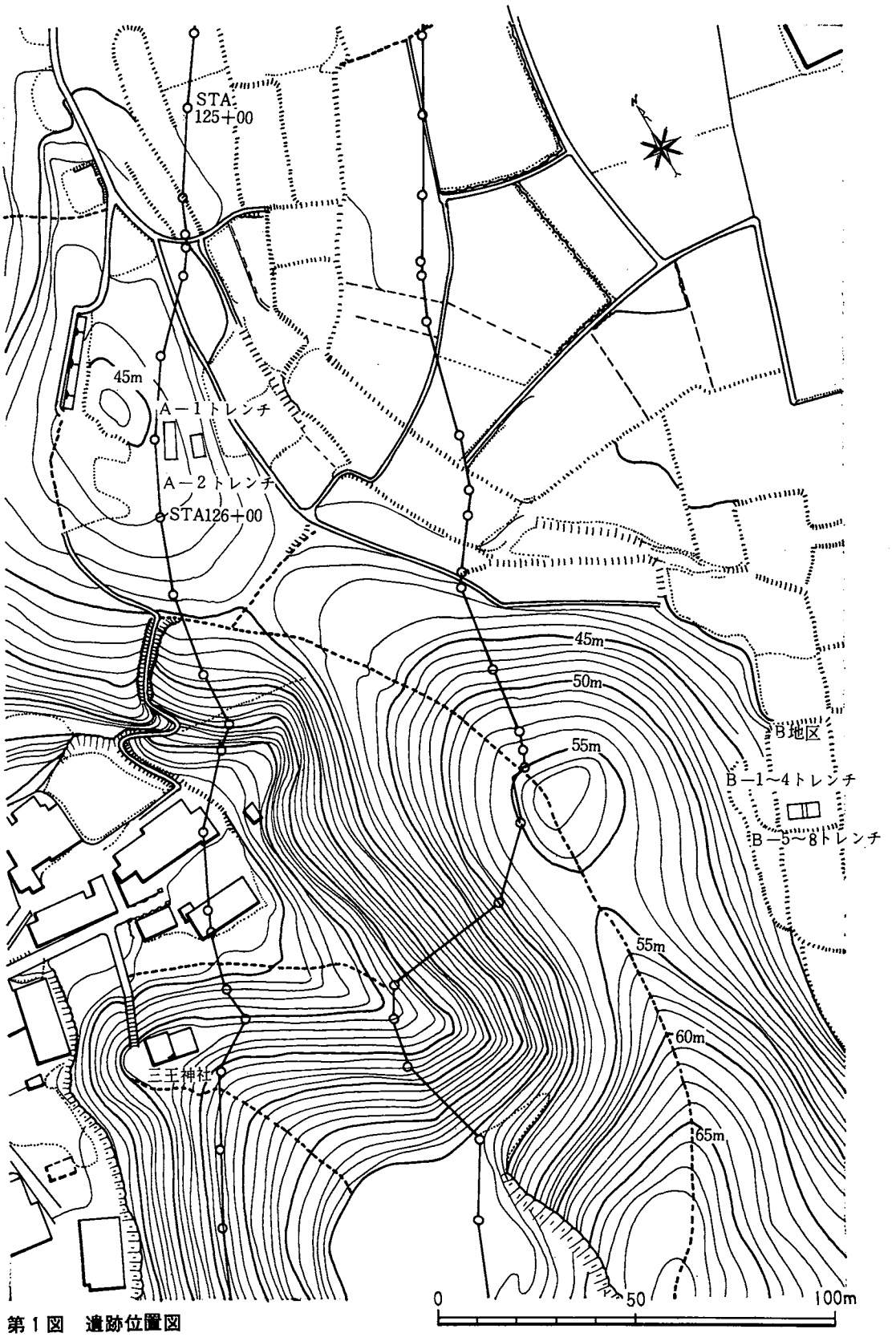
８月28日　土坑を調査すると底部から人骨片・竹製品・鉄製鎌が出土した。

８月29日　第Ⅵ層まで掘り下げを行い、土層図および土坑の実測図をとりはじめる。

８月30日　実測図を終了し、遺物も全てとり上げて調査を終了した。このあと埋め戻し作業を行って調査を終了する。

８月31日　遺物と器材とを撤収し熊本県文化財収蔵庫に運び終え、水洗い作業とナンバリングを済ませておく。

昭和54年11月29日から報告書の作成にとりかかる。　（江本）


STA.
125+00
45m
A－1トレンチ
A－2トレンチ
STA126+00
45m
50m
55m
B地区
B－1～4トレンチ
B－5～8トレンチ
55m
60m
65m
三王神社
0
50
100m

第1図　遺跡位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置および環境

このことについては、すでに報告書「久保遺跡」において記述がなされているが、先土器時代の遺物の出土地を少しつけ加えておきたい。

熊本県内では最近、先土器時代の遺跡の発掘例が増えてきている。昭和51年八代郡宮原町立神ドトク遺跡[註1]、立神岩立遺跡[註2]、昭和53年阿蘇郡小国町下城遺跡第Ⅰ次[註3]、昭和54年下城遺跡第Ⅱ次、球磨郡多良木町里城遺跡[註4]などがその主なものである。[註5]

立神ドトク遺跡では、小型のナイフ形石器や細石核・細石刃の出土があり、近接した立神岩立遺跡でもナイフ形石器と細石刃が出土している。県南地方では、昭和42年に発掘調査された水俣市石飛遺跡が知られるにすぎず空白地とされていた八代地方にも今後遺跡が増加するであろうことを示唆している。[註6]

下城遺跡の第Ⅰ次・第Ⅱ次調査では、多量のナイフ形石器や台形石器・尖頭器などの出土がある。プライマリーな層序状態での発掘調査であり、最近全国的な論議を呼んでいる広域火山灰ＡＴも確認され、この鍵層をもとに比較的火山灰層の厚い大分県や噴出源の鹿児島県とその対比が可能になりつつある。

里城遺跡では尖頭器や細石刃が出土し、周辺でも細石刃を出土した遺跡の確認が進み球磨・人吉盆地における先土器時代の遺跡の数を増加させている。

さて本遺跡の周辺では上益城郡甲佐町大峯遺跡が最も著名なものである。南側の台地下を流れる緑川の上流約 7.5kmに位置している。[註7] 発掘調査は昭和39年に行なわれたもので県内での先土器時代の本格的な発掘調査としてははじめてのものである。阿蘇新期ローム層中にも遺物が出土したとされている。ナイフ形石器・尖頭器・石核・礫器・細石核等が出土している。

表採資料によって先土器時代の遺跡として確認されたところでは、上益城郡御船町中山神遺跡[註8]や同町南小池遺跡[註9]があり、礫器や細石核が採集されている。また同郡甲佐町では下横田遺跡[註10]と妙見坂遺跡[註11]があり、細石核・礫器・スクレーパー・石核が採集されている。隣接する同郡嘉島町小池塔の平遺跡[註12]でも細石核・礫器・スクレーパー等が見られる。

さらに東側の阿蘇外輪に目を転じれば、俵山（1095m）冠ケ岳（1,154m）の山麓一帯に遺跡が点在している。阿蘇郡西原村桑鶴土橋遺跡[註13]では昭和53年に熊本大学文学部考古学研究室が行った発掘調査によって第Ⅵ層に細石核の包含が確認されている。同じく発掘調査による出土例として河原谷頭遺跡[註14]で細石核がある。冠ケ岳の西麓および東麓では数ケ所で熱心な採集が行なわれている。県営西原共同牧場周辺や上益城郡矢部町大矢野原自衛隊演習場周辺に細石核・細石刃や小型のナイフ形石器等の採集が行なわれている。[註15] いずれも海抜 600～700m に立地している。

以上のように本遺跡の周辺においても先土器時代の遺跡数は増加しつつある。なかでも細石

核・細石刃の出土例が多く一つの特色として捉えることができるが、後期旧石器時代の主体的特徴を持つナイフ形石器や台形石器、それに尖頭器等の出土例が少ない。また本格的な発掘例も少なく層位的裏づけに乏しいのも現状である。　（江本）

註

註１　橘昌信・江本直也「立神ドトク遺跡」熊本県文化財調査報告書第35集　1979

註２　村井真輝他「五ツ穴横穴群」熊本県文化財調査報告第34集　1979

註３　田中寿夫・緒方勉他「下城遺跡Ⅰ」熊本県文化財報告第37集　1979

註４　古森政次・緒方勉他「下城遺跡Ⅱ」熊本県文化財報告第50集　1980

註５　下村悟史・大田幸博他「里城遺跡」熊本県文化財報告第51集　1980

註６　池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」考古学ジャーナルNo.21　1968

註７　国分直一「賀川論文に対する論評」　第四紀研究　1971

註８～12　富田紘一「旧石器・縄文時代の熊本」『新・熊本の歴史Ⅰ』熊本日日新聞社　1978

註13　田中寿夫他「桑鶴土橋遺跡」熊本大学文学部考古学研究室　1979

註14　松村道博他『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団　1978

註15　熊本市　福田正文・吉田雅人氏採集資料

第Ⅲ章　調　　査

1　調査地とトレンチ設定について

久保遺跡ではすでに報告したように数多くの遺構や遺物を出土している。今回報告を行う石器の調査地は最も南側部分にあたり、レベルも最も高いところで、秋只山の頂上部分である。道路公団の用地を示すＳＴＡ125＋80を中心とするが、西側の幅杭にそって南北約50m、東西約25mが調査可能な状態で残されていた。この残存部分の東側および南側はすでに道路建設工事のための大規模なカッティングが行なわれていた。このわずかに残された部分をＡ地区とした。

Ａ－１トレンチはSTA 125＋80の東側約２ｍ地点に東西２ｍ、南北５ｍの規模で設け、Ａ－２トレンチはさらに東側に７ｍ離れて、東西２ｍ、南北５ｍの規模に設定した。この二ケ所のトレンチによって有望な出土状態が確認された場合には、トレンチをさらに面的に拡大して調査を行う予定とした。

Ｂ地区はSTA 126＋80の東側幅杭からさらに東側約70m地点で熊本市田崎町在住の緒方三郎氏所有の雑木林である。このＢ地区の周囲も土砂の採集によって大きく壊され、調査中も固い岩石を壊す発破作業が進められ、大きなブルドーザーが動き廻る状態であった。トレンチは二ケ所に設けたが、Ｂ－１～４トレンチは南側の崖線に沿った状態で東西４ｍ、南北４ｍの規模で設定した。Ｂ－５～８トレンチは西側の崖線に沿って東西3.5m、南北４ｍの規模に設定した。

2　層　　位

Ａ　地　区

Ａ－１トレンチを見れば第Ⅰ層は表土層で色調は黒褐色を呈する。地表は東側および北側に向かって傾斜している。厚さは35～64cmあり、第Ⅱ層とは起伏を持って接している。上面は樹木・雑草の樹根が著しく、腐食した有機物が多く混じっている。

第Ⅲ層は濃茶褐色を呈し、いくぶん粘質をもっている。小礫石が少量混じり少し固くなる。なお、東壁に近いところでピットが一ケ所確認できたが、このピットは第Ⅱ層から第Ⅲ層へと掘り込んでいる。ピット内の土質は第Ⅱ層の土質にくらべて色調に大きな変化はみられないが粒子が粗くサラサラした状態にあり、一応第Ⅱ層として区分した。

第Ⅲ層は基本的には第Ⅱ層の特色を踏襲するが粘質性がより強くなり、色調は暗褐色を呈し、小礫石の含まれる量も少なくなる。これらの変化があり第Ⅱ層と分離を行った。南側に厚く約60cmを計り、北側にいくにしたがい薄くなっている。

第Ⅳ層は橙色を呈するローム層である。粘質が強く、くされ小礫石を含んでいる。

Ｂ　地　区

第Ⅰ層は表土層で色調は茶褐色を呈する。上面は雑木や竹の根が多い。小礫石を含んでいる。

第Ⅱ層は黒褐色土層で小礫石の含有は少なくなるが黄褐色を呈する大きさ5㎜前後のパミスを含んでいる。粘質性は弱い。

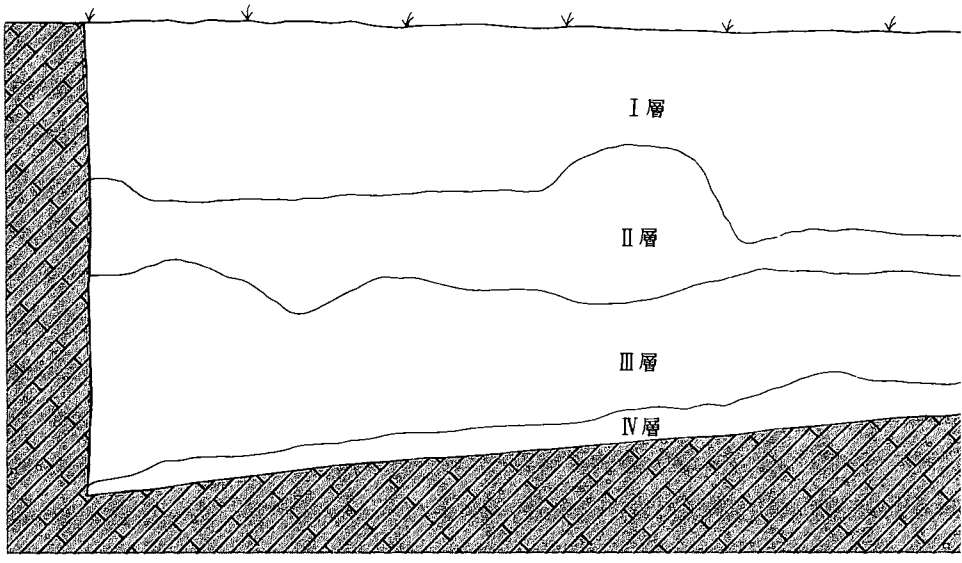
第Ⅲ層は黄褐色土層で、第Ⅱ層に見られたような5㎜前後のパミスを多量に含んでいる。パミスの色調は黄褐色や赤褐色のものが見られる。粘質が強くなる。

第Ⅳ層は第Ⅲ層と同じく黄褐色を呈する粘質土である。全体的に粒子が密になり、その分だけ粘質が強くなる。小礫石や砂粒もいく分含んでいる。

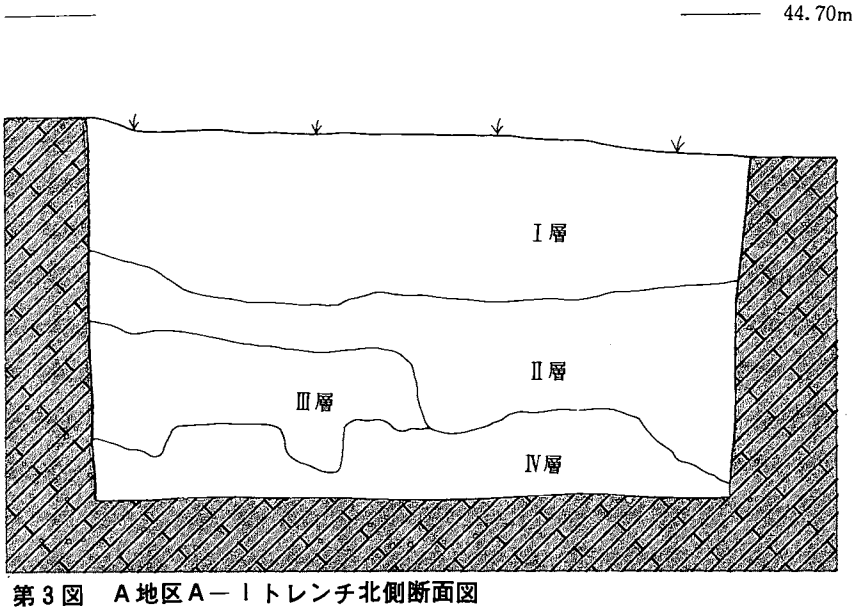
第Ⅴ層は濃茶褐色土層で第Ⅳ層にくらべて、さらに粘質が強く、固くなる。小礫石は少なくなるが砂粒子は含んでいる。

第Ⅵ層は粘性が非常に強く、色調は暗褐色もしくは黒紫色を呈する。5～8トレンチの方では、黄褐色や茶褐色を呈するものが斑点状に多く混じっている。砂粒子も含んでいる。

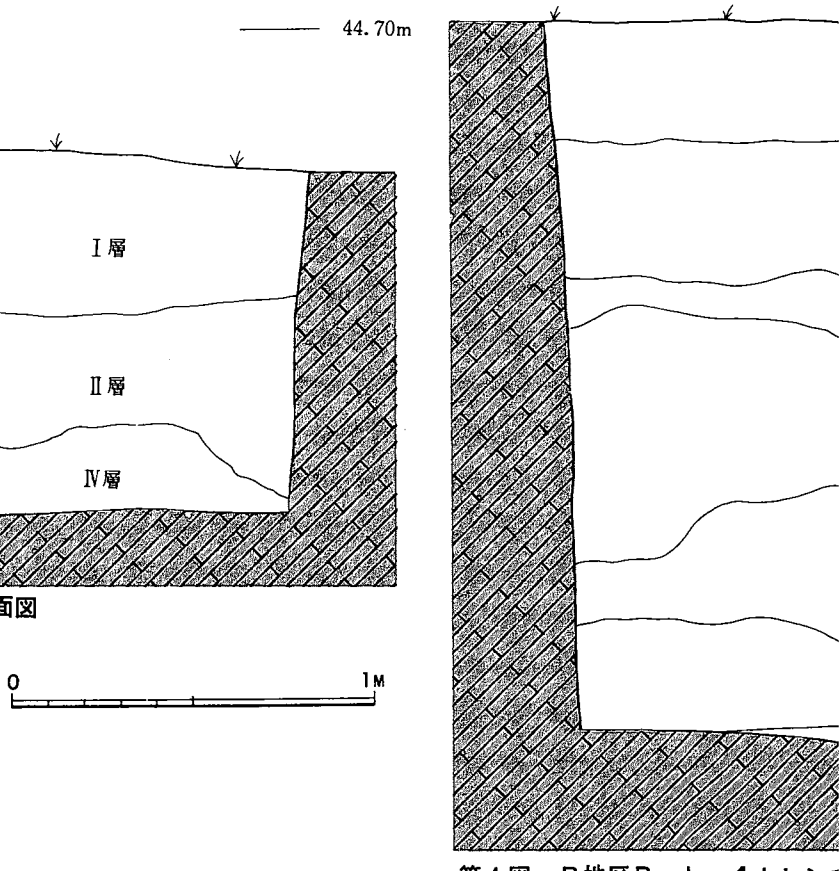
（江本）



第２図　Ａ地区Ａ－１トレンチ西側断面図

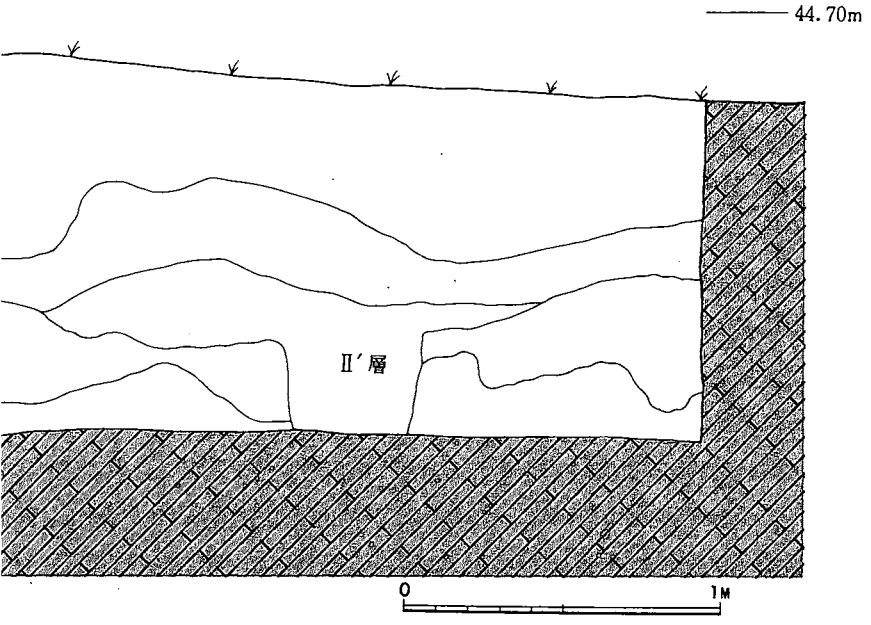


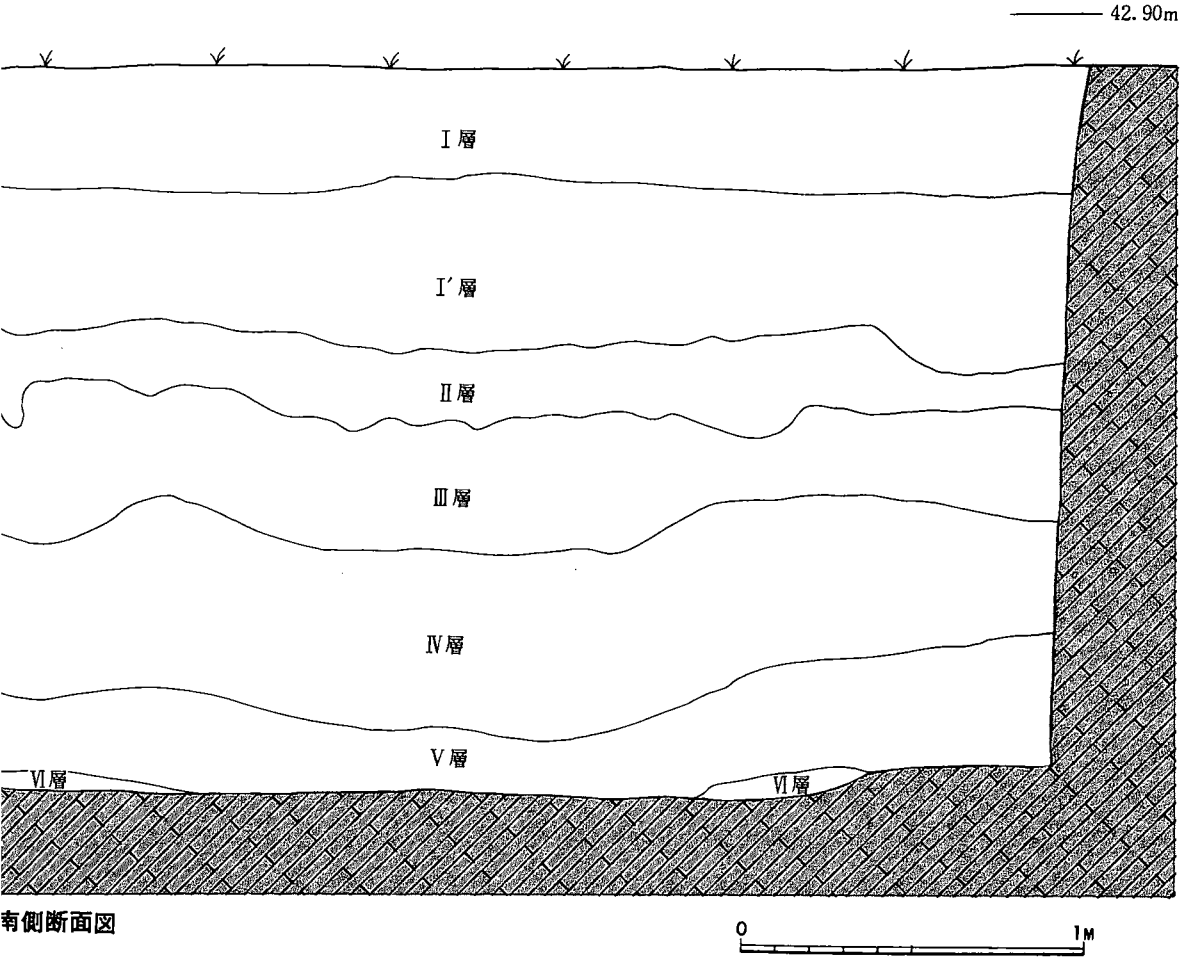
第３図　Ａ地区Ａ－１トレンチ北側断面図



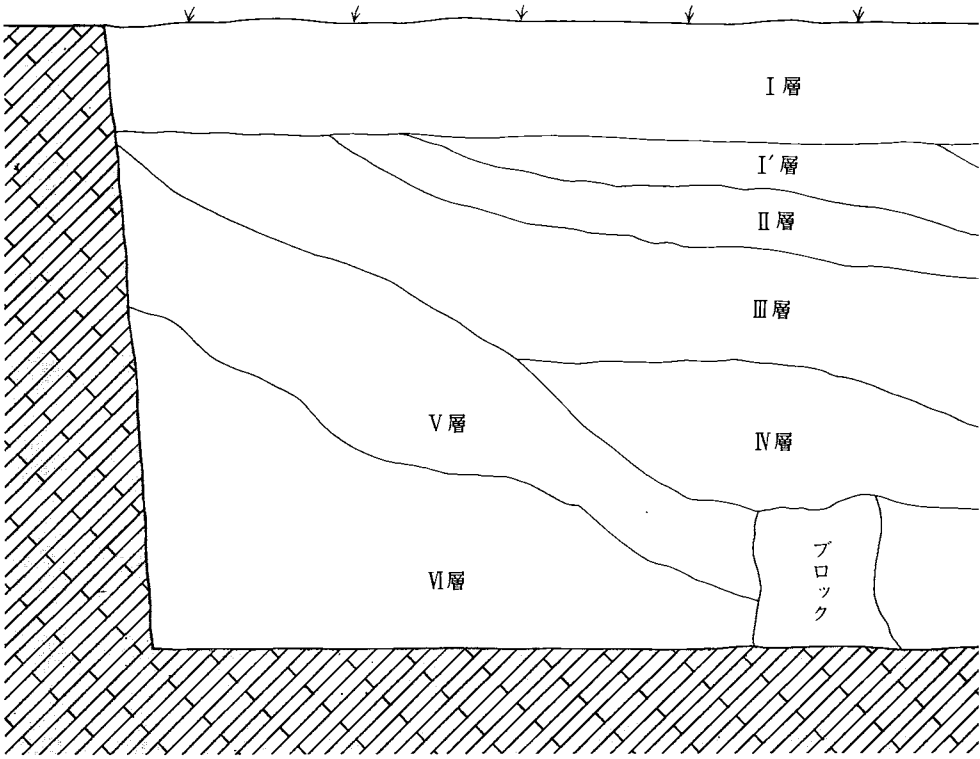
第４図　Ｂ地区Ｂ－１～４トレンチ

0　1M

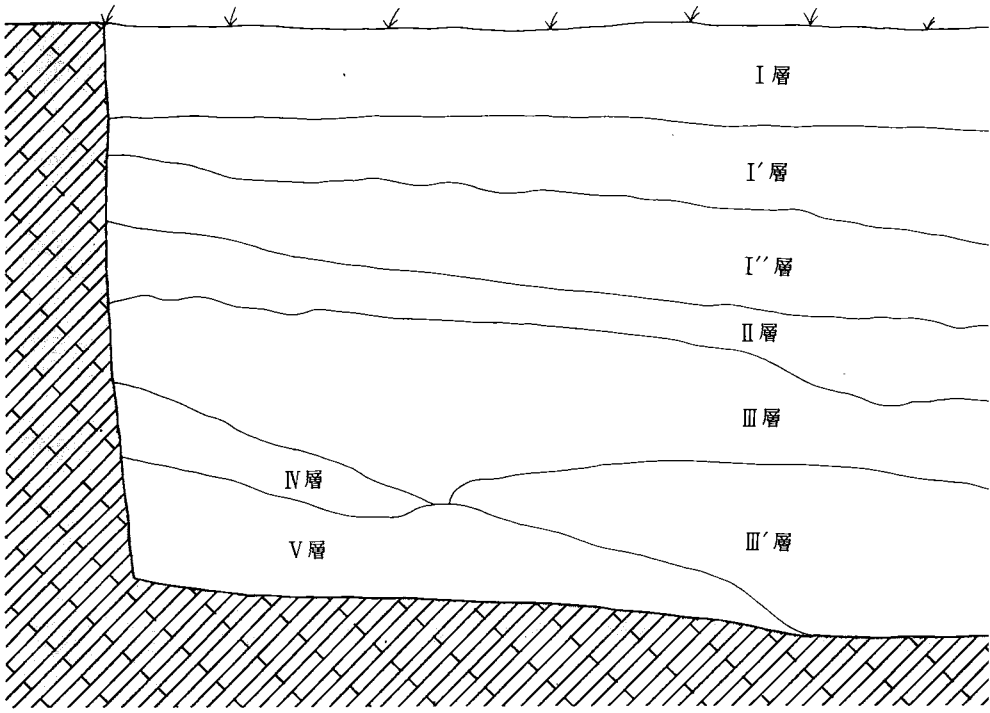




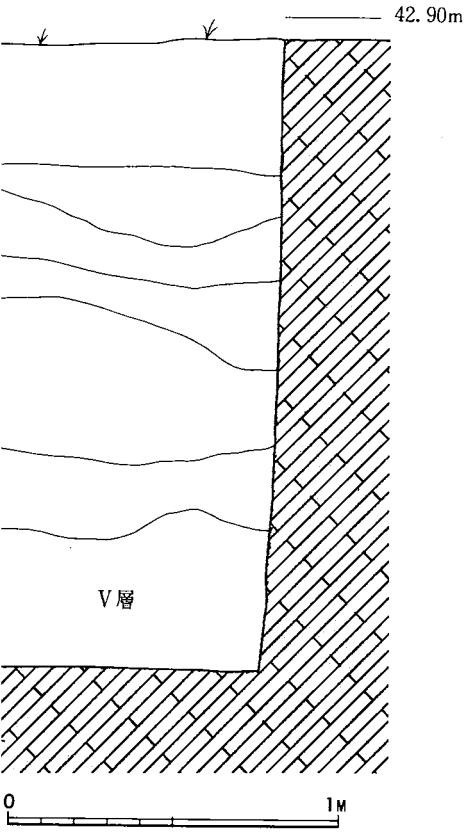
南側断面図

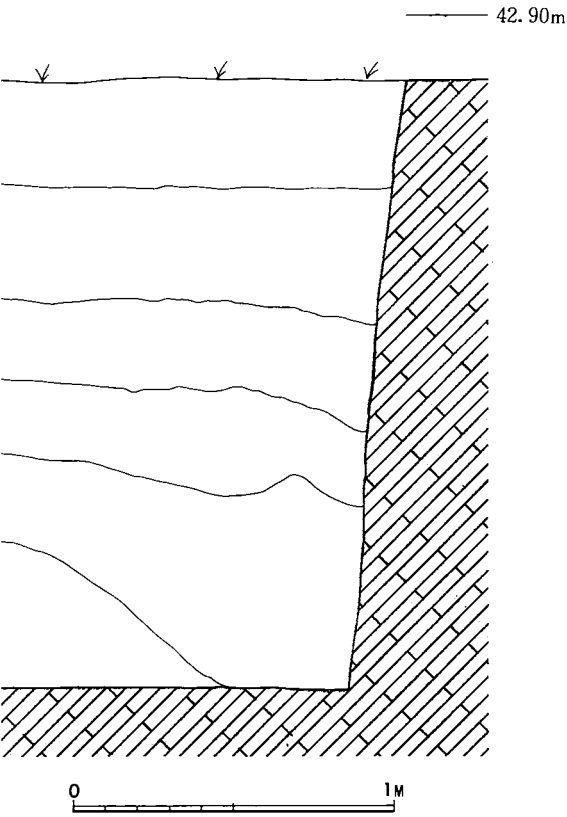


第５図　Ｂ地区Ｂ－５～８トレンチ南側断面図



第６図　Ｂ地区Ｂ～５～８トレンチ西側断面図


42.90m
V層
0
1M


42.90m
0
1M

第Ⅳ章　出土遺物について

1．出土状況について

A・B地区の各層ごとの機種別の出土数は表1・表2に示すとおりである。B地区の表採資料の機種別数は表3に示した。また、各地区から出土した石器の石材別割合表は表4に表わした。

A地区のA－1トレンチ、A－2トレンチでは49点の石器が出土している。石器の機種として細石刃・細石核・スクレーパー・礫器・彫器・尖頭器・石核・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石鏃・剥片が見られる。A－1トレンチではほとんどが第Ⅱ層に出土し、第Ⅲ層にはわずか4点の出土にとどまっている。第Ⅳ層には遺物は全く認められなかった。A－2トレンチはA－1トレンチにくらべて石器の出土量は非常に少ない。第Ⅰ層・第Ⅱ層に合計8点が出土したにとどまり、第Ⅲ層・第Ⅳ層には出土しなかった。

表1　石器出土数一覧表

A地区

	層位＼器種	細石刃	細石核	スクレーパー	礫器	彫器	尖頭器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石鏃	剥片
A－1トレンチ	表採第Ⅰ層			2					2	1		3
	第Ⅱ層	1	1	1	1		1	1	4	6		13
	第Ⅲ層							1	1	1		1
	第Ⅳ層											
	計	1	1	3	1		1	2	7	8		17

	層位＼器種	細石刃	細石核	スクレーパー	礫器	彫器	尖頭器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石鏃	剥片
A－2トレンチ	表採第Ⅰ層			1		1		2		1		1
	第Ⅱ層							1				1
	第Ⅲ層											
	第Ⅳ層											
	計			1		1		3		1		2

表2　石器出土数一覧表

B地区

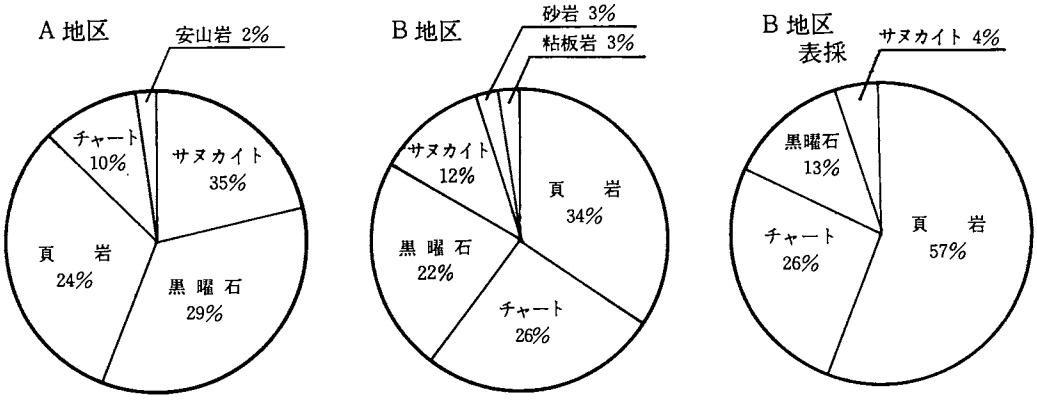
	層位＼器種	細石刃	細石核	スクレーパー	石斧	尖頭器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石鏃	剥片
B－1～4トレンチ	表採第Ⅰ層										2
	第Ⅱ層			1	1		1	1	2		3
	第Ⅲ層					1	1	2	6		9
	第Ⅳ層										
	第Ⅴ層										
	第Ⅵ層										
	計			1	1	1	2	3	8		14

	層位＼器種	細石刃	細石核	スクレーパー	石　斧	尖頭器	石　核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	石　鏃	剥　片
B－5～8トレンチ	表採第Ⅰ層							1			
	第　Ⅱ　層	1								1	
	第　Ⅲ　層			1					1		
	第　Ⅳ　層										
	第　Ⅴ　層										
	第　Ⅵ　層										
	計	1		1				1	1	1	

表3　採集資料器種別一覧表

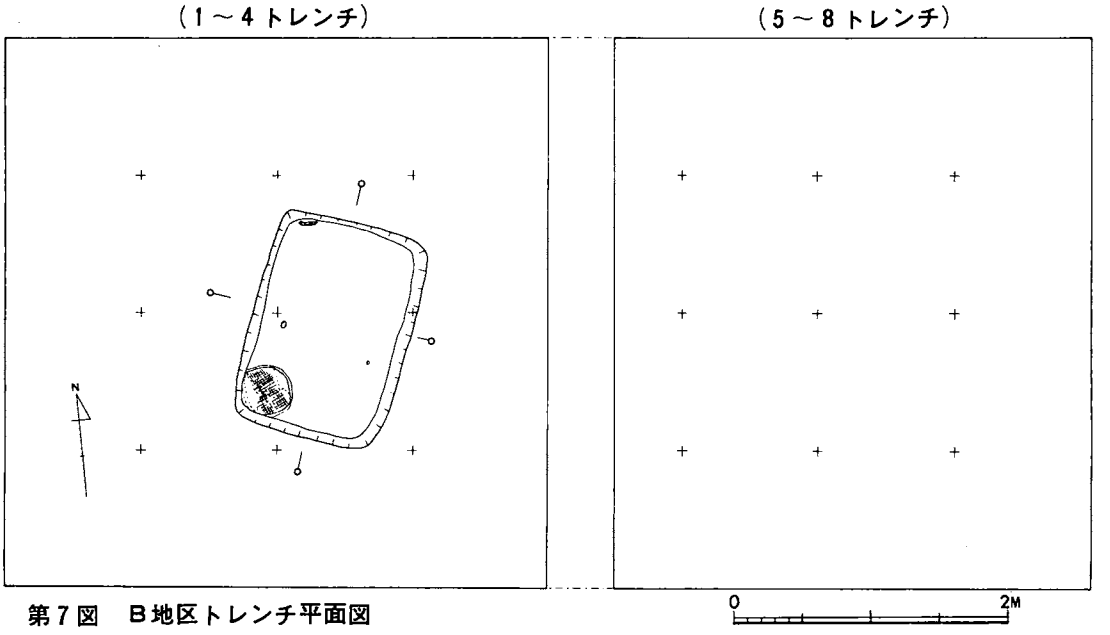
器　種	細石刃	石　核	スクレーパー	礫　器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥　片	石　鏃
数	1	1	3	2	3	9	3	1

表4　石材別割合表

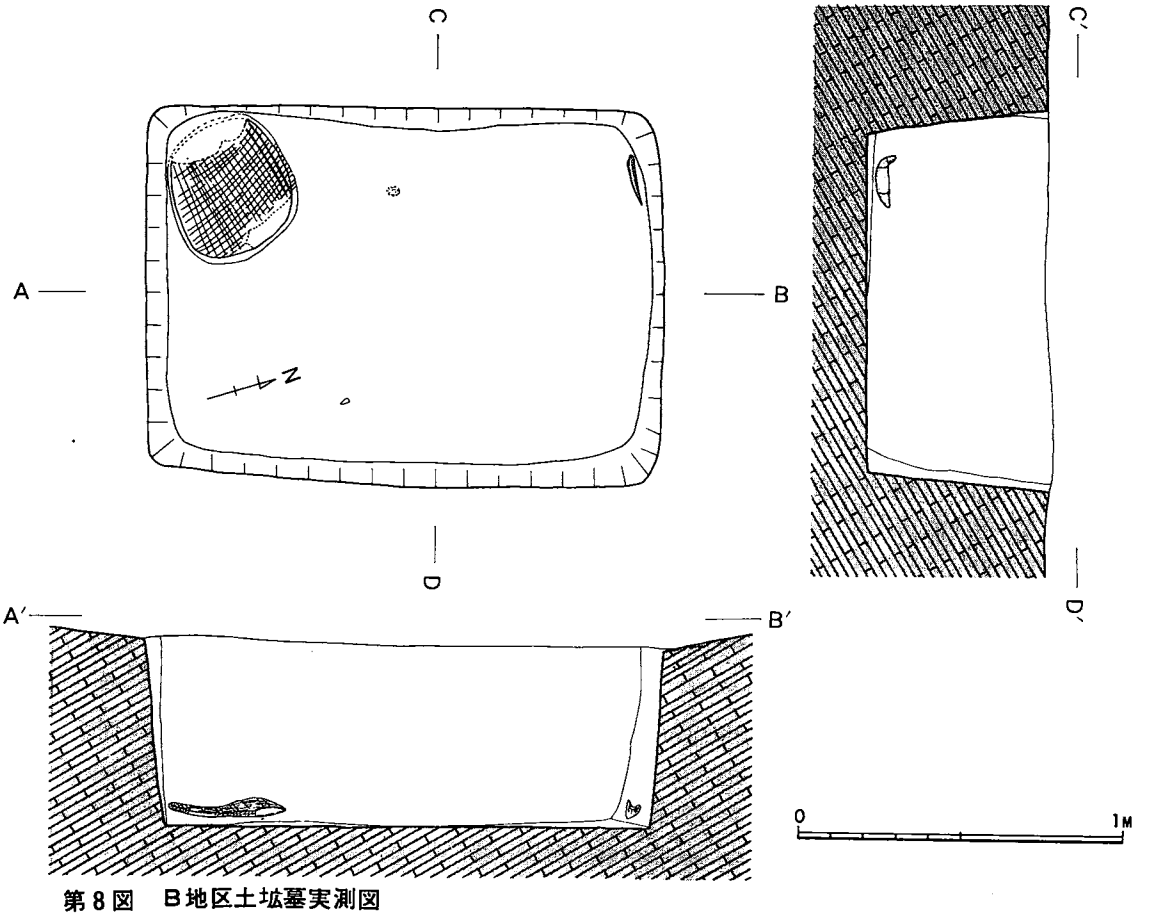


B地区では合計35点の石器が出土した。出土した石器の機種には細石刃・スクレーパー・石斧・尖頭器・石核・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・石鏃・剥片が出土している。B－1～4、B－5～8両トレンチで遺物が出土したのは第Ⅰ～第Ⅲ層までで、第Ⅳ層から第Ⅵ層には遺物は全く認められなかった。なお、B－1～4トレンチのほぼ中央部で土坑が出土している。土坑は主軸をN－16°－Eにとり方形を呈している。確認できる範囲での大きさは長軸1.63m、短軸1.18mで底はいくぶん狭くなっている。残存部での深さは0.50mを計る。底部の西隅から竹であんだ笊と、北隅から鎌片が出土している。骨片も認められ近世の土坑墓と判断した。周辺の砂利採掘場にも人骨片が認められることから一帯が墓地であったことがうかがわれる。

B－1～4トレンチおよびB－5～8トレンチの周辺で表採した石器は23点あり、細石刃・石核・スクレーパー・礫器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・石鏃が見られる。



第7図　B地区トレンチ平面図



第8図　B地区土坑墓実測図

以上のA・B両地区から出土した石器について特徴を述べておきたい。

2.A地区出土の石器

細　石　刃（001）

先端を欠失している。石材はサヌカイトで、打面は自然平担面をそのまま残しているため疑問がある。石材にサヌカイトや安山岩を用いた類例資料があるので一応細石刃としてとりあげておきたい。

石　　核（002～006）

(002)はサヌカイトの厚手の剥片を素材として、折りとるような剥離によって平坦打面を形成したあと、小剥片を剥取している。打面は二カ所で、それぞれに剥離痕が見られる。(003)は不定形の角礫状の剥片から、自然平坦面を打面として剥離を行っている。細石核の可能性を有している。(004)は打面調整を施したあと、厚手の剥片を作出している。表面にも小剥片の剥離痕が認められる。(005)は稜をもつ打面であるが、平坦な部位から少なくとも三回の剥離を行い小剥片を剥取している。もっとも広い側面だけに剥離を加えた石核である。(006)礫の上半を剥ぎ取り平坦打面を作出したあと数条の剥片を剥取している。さらに剥片を剥取したあとに生じた平坦面を打面として再度の剥離を行っている。上面の打面作出との前後関係は不明であるが、側面にも小規模の打面調整を施し小剥片を剥取している。

スクレーパー（007～009･011）

(007) は不定形の剥片を素材として両面から粗雑な剥離を施して刃部を形成している。(008)は台形状の剥片を素材としている。表面の一部に自然面を残し、片方の側縁に細かなリタッチを施し刃部としている。(009)は調整打面から剥取したいく分横に広い剥片を素材として、両面に細かな剥離を行って刃部をつくっている。

(011) はチャートの不定形の剥片を素材としたもので、基部および背にリタッチがある。刃部にも細かなリタッチがある。基部および背に調整剥離があることからナイフ形石器とも思われるが、刃部の状態から察して、スクレーパーとしておきたい。

尖　頭　器（012）

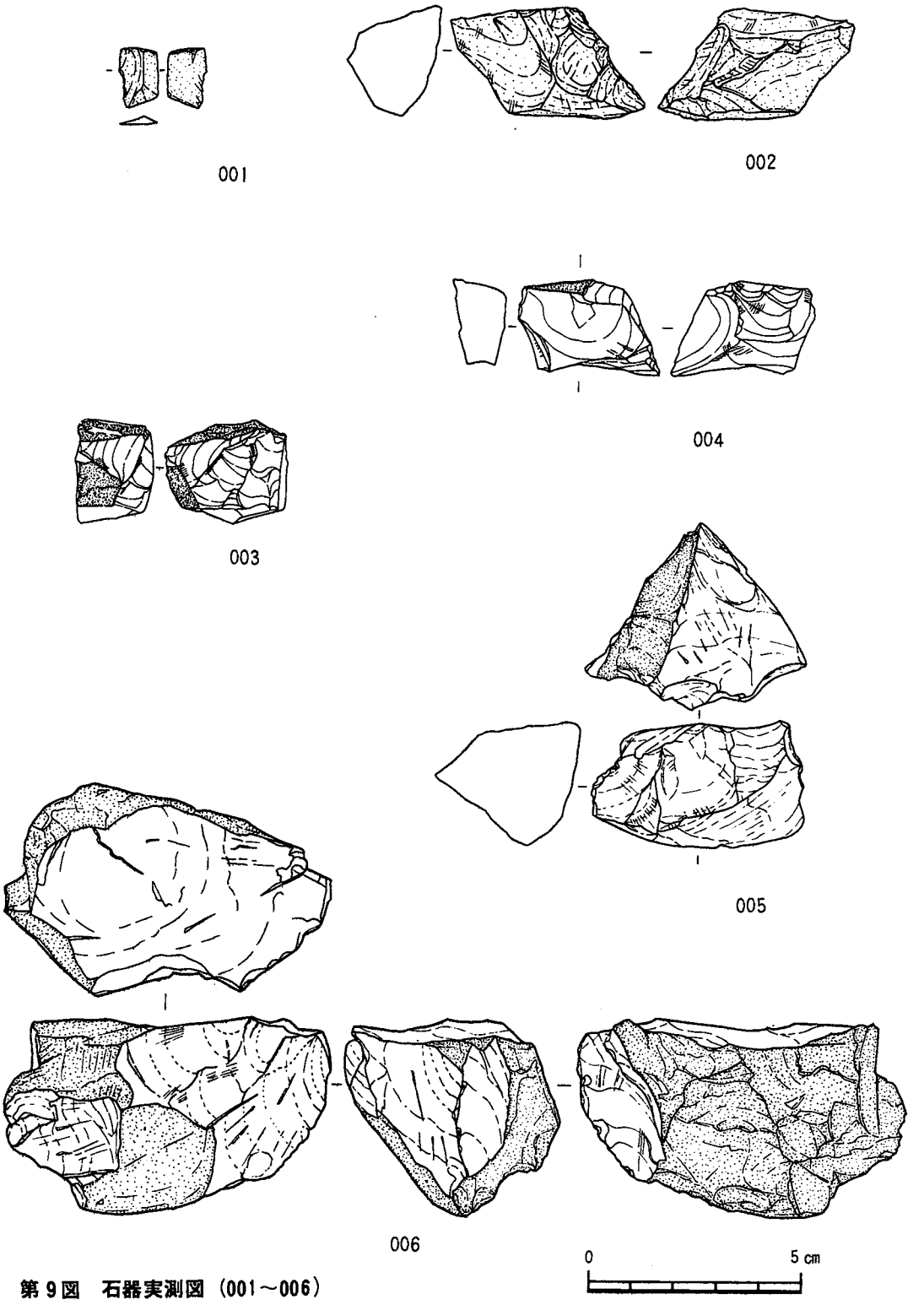
(012) は小型の尖頭器である。石材はサヌカイトで両面から交互剥離状の小剥離を施して先端を尖らしている。形状は三角形を呈し、胴部がふくらみ基部をうすく仕上げている。

彫　　器（013）

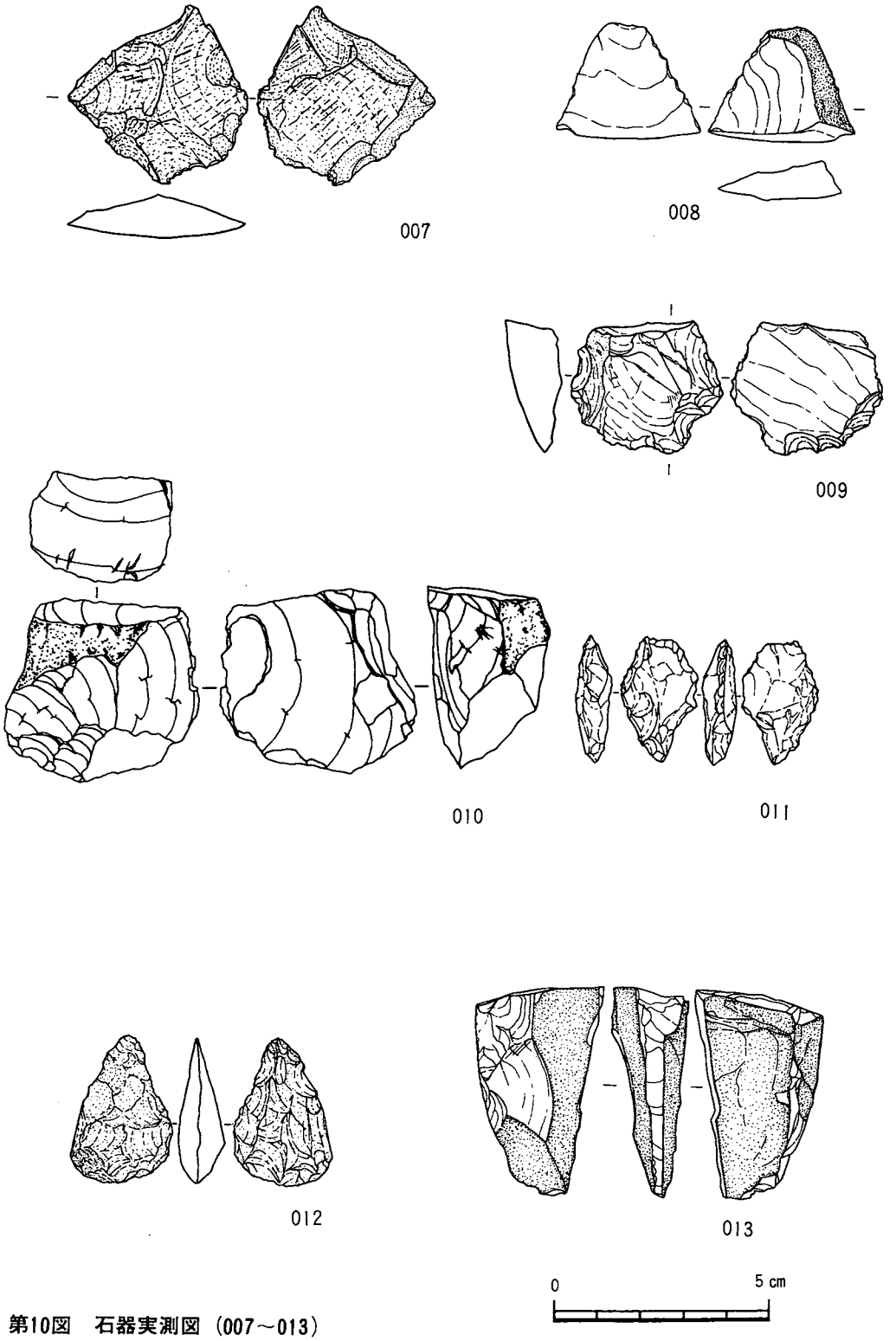
厚手の剥片を折断してできた平坦面から、側面に桶状剥離を行っている。厚く不整形な側面に細かな調整剥離を行い厚みを除去している。

礫　　器（014）

礫石の一部に両面から粗い剥離を施して刃部を形成している。先端は尖がり、刃部の一部に



第9図　石器実測図（001～006）



第10図　石器実測図（007～013）

は砕けたような使用痕が認められる。

二次加工のある剝片（015～021）

（015・016）はいずれもサヌカイトの不定形剝片に粗雑なリタッチがある。スクレーパーとしての機能を有するものであろう。（017）は黒曜石の横広の剝片を素材としたもので基部および側縁にブランティングを施している。ブランティングは裏面からを主調とするが、表面からも行われている。このほか打瘤部や表面の厚みを除去する調整剝離を行っている。刃部には顕著な使用痕が認められ、形態および製作技術から見てナイフ形石器と考えることができよう。（018）サヌカイトの断口が三角形を呈する小形縦長剝片を素材としている。打剝部を先端として基部および側縁に裏面から細かなブランティングを施している。刃部には細かな使用痕が認められ、基部および側縁にブランティングが施されており（017）と同じくナイフ形石器と考えることができよう。（019）は黒曜石で綿密な両面加工が施された石器である。石鏃の一部としてあてはまるような部位は考えられず、尖頭器の基部の一部の可能性がある。（020）は両面に粗雑な二次加工が認められるが、機種および機能については不明確である。（021）側縁にブランティングがある。刃部には使用痕があり、ナイフ形石器として捉えておきたい。

使用痕のある剝片（022～030）

（022）は平坦打面を残し、縁辺の鋭い部位に使用痕が認められる。（023）は表面に一部自然面を残した剝片である。この表面が残ったところを含め縁辺は鋭く、多くの使用痕がある。（024～027）はいずれも不定形の小剝片に生じたエッヂに使用痕が認められる。（028）は平坦打面を残す横長の剝片で、表面は自然面である。縁辺には使用痕がある。(029)は大型で横長の剝片である。自然平坦打面が残り、側縁や下縁には表皮が残る。使用痕は下縁に多く認められる。（030）は片方の側縁に使用痕がある。主要剝離面に剝離痕が見られるが、剝離の意図は定かにしない。

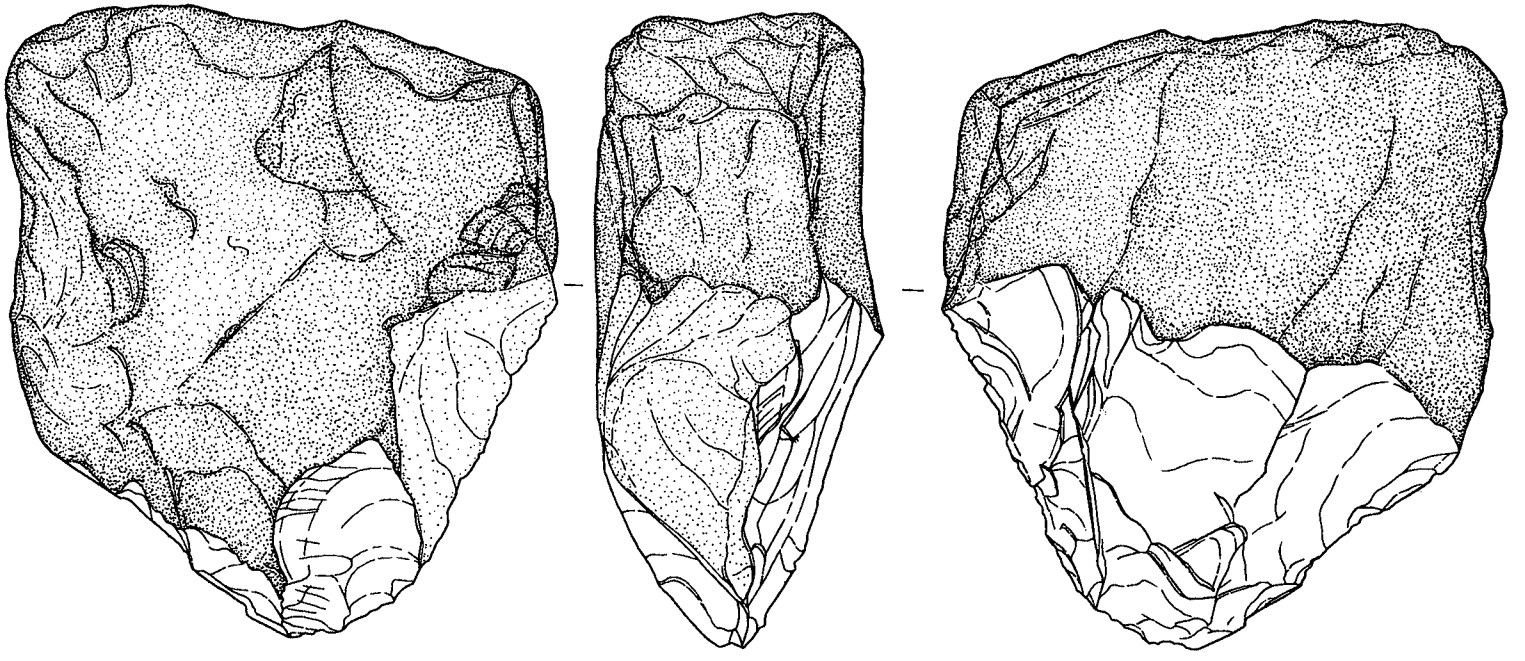
剝　　片（031～049）

いずれも不定形の剝片である。打面の不規則な転位をはじめとして、粗雑な剝離技術で剝取されている。

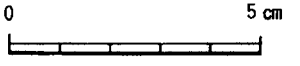
3.B地区出土の石器

石　　核（050～051）

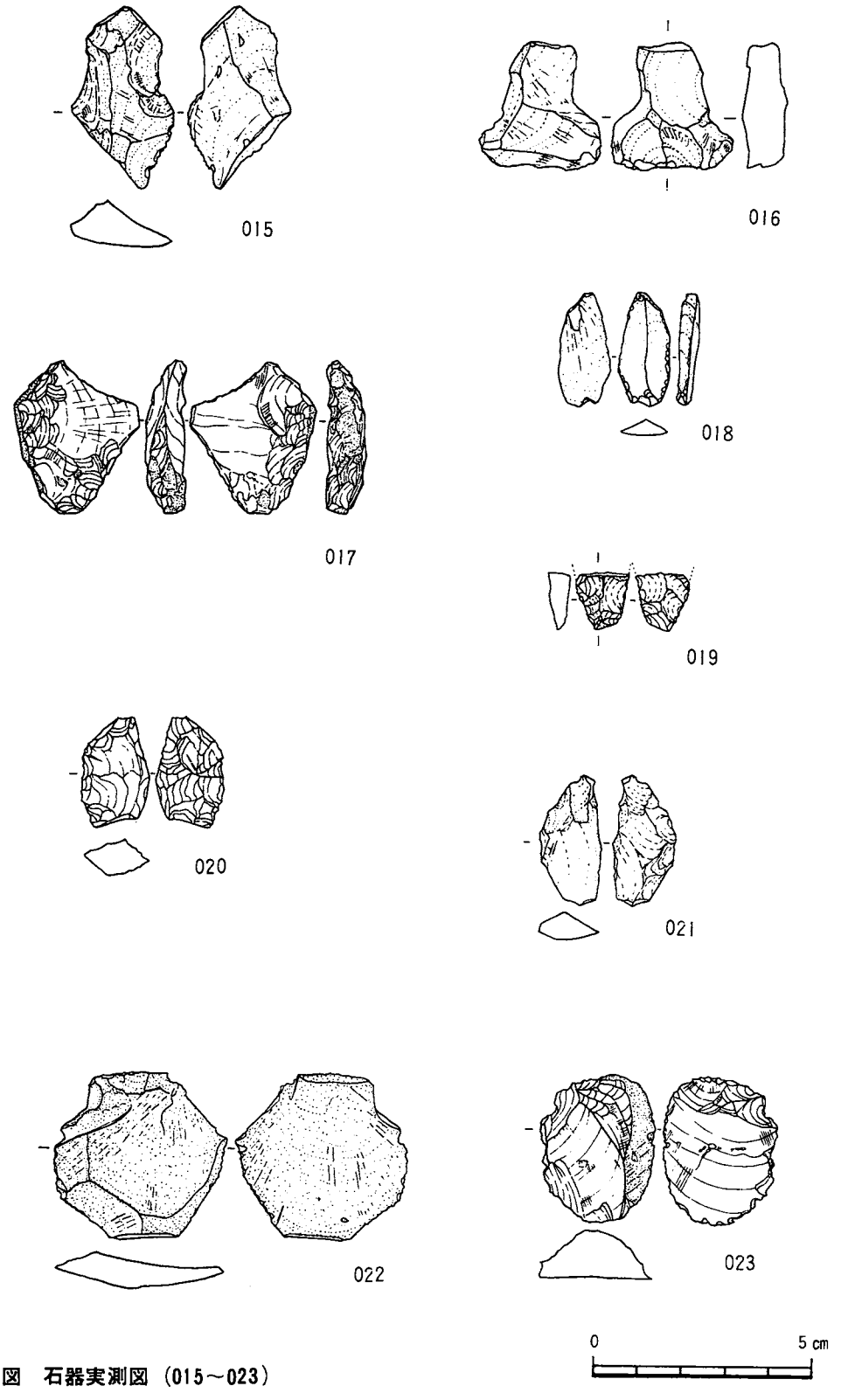
（050）はチャートの厚手の剝片を用いたもので、主要剝離面からの剝離痕が認められる。（051）は頁岩で三角錐状の小形の石核である。打面は三面にあり転移している。礫石に第一加撃を行い平坦打面を形成したあと、数多くの小剝片を剝離している。この剝離によって生じた剝離面をさらに打面として小剝片の剝離を行っている。上面と下面の両面からの剝離も行われている。剝片剝離痕は10㎜内外の横長・縦長をはじめ不規則な形状の剝片を剝取したことを示



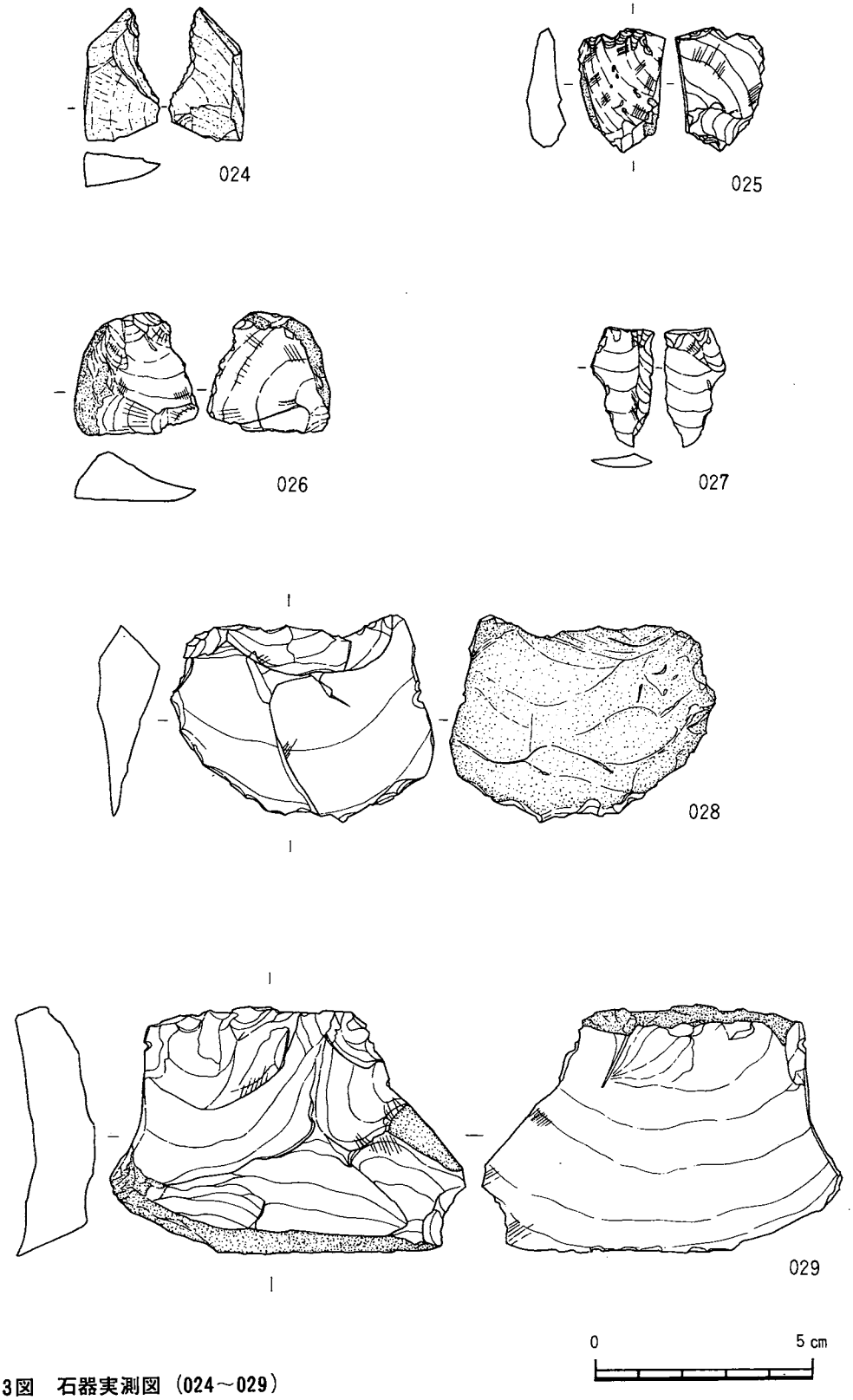
014



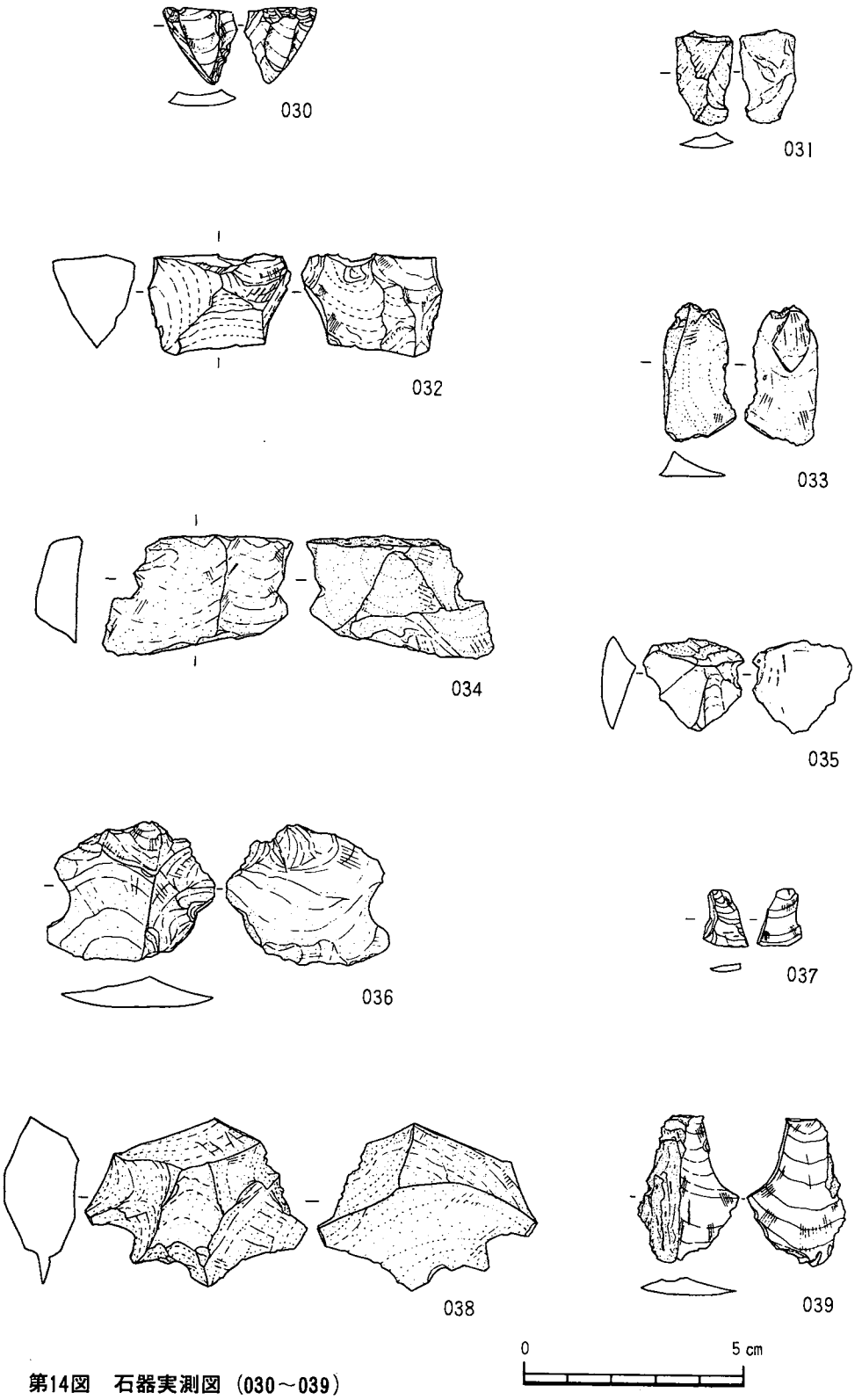
第11図　石器実測図（014）



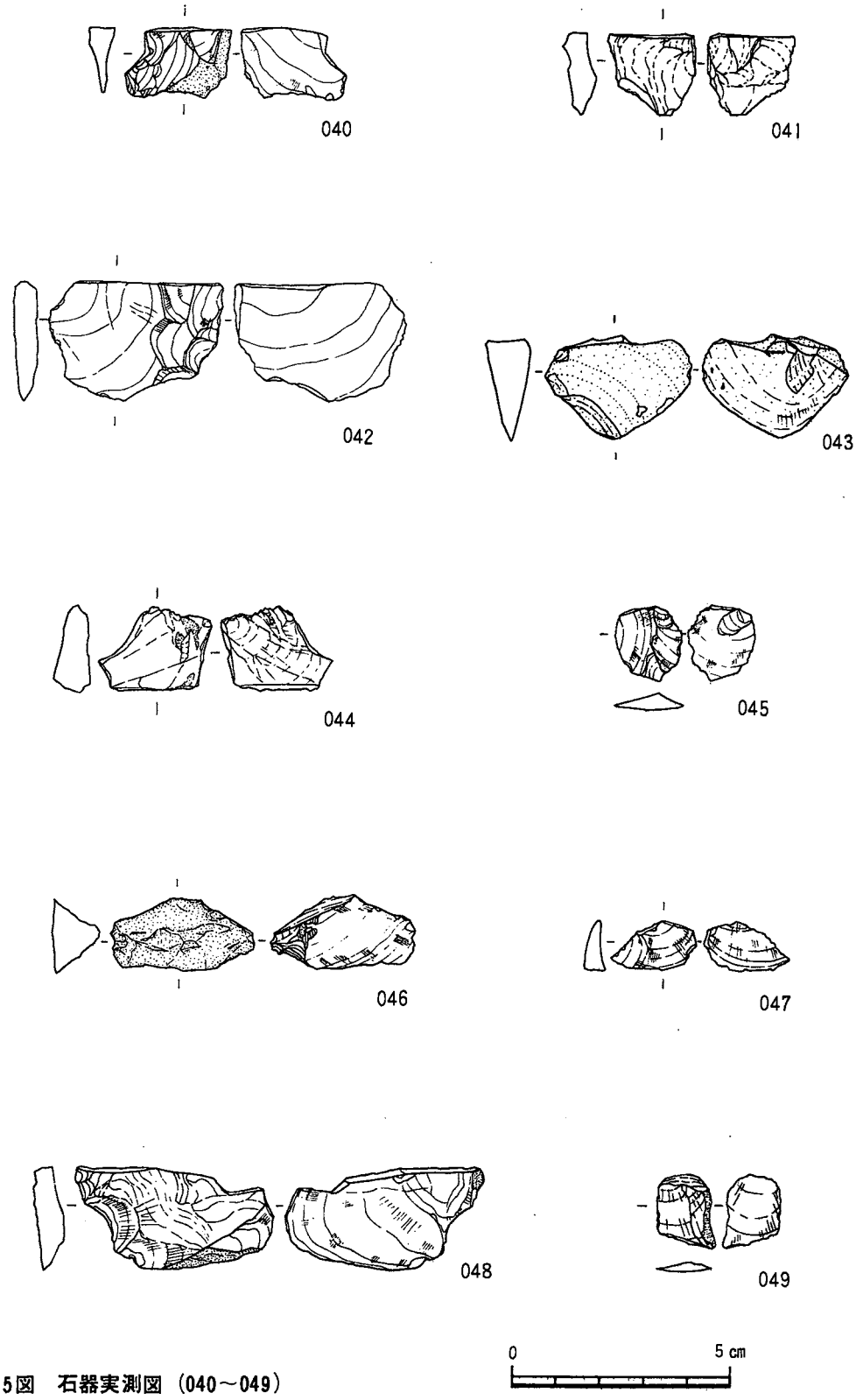
第12図　石器実測図（015～023）



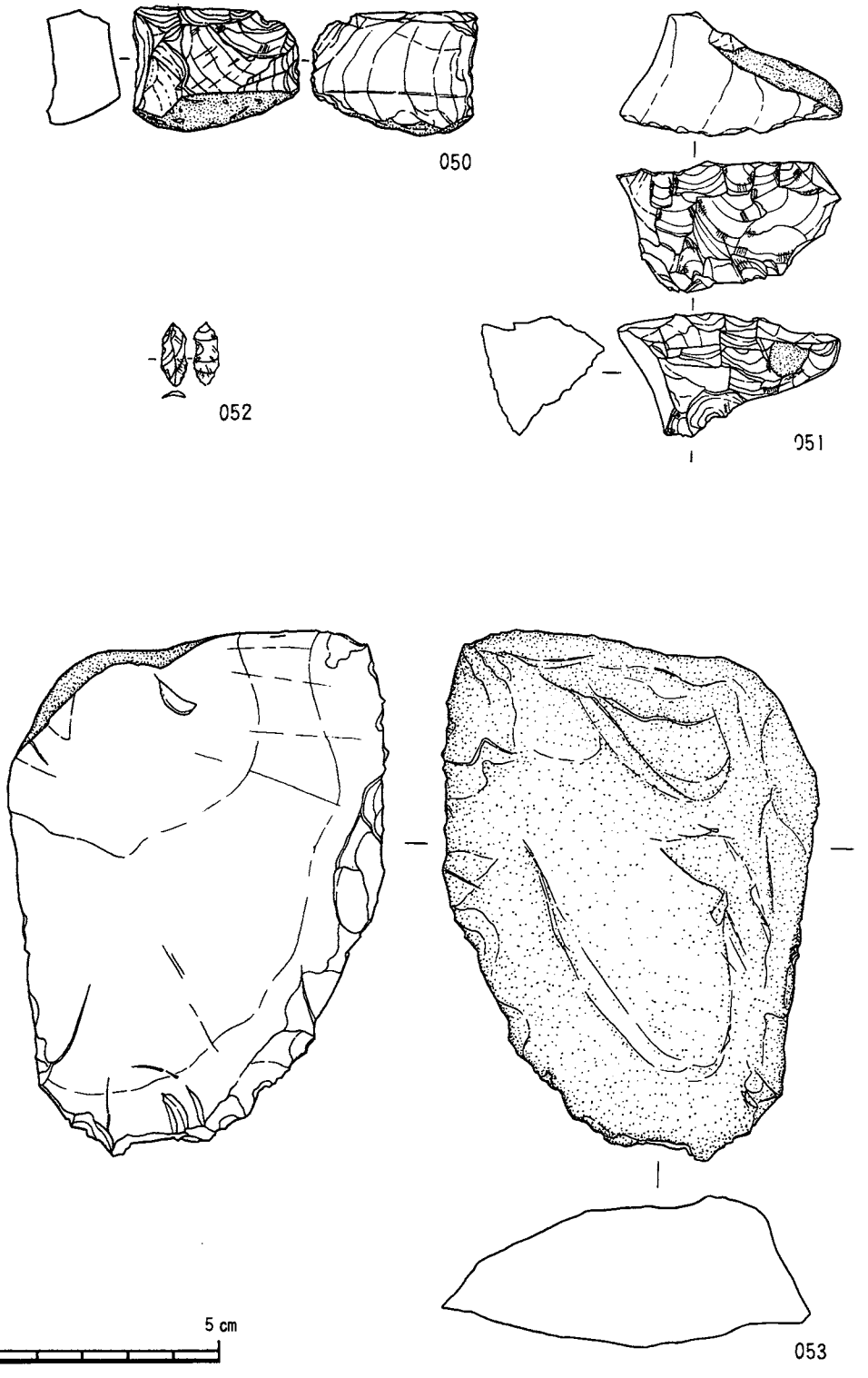
第13図　石器実測図（024～029）



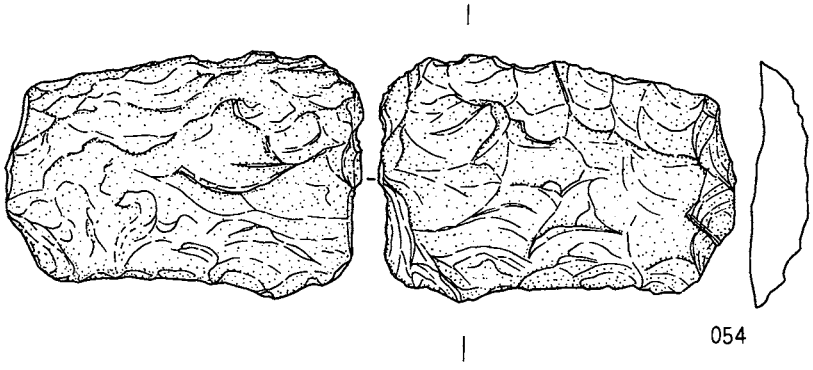
第14図　石器実測図（030～039）

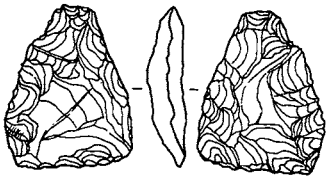


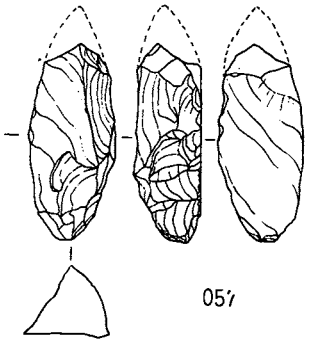
第15図　石器実測図（040～049）

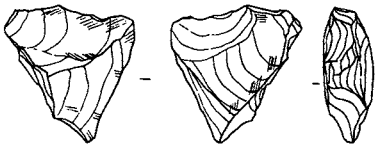


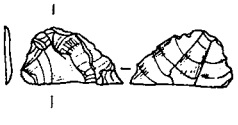
第16図　石器実測図（050～053）

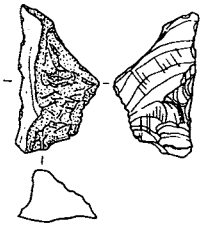


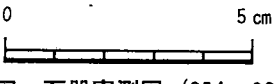












第17図　石器実測図（054～060）

している。

細　石　刃（052）

（052）は両側縁に多くの細かな使用痕がある。細石刃として捉えておきたい。

スクレーパー（053～054）

大型の剥片を素材としている。表面は自然面で、表面から小剥離を行い刃部を形成している。礫石から表皮を剥いで平坦打面をつくる際の剥片を利用したものと思われる。（054）は両面から粗い剥離をくり返し刃部を形成し、扁平な打製石斧を思わせる。表面の風化が著しい。

尖　頭　器（055）

小型の尖頭器でチャートの不定形剥片に両面から両側縁および調整剥離を施したもので、形状は三角形を呈する。基部はうすく仕上げ、先端は欠失しているが、鋭く尖らしたものと思われる。

石　　鏃（056）

サヌカイトを用いたうすく小型の石鏃である。両面から細かな調整剥離を施して、脚部は尖がっている。

二次加工のある剥片（057～059・071）

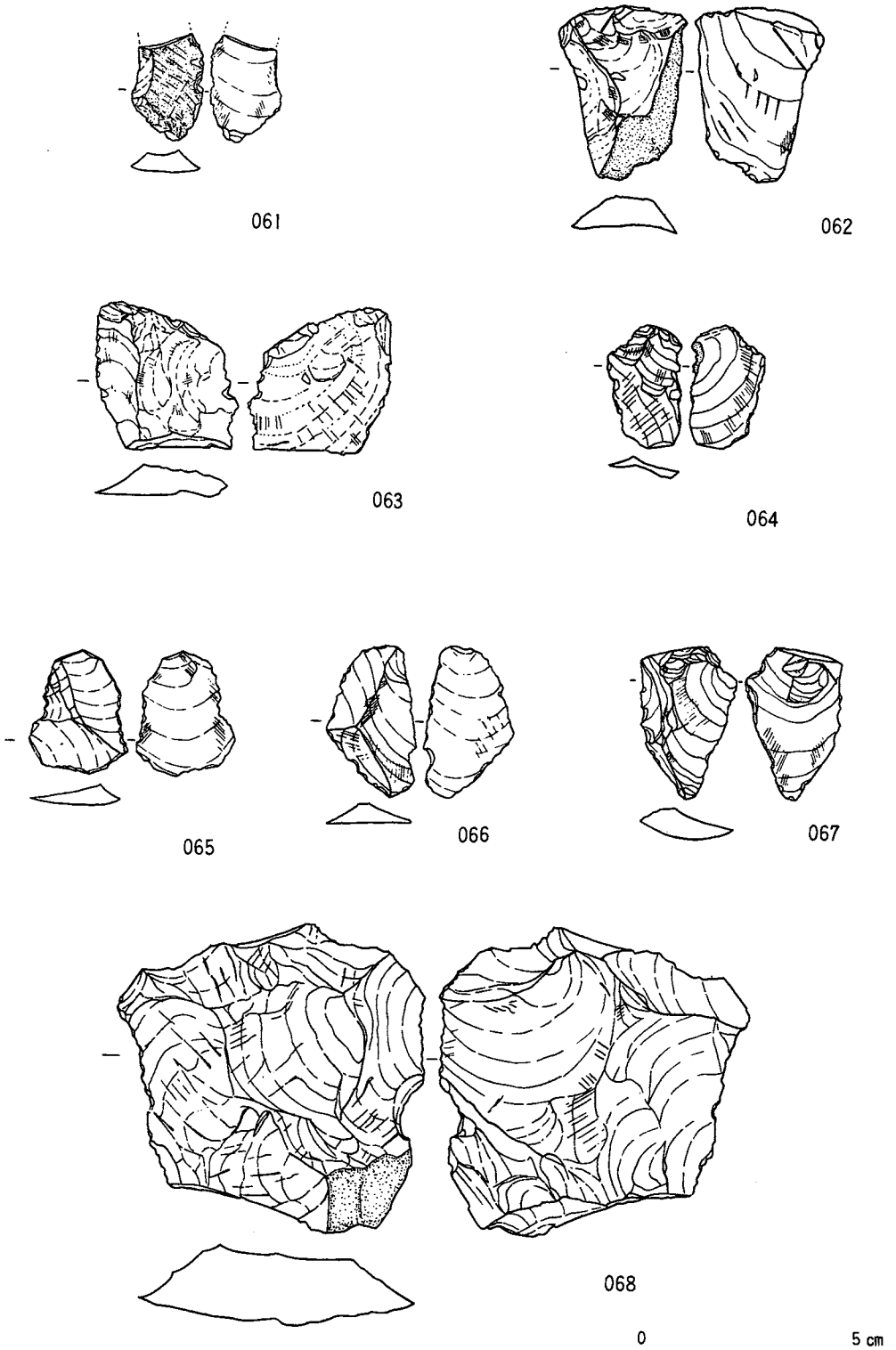
（057）は断面が三角形を呈するチャートの剥片が素材で、背面に綿密な調整剥離を行っている。先端を欠失しているため全体的な形状は不明確であるが、刃部には多くの細かな使用痕が認められる。片方の基部および背にブランティングを施しておりナイフ形石器と判断しておきたい。（058）は頁岩で三角形の形状を呈し、一側面にブランティング様の調整剥離を施している。他方の側面は折断によって生じた平坦面である。刃部には使用痕が認められ台形石器として捉えておきたい。（059）は黒曜石の薄い剥片で両面に細かな調整剥離痕が認められ、特に主要剥離面は一条の剥離を行い打瘤部の厚みを除去している。（071）は断口が台形を呈するサヌカイトの不定形の剥片を素材としている。一方の側縁と基部の一部にブランティングを施し、他方の側縁は折断した平坦面である。先端は尖らし、斜刃には使用痕が認められる。ナイフ形石器として捉えることができよう。

使用痕のある剥片（060～068）

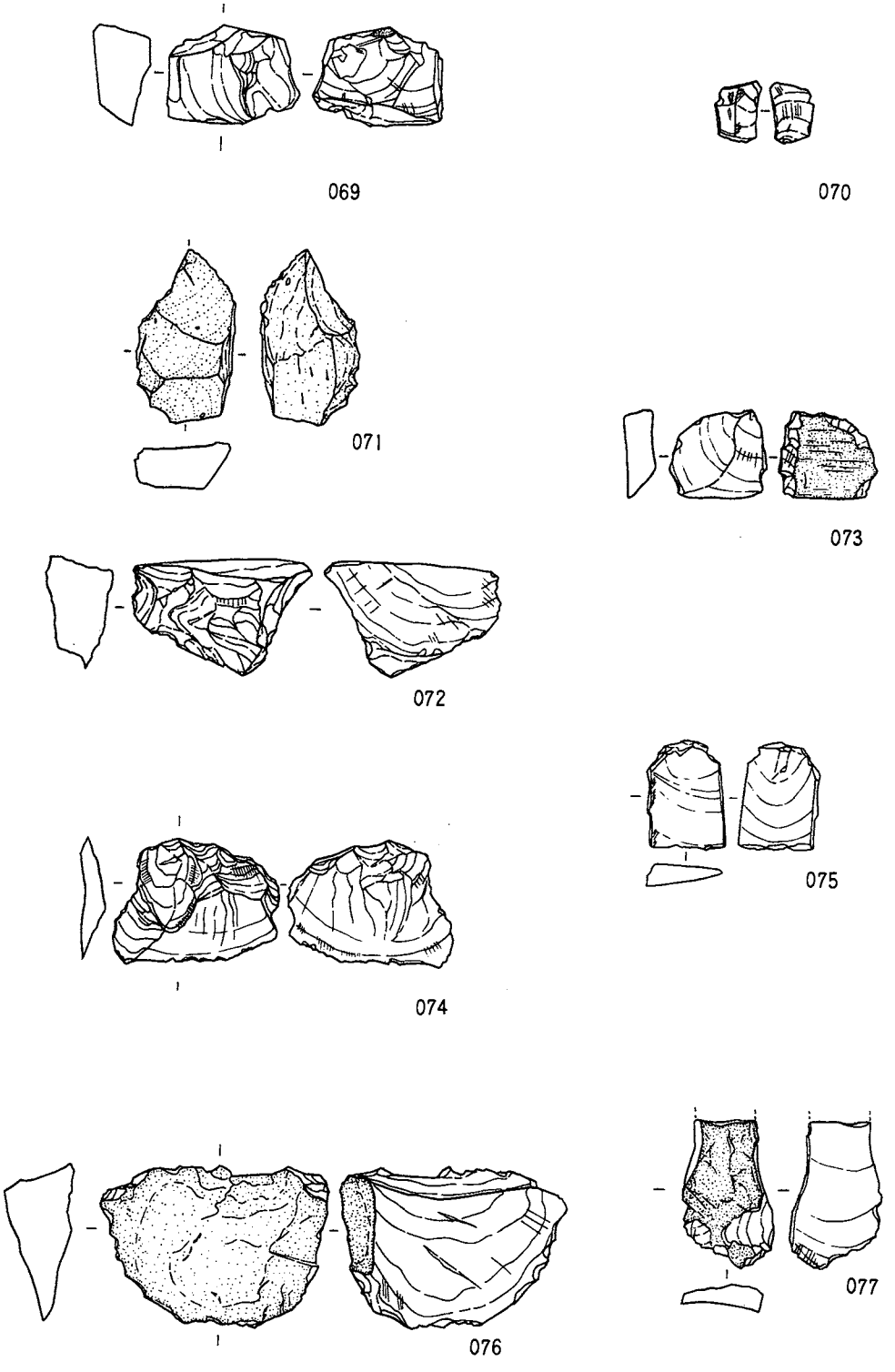
（060～068）にはいずれにも使用痕が認められる。縦長の小剥片が多く、石材には黒曜石・頁岩・サヌカイトが見られる。（068）は頁岩の大型の剥片で、上下両端は厚くて刃部とはならないが、両側縁の鋭い部分が使用され、細かな使用痕がある。

剥　　片（069～070・072～083）

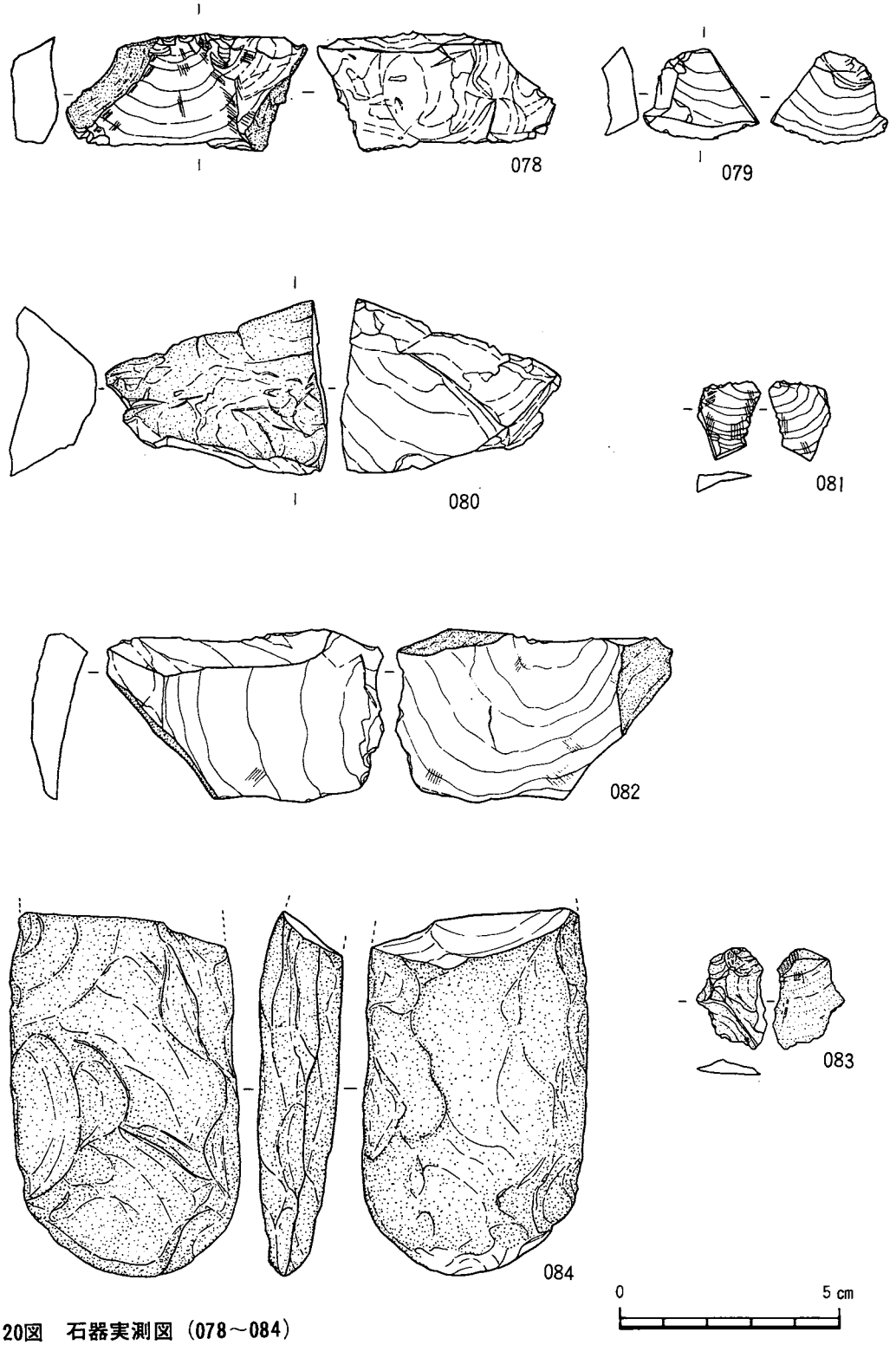
剥片の石材にはチャート・黒曜石・サヌカイト・頁岩が用いられている。不定形の剥片が多いが（075・077）は小型縦長剥片で、整った形状を示す方である。（078・080・082）は厚手の剥片でいずれも平坦打面を残している。



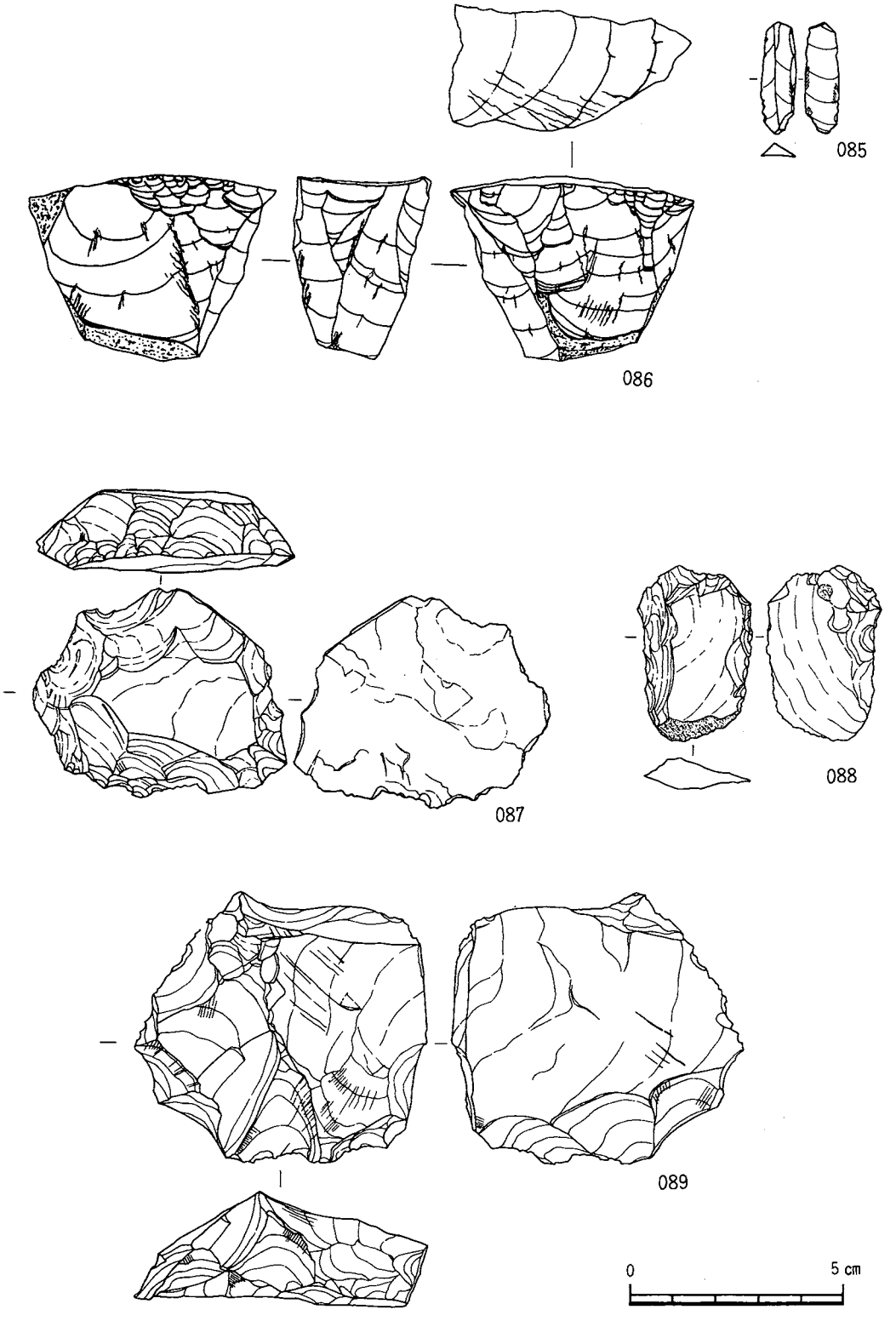
第18図　石器実測図（061～068）



第19図　石器実測図（069～077）



第20図　石器実測図（078～084）



第21図　石器実測図（085～089）

石製石斧（084）

打製石斧はただ一点だけ出土したもので、質の悪い砂岩に粗い剝離を加えて整形している。表面の磨滅が著しい。縄文時代後・晩期のものであろう。

4. B地区周辺採集の石器

細　石　刃（085）

頭部の先端を欠失した細石刃である。稜線は二本あるが、断口はほぼ三角形を呈する。良質の頁岩を用いており、剝離の方向は一定している。左辺に多く使用痕が認められる。

スクレーパー（087）

厚手の剝片を利用したスクレーパーである。裏面の自然平坦面から表面に向かってほぼ一周する小剝離を施して刃部を形成している。刃部剝離が施されていないところが一部にあるが、刃部はほぼ一周し、ラウンドスクレーパーと捉えることができる。(088) は小型の縦長剝片を素材として、ほぼ全周に細かな刃部加工を行っている。特に打点部および打瘤部分は綿密な剝離を施している。(089) も同じくスクレーパーである。大形で厚手の剝片を素材として、打面以外の部分に剝離を加えて刃部をつくりだしている。表面の最も高い部分には細かな剝離を加えて厚みを除去しようとした意図がうかがわれる。

礫　　器（090～091）

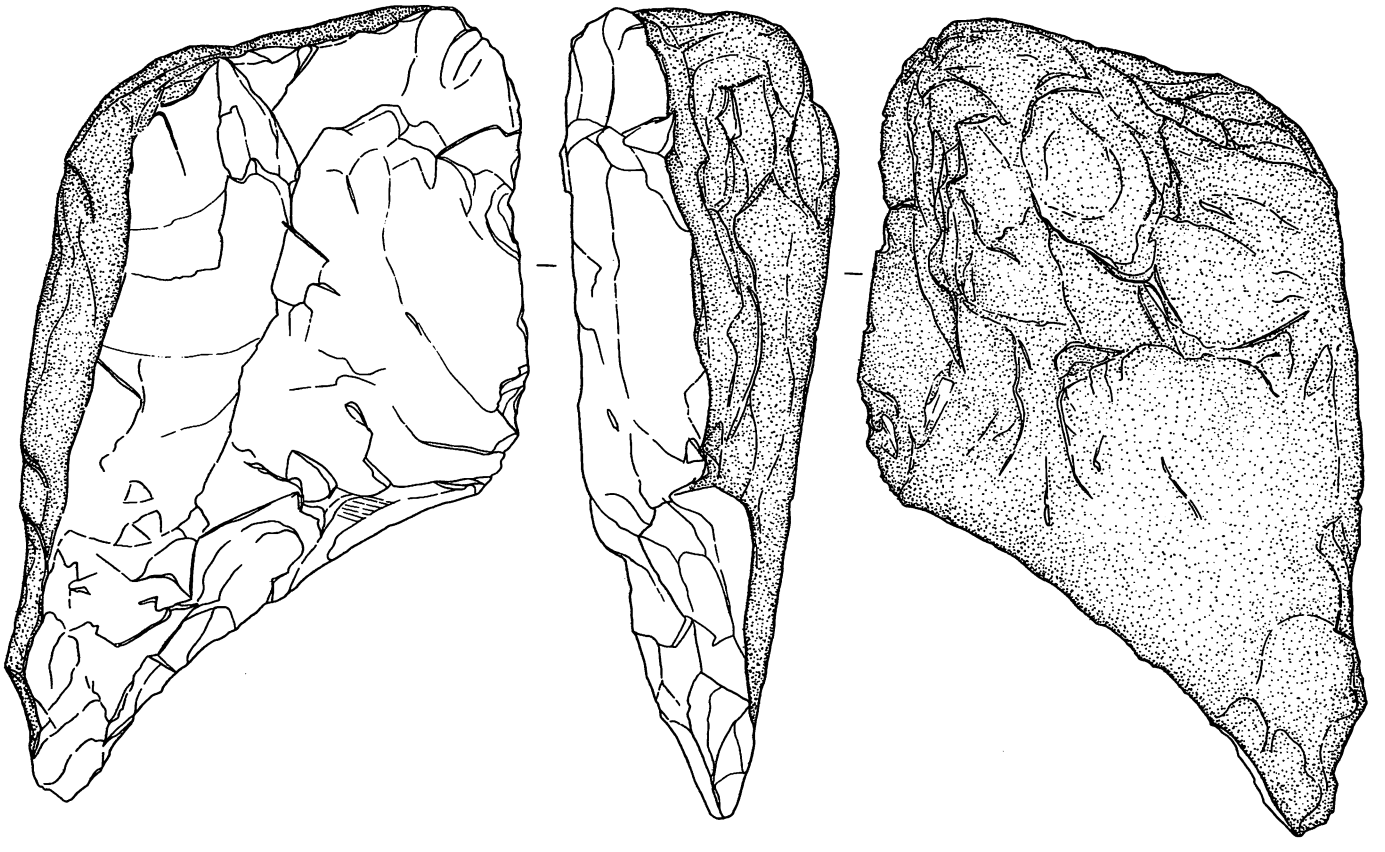
(090) は大きな礫石の片面に剝離を行い刃部をつくりだしている。(091) は三面に剝離を施して刃部を形成する。先端は尖がり三角錐状になっている。上面部は自然面を残している。

二次加工のある剝片（092～094）

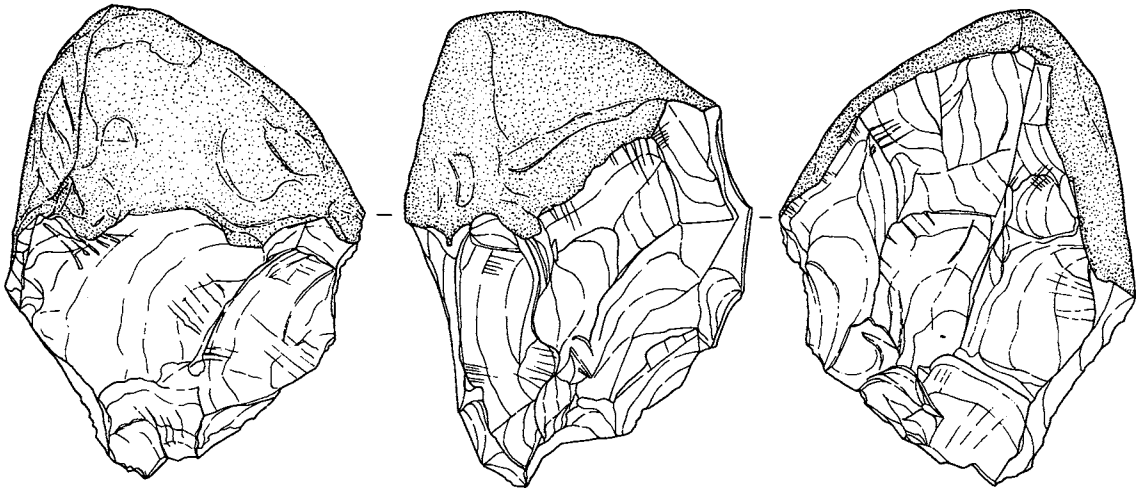
(092) は頁岩の不定形の剝片を素材としている。側縁にブランティングを施し、さらにできた背を打面として厚みを剝ぎとる剝離を行っている。基部にも細かな調整剝離がある。他方の側縁は折断が行われ、平坦面をなしている。斜刃には使用痕が多く認められる。(093) は横長の剝片を素材として、基部調整を施している。片面は表皮が残り、先端は欠失している。使用痕が縁辺に認められる。

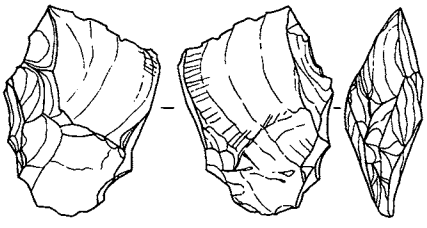
使用痕のある剝片（094～104）

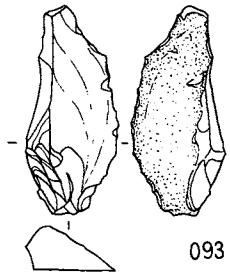
(094) の縁辺には多くの細かな使用痕がある。(095) は自然面が多く残るが、縁辺を使用している。(096) は最も形の良く整った縦長剝片である。調整打面を残し、鋭い両側縁は多くの使用痕がある。(097) は薄い剝片で平坦打面を残している。表面には二本の稜線があり、使用痕は片方の側縁だけに見られる。(098) も同じく表面に二本の稜線を有する剝片で、両側縁に多くの使用痕がある。(103) は大型の断口が三角形を呈する剝片である。平坦打面を残し、上端および下端は非常に厚い。両側縁は鋭く使用痕が認められる。表面に残された剝離痕では、不定形の剝片が多く剝取されたことをものがたっている。(104) は表面の一部に表皮を残したチャートの剝片である。調整打面がある。打面部以外の縁辺には鋭く多くの使用痕が認めら

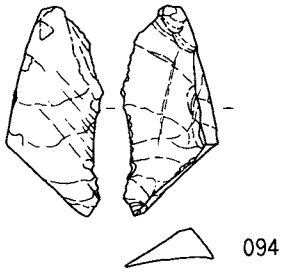


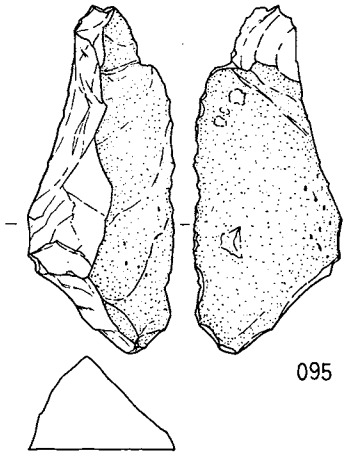
第22図　石器実測図（090）

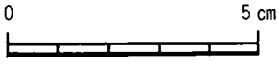




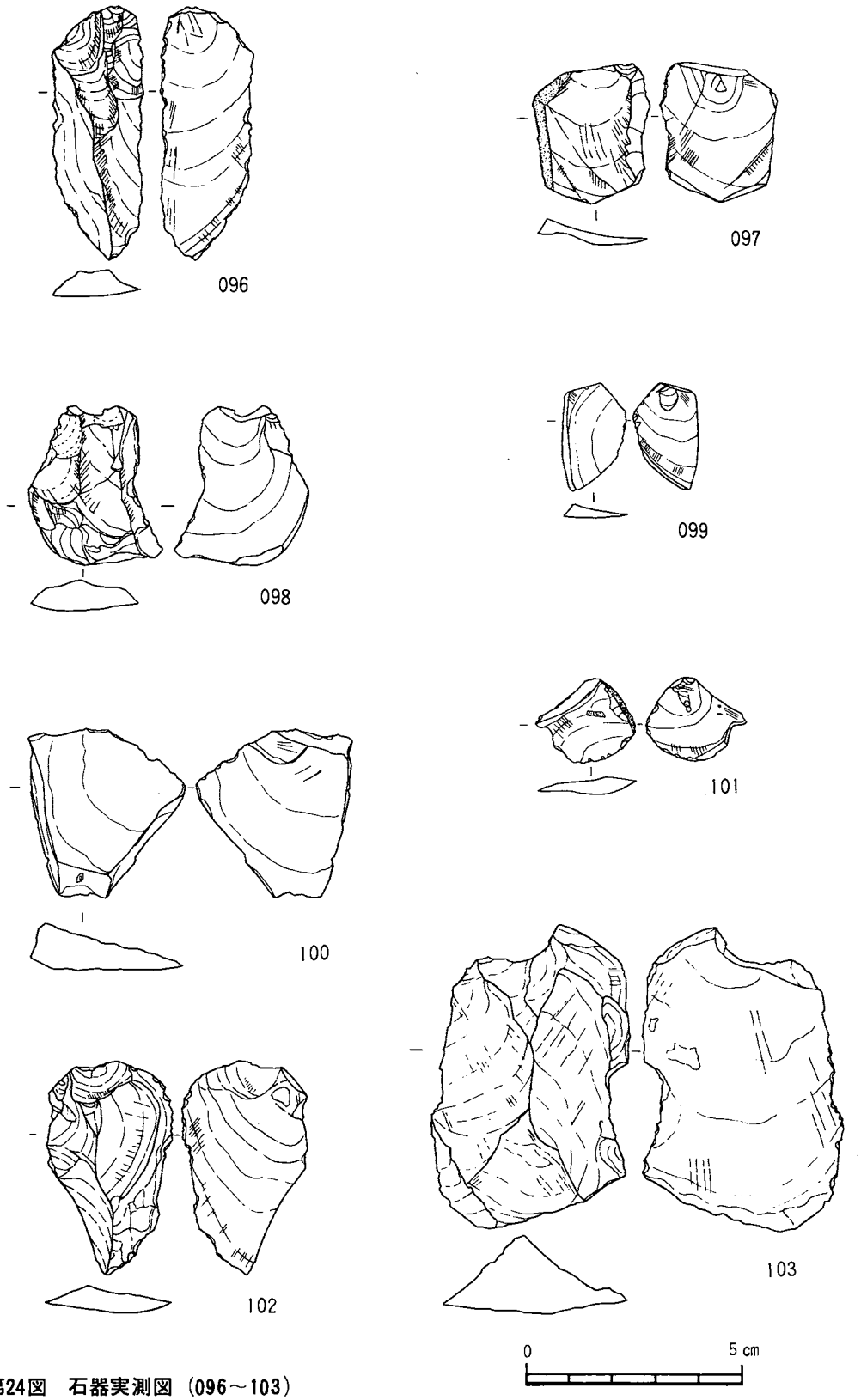




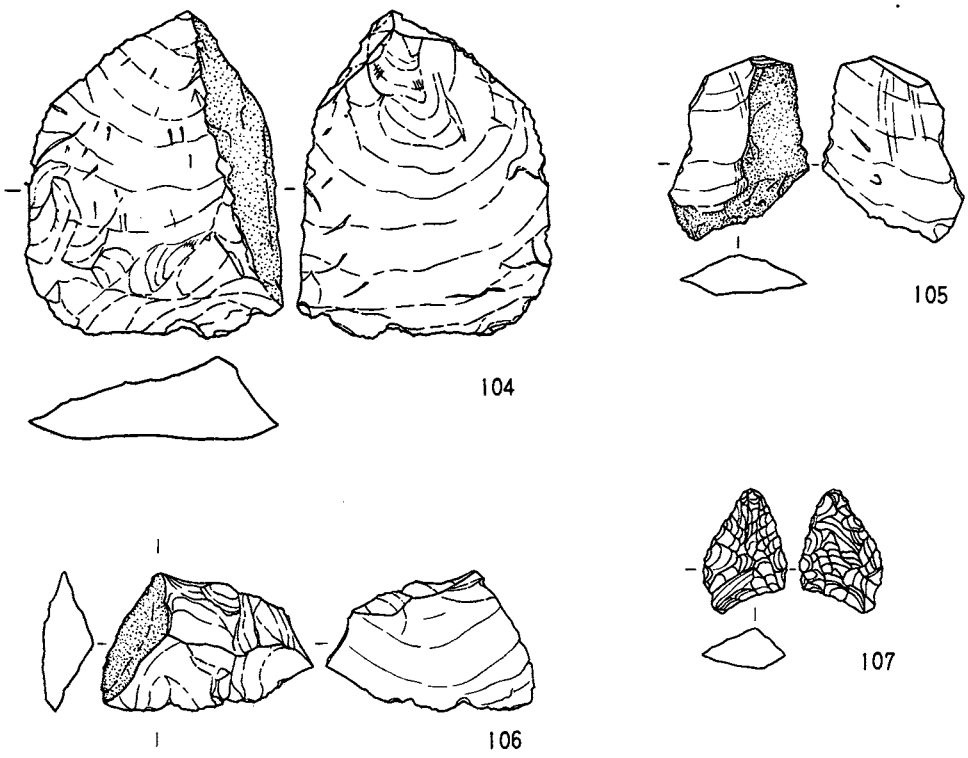


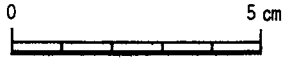


第23図　石器実測図（091～095）



第24図　石器実測図（096～103）





第25図　石器実測図（104～107）

れる。チャートは端正な大形の剝片を仲々剝取しがたい石材であるが、この剝片はうまく剝取されている。

剝　　片（105～106）

双方とも小剝片で縦長・横長ぎみである。縁辺は鋭さをもっているが使用痕は認められない。

石　　鏃（107）

シマ模様のはいった黒曜石の剝片を素材として用いたもので、両面から綿密な剝離を施している。先端は尖らして充分であるが、脚部の抉りが不充分で片脚状につくられている。

（江　本）

5．久保遺跡の細石核（010・086）

久保遺跡において、細石核とそのブランクと判断できる資料が各１点出土しているので、それらについての観察と若干の考察を試みることにしたい。

図21―086は長さ5.78cm、高さ4.44cm、それに幅3.30cmの大きさを有する細石核である。ただ細石刃剥離面に認められる剥片剥離面の大きさは一般の細石核のそれに比較して大きく、特に幅については著しく異なっている。そこで、細石核とするよりもむしろ小石核と呼んだ方が適当とも考えられるが、現在のところ細石核と小石核との大きさの上での基準が明確にされてなく、また小石核そのものについての位置づけが不明であるため敢えて細石核としておく。

拳大よりやや小さく比較的扁平な頁岩質の礫を素材に用いて、礫の一端から長軸の方向に向っての大きな一回の剥離によってこの石核の打面を形成している。この平坦な剥離面を打面にして長軸の両側辺から剥離を施すことによって側面を整形している。この側面調整の剥離は上端からのみに限られている。両側面の下端近くの一部に節理面を残しており、母型になった礫があまり大きくなく、しかも扁平であることが窺える。次に長軸の一端すなわちこの細石核の母型を形成するために剥離した打面側に上端からの剥離が施され、細石刃剥離面が準備されている。

礫の一端を大きく剥離してまず打面を形成する細石核の製作技術は「野岳型細石核」に普遍的に認められるものである。しかしながら長軸の両側面を調整して短軸の一端に細石刃剥離面が準備されることや体形がほぼ舟底形を呈すること、それと背面に稜を持つこと、また打面の調整が全く見られないことなどでは野岳型と異なっている。これらの野岳型に認められない一般的な諸特徴は、東九州の細石核の一つのタイプをなす「船野型細石核」に類似点を求めることが可能である。すなわち礫に加えられた１回の大きな剥離面を打面にして細石核の側面の調整を行なうことや短軸に細石刃剥離面を有すること、それに体形が舟底形に近いことなどである。ただ、船野型の場合は現在のところ流紋岩の円礫が石材に用いられ、しかも原則として厚手の剥片が素材とされること、さらにその分布が宮崎県の北部と大分県の南部にほぼ限られていることなどからただちに舟野型細石核との関係づけられないであろう。

熊本県内において今日までに細石核出土の遺跡は20個所近く存在するが久保遺跡出土のこのような細石核は知られていないようである。もっとも熊本県内の細石核出土遺跡の大半は表採による確認で、しかも菊池郡七城町の小野崎遺跡など数ケ所の遺跡以外ではいずれも資料の数が極端に限られており、今後の調査いかんによっては類似の資料が追加され得ると思われる。

図10―10は最大長4.43cm、高さ4.11cm、幅2.56cmの細石核のブランクと判断される資料である。

拳大よりやや小形の頁岩質の礫の一端に打剥を施し大きな一回の剥離面を形成する。この剥離面は将来細石核の打面として利用されるものである。次にこの剥離面と直交する方向からの

打撃によって素材の礫から厚味のある剥片を打ち剥がす。この面はいわゆる主要剥離面になり、同時に当ブランクの一方の側面をなす。結局、礫に2回の大きな剥離を施すことによって細石核の母型の打面と一方の側面が形成されることになるのである。次の作業としてもう一方の側面調整のための剥離が行なわれるがその調整剥離は全体におよんでなく一部に表皮を残している。最後にこの石核の母型の一端に、礫に加えられた最初の大きな剥離面からの打剥によって細石刃剥離面が準備されている。細石刃の剥離が一度も行なわれていないことから細石刃のブランクと考えるべきであろう。

当細石核ブランクの製作上の特徴としては、礫に加えられる最初の剥離が打面をなすことと、厚手の剥片が素材になっておりしかも素材である剥片の主要剥離面がほとんどそのままの状態でブランクの一方の側面を形成していることである。さらにもう一方の側面に認められる横方向および下端からの調整剥離もつけ加えることができよう。これらの製作上に起因して、全体的な形はやや厚味のある舟底形を呈している。これらの諸特徴のうち、最初の大きな剥離面が打面をなすこと以外は「福井型細石核」（舟底形細石核）に一般的に認められるものである。

当資料については先の資料と同様、石材も含めて類似資料の増加を待って改めて検討されるべきであり、ここでは資料の観察のみにとどめておきたい。

（橘）

参考文献

鈴木忠司　「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」　古代文化　23－8　1971
富田紘一　「旧石器・縄文時代の熊本」　新熊本の歴史　1　1978
橘昌信　「宮崎県船野遺跡における細石器文化」　考古学論叢　3　1975
鎌木義昌・芹沢長介　「長崎県福井岩陰」　考古学集刊　3－1　1965
橘昌信　「九州地方の細石器文化」　駿台史学　47　1979

表5　出土遺物一覧表（001～023）

挿図番号	No.	地区	グリッド番号	層位	機種	石質	色調	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	備考	図版番号
第9図	001	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	細石刃？	サヌカイト	暗青灰色	1.37 cm	0.90 cm	0.26 cm	0.30 g	先端を欠失。	図版8
第9図	002	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	石核	サヌカイト	暗青灰色	4.90	2.85	2.16	17.50		図版8
第9図	003	A地区	第2トレンチ	黒色土Ⅰ	石核	チャート	暗灰色	2.85	2.36	1.85	16.72	細石核の可能性がある。	図版8
第9図	004	A地区	第2トレンチ	黒色土Ⅰ	石核	頁岩	淡黄色	3.56	2.27	1.23	9.40	打面転移。	図版8
第9図	005	A地区	第1トレンチ（西側）	第Ⅱ層	石核	頁岩	淡黄色	5.10	4.03	3.61	46.90	打面転移。	図版8
第9図	006	A地区	第2トレンチ（南側）	第Ⅱ層	石核	頁岩	浅黄色	7.84	5.19	4.23	168.78	打面転移。	図版8
第10図	007	A地区	第1トレンチ（南側）	黒土層Ⅰ	スクレーパー	サヌカイト	暗灰色	3.60	3.60	1.05	13.00	不定形剥片を素材とする。	図版9
第10図	008	A地区	第2トレンチ	黒色土Ⅰ	スクレーパー	チャート	オリーブ灰色	3.34	2.60	0.93	7.12	自然面を残す。	図版9
第10図	009	A地区	第1トレンチ	黒色土Ⅰ	スクレーパー	頁岩	灰白色	3.45	3.00	1.22	12.10	調整打面で剥取。	図版9
第10図	010	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	細石核	頁岩	淡黄色	4.11	4.43	2.56	55.04	第Ⅳ章に記述	図版9
第10図	011	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	スクレーパー	チャート	青灰色	2.80	1.75	0.80	3.58	リタッチがありナイフ形石器の可能性あり。	図版9
第10図	012	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	尖頭状石器	サヌカイト	灰オリーブ色	3.40	2.20	1.02	6.50	交互剥離状の小剥片。	図版9
第10図	013	A地区	第2トレンチ	黒色土Ⅰ	彫器	頁岩	淡黄色	4.89	3.01	1.75	21.50	桶状剥離。	図版9
第11図	014	A地区	第1トレンチ（西側）	第Ⅱ層（下部）	礫器	頁岩	明緑灰色	13.08	10.90	5.39	995.74	使用痕がある。	図版10
第12図	015	A地区	第1トレンチ	黒色土Ⅰ	二次加工のある剥片	サヌカイト	暗青灰色	4.04	2.28	1.27	7.00	不定形剥片を素材とする。	図版11
第12図	016	A地区	第1トレンチ	黒色土Ⅰ	二次加工のある剥片	サヌカイト	暗青灰色	2.90	2.80	0.90	6.08	不定形剥片を素材とする。	図版11
第12図	017	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	二次加工のある剥片	黒曜石	黒色	3.43	2.86	0.88	7.40	ナイフ形石器の可能性が強い。	図版11
第12図	018	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	二次加工のある剥片	サヌカイト	オリーブ黒色	2.53	1.15	0.41	1.18	ナイフ形石器であろう。	図版11
第12図	019	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	二次加工のある剥片	黒曜石	黒色	1.24	1.20	0.40	0.42	尖頭器の基部と思われる	図版11
第12図	020	A地区	第1トレンチ	第Ⅲ層	二次加工のある剥片	頁岩	緑灰色	2.41	1.59	0.70	2.82	粗雑な二次加工がある。	図版11
第12図	021	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	二次加工のある剥片	サヌカイト	暗青灰色	2.85	1.46	0.58	2.20	ナイフ形石器。	図版11
第12図	022	A地区	第1トレンチ（南側）	黒土層Ⅰ	使用痕のある剥片	サヌカイト	暗灰色	3.85	3.70	0.62	9.08	使用痕がある。	図版11
第12図	023	A地区	第1トレンチ（ピット内）	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	黒曜色	黒色	3.30	2.54	1.03	7.55	自然面を残す。	図版11

表6　出土遺物一覧表（024～046）

挿図番号	No.	地区	グリッド番号	層位	機種	石質	色調	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	備考	図版番号
第13図	024	A地区	第1トレンチ	第Ⅲ層	使用痕のある剥片	サヌカイト	暗灰色	2.94 cm	1.82 cm	0.82 cm	3.55 g	不定形の小剥片。	図版12
第13図	025	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	2.70	2.00	0.90	4.10	不定形の小剥片。	図版12
第13図	026	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	2.95	3.13	1.37	8.50	不定形の小剥片。	図版12
第13図	027	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	2.80	1.34	0.33	1.12	不定形の小剥片。	図版12
第13図	028	A地区	第1トレンチ（西側）	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	頁岩	淡黄色	2.86	4.38	1.44	36.04	横長剥片。	図版12
第13図	029	A地区	第2トレンチ。	黒色土	使用痕のある剥片	頁岩	淡黄色	8.16	5.82	2.04	85.60	大型の横長剥片。	図版12
第14図	030	A地区	第1トレンチ（ピット内）	第Ⅱ層	使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	1.61	1.68	0.44	1.02	剥離痕がある。	図版12
第14図	031	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	黒色	2.09	1.29	0.30	1.10	不定形剥片。	図版13
第14図	032	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	サヌカイト	暗青灰色	3.18	2.19	1.91	11.60	不定形剥片。	図版13
第14図	033	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	サヌカイト	暗青灰色	3.11	1.62	0.63	2.22	不定形剥片。	図版13
第14図	034	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	サヌカイト	暗青灰色	4.60	2.49	0.99	9.98	不定形剥片。	図版13
第14図	035	A地区	第2トレンチ	第Ⅱ層（上面）	剥片	サヌカイト	暗青灰色	2.25	2.02	0.89	2.32	不定形剥片。	図版13
第14図	036	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	サヌカイト	暗青灰色	3.88	3.00	0.69	7.30	不定形剥片。	図版13
第14図	037	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	黒色	1.38	0.99	0.21	0.22	不定形剥片。	図版13
第14図	038	A地区	第1トレンチ（南側）	黒土層	剥片	サヌカイト	暗灰色	5.06	3.73	1.65	8.74	不定形剥片。	図版13
第14図	039	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	黒色	3.36	2.28	0.65	3.20	不定形剥片。	図版13
第15図	040	A地区	第1トレンチ（南側）	黒土層Ⅰ	剥片	黒曜石	黒色	2.48	1.60	0.87	2.50	不定形剥片。	図版14
第15図	041	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	チャート	青灰色	1.86	1.95	0.69	2.24	不定形剥片。	図版14
第15図	042	A地区	第2トレンチ	黒色土Ⅰ	剥片	頁岩	淡黄色	3.98	2.65	0.62	6.60	不定形剥片。	図版14
第15図	043	A地区	第1トレンチ	黒色土	剥片	サヌカイト	青灰色	3.31	2.25	0.94	5.64	不定形剥片。	図版14
第15図	044	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	チャート	青灰色	2.60	1.90	0.90	3.84	不定形剥片。	図版14
第15図	045	A地区	第1トレンチ（ピット内）	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	黒色	1.67	1.45	0.43	0.62	不定形剥片。	図版14
第15図	046	A地区	第1トレンチ	第Ⅱ層	剥片	黒曜石	黒色	3.23	1.65	1.17	4.42	不定形剥片。	図版14

表7　出土遺物一覧表（047～069）

挿図番号	No.	地区	グリッド番号	層位	機種	石質	色調	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	備考	図版番号
第15図	047	A地区	第1トレンチ（ピット内）	第Ⅱ層	剝片	黒曜石	黒色	1.89cm	1.06cm	0.56cm	0.80g	不定形剝片。	図版14
第15図	048	A地区	第1トレンチ（西側）	第Ⅲ層	剝片	頁岩	灰白色	4.64	2.27	0.67	7.34	不定形剝片。	図版14
第15図	049	A地区	第1トレンチ（ピット内）	第Ⅱ層	剝片	安山岩	黒色	1.71	1.19	0.26	0.58	不定形剝片。	図版14
第16図	050	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	石核	チャート	晴青灰色	3.60	2.74	1.66	19.98	主要剝離面から剝離。	図版15
第16図	051	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層	石核	頁岩	灰白色	4.82	2.89	2.72	27.40	打面転移。	図版15
第16図	052	B地区	第5～8トレンチ	第Ⅱ層	細石刃？	黒曜石	黒色	1.34	0.55	0.12	0.12	使用痕がある。	図版15
第16図	053	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層（下面）	スクレーパー	頁岩	にぶい黄色	10.86	8.22	3.11	300.71	自然面が残る。	図版15
第17図	054	B地区	第5～8トレンチ	第Ⅲ層	スクレーパー	粘板岩	浅黄色	7.09	4.78	1.13	53.68	粗い二次加工。	図版16
第17図	055	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	尖頭器	チャート	暗緑灰色	3.17	2.53	0.83	6.58	基部をうすく仕上げる。	図版16
第17図	056	B地区	第5～8トレンチ	第Ⅱ層	石鏃	サヌカイト	暗灰黄色	1.58	1.08	0.19	0.32	脚部は尖がる。	図版16
第17図	057	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	二次加工のある剝片	チャート	灰色	3.81	1.71	1.45	8.30	ナイフ形石器。	図版16
第17図	058	B地区	第1～8トレンチ	第Ⅱ層（下部）	二次加工のある剝片	頁岩	浅黄色	2.90	2.22	0.95	4.90	台形石器の可能性あり。	図版16
第17図	059	B地区	第5～4トレンチ	第Ⅰ層	二次加工のある剝片	黒曜石	黒色	1.99	1.08	0.21	0.36	打瘤部を除去。	図版16
第17図	060	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層（下部）	二次加工のある剝片	黒曜石	黒色	2.89	1.56	0.89	2.46		図版16
第18図	061	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層	使用痕のある剝片	黒曜石	黒色	2.20	1.65	0.48	1.48	先端を欠失。	図版17
第18図	062	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	使用痕のある剝片	頁岩	灰黄色	3.83	2.84	0.80	8.40		図版17
第18図	063	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	使用痕のある剝片	サヌカイト	暗青灰	4.18	3.04	0.62	5.94		図版17
第18図	064	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	使用痕のある剝片	黒曜石	黒色	2.57	1.82	0.33	1.28		図版17
第18図	065	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	使用痕のある剝片	頁岩	浅黄色	2.80	2.28	0.49	1.63		
第18図	066	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	使用痕のある剝片	頁岩	淡黄色	3.44	2.03	0.43	2.38		
第18図	067	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	使用痕のある剝片	頁岩	淡黄色	3.27	2.13	0.70	4.20		
第18図	068	B地区	第5～8トレンチ	第Ⅲ層	使用痕のある剝片	頁岩	浅黄色	7.29	6.79	1.76	88.70	大型の剝片	図版17
第19図	069	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層	剝片	チャート	灰色	2.87	2.32	1.28	8.46	二次加工を行った可能性がある。	図版18

表8　出土遺物一覧表（070～092）

挿図番号	No.	地区	グリッド番号	層位	機種	石質	色調	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	備考	図版番号
第19図	070	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅰ層	剝片	黒曜石	黒色	1.28 cm	0.87 cm	0.42 cm	0.52 g	不定形剝片。	図版18
第19図	071	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	2次加工のある剝片	サヌカイト	灰色	3.70	2.02	0.90	7.40	ナイフ形石器か。	図版18
第19図	072	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	剝片	頁岩	灰白色	3.91	2.40	1.39	10.64	不定形剝片。	図版18
第19図	073	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅰ層	剝片	黒曜石	黒色	2.10	1.86	0.65	2.80	不定形剝片。	図版18
第19図	074	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	剝片	頁岩	灰白色	3.74	2.76	0.79	5.62	不定形剝片。	図版18
第19図	075	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層	剝片	チャート	浅黄色	2.38	1.64	0.69	3.00	小型縦長剝片。	図版18
第19図	076	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	頁岩	浅黄色 緑灰色	4.94	3.18	1.45	21.40	自然面を残す。	図版18
第19図	077	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層（下部）	剝片	チャート	暗青灰色	3.18	1.91	0.64	5.02	小型縦長剝片。	図版18
第20図	078	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	チャート	暗青灰色	5.51	2.79	1.47	21.36	厚手・不定形剝片。	図版19
第20図	079	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	頁岩	暗青灰色	2.62	2.00	0.82	3.44	不定形剝片。	図版19
第20図	080	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	頁岩	浅黄色	5.00	3.96	3.01	45.88	厚手・不定形剝片。	図版19
第20図	081	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	黒曜石	黒色	1.91	1.40	0.50	0.72	不定形剝片。	図版19
第20図	082	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層	剝片	チャート	灰白色	6.10	3.85	2.00	32.90	厚手不定形剝片。	図版19
第20図	083	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅲ層（上面）	剝片	サヌカイト	暗オリーブ灰色	2.50	1.53	0.58	1.28	不定形剝片。	図版19
第20図	084	B地区	第1～4トレンチ	第Ⅱ層（下面）	打製石斧	砂岩	黄褐色	8.06	5.22	2.00	120.64	磨滅が進む。	図版19
第21図	085	B地区	表採		細石刃	頁岩	オリーブ灰色	2.56	0.77	0.24	0.58	先端を欠失。	図版20
第21図	086	B地区	表採		細石核	頁岩	浅黄色	5.78	4.44	3.30	77.60		図版20
第21図	087	B地区	表採		スクレーパー	頁岩	灰オリーブ色	6.60	4.78	1.94	61.40	刃部はほぼ一周する。	図版20
第21図	088	B地区	表採		スクレーパー	サヌカイト	青灰色	4.00	2.56	0.86	7.40	小型の縦長剝片を素材とする。	図版20
第21図	089	B地区	表採		スクレーパー	チャート	浅黄色	6.88	6.10	2.45	119.50	大型の剝片を素材とする。	図版20
第22図	090	B地区	表採		礫器	チャート	明オリーブ灰	17.38	9.52	4.93	729.50	片面は自然面。	図版21
第23図	091	B地区	表採		礫器	頁岩	淡黄色	9.40	7.46	6.49	435.30	先端は三角錐状。	図版22
第23図	092	B地区	表採		二次加工のある剝片	頁岩	明緑灰色	3.76	2.92	1.56	3.00	不定形の剝片を素材とする。	図版22

表9　出土遺物一覧表（093～107）

挿図番号	No.	地区	グリッド番号	層位	機種	石質	色調	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重さ	備考	図版番号
第23図	093	B地区	表採		二次加工のある剥片	頁岩	浅黄色	4.18 cm	1.79 cm	0.89 cm	5.10 g	横長剥片を素材とする。	図版22
第23図	094	B地区	表採		使用痕のある剥片	チャート	暗青灰色	4.18	1.76	0.75	4.32		図版22
第23図	095	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	淡黄色	6.92	2.85	2.23	32.20	自然面が残る。	図版22
第24図	096	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	浅黄色	5.72	2.07	0.70	8.40	縦長剥片。	図版23
第24図	097	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	淡黄色	3.50	2.60	0.51	3.80	二本の稜線がある。	図版23
第24図	098	B地区	表採		使用痕のある剥片	チャート	淡黄 暗緑灰	3.75	2.65	0.86	8.54	二本の稜線がある。	図版23
第24図	099	B地区	表採		使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	2.15	1.48	0.30	1.14	不定形剥片。	図版23
第24図	100	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	にぶい黄色	3.98	3.51	0.93	13.50	不定形剥片。	図版23
第24図	101	B地区	表採		使用痕のある剥片	黒曜石	黒色	2.30	1.93	0.47	1.30	不定形剥片。	図版23
第24図	102	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	灰白色	4.83	2.96	0.62	7.78	不定形剥片。	図版23
第24図	103	B地区	表採		使用痕のある剥片	頁岩	浅黄色	6.15	4.54	1.97	57.38	断口は三角形。	図版23
第25図	104	B地区	表採		剥片	チャート	暗青灰色	6.39	5.20	1.60	44.90	自然面を残す。	図版24
第25図	105	B地区	表採		剥片	頁岩	浅黄色	3.79	2.75	0.79	6.10	不定形剥片。	図版24
第25図	106	B地区	表採		剥片	チャート	浅黄色	4.11	2.74	1.15	8.56	不定形剥片。	図版24
第25図	107	B地区	表採		石鏃？	黒曜石	黒色	2.24	1.64	0.74	2.02	片脚状。	図版24

第V章　む　す　び

今回の発掘調査によって出土した石器の一覧表は表５～９に示すとおりである。

Ａ地区で石器の出土が見られたのは第Ⅰ層から第Ⅲ層までで第Ⅳ層には出土していない。各層の状態については第Ⅱ章に述べたとおりであるが、他の遺跡との層位的な比較を少し行ってみたい。県内で土層の報告例がある中で、本遺跡の北と南に接近して位置する上益城郡益城町櫛島遺跡[註1]と下益城郡城南町沈目遺跡[註2]とを見てみたい。両遺跡の層位を概略的にまとめると次のように述べることができよう。

第Ⅰ層は表土層で耕作等による攪乱層である。

第Ⅱ層は黒色土である。この黒色土は県内を広く覆っている、いわゆるクロボクである。縄文後、晩期以降の遺物が見られる。

第Ⅲ層は黄褐色を呈するキナコ状のサラサラとした土質である。近年明らかにされている広域火山灰層のアカホヤに相当するといわれており、縄文前期曽畑式土器を含んでいることでも知られている。第Ⅳ層は黒褐色粘質土である。櫛島遺跡・沈目遺跡では縄文時代の押型文土器や塞ノ神式土器を包含している層である。第Ⅴ層は暗褐色土層で固くクラックをなした土質である。第Ⅴ層になると縄文時代の遺物の包含は見られない。第Ⅵ層は赤褐色のローム層である。肉眼的観察にほかならないが第Ⅴ層は阿蘇郡小国町下城遺跡[註3]にいう、第Ⅵ層ハードロームないしは第Ⅵ層黒色バンド層に類似する。下城遺跡の正式な報告をまたねばならないが、第Ⅳ層ソフトロームおよび第Ⅴ層ハードロームには広域火山灰の姶良パミス・ＡＴが含まれていることが伝えられており、両者の比較がまたれる。

以上が両遺跡の土層の概略的なものである。前にも述べたように両遺跡とも、本遺跡に近いところに位置し、本遺跡の北側は同一の層序状態を示している。以上のような関連した状態の中でＡ－１・Ａ－２トレンチの層序状態を見てみることとしたい。

第Ⅰ層は表土層で攪乱層であることから除くとしても、遺物を包含している第Ⅱ層・第Ⅲ層はいずれも前の両遺跡の層位との特徴が符合せず、対比しがたい。第Ⅳ層は橙色を呈するローム層であり、この層は両遺跡の第Ⅵ層と対比することが可能であろう。したがって本遺跡の第Ⅱ層と第Ⅲ層は両遺跡の第Ⅴ層から上層にあたるものと推定される。

両遺跡の第Ⅱ層から第Ⅴ層はいわゆる火山灰の降りつもった堆積状態を示しているが、本遺跡の第Ⅱ層と第Ⅲ層はこのような堆積状態にはほど遠く、小石がはいったり、土質の違ったものがブロック状にはいったりする状態にある。このような状況から、本来的、また基本的には両遺跡と同じような層序状態を示していたものが、第Ⅳ層より上層を一度カットされ、人為的に再堆積されたものと考えられた。近くに出土する須恵器片を対象とすれば、古墳の盛土や整地の行われたところ、そういった状況が想像されたのである。

したがって、このA地区に関しては自然的な堆積状態を示しておらず、各々の石器に対して層位的な解釈はできないものといえよう。

同じくB地区の層位も前記・櫛島・沈目遺跡の層位状態とは比較できない状況にある。ただA地区に比べて堆積状態は非常に整合的になる。これらの整合的な堆積はA地区のように人為的に堆積されたとは考え難い。B地区は北側および南側は小高い山があり、双方の山に挟まれた凹地にあたることから、傾斜面から流れた土砂が自然的に再堆積したものであろう。

A・B両地区とも以上のような状態での出土であり、層位をもとにしての時期的な解釈はできないといわざるをえない。出土した各々の石器の特徴については前章において記したとおりである。以下、石器の機種や製作技術をもとにして時期について可能なかぎり考えてみたい。

まず先土器時代の石器として考えられる石器の機種と特徴を述べてみたい。

細石刃として三点をとり上げた。A－1トレンチ、B－5～8トレンチ各一点と採集したもの一点である。最も細石刃としての特徴を有するものは(085)である。頁岩を用いた端正なもので、表面に残された剝離痕はいずれも主要剝離面と方向を同じくする。(001)(052)については、(001)は石材が細石核・細石刃にあまり多く用いられないサヌカイトであること、(052)は両先端に尖がりがあることなど細石刃として肯首しがたい様相を含んでいる。細石核は2点(010・086)をとりあげた。(010)は石材に頁岩を用いて、厚みのある舟底形の形状を呈している。2回の大きな剝離を施し、細石核の打面と一側面を形成し、次いで他方の側面の調整剝離を行っている。さらに、最初の大きな剝離で生じた剝離面を打面として細石刃の剝離面を形成している。(086)も同じく石材に頁岩を用いたもので、舟底形に近い形状を呈している。礫に一撃を加えて生じた大きな剝離面から側面に調整剝離を行い、短軸に細石刃剝離面を有するものである。以上2点の細石核について橘助教授は前者の特徴については「福井型細石核」に一般的に認められるもの、後者は「船野型細石核」に類似点を求めることが可能であるとの考察がなされた。今後細石刃、細石核ともに類似資料の増加が望まれ、追って、石材の問題もふまえ地域的特色の検討が待たれるものである。

二次加工のある石器の中には、ナイフ形石器もしくはナイフ形石器の可能性のあるとした石器が5点と、台形石器とした石器が1点ある。前者の5点の石器はいずれも違った形状を示し、製作技術にも差異が見られる。用いられた石材はサヌカイト3点と黒曜石・チャートが各1点である。

(017)は両側縁および基部にブランティングを施し、斜刃である。

(018)は小形の縦長剝片の側縁および基部の一部にブランティングを施したもので、先端はやや尖がりが見られる。

(021)は小形の不定形の剝片を素材として、背にブランティングを施したもので、先端はいく分尖がりがある。

(057) は断口が三角形を呈する剝片の一面に綿密なブランティングをなしたもので、先端は尖がらしていたものと思われる。

(071) は不定形の剝片に先端を尖がらし側縁にブランティングを施したものである。

このほかでは (092) にもナイフ形石器として可能性がもたれる。

台形石器としたのは (058) である。一側縁にブランティング様の調整剝離を施し、他方の側面は折断によって生じた平坦面である。

以上のようにA・B両地区を包括して考えれば、石器の機種として、ナイフ形石器・台形石器・細石刃の出土があり、先土器時代後期の所産と考えることができよう。ナイフ形石器・台形石器ともいわゆる典型的特徴からいく分違った存在に思え、ナイフ形石器や台形石器の盛行する時期よりも遅れ、細石核・細石刃が出現した以後の時期の所産と見るのが妥当であろう。細石核・細石刃は縄文土器と共伴する例も多く知られるようになってきているが、その様な土器は今回の調査では認められておらず、縄文時代のものではないと判断しておきたい。

礫器や二次加工のある剝片・使用痕のある剝片などは先土器時代と縄文時代と分離ができないのが大半であるが、久保遺跡からは縄文時代の土器として早期押型文、無文土器、前期円筒土器が出土しており、縄文時代[註4]の石器はほとんどがこの時期のものであろう。

(江本)

註

註1　緒方勉他　「櫛島」　熊本県文化財調査報告書第18集　1975

註2　江本直他　『沈目』　熊本県文化財調査報告書第13集　1974

註3　田中寿夫・緒方勉『下城遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告書第37集　1979

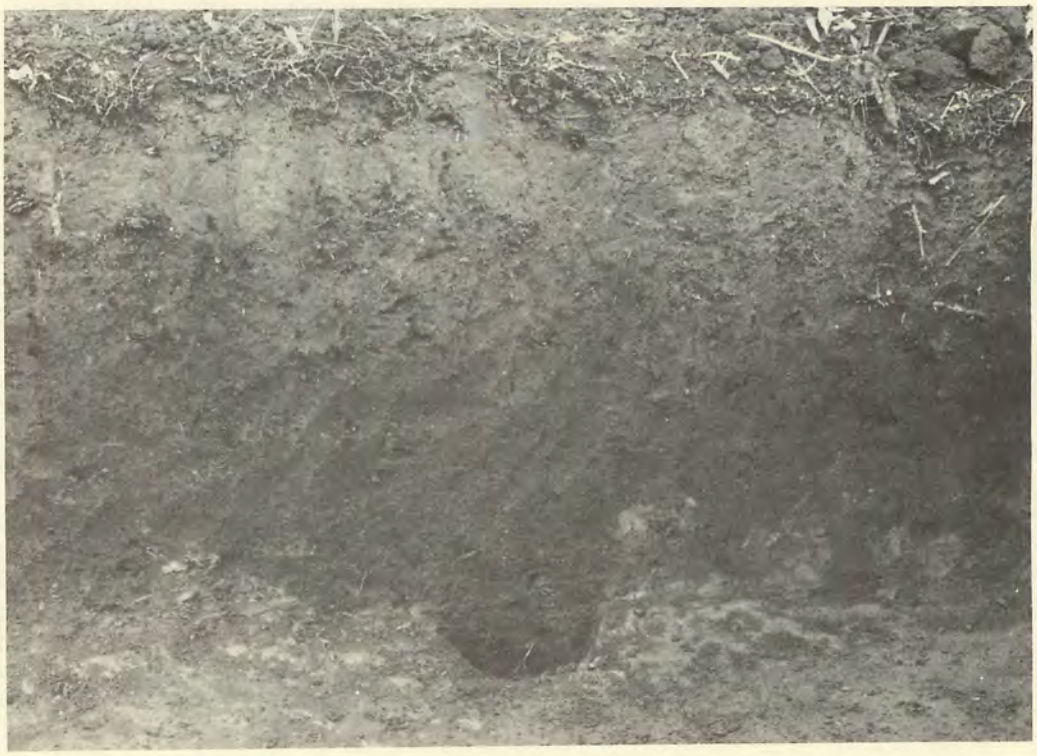
註4　緒方勉・高木正文他　『久保遺跡』熊本県文化財調査報告書第18集　1975

図　　版

上：A地区遠景（B地区から）　　下：A地区　A－2トレンチ

上：A地区　A－Ⅰトレンチ　　下：A－Ⅰトレンチ調査風景

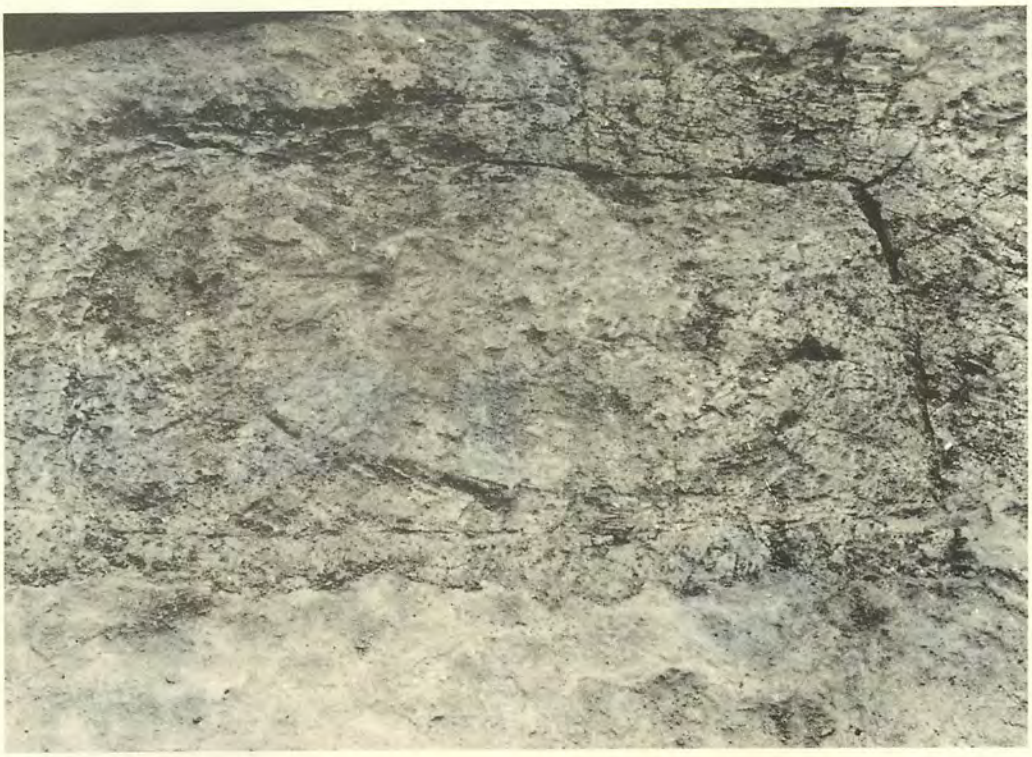
上：A－Ⅰトレンチ西側断面　　下：A－Ⅰトレンチ西側断面



上：A－Ⅰトレンチピット遺構　　下：A－Ⅰトレンチ石器出土状況

上：B地区遠景（A－Ⅰトレンチから）　　下：B地区周辺遺物採集地

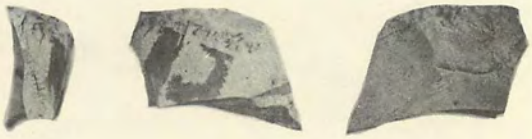
上：A地区A－2トレンチ　　下：B地区Bトレンチ



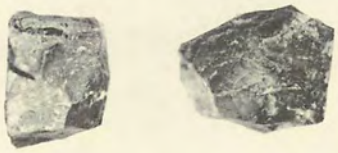
上：B地区土坑墓　　下：B地区土坑墓

001

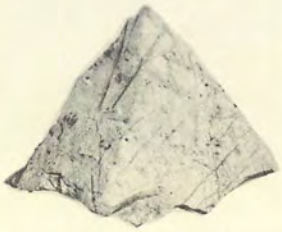
002



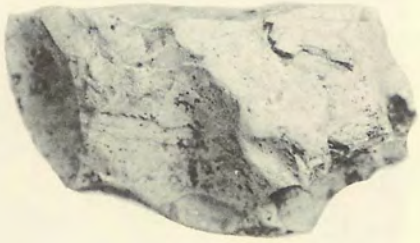
004



003

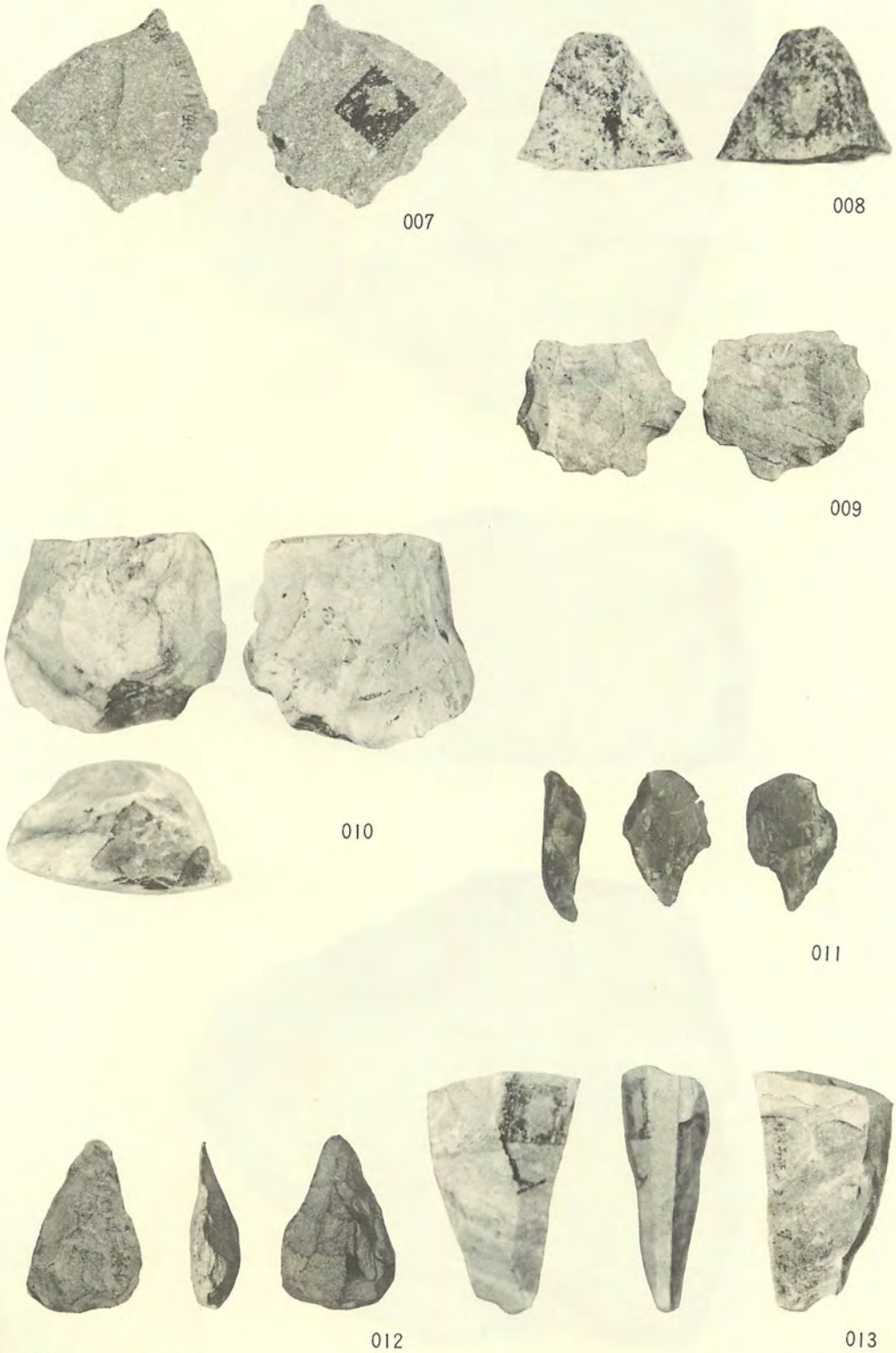


005



006

出土石器（001～006）



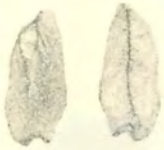
出土遺物（007～013）

014

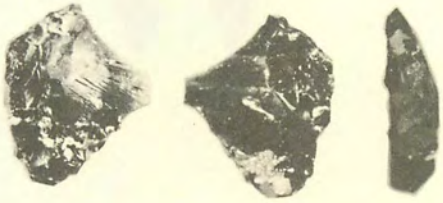
出土石器（014）

015

016



018



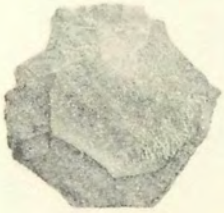
017

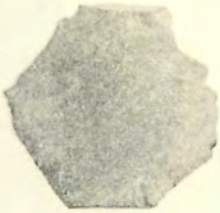
(刃部拡大)　017

020

019

021



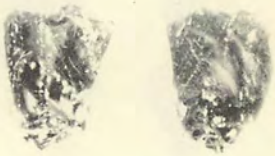


022

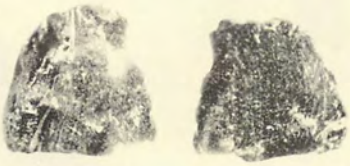
023

出土石器（015～023）

024

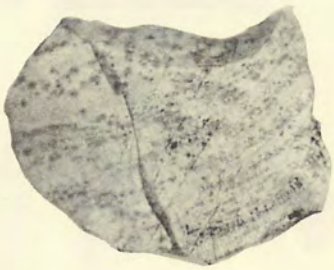


025

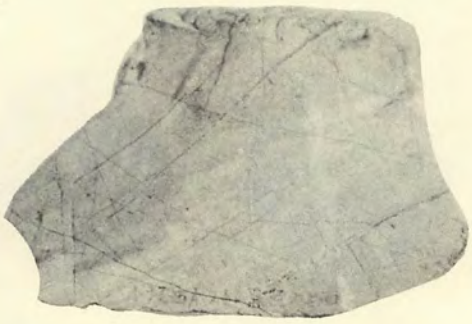


026

027



028

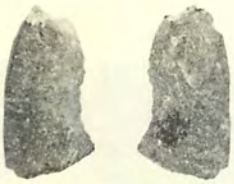


029

出土石器（024～029）

032

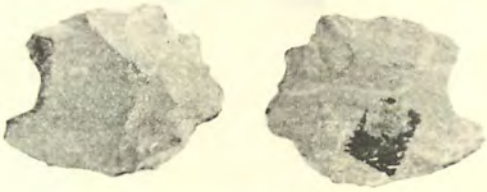
031



033

034

035



036

037

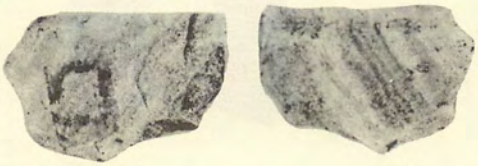
038

039

出土石器（031～039）

040

041



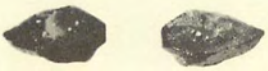
042

030
043

044

045

046

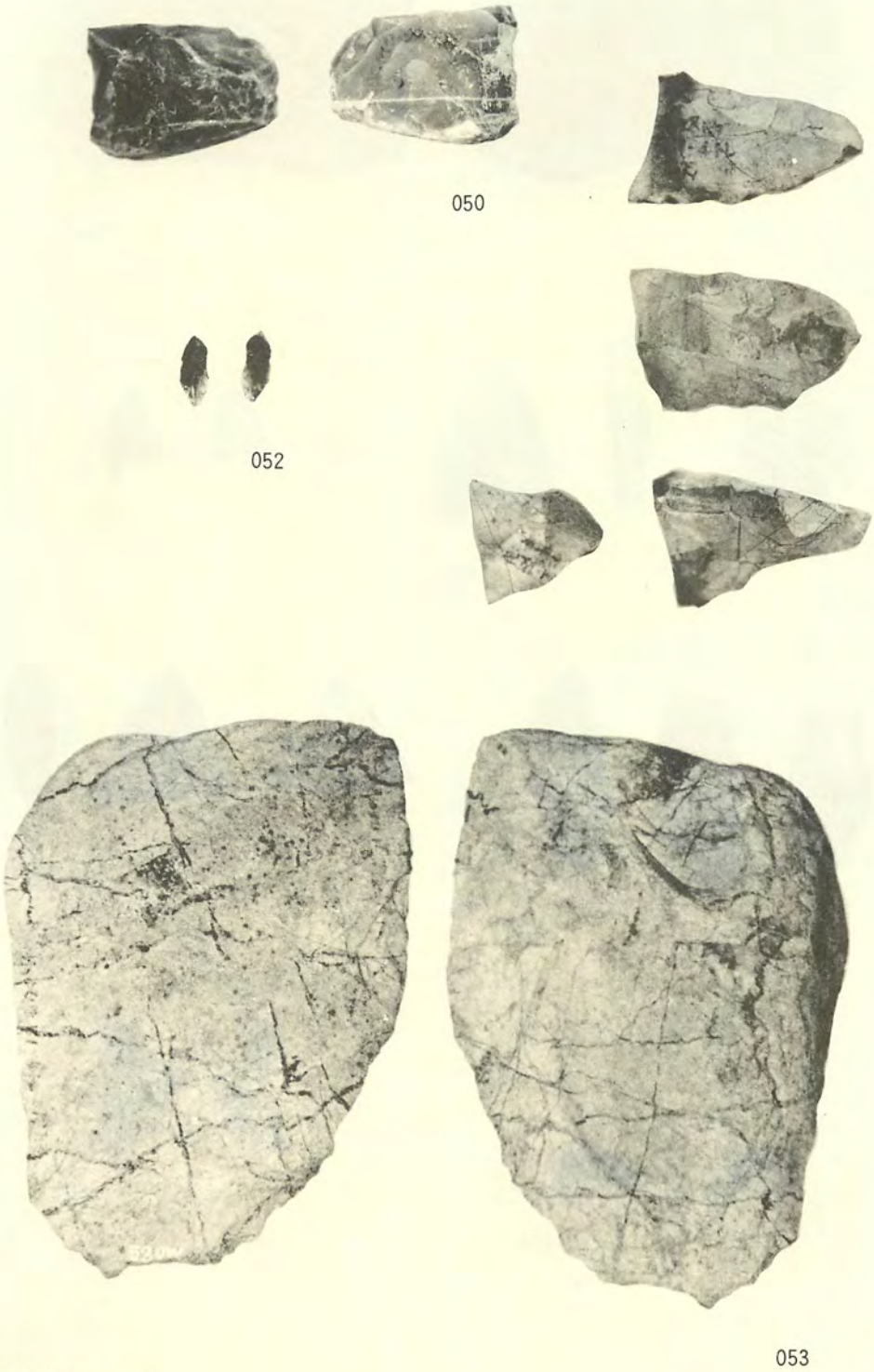


047

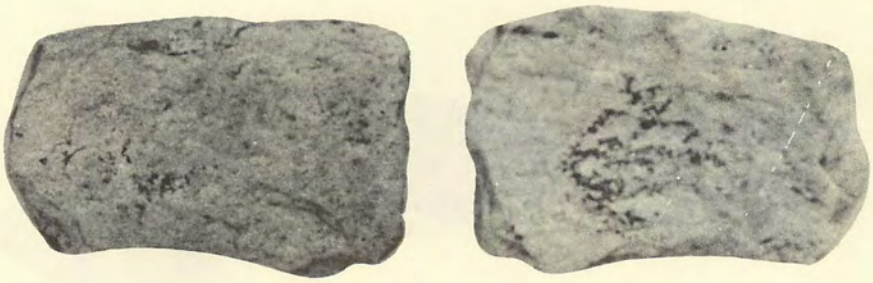
048

049

出土石器（040～049）



出土石器（050～053）

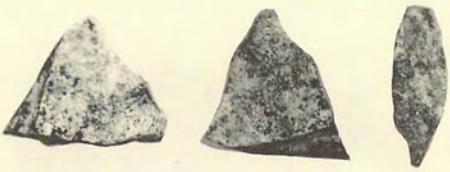


054

055

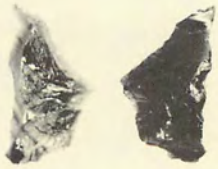
056

057



058

059



060

出土石器（054～060）

061

062

063

064

068

出土石器（061～068）

069

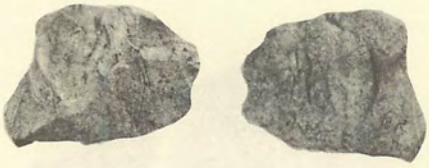
070

071

073

072

075



074

076

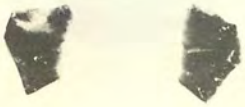
077

出土石器（069～077）

078

079

080



081

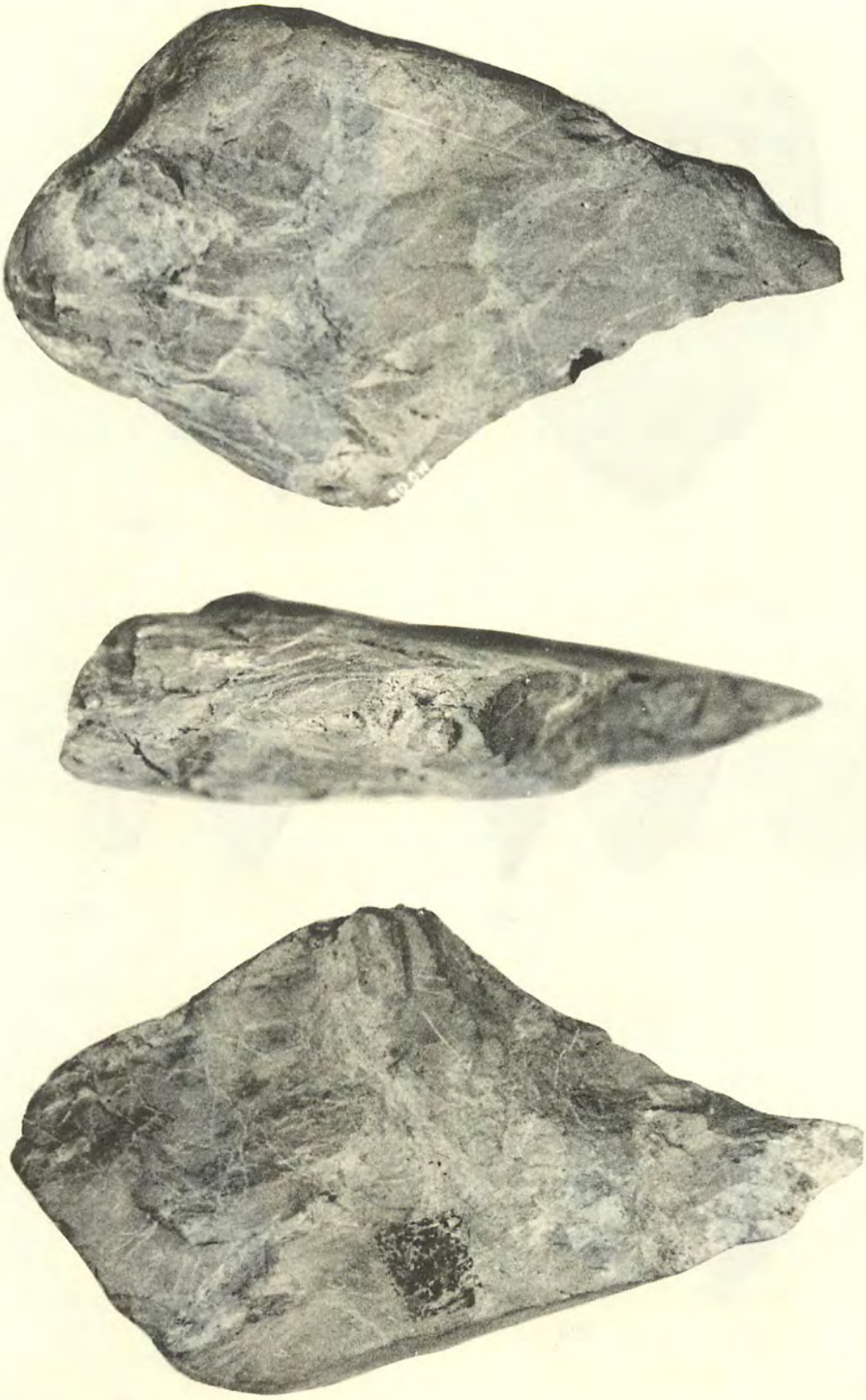
082

083

084

出土石器（078～084）

出土石器（085～089）



090

出土石器（090）

091

092

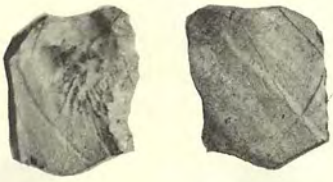
093

094

095

出土石器（091～095）

096



097

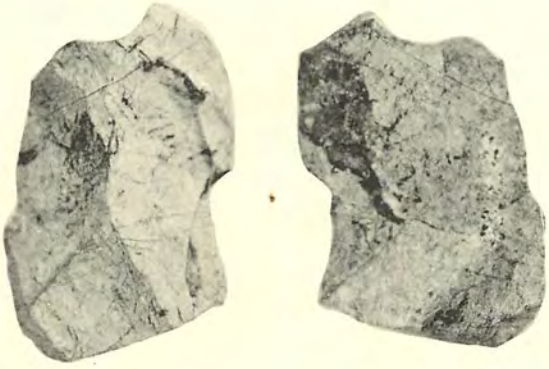
098

099

100

101

102



103

出土石器（096～103）

104　105

106　107

出土石器（104～107）

熊本県文化財調査報告　第40集

平　原　瓦　窯　址

昭和55年３月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒 861　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　(株)城野印刷所
〒 860　熊本市琴平１丁目４番１号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 40 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：平原瓦窯址
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日